

hp OpenView
reporter

インストールおよび
特別構成ガイド



[第 1 章 概要およびインストール](#)

[第 2 章 UNIX の設定](#)

[第 3 章 SQL Server データベースの設定](#)

[Part A : MS SQL Server 2000](#)

[Part B : MS SQL Server 2005](#)

[Part C : MS SQL Express 2005](#)

[第 4 章 Oracle データベースの設定](#)

[Part A : Oracle ファイルの編集](#)

[Part B : データ転送](#)

[Part C : Oracle 9i/10g、OVO データベース](#)

[Part D : Oracle 9i \(Solaris または HP-UX\)](#)

[Part E : Oracle 10g \(Solaris または HP-UX\)](#)

[第 5 章 Unified Reports の設定](#)

[第 6 章 別々のシステムでの Reporter と OVOW 7.5 の実行](#)

[第 7 章 Microsoft Cluster Server へのイン ストール](#)

[第 8 章 複数の OVO UNIX 管理サーバーの ための Reporter の構成](#)

[索引](#)

1 概要およびインストール

HP OpenView Reporter は、OpenView エージェント ソフトウェアが実行されていることを検出した対象システムのデータから Web ベースのレポートを作成します。次のエージェント ソフトウェアが検出されます。

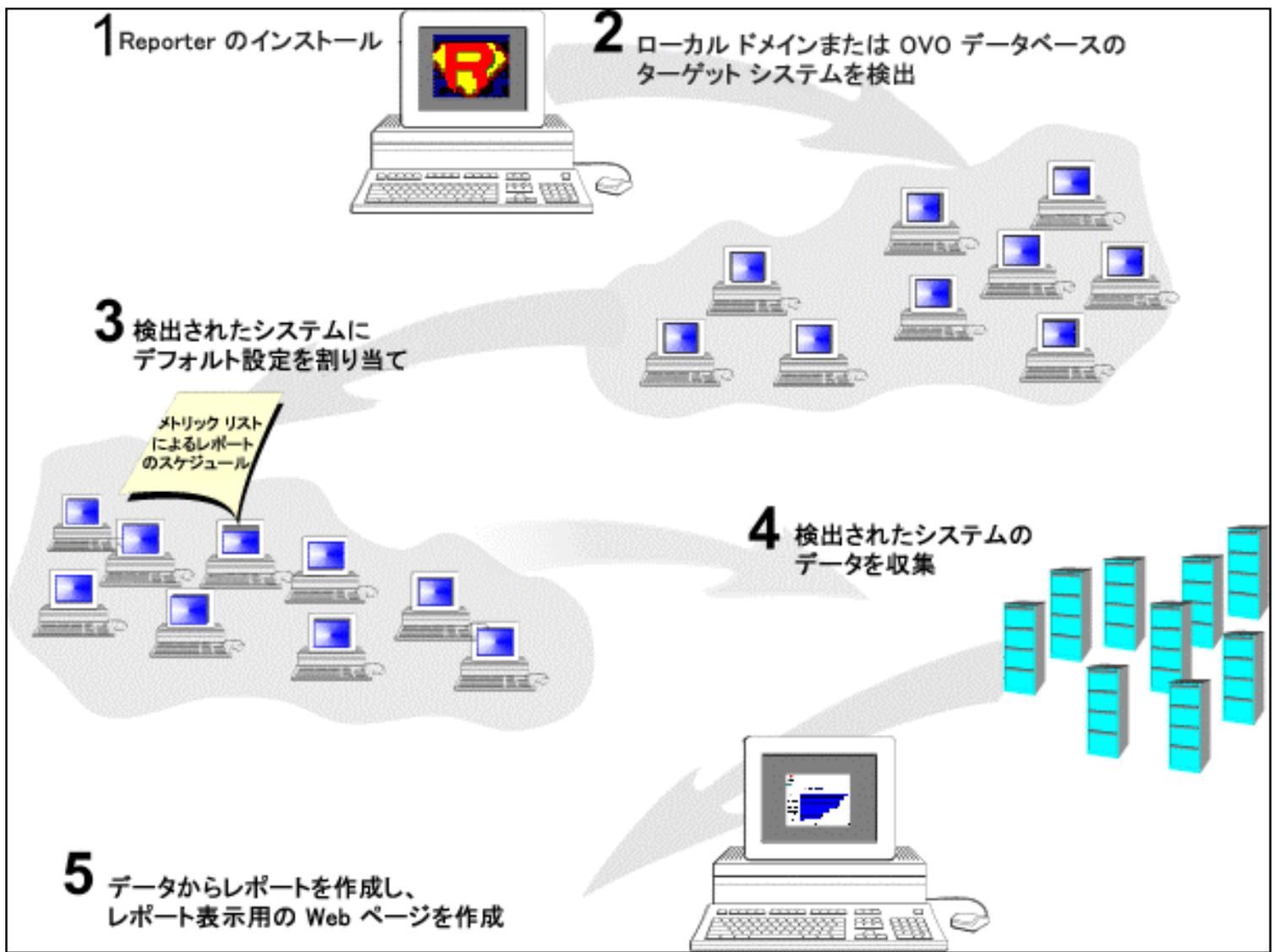
UNIX または Windows 上の HP OpenView Performance Agent
(MeasureWare Agent)
HP OpenView Operations サブエージェント (バージョン 7 以降)

 **メモ** : Oracle がサポートされているプラットフォームは、HP-UX と Solaris のみです。Microsoft Access は、OVR 3.0 からアップグレードする場合のみサポートの対象となります。クリーン インストールでは、Microsoft Access はサポートされません。Microsoft Access の「長いホスト名」や「複合インデックス」などの一部の機能は、アップグレード後もサポートされません。

Reporter をインストールすると、製品にあらかじめ構成されている設定に従って、自動的に動作が開始されます。ローカル ドメインで OpenView エージェント ソフトウェアを実行しているシステムは、この初期設定に従って検出できます。Reporter は、[構成した OpenView Operations データベース](#)内のシステムも検出できます。Reporter のインストール後に、次の図に示す手順が自動的に実行されます。Reporter は検出プロセスを実行し、あらかじめ定義されているメトリック リストやユーザー指定のメトリック リストに基づきデータを収集します。次に、このデータを使用してレポートを作成します。

 **メモ** : 他の OpenView 製品のレポートも作成する場合は、該当する OpenView 製品用の Reporter パッケージを追加する必要があります。手順については、オンライン ヘルプの「レポートに関する作業」を参照してください。

[インストール](#)後に実行されること



前の図に示したように、Reporter はインストール後、直ちにアクション サイクルを開始します。このインストール直後のアクションは、Reporter のデフォルトのスケジュールとは異なり、翌日まで待たずに直ちにレポートを確認できるように実行されます。上記のアクションの終了後、デフォルトの設定を変更しない限り、Reporter はデフォルトのスケジュールに従って毎晩 12:30 a.m. に開始されます。Reporter のデフォルトのスケジュールについては、『Reporter コンセプト ガイド』の第 3 章「Reporter の機能」を参照してください。

⚠ 重要： 同じ Reporter データベースを使用して Reporter の複数のコピーを実行しないでください。Reporter の複数のコピーから Reporter データベースにデータが書き込まれると、予測できない結果が生じます。

OpenView Performance Agent と OpenView Operations (OVO) は、Reporter とは別売りです。Reporter をサポートするために OpenView Performance Agent を変更する必要はありません。ただし、HP-UX または SUN で OpenView Operations を使用する場合は、このドキュメントの対応するセクションを参照して、OVO データベースへの接続を構成してください。

さらに、Reporter に対応する他の OpenView 製品からレポートを作成する場合は、Reporter の [ファイル] メニューの [レポート パッケージの構成] でレポート パッケージを選択してください。

📌 メモ： データはデフォルトのデータベース (Reporter A.03.70 の場合は MSDE SP3a) に保存されます。別のデータベー

スを使用する場合は、使用するデータベース ソフトウェアを構成するための指示を参照してください* ([インストールおよび特別構成ガイド](#))。

*Oracle の要件により、Reporter は Oracle Server の複数のバージョンに同時に接続することはできません。詳細は、『Oracle9i/10g Online Generic Documentation』を参照するか、Oracle サポート センターにお問い合わせください。

Reporter の毎日のルーチン

Reporter のインストール後、Reporter は検出プロセスを実行し、メトリック リストに基づくデータ収集を開始します。OpenView Performance Agent と OpenView Operations Agent のメトリック リストは変更可能です。OpenView Operations 管理サーバーから収集したサービス データおよびイベント データのメトリック リストは変更できません。各エージェントに指定されるデフォルトのメトリック リストは、次のように分類されます。

OpenView Performance Agent システムの場合

- グローバル (Global)
- アプリケーション
- トランザクション (Transaction)
- アップタイム (Uptime)
- システム ダウンタイム (Sysdowntime)

OpenView Operations システムの場合

- ITO メッセージ
- ITO オペレータ (ITO Operator)

Reporter で収集されたデータはデータベースに保存され、そのデータベースからレポートが作成されます。また、Reporter は、毎日、データベースの保守を実行し、Reporter で作成されたすべてのレポートを表示できる Web ページを作成します。この Web ページはブラウザで表示できます。

Reporter は、以下のアクションを実行して、新しいシステムを検出したり、データベース内の既存システムを追跡したりします。

- [検出範囲] に指定されたシステム (デフォルトでは最初にローカル ドメイン内のシステム) を検索し、新しく追加されたデータ ソースを検出すると、データ収集のスケジュールにエントリを追加します。
- OpenView Performance Agent に指定されたメトリックに従って、デフォルトのメトリック データを収集し、Reporter データベースに保存します。
- 新しい情報でデータベースを更新します。
- Reporter データベース内のデータから、あらかじめ定義されているレポート群を作成します。
- Reporter で作成したすべてのレポート (HTML 形式) にリンクする Web ページを作成します。

Reporter は、収集したデータから複数のレポートを自動的に作成し、ユーザーのコンピュータ環境のシステムに関する重要な情報を提供します。

Reporter の使用開始後に Reporter をカスタマイズする場合は、システムを複数のシステム グル

ープとして編成します (『コンセプト ガイド』の第 5 章を参照)。この変更により、レポートを新しいシステム グループに割り当て、ユーザーの組織の業務に即応するレポート セットを作成して編成できます。さらにカスタム レポートを作成することもできます (『コンセプト ガイド』の第 4 章を参照)。その場合は、Crystal Reports を購入し、メトリック リストを作成してデータを選択し、そのデータを使用する新しいレポートを定義します。

Reporter をインストールするには - 新規インストール

1. Windows システムの CD-ROM ドライブに CD を挿入します。
2. 表示されるウィンドウで、次の 2 つのドキュメントを選択して印刷し、内容を確認します。
 - インストールの前にお読みください
 - リリース ノート
3. **[reporter のインストール]** を選択します。
4. 画面に表示される指示に従います。

 **メモ :** アップグレードや他の状況に関する詳細な手順は、リリース ノートを参照してください。

Reporter をアップグレードするには

Reporter をアップグレードし、Reporter データベースを現在のデフォルト (MSDE SP3a) に変更する場合は、**Reporter** リリース ノートを参照してください。

 **メモ :** Access データベースを継続して使用する場合は、Reporter の以前のバージョンをアンインストールしないでください。このガイドには、Microsoft Access から SQL Server 2000、MSDE、Microsoft SQL Server 2005、Microsoft SQL Express 2005 のいずれかに移行するための手順が含まれています。後で MSDE を使用する場合は、Microsoft が提供するツール (Access 2000 のアップサイジング ウィザード、SQL クライアント ツールのデータのインポートとエクスポート ウィザード) を使用して Microsoft Access から MSDE に移行できます。

1. Reporter を以前のバージョンからアップグレードする場合に、以前のバージョンに戻すことを考慮して、Reporter データベースのバックアップ コピーを作成します。
2. データベースにある構成データをファイルに保存する (収集データは保存されません) には、[コマンド プロンプト] ウィンドウから次のコマンドを入力します。 `replod -save <filename>`
3. 新規インストールの場合と同じ手順を完了します。インストール中に既存のデータベース構成が検出され、そのまま保持されます。
4. ライセンス キーを控えます。Reporter ウィンドウで、[ファイル] [構成] [ライセンス] の順に選択すると、[ライセンスの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウにライセンス キー情報が表示されます。

 **メモ :** 構成データを新しいデータベースに復元するには (古いデータベースを削除した場合)、インストール完了後に [コマンド プロンプト] ウィンドウを開き、次のコマンドを入力します。 `replod -load <filename>`

アップグレード時に実行されること

Reporter のバイナリが上書きされます。
デフォルトのレポート テンプレートの新しいバージョンが追加されるか、<installation_directory>%data %reports にある既存のバージョンが更新されます。カスタム テンプレートは影響を受けません。ただし、Reporter のデフォルト テンプレートとは異なるファイル名を使用していることを条件とします。Reporter GUI を使用してレポート テンプレートに適用したカスタマイズの内容は保持されます。Crystal Reports Professional を使用してレポート テンプレートに適用したカスタマイズの内容は保持されません。

Reporter のWeb ページは影響を受けません (<installation_directory>¥data¥Webpages)。
Reporter データベースに、新しい列または表が追加されます。この変更は、データには影響しません。

Reporter をアンインストールするには

1. [スタート] メニューで、[設定] [コントロール パネル] の順に選択します。
2. [コントロール パネル] ウィンドウで、[アプリケーションの追加と削除] をダブルクリックします。
3. [アプリケーションの追加と削除] ウィンドウで、[HP OpenView Reporter] を選択し、[削除] ボタンをクリックします。
 - [標準削除] および [クリーン削除] という 2 種類のオプションを使用できます。[クリーン削除] オプションは、Reporter で作成したデータ ファイルと HTML レポートを削除する場合に使用します。[標準削除] を使用すると、Reporter で作成したデータ ファイルと HTML レポートは削除されません。

 **メモ:** [クリーン削除] オプションは、システムに他の OV 製品がインストールされていない場合のみ選択してください。

アンインストール時に実行されること

Reporter のバイナリおよびプロダクト ファイルが削除されます。
次の Reporter ディレクトリは変更なしで保持されます。
<installation_directory> ¥data¥datafiles¥ (Reporter データベースは削除されません)。
<installation_directory> ¥data¥Webpages¥ (Webpages は削除されません)。

 **メモ:** Reporter A.03 以降では、アンインストール時にデータベース接続が削除されないため、再インストール時の再構成は不要です。

アンインストールは、IIS の仮想ディレクトリの設定には影響しません。これらの設定は、他の OpenView 製品 (OV Internet Services など) で引き続き使用できます。IIS を使用する OV 製品がない場合は、Web サーバーに残存する "HPOV_" エントリをすべて手動で削除できます。

2 UNIX の設定

ここでは、デフォルト インストールで Reporter データベースを使用するための設定 (Part 1)、およびカスタム データベースを構成して使用するための設定 (Part 2) を示します。次の内容について説明します。

[Part 1 : カーネル パラメータの最小値の設定](#)

[Part 2 : UNIX 上の Oracle データベースの設定/UNIX 環境変数の設定](#)

Part 1 : カーネル パラメータの最小値の設定

HP-UX システムと Solaris システムのカーネル パラメータの設定について説明します。

HP-UX システムの場合

システムの動作をより効率的にするには、必要に応じて HP-UX のカーネル パラメータを次に示す最小値以上に変更します。カーネルの値を変更するには、SAM を実行し、[Kernel Parameters] 領域を使用して [Action] メニュー内の該当するパラメータを変更します。

maxdsiz	32 MB
maxfiles	120
maxssiz	2 MB
maxuprc	100
nfile	3000
nproc	700
semgni	20
semns	128
shmmax	64 MB
shmmni	100
shmseg	12

 **重要** : 設定の変更を有効にするには、システムをリブートする必要があります。

Solaris システムの場合

システムの動作をより効率的にするには、必要に応じて Solaris の共有メモリ パラメータを次に示す最小値以上に変更します。共有メモリの値を変更するには、/etc/system

ファイルを編集し、次に示すように、該当するパラメータを変更します。

set shmsys:shminfo_shmmax	67108864
set shmsys:shminfo_shmmin	1
set shmsys:shminfo_shmmni	100
set shmsys:shminfo_shmseg	40
set semsys:seminfo_semmns	200
set semsys:seminfo_semmni	100
set semsys:seminfo_semmsl	30

 **重要** : 設定の変更を有効にするには、システムをリブートする必要があります。

Part 2 : UNIX 上の Oracle データベースの設定/UNIX 環境変数の設定

▶新しい Oracle システムの場合

1. root または su としてログオンする必要があります。
2. 次のように UNIX 環境変数を設定します。
 - ORACLE_BASE - デフォルトの admin パス名 (/opt/oracle) を設定します。
 - ORACLE_SID - 作成するデータベース名 (reporter) を設定します。
 - ORACLE_HOME - Oracle システム ホーム ディレクトリのフルパス名を設定します。
 - \$ORACLE_TERM - 適切な値 (hpterm など...) を設定します。
 - PATH - \$ORACLE_HOME/bin を含める必要があります。
 - UMASK - 022 に設定します。

▶既存の Oracle システムの場合

次の HP-UX 環境変数が設定されていることを確認します。

- ORACLE_BASE - デフォルトの admin パス名 (/opt/oracle) を設定します。
- ORACLE_SID - 作成するデータベース名 (reporter) を設定します。
- ORACLE_HOME - Oracle システム ホーム ディレクトリのフルパス名を設定します。
- \$ORACLE_TERM - 適切な値 (hpterm など...) を設定します。
- PATH - \$ORACLE_HOME/bin を含める必要があります。

3 Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server の設定

HP OpenView Reporter (Reporter) は、カレント データベースとして MSDE SP3a (Microsoft Database Engine) を使用しています。Reporter が現在使用している MSDE SP3a のバージョンは、SQL Server 2000 のサブセットです。したがって、SQL 2000 の対応する機能を MSDE データベースでも使用できます。ただし、構成の作業ではダイアログを使用できません。各データベース インスタンスの MSDE のサイズは 2GB に制限されます。したがって、必要に応じてデータを SQL Server 2000 データベースに移行することも検討してください。

 **重要** : 同じ Reporter データベースを使用して Reporter の複数のコピーを実行しないでください。Reporter の複数のコピーから Reporter データベースにデータが書き込まれると、予測できない結果が生じます。

[Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server 2000 の構成](#)では、SQL Server 2000 を Reporter のデータベースとして設定する方法について説明します。

[Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server 2005 の構成](#)では、SQL Server 2005 を Reporter のデータベースとして設定する方法について説明します。

[Reporter データベースとしての Microsoft SQL Express 2005 の構成](#)では、SQL Express 2005 を Reporter のデータベースとして設定する方法について説明します。

Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server の設定

Part A : SQL Server 2000 の構成

Reporter データベースとしての SQL Server 2000 の設定

Microsoft SQL Server を Reporter のデータベースとして使用するには、サーバー ソフトウェアとクライアント ソフトウェアの両方が必要です。この手順の最初のセクションでは、SQL Server サーバーをインストールして構成します。2 番目のセクションでは、SQL Server クライアントをインストールし、Reporter を SQL Server アカウントとして構成します。

Reporter 3.70 は、そのデータベースとして MSDE SP3a (Microsoft Database Engine) を使用します。Reporter が現在使用している MSDE SP3a のバージョンは、MS SQL Server 2000 のサブセットです。したがって、MS SQL Server 2000 の対応する機能を MSDE データベースでも使用できます。各データベース インスタンスの MSDE のサイズは 2GB に制限されます。したがって、必要に応じてデータを MS SQL Server 2000 データベースに移行することも検討してください。MSDE から SQL Server 2000 にアップグレードする場合は、Microsoft 社が提供する手順に従い、OVOPS インスタンスをアップグレードします。

 **重要** : OVIS または Reporter の旧バージョンからアップグレードする場合の、SQL Server 2000 および MSDE の最小要件は Service Pack 3a です。この Service Pack は、破壊的なコンピュータ ウィルス (たとえば、SLAMMER ワーム ウィルス) に対する SQL Server 2000 の脆弱性への対策として必要です。この Service Pack のアップグレード手順についての詳細は、Microsoft 社が提供するドキュメントを参照してください。

 **重要** : HP OpenView Internet Services 4.0 と Reporter を同じシステムにインストールしている場合、既存データベースから SQL Server 2000 への OVIS/Reporter データの移行はサポートされません。

Reporter は MSDE SP3a インスタンスを使用しているため、MS SQL Server 2000 Enterprise Manager を使用して MSDE Reporter データベースを参照すると、そのインスタンス名がわかります。対応する MS SQL Server 2000 の例では、インスタンス名は使用されません。MS SQL Server 2000 を使用するときにはインスタンス名を使用する必要はありません。

 **メモ** : Access データベースまたは MSDE データベースから MS SQL Server にデータを移行する場合は、作業 5 をスキップして作業 6 または作業 6a に進んでください。作業 6 では、Access (Reporter 2.0 のデフォルト データベース) から MS SQL Server への移行を行います (Access で使用した領域の約 1.5 倍の領域が必要になります)。作業 6a では、MSDE (Reporter 3.5 のデフォルト データベース) から SQL Server 2000 への移行を行います (必要なディスク領域は以前と同じです)。

SQL Server システムの構成

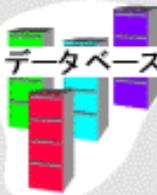
(新しくインストールする場合、すべての手順が必要です。インストール済みの場合は、2-4のみです。)

1 SQL Server ソフトウェアのインストール



2 クライアントとサーバーの信頼関係の確認

3 SQL Server での Reporter データベースの構成



Reporter が実行されている SQL Client システムの構成

1 Reporter のインストールまたは更新



2 SQL Client ソフトウェアのインストール



3 ODBC 接続の設定

4 Reporter データベースとして SQL を構成

5 Reporter データベースのアップグレード

6 (必要な場合) Access または MSDE からデータをインポート

7 データベースが設定されていることを確認

MS SQL Server ソフトウェアのインストールと構成

MS SQL Server がすでにインストールされている場合は、作業 1 をスキップしてください。Reporter と MS SQL Server のシステムが同じドメインにある場合は、作業 2 をスキップし、作業 3 から始めてください。

前提条件: (1) Windows 2000 Server、および (2) Internet Explorer 5.01、Service Pack 2 以降が必要です。

重要 : SQL Server 2000 Service Pack 3a が必須です。

作業 1 MS SQL 2000 Server ソフトウェアのインストール

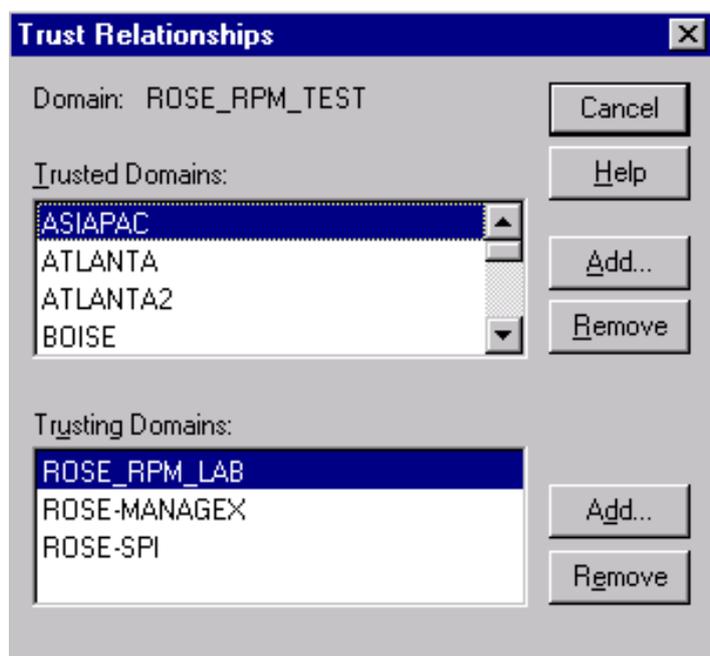
1. MS SQL Server 2000 の CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. **[MS SQL Server 2000 コンポーネントのインストール]** を選択します。
3. **[データベース サーバー] - [Standard Edition]** を選択します。
4. **[ローカル コンピュータ]** を選択し、表示されるプロンプトに従います。
5. 認証には必ず **[混在モード]** を使用してください。
6. システムを再起動します。

7. SQL Server 2000 Service Pack 3a にアップグレードします。
8. システムを再起動します。

作業 2 ➡ クライアントとサーバーとの信頼関係の確認

 **メモ**：信頼関係の設定は、Reporter クライアントと SQL Server が NT4 内の別々のドメインにある場合、またはクライアントとサーバーが混在システム (Windows NT4、または Windows NT4 と Windows 2000) で実行されている場合に必要となります。Reporter クライアントと SQL Server を Windows 2000 で実行している場合は、この作業をスキップしてください。

1. MS SQL Server がインストールされているシステムに管理者特権でログオンします。
2. [スタート] メニューから、[プログラム] [管理ツール] [ドメイン ユーザー マネージャ] の順に選択します。
3. [原則] メニューの [信頼関係] を選択します。



4. [信頼する側のドメイン] ボックスで、Reporter が位置するドメインを探します。該当するドメインが表示されている場合、次の作業に進みます。ドメインが表示されていない場合は、必要に応じて信頼用のドメインを追加します。信頼用のドメインに関して不明な点がある場合は、[ヘルプ] ボタンをクリックします (Reporter システムと SQL Server システムが別々のドメインにある場合は、これらのシステム間の信頼関係を構成する必要があります)。

作業 3 ➡ SQL Server 2000 での Reporter データベースの構成

1. [スタート] メニューから [プログラム] [Microsoft SQL 2000] [Enterprise Manager] の順に選択します。
2. [Microsoft コンソール ルート] ウィンドウが表示されます。ここでは、SQL Server グループが表示されます。

3. 使用している SQL Server システムが SQL Server グループに含まれていない場合は、SQL Server グループを右クリックし、ドロップ ダウン メニューから **[SQL Server の新規登録]** を選択して、登録ウィザードの指示に従って追加します。
4. 右クリックで **[データベース]** - **[新規データベース]** を選択します。
5. **[全般]** タブの **[名前]** ボックスに、データベース名 (この例では「Reporter」) を入力します。

データベースのプロパティ - Reporter

全般 | データ ファイル | トランザクション ログ

名前(N): Reporter

データベース

状態:	(不明)
所有者:	(不明)
作成日:	(不明)
サイズ:	(不明)
使用可能領域:	(不明)
ユーザー数:	(不明)

バックアップ

最終データベース バックアップ:	なし
最終トランザクション ログ バックアップ:	なし

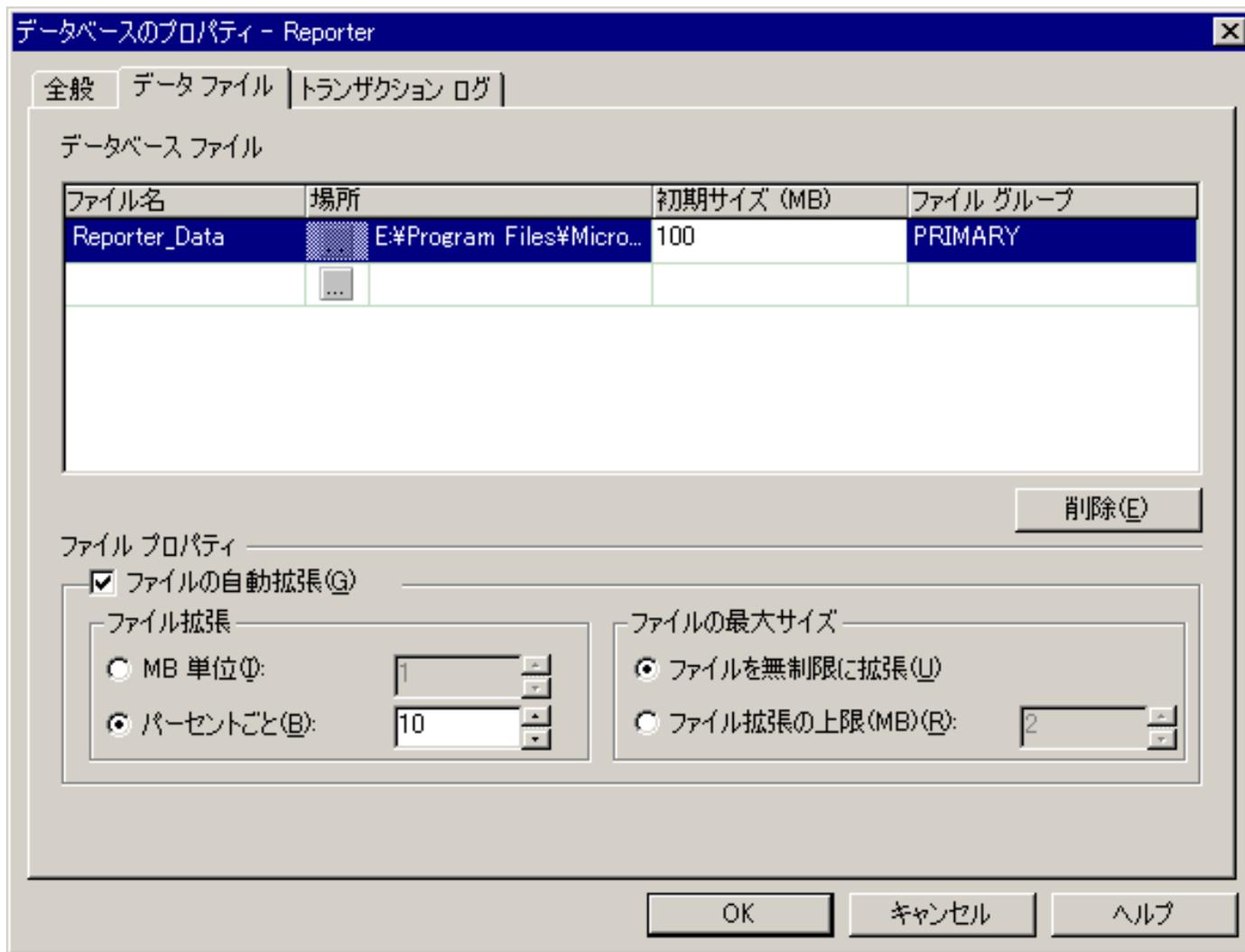
保守

保守計画:	なし
照合順序名:	(サーバーの既定値)

OK キャンセル ヘルプ

 **メモ** : SQL Server データベースの名前を「Reporter」にする必要はなくなりました。

6. **[データ ファイル]** タブを選択し、**[データベース ファイル]** セグメントで **[初期サイズ (MB)]** カラムに「100」と入力します。
7. **[OK]** をクリックしてウィンドウを閉じます。



- データベースの作成後、[セキュリティ] を展開します。
- 右クリックで【ログイン】 - 【新規ログイン】 を選択します。
- 【全般】 タブを選択し、【名前】 ボックスにユーザー名として **openview** を入力します。

SQL Server ログインのプロパティ - 新規ログイン

全般 | サーバー ロール | データベース アクセス

 名前(N):

認証

Windows 認証(W)
ドメイン(M):

セキュリティ アクセス:
 アクセス許可(G)
 アクセス拒否(Y)

SQL Server 認証(S)
パスワード(P):

既定値

 このログインの既定の言語とデータベースを指定します。

データベース(D):

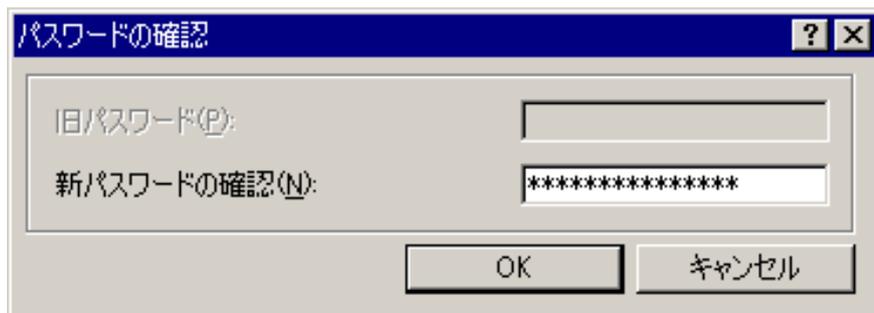
言語(L):

OK キャンセル ヘルプ

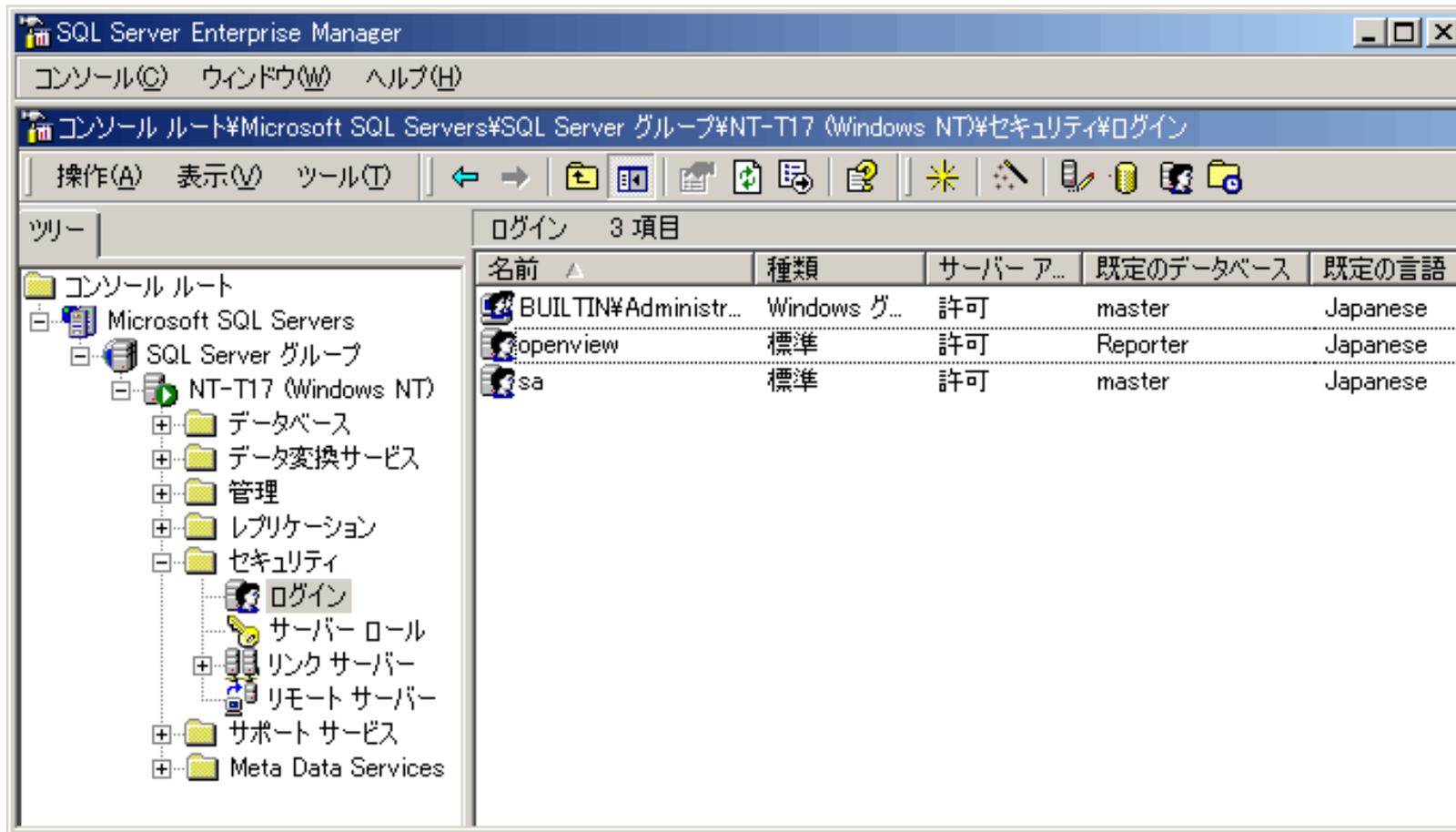
11. [認証] で、[SQL Server 認証] ラジオ ボタンを選択し、パスワードを入力します。
12. [既定値] で、データベース リスト ボックスから [Reporter] を選択します。
13. [データベース アクセス] タブを選択します。[データベース アクセス] で、Reporter に対応する [権限] ボックスをチェックします。
14. [データベース ロール - 'Reporter'] で [public] と [db_owner] をチェックし、[OK] を選択して終了します。



15. 手順 11 の新しいパスワードを確認します。



16. ユーザーが [データベース アクセス] に追加されていることを確認するには、左ペインで [セキュリティ] フォルダを展開するか、【セキュリティ】 【ログイン】 の各項目の横にあるプラス記号をクリックします。右ペインに「openview」と表示されます。



17. [Enterprise Manager] を終了し、クライアント システム (Reporter がインストールされている場所) に移動します。

SQL クライアント ソフトウェアのインストールと構成

SQL 2000 Client のインストールは次の 3 つの領域に分かれます。

[SQL 2000 ソフトウェアのインストール](#)

[Reporter の ODBC 接続の設定](#)

[Reporter または SQL データベースの最新バージョンへのアップグレード、または Reporter のインストール](#)

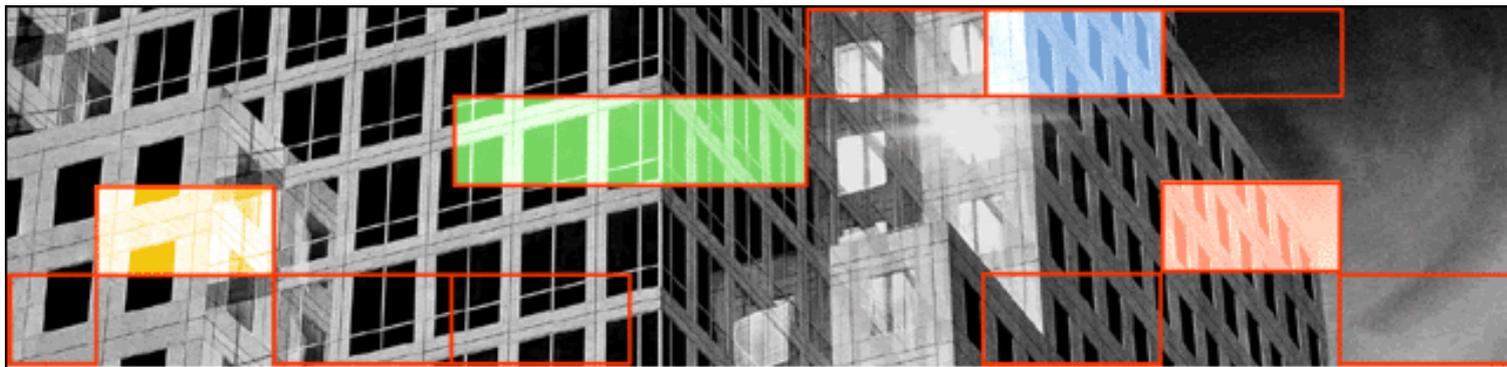
SQL 2000 Client インストールの前提条件

Internet Explorer 5.01 SP 2
500 MB の空きディスク領域
SQL Server 2000 の CD
製品のライセンス - 10 桁のコード

作業 1 SQL クライアント ソフトウェアのインストール

 **重要** : Reporter と SQL Server が同じシステムにインストールされている場合、この作業は不要です。

1. SQL Server 2000 の CD を CD-ROM ドライブに挿入して SQL Client 2000 ソフトウェアをインストールします。
2. **autorun.exe** をクリックします。
3. **[SQL Server 2000 コンポーネント]** をクリックします。



Microsoft® **SQL Server 2000** **Standard Edition**



SQL Server 2000 コンポーネント (C)



セットアップ/アップグレード ヘルプの表示 (B)



SQL Server 2000 の前提条件 (P)



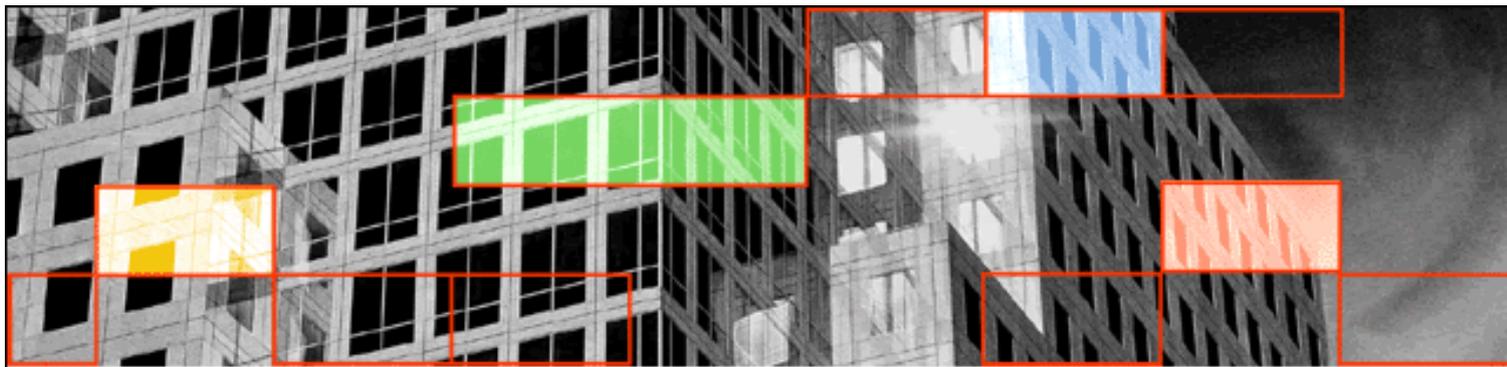
リリース ノートの表示 (R)



Web ページの表示 (Y)

終了 (X)

4. 【データベース サーバーのインストール】を選択します。



コンポーネントのインストール

Microsoft® **SQL Server 2000** **Standard Edition**



データベース サーバーのインストール(S)



Analysis Services のインストール(A)



English Query のインストール(Q)

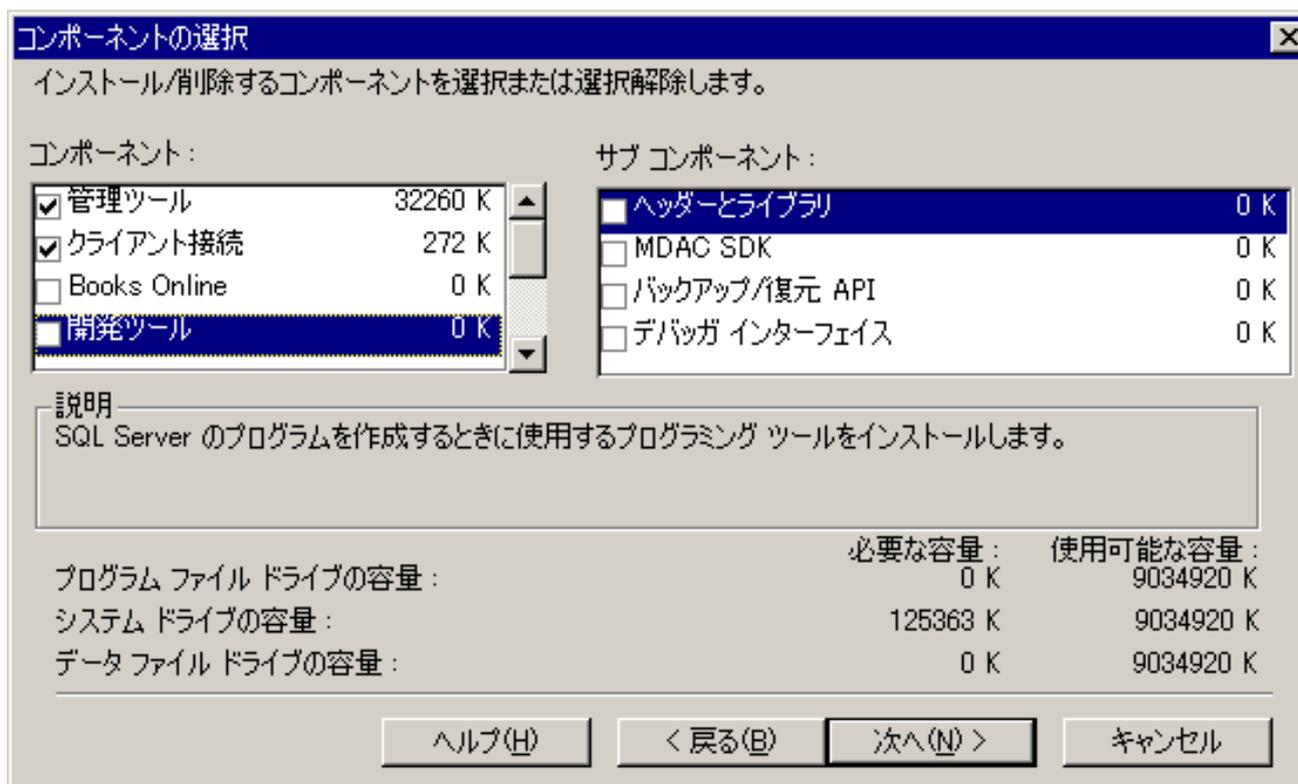
戻る(B)

終了(X)

5. [次へ] を選択して [インストールの選択] 画面に移動し、次のメッセージに対して [OK] をクリックします。



- 表示される手順に従います。
- [管理ツール] と [クライアント接続] を、インストールするコンポーネントとして選択します。ドキュメントをインストールすることを選択します。



- インストールの終了後、システムをリブートします。

作業 2 ➡ ODBC 接続の設定

⚠ 重要 : デフォルト データベースから SQL Server にデータを移行する場合は、作業を続行する前に Reporter ツールバー ボタンで Reporter サービスを停止し、Reporter のメイン ウィンドウを閉じます。



作業 3 ➡ Reporter のアップグレードまたはインストール

(デフォルト データベースの現在のデータを SQL Server に移行する場合は、この作業をスキップしてください)

1. Reporter をインストールします。
2. インストール中に、サービスの自動開始を選択するプロンプトが表示された場合は、**[No]** を選択します。

Windows 2003 Enterprise / Windows 2000 / Server / Professional / Windows XP

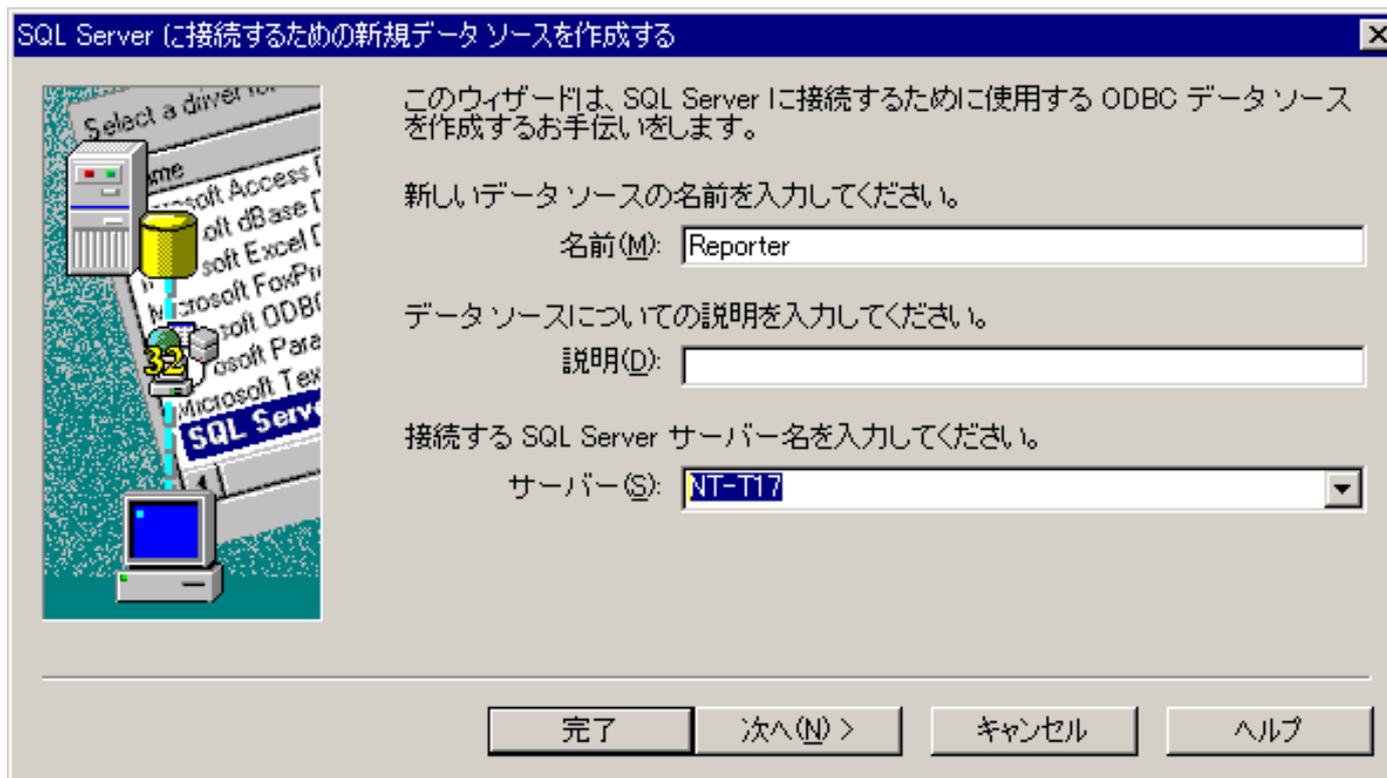
1. [スタート] メニューから、[設定] [コントロール パネル] の順に選択します。
2. [管理ツール] をダブルクリックします。
3. [データ ソース (ODBC)] をダブルクリックします。
4. [Reporter] を強調表示し、[削除] ボタンを選択します。



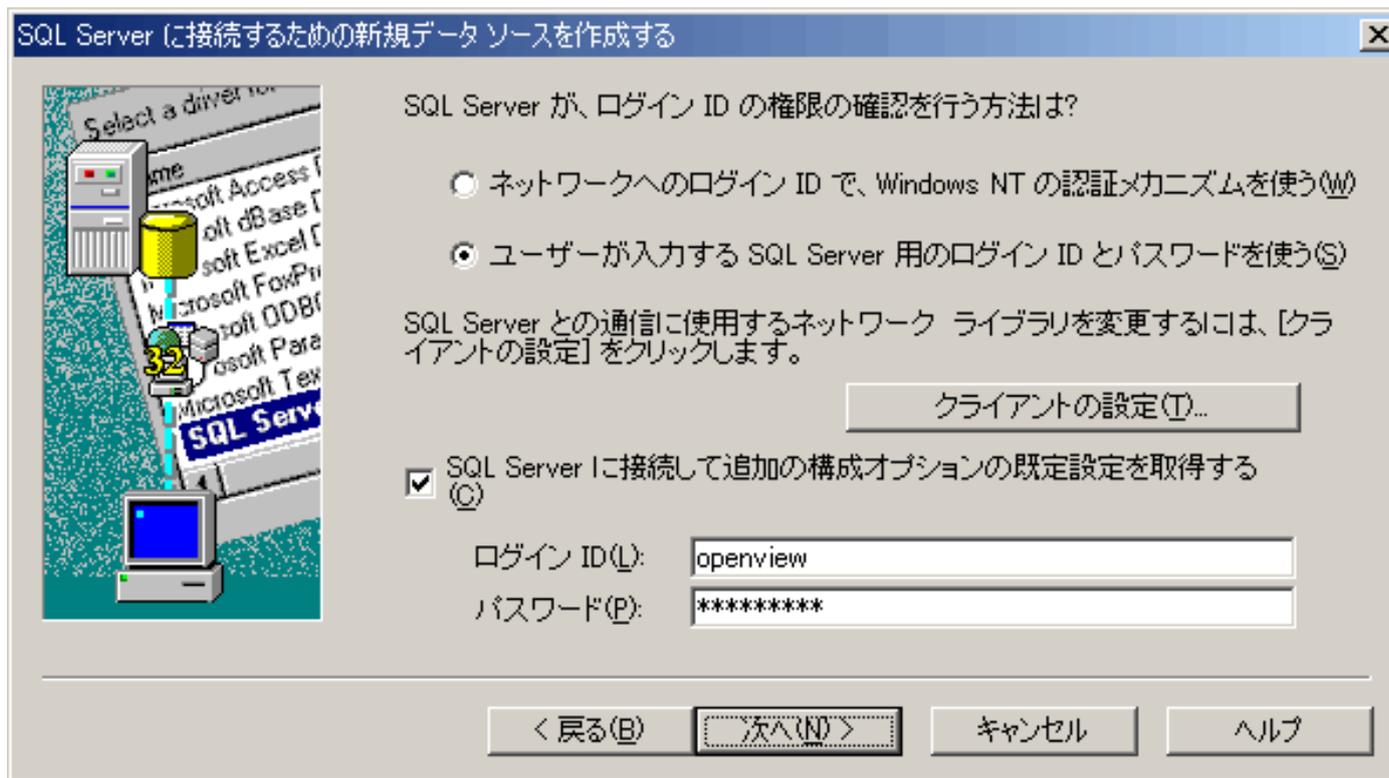
5. 【追加】 を選択し、新しい Reporter データ ソースを作成します。
6. 【データ ソースの新規作成】 ダイアログ ボックスで、【SQL Server】 ドライバを選択し、【完了】 ボタンをクリックします。



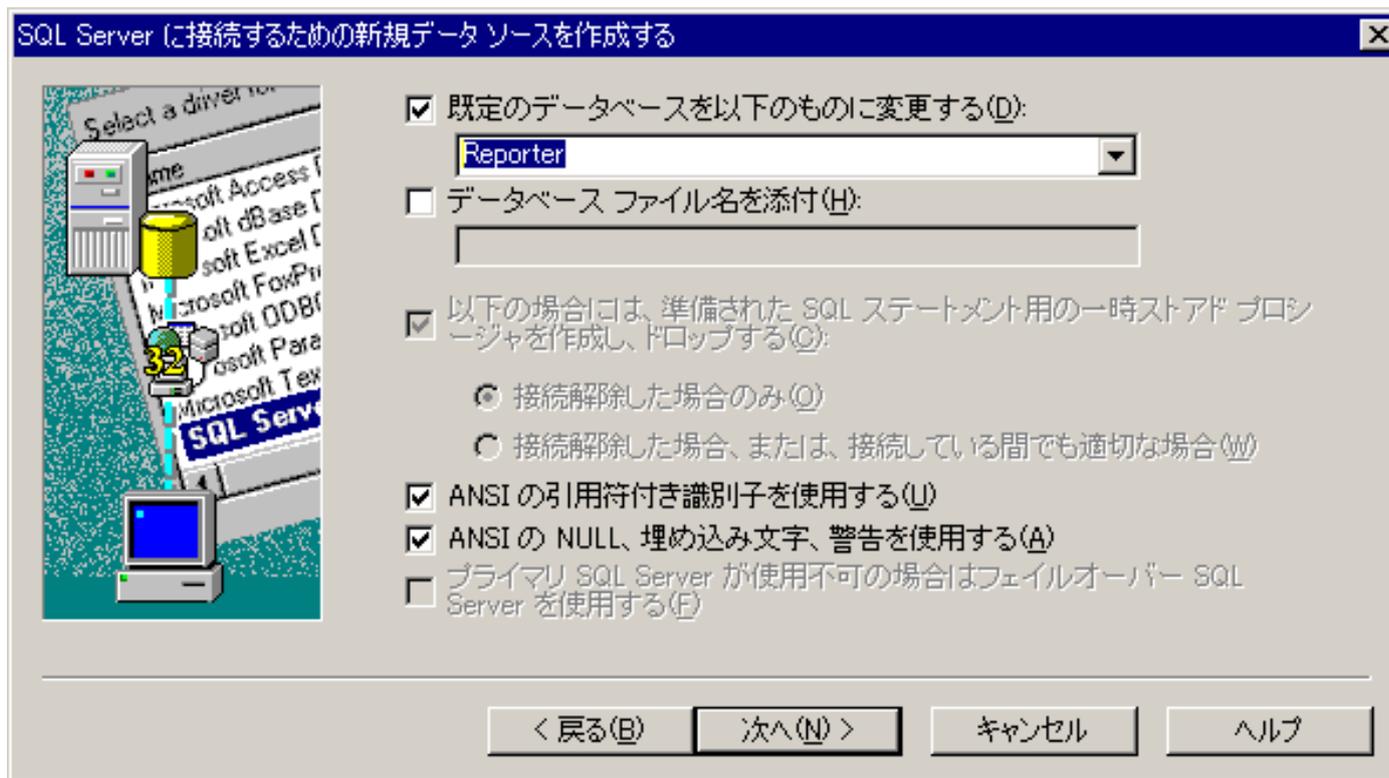
7. [SQL Server に接続するための新規データソースを作成する] ダイアログボックスで、[サーバー] テキストボックスにサーバー名が表示されていることを確認します。[次へ] を選択します。



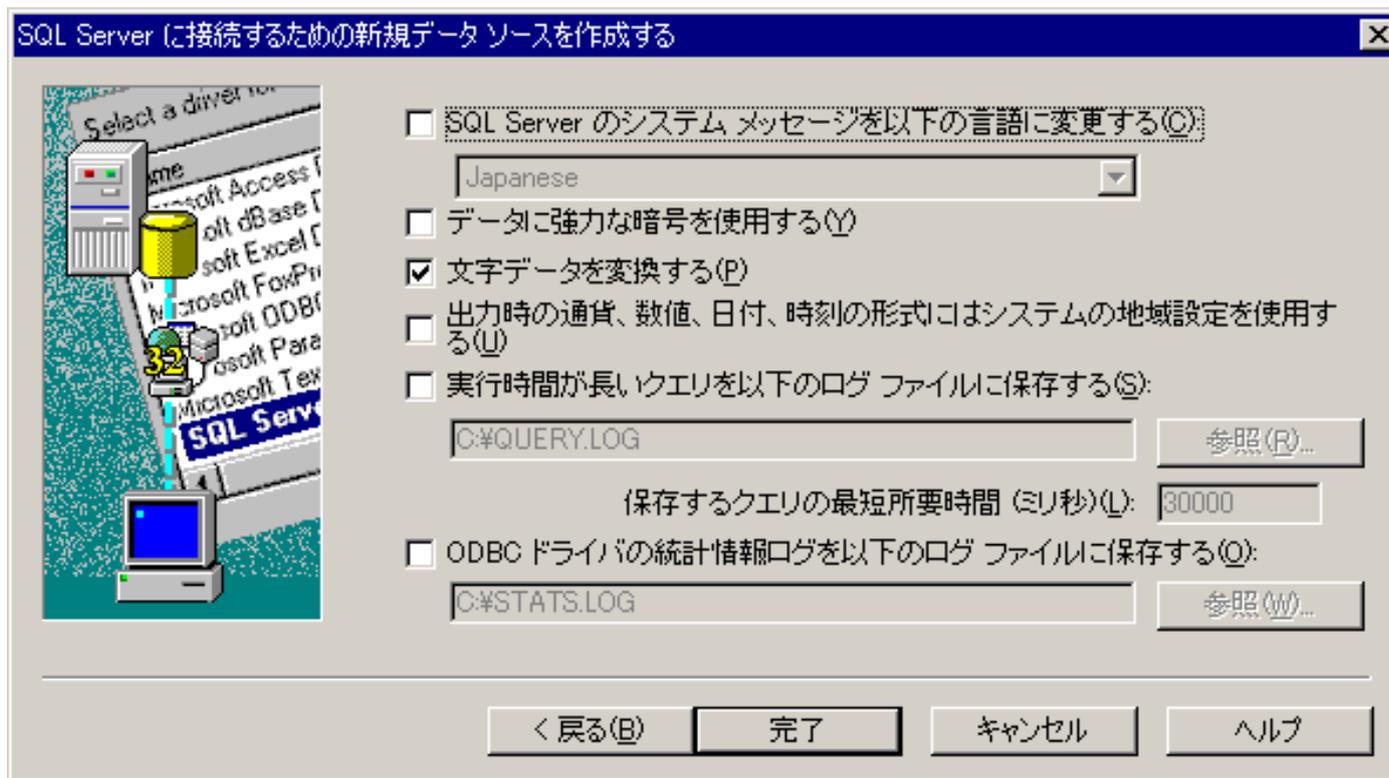
8. [ユーザーが入力する **SQL Server** 用のログイン ID とパスワードを使う] を選択します。
[**SQL Server** に接続して追加の構成オプションの既定設定を取得する] ボックスもチェックします。
最初のセクション「SQL Server 2000 のインストールと構成」の作業 3「SQL Server 2000 でのデータベースの構成」で使用したログイン ID とパスワードを入力します。[次へ] を選択します。



9. 【既定のデータベースを以下のものに変更する】をチェックし、【Reporter】を選択して、【次へ】をクリックします。



10. 【文字データを変換する】をチェックし、【完了】を選択します。



11. [ODBC Microsoft SQL Server セットアップ] ダイアログ ボックスで、[データソースのテスト] ボタンを選択します。



12. [OK] をクリックして、[SQL Server ODBC データ ソース テスト] を終了します。



作業 4 ➡ Reporter データベースとしての SQL の構成

1. [スタート] メニューから、[プログラム] [HP OpenView] [Reporter] [Reporter] の順に選択します。
2. エラー メッセージが表示されます。[Yes] をクリックして続行します。
3. Reporter のメイン ウィンドウで、[ファイル] [構成] [データベース] の順に選択します (別のエラー メッセージが表示されます。[Yes] をクリックして続行します)。
4. [データベースの構成] ダイアログ ボックスの [Reporter データベース] セクションに、最初のセクション「SQL Server 2000 のインストールと構成」の作業 3「SQL Server 2000 でのデータベースの構成」で使用したログイン ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。残りのテキスト ボックスには何も入力する必要がありません。
5. Reporter サービスと Reporter UI が停止していることを確認します。

作業 5 ➡ Reporter の SQL Sever データベース テーブルのアップグレード

Access データベースから SQL Server にデータを移行する場合は、このセクションをスキップして作業 6 に進んでください。

1. <install_directory>%bin%\NewDB.exe を実行します。
2. <install_directory>%bin%\Reporter.exe をダブルクリックして Reporter を開始します。ステータス ペインに、メッセージ「Completed creation/modification of required Reporter database tables」が表示されていることを確認します。

作業 6 ➡ Access データベースから SQL Server へのデータの移行 (オプション、必要に応じて使用)

1. <installation_directory>%bin%\NewDB.exe -empty を実行します。
2. Reporter のメイン ウィンドウを開き、[Reporter サービス開始/終了] ツールバー ボタンをクリックして、ソース データベースにアクセスしているすべてのサービスを停止します (または、[実行] [Reporter サービス終了] を選択します)。



3. [SQL Server Enterprise Manager] コンソールで、新しく作成した Reporter データベースを右クリックし、[DTS インポート ウィザード] を開始します。
4. [すべてのタスク] [データのインポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
5. [変換元] ドロップ ダウン リストから、[Microsoft Access] を選択します。

DTS インポート/エクスポート ウィザード

データソースの選択

データのコピー元を指定します。以下の変換元のいずれかからデータをコピーできます。

データソース(D): Microsoft Access

接続するにはデータベースを選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。詳細設定オプションを指定する必要がある場合もあります。

ファイル名(F): C:\rpmtools\data\datafiles\Reporter.mdb

ユーザー名(U):

パスワード(P):

詳細設定(A)...

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

6. Reporter.mdb ファイルの場所を [ファイル名] テキスト ボックスに入力し、[次へ] をクリックします (Access へのログオンとパスワードは不要です)。
7. [変換先] ボックスで、下向き矢印をクリックし、新しく作成した Reporter データベースがある SQL Server システムを選択します。
8. [SQL Server 認証を使用] ラジオ ボタンを選択します。

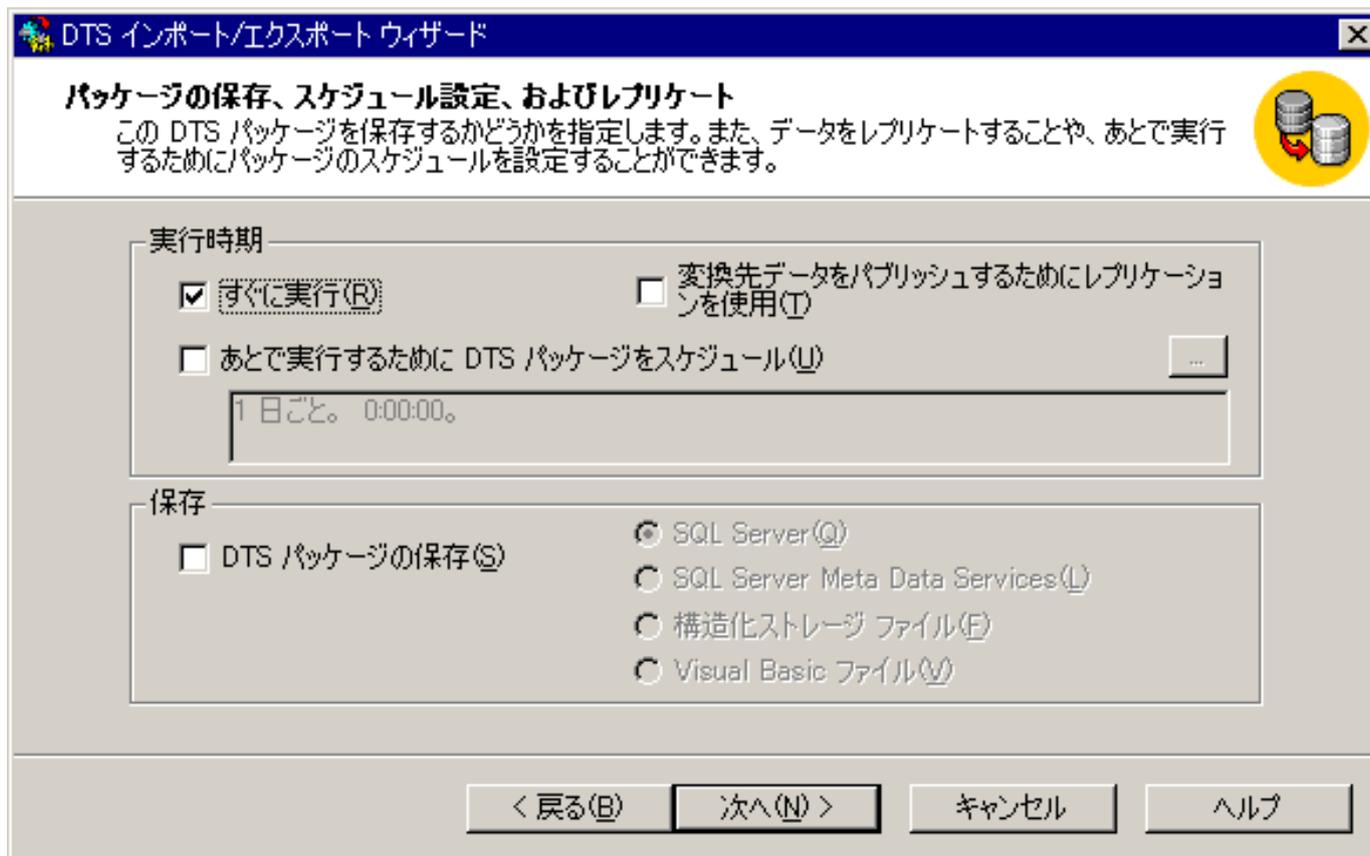
9. 最初のセクション「SQL Server 2000 のインストールと構成」の作業 3「SQL Server 2000 でのデータベースの構成」で使用したログイン ID とパスワードを入力します。



10. [データベース名] ドロップダウン リストから [reporter] を選択し、[次へ] をクリックします。
11. [変換元データベースからテーブルをコピー] の横のラジオ ボタンを選択し、[次へ] をクリックします。



12. 変換元テーブルの下の【すべて選択】ボタンをクリックし、【次へ】をクリックします。



13. 【すぐに実行】チェック ボックスを選択し、【次へ】をクリックします。
14. 【サマリ時情報】ボックスで、変換元と変換先の情報が正しいことを確認し、【完了】を選択します。
インポートの進行状況を知らせるステータス ペインが表示されます。最後のメッセージには、デフォルト データベースから Microsoft SQL Server に正常にインポートされたテーブル数が表示されます。すべてのテーブルがエラーなしで転送されていることを確認します。
15. Reporter のメイン ウィンドウを開き、[Reporter サービス開始/終了] ツールバー ボタンを選択して Reporter サービスを再起動します。

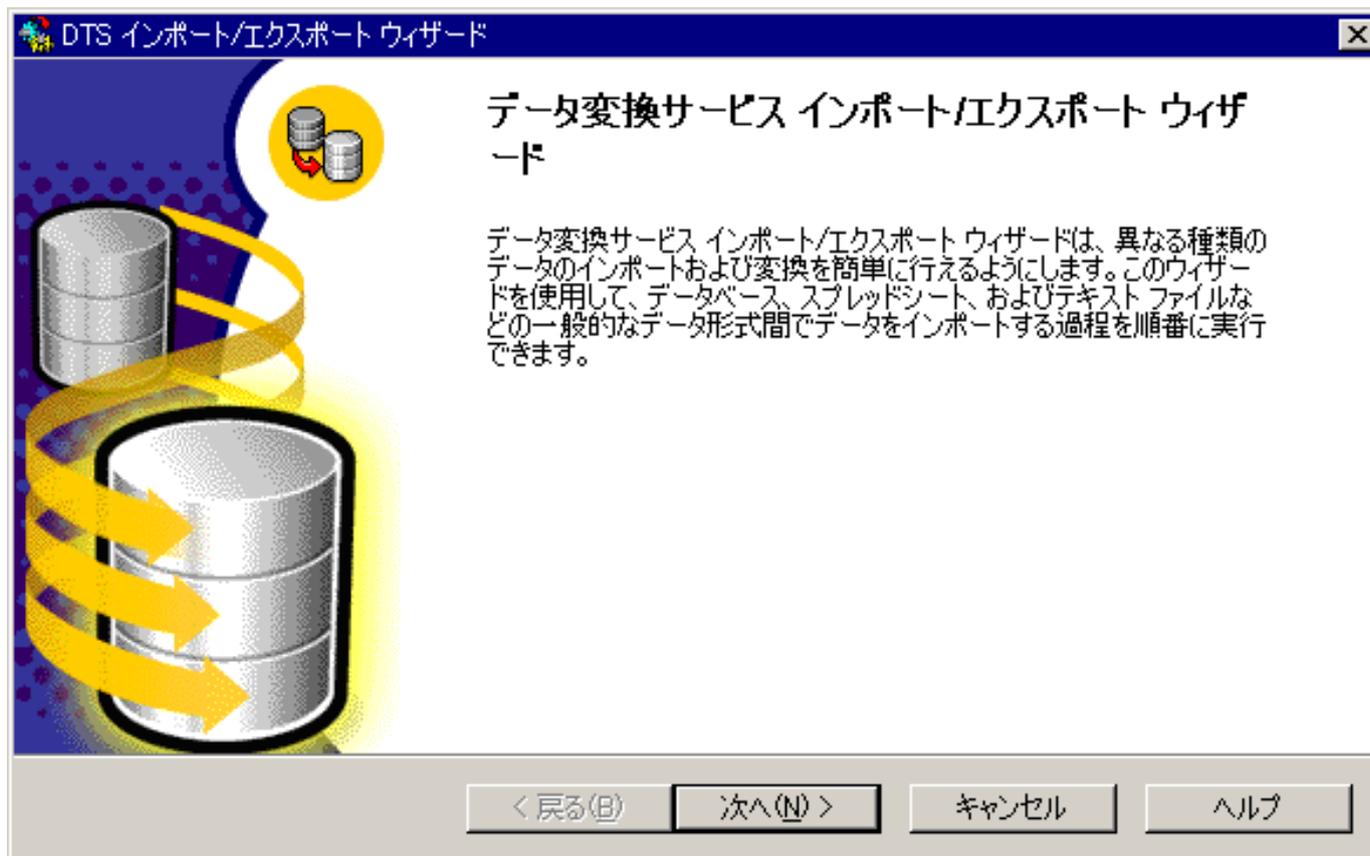


作業 6A ➡ デフォルト MSDE データベースから SQL Server へのデータの移行 (オプション、必要に応じて使用)

1. Reporter のメイン ウィンドウを開き、【Reporter サービス開始/終了】ツールバー ボタンをクリックして、ソース データベースにアクセスしているすべてのサービスを停止します (または、【実行】 【Reporter サービス終了】を選択します)。



2. [SQL Server Enterprise Manager] コンソールで、新しく作成した Reporter データベースを右クリックし、[DTS インポート ウィザード] を開始します。
3. 【すべてのタスク】 【データのインポート】を選択し、【次へ】をクリックします。



4. [変換元] ドロップ ダウン リストから、[SQL Server] を選択します。

DTS インポート/エクスポート ウィザード

データソースの選択

データのコピー元を指定します。以下の変換元のいずれかからデータをコピーできます。

データソース(D): Microsoft OLE DB Provider for SQL Server

Microsoft SQL Server に接続するためには、サーバー、ユーザー名、およびパスワードを指定します。

サーバー(S): NT-T171#OVOPS

Windows 認証を使用(W)

SQL Server 認証を使用(Q)

ユーザー名(U): sa

パスワード(P):

データベース(B): Reporter 最新(R) 詳細設定(A)...

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

5. [変換先] ボックスで、下向き矢印をクリックし、新しく作成した Reporter データベースがある SQL Server システムを選択します。
6. [SQL Server 認証を使用] ラジオ ボタンを選択します。
7. 最初のセクション「SQL Server 2000 のインストールと構成」の作業 3「SQL Server 2000 でのデータベースの構成」で使用したログイン ID (ユーザー名) とパスワードを入力します。
8. 最初のセクション「SQL Server 2000 のインストールと構成」の作業 3「SQL Server 2000 でのデータベースの構成」で使用したログイン ID とパスワードを入力します。

DTS インポート/エクスポート ウィザード

変換先の選択

データのコピー先を指定します。以下の変換先のいずれかにデータをコピーできます。

変換先(T): Microsoft OLE DB Provider for SQL Server

Microsoft SQL Server に接続するためには、サーバー、ユーザー名、およびパスワードを指定します。

サーバー(S): (local)

Windows 認証を使用(W)

SQL Server 認証を使用(Q)

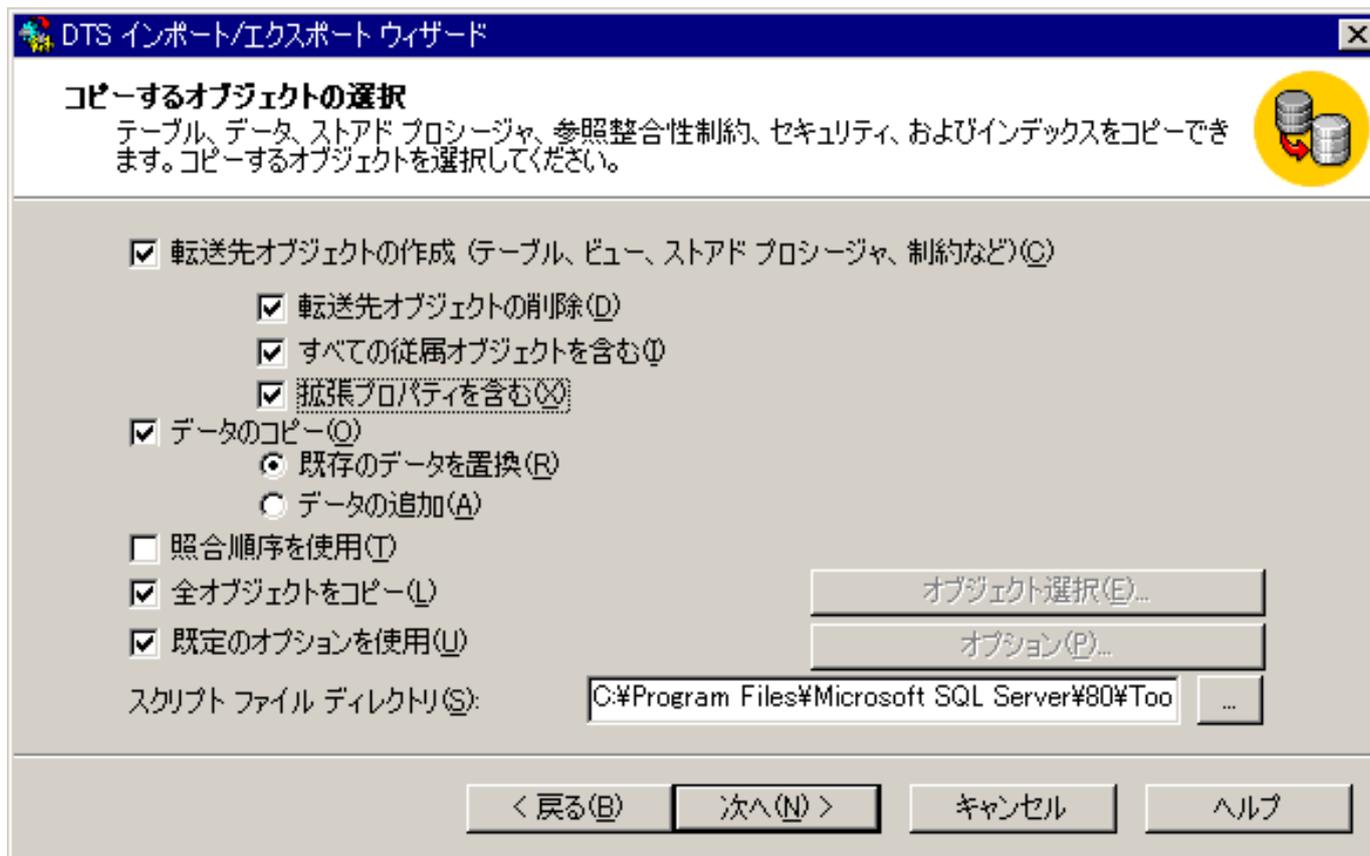
ユーザー名(U): openview

パスワード(P): *****

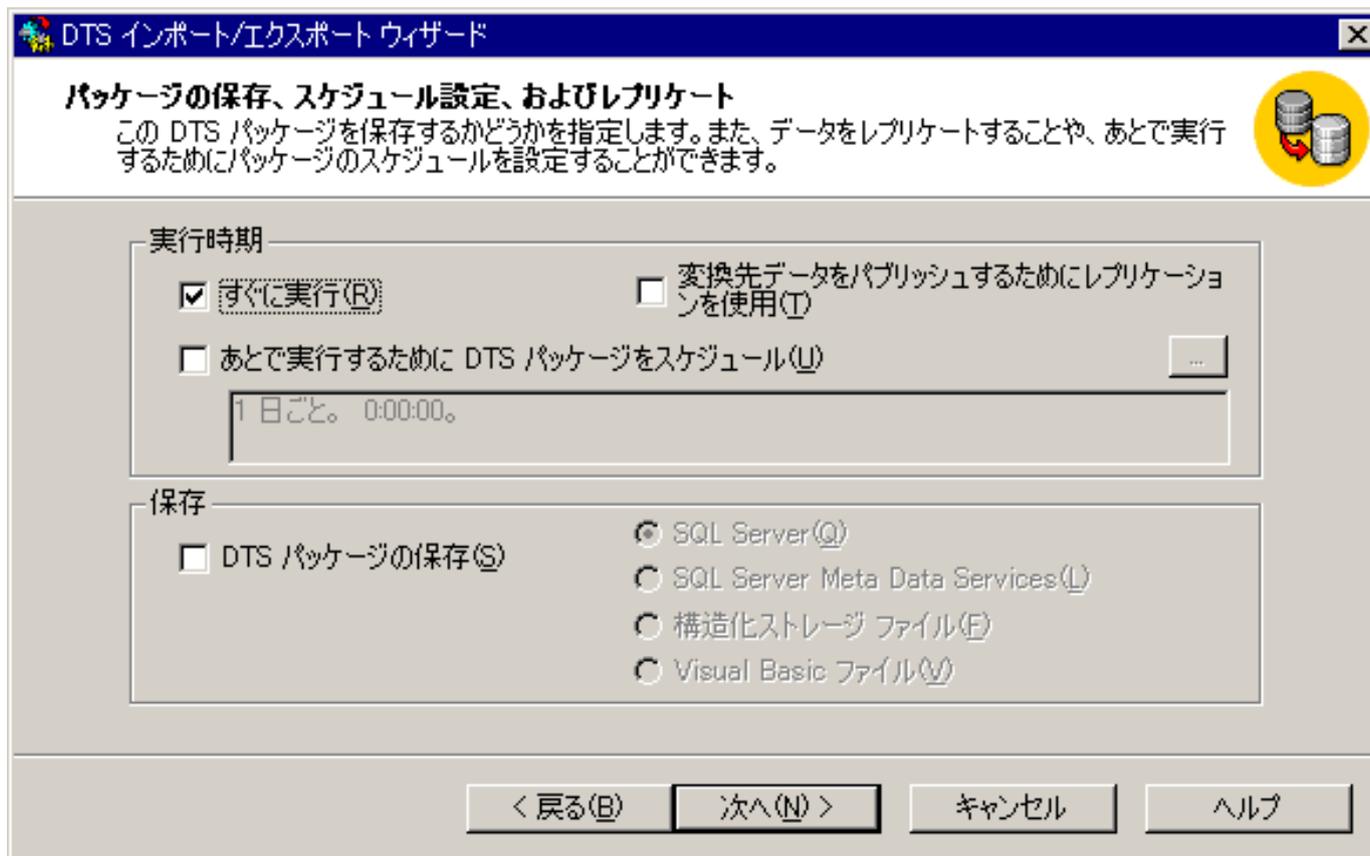
データベース(D): Reporter 最新(R) 詳細設定(A)...

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル ヘルプ

9. [データベース名] ドロップダウン リストから **[reporter]** を選択し、[次へ] をクリックします。
10. **[SQL Server データベース間のオブジェクトとデータのコピー]** の横にあるラジオ ボタンを選択し、[次へ] をクリックします。



11. 【拡張プロパティを含む】を選択し、【次へ】をクリックします。



12. [すぐに実行] チェック ボックスを選択し、[次へ] をクリックします。



13. [サマリ時情報] ボックスで、変換元と変換先の情報が正しいことを確認し、【完了】を選択します。
ステータス ペインにはインポートの進行状況が表示され、最後に、Microsoft SQL Server に正常にインポートされたテーブルの数が表示されます。すべてのテーブルがエラーなしで転送されていることを確認します。
14. Reporter のメイン ウィンドウを開き、[Reporter サービス開始/終了] ツールバー ボタンを選択して Reporter サービスを再起動します。



作業 7 ➡ データベースが設定されたことの確認

1. [スタート] メニューから [プログラム] [Microsoft SQL 2000] [Query Analyzer] の順に選択します。
2. 作成したユーザー名とパスワードを使用し、SQL Server 認証を使用して SQL Server に接続します。
3. [SQL Server Query Analyzer] ダイアログ ボックスで、[DB: reporter] を選択します。
4. データベースの接続を確認するための問い合わせを入力します。

3 Part B : Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server 2005 の設定

概要

この章では、Microsoft SQL Server 2005 を Reporter のデータベースとして使用する際の手順について説明します。Microsoft SQL Server 2005 を HP OpenView Reporter (Reporter) のデータベースとして使用するには、Microsoft SQL Server 2005 のサーバー ソフトウェアとクライアント ソフトウェアをインストールする必要があります。ここでは、次の操作の手順について説明します。

[Microsoft SQL 2005 Server ソフトウェアのインストール](#)
[Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server 2005 の構成](#)
[Microsoft SQL クライアント ソフトウェアのインストール](#)
[Microsoft SQL Server のデータベース テーブルのアップグレード](#)
[ODBC 接続の確立とテスト](#)
[他のデータベースから Microsoft SQL Server へのデータの移行](#)



メモ :

Reporter 3.70 をインストールしていない場合は、先に Microsoft SQL Server ソフトウェアとクライアント ソフトウェアをインストールし、続いて Reporter をインストールしてください。Reporter のインストール手順については、[第 1 章「概要およびインストール」](#)を参照してください。

Microsoft SQL Server をインストールする前にデータベース管理者 (DBA) にご相談ください。表領域の作成など、OV Reporter での使用に最も適した形でデータベースの設計と設定を行うことができます。

Microsoft SQL Server をインストールする前に Microsoft のドキュメントを参照し、推奨設定を確認してください。

インストール要件

Microsoft SQL Server ソフトウェアをインストールする前に、オンライン (<http://www.microsoft.com/sql/default.mspx>) で入手可能な製品ドキュメントでシステム要件などの情報を確認してください。

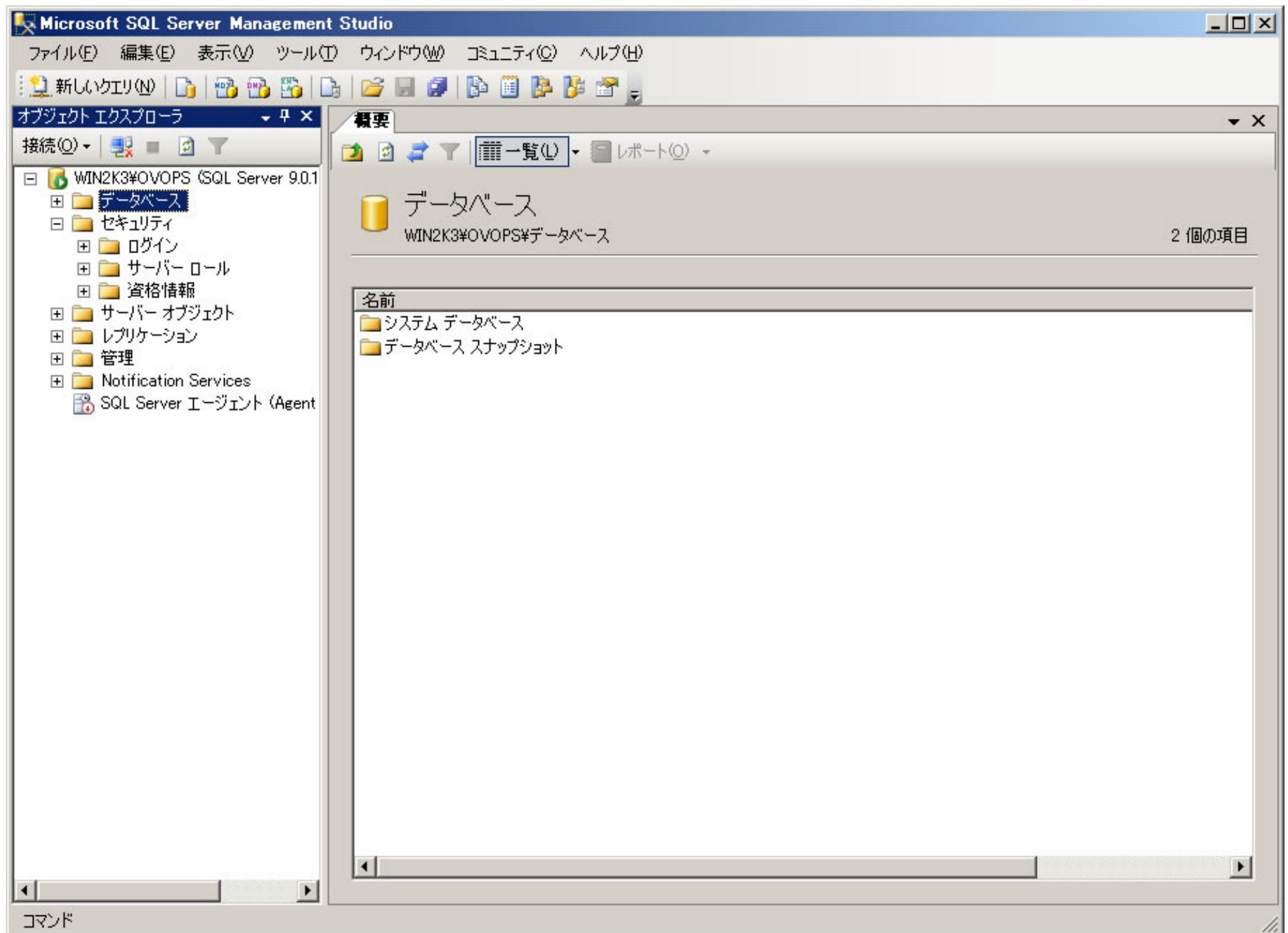
Microsoft SQL 2005 Server ソフトウェアのインストール

1. Microsoft SQL Server 2005 の CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. 【インストール】配下の【サーバー コンポーネント、ツール、**Books Online**、およびサンプル】を選択します。インストール ウィザードが表示されます。
3. ビルトイン システム アカウントとして【ローカル システム】を選択し、表示されたデフォルトのオプションをすべて選択します。
4. 認証には【混合モード】を選択します。
5. 【インスタンス名】ダイアログ ボックスで【名前付きインスタンス】を選択し、「OVOPS」と入力します。
6. インストールの終了後、システムを再起動します。

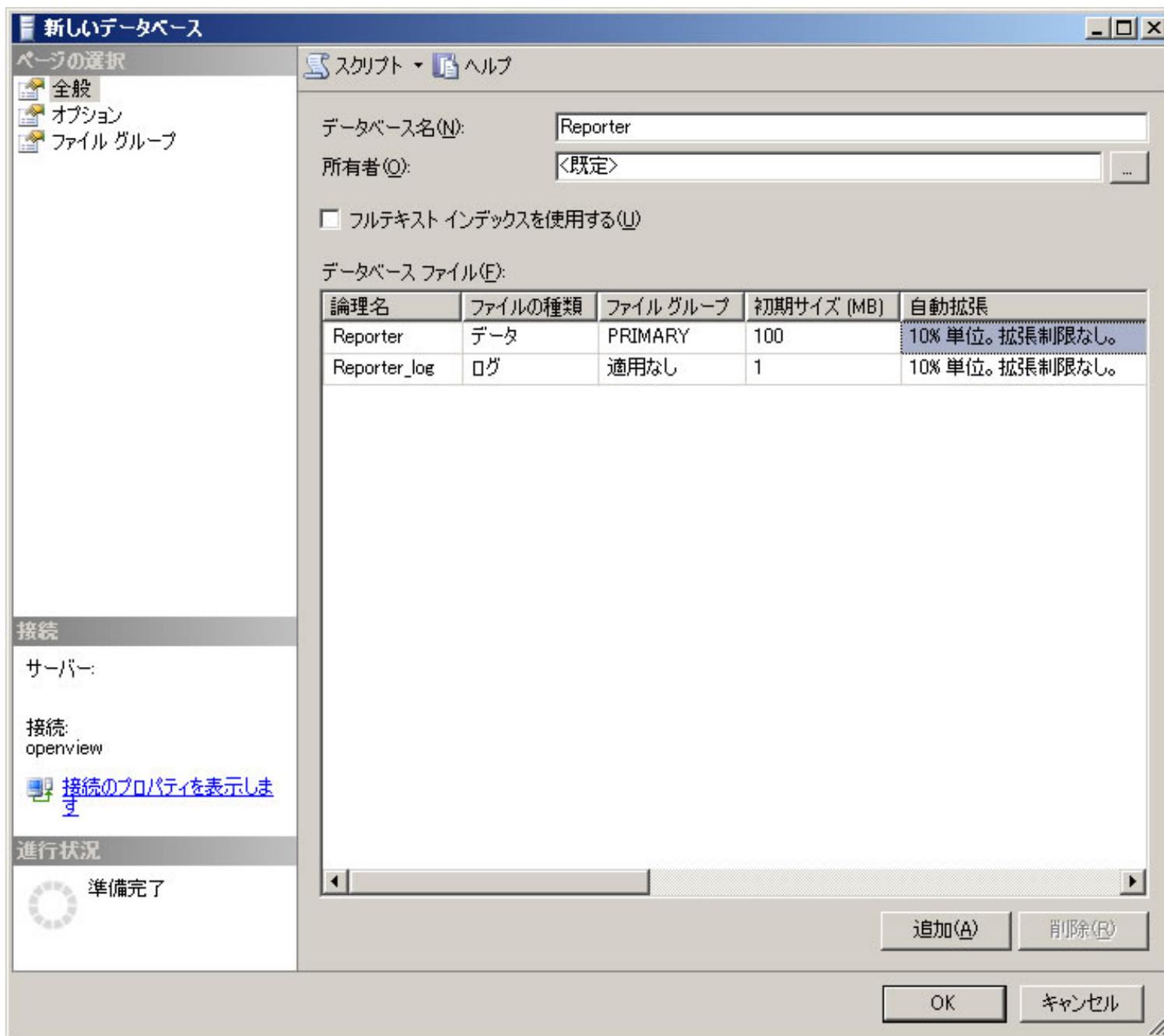
Reporter データベースとしての Microsoft SQL Server 2005 の構成

Reporter データベースとして Microsoft SQL Server 2005 を構成するには、次の手順を実行します。

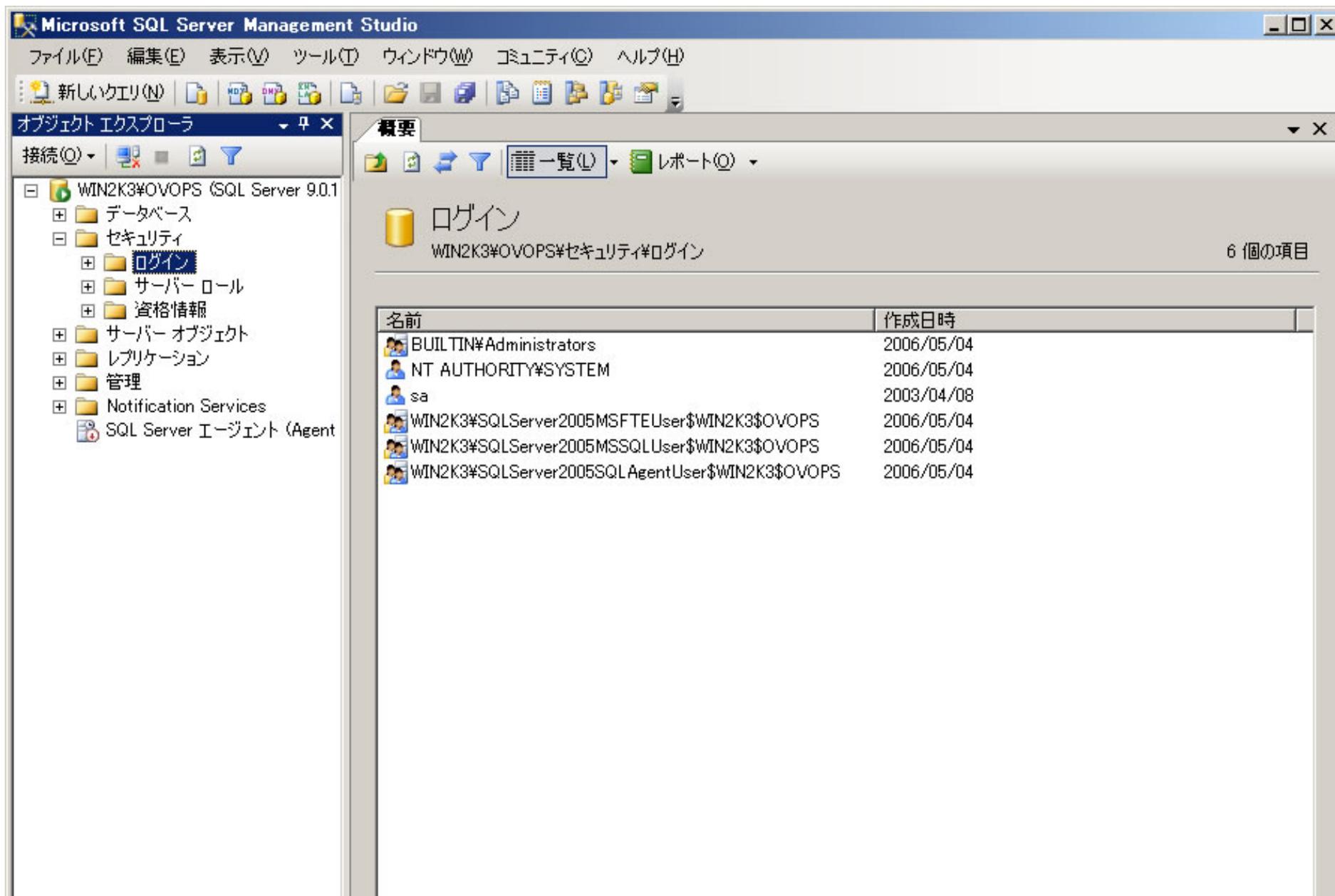
1. [スタート] メニューから、[プログラム] [Microsoft SQL Server 2005] [SQL Server Management Studio] の順に選択します。
2. [ログイン] と [パスワード] に入力し、[接続] をクリックすると、[Microsoft SQL Server Management Studio] ウィンドウが表示されます。



3. [Microsoft SQL Server Management Studio] ウィンドウの左ペインの [データベース] を右クリックし、[新しいデータベース] を選択します。[新しいデータベース] ウィンドウが表示されます。

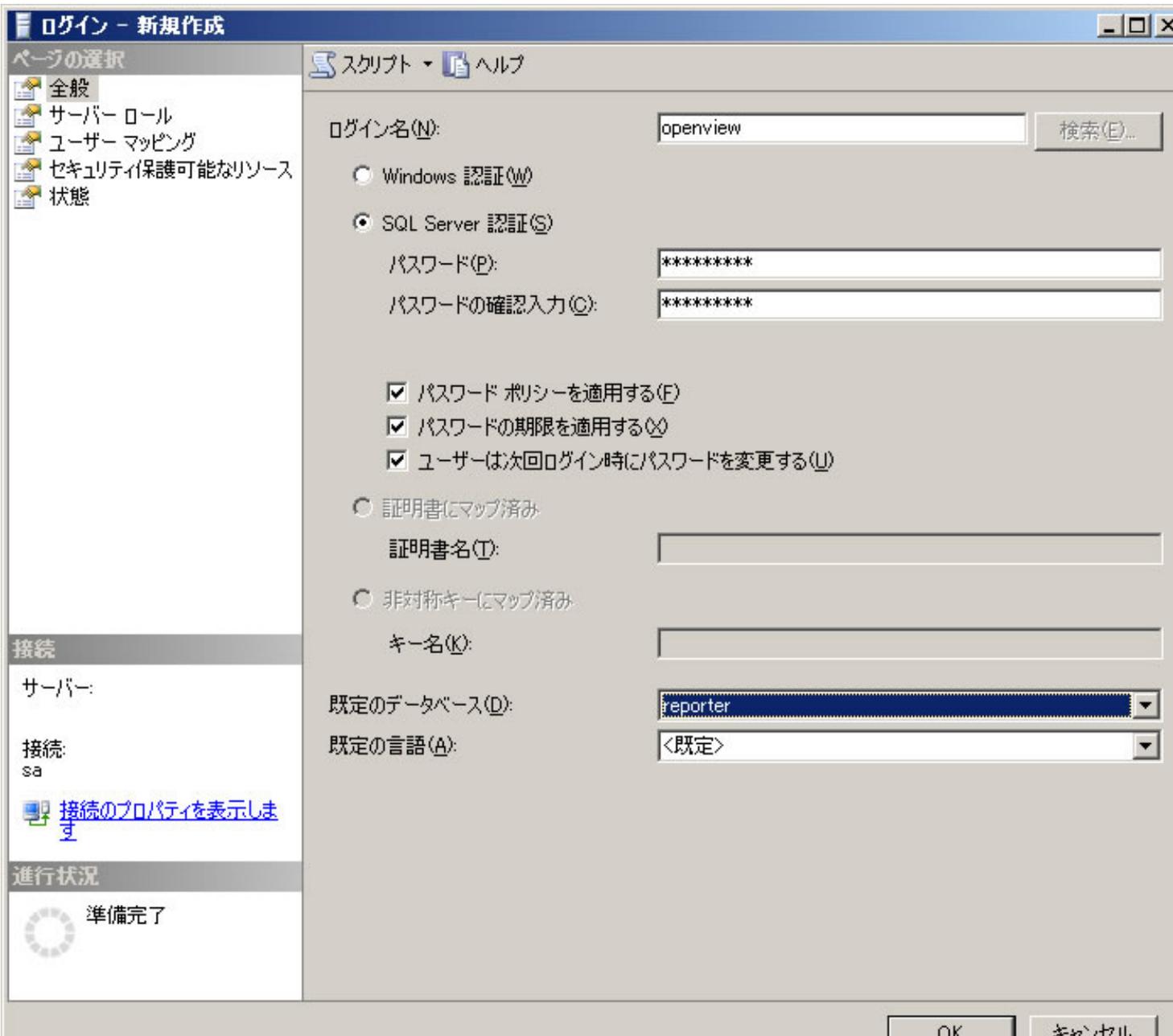


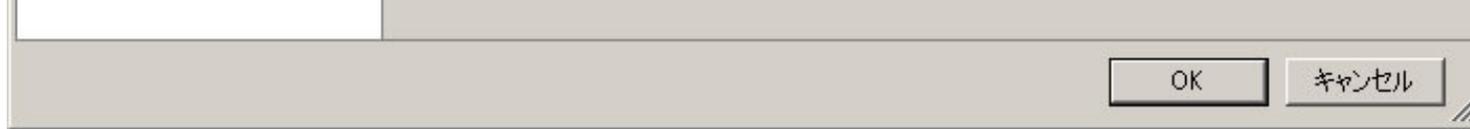
4. 使用している SQL Server システムが SQL Server グループに含まれていない場合は、**SQL Server** グループを右クリックし、ドロップ ダウン メニューから【登録】を選択します。登録ウィザードが表示されます。登録ウィザードに表示されるデフォルトのオプションを選択して、SQL Server を登録します。
5. 【データベース名】テキスト ボックスにデータベースの名前を入力します (例：画面図に示すように「Reporter」と入力)。
新しいデータベースを作成すると、次のファイルが自動的に作成されます。
 - 指定したデータベース名と同じ論理名を持つデータ ファイル (例：画面図の「Reporter」という名前のファイル)
 - データベース名の後に **_log** という文字列が追加された論理名を持つログ ファイル (例：画面図の「Reporter_log」という名前のファイル)
6. これらのデータベース ファイルが【データベース ファイル】セクションに表示されます。次に、データベース ファイルの【初期サイズ (MB)】の値を 100 と指定し、ログ ファイルの初期サイズには表示されたデフォルト値を使用します。【OK】をクリックして【新しいデータベース】ウィンドウを閉じます。
7. 左ペインで【セキュリティ】をクリックします。





8. 【ログイン】を右クリックし、【新しいログイン】を選択します。【ログイン - 新規作成】ウィンドウが表示されます。





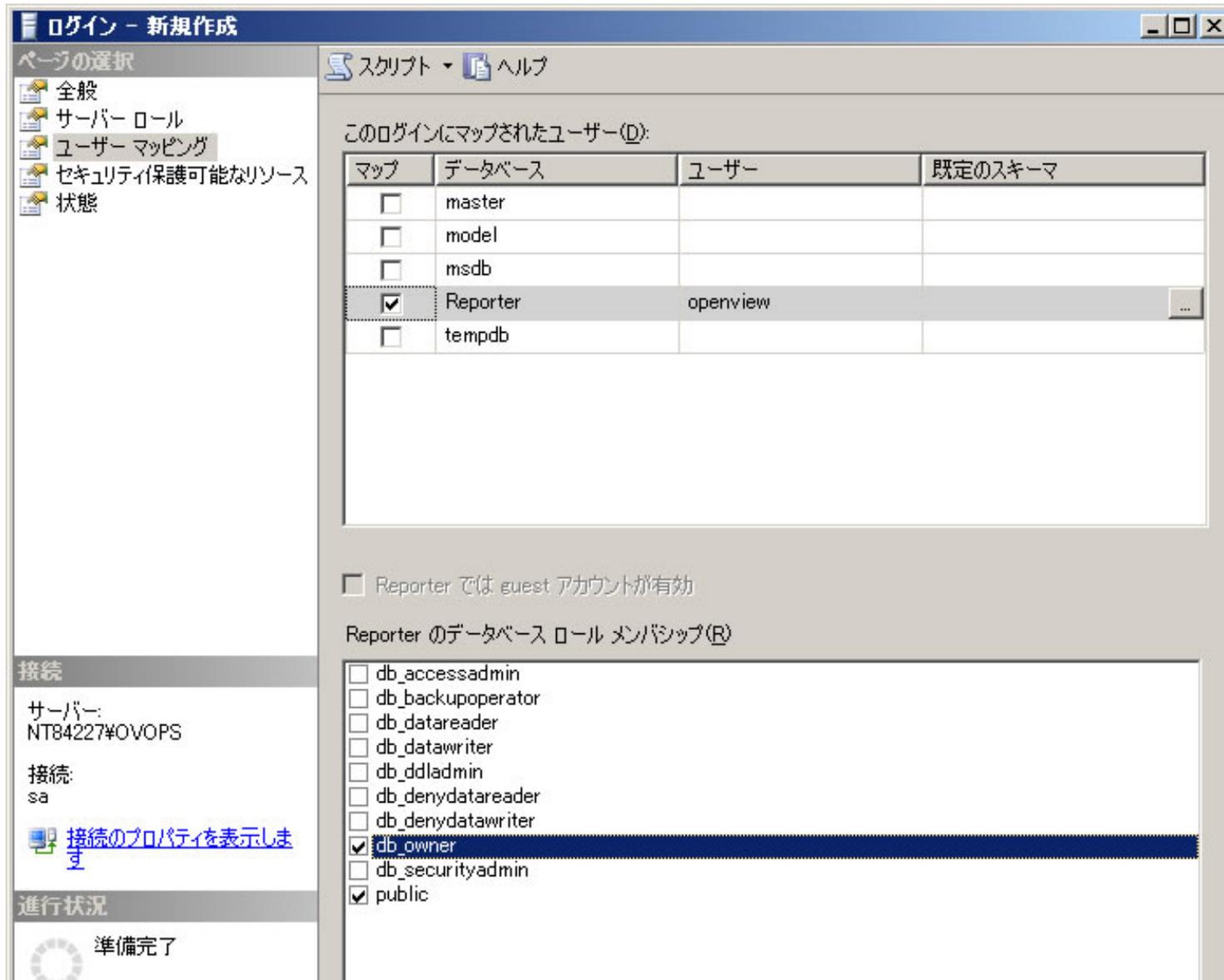
9. 【ページの選択】オプションで【全般】をクリックします。【ログイン名】に **openview** と入力します。

メモ：ログイン名は、必ず **openview** にします。

10. 【SQL Server 認証】を選択し、パスワードを入力します。

11. 【既定のデータベース】ドロップダウンリストから、【Reporter】を選択します。残りのフィールドについては、表示されたデフォルト値をそのまま使用します。

12. 【ページの選択】オプションで【ユーザー マッピング】をクリックします。





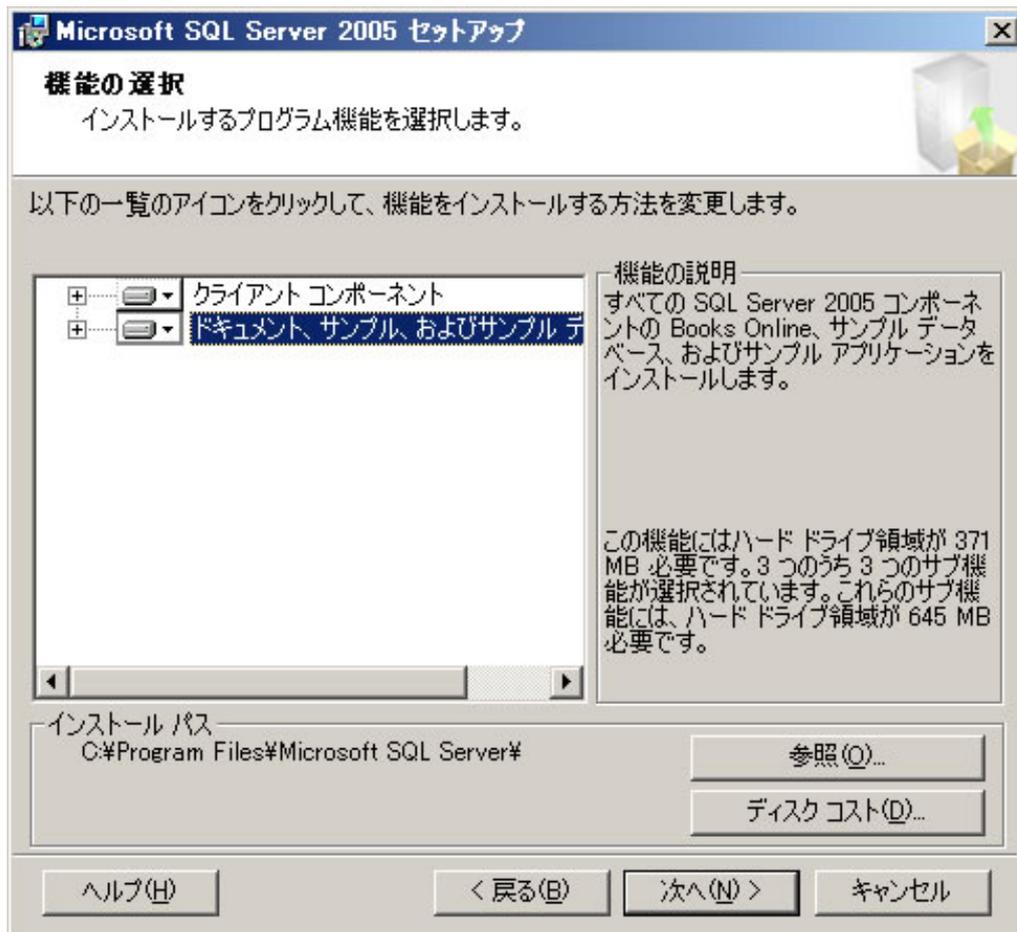
13. 【このログインにマップされたユーザー】セクションで、**Reporter** データベースに対応する【マップ】を選択します。
14. 【Reporter のデータベース ロール メンバシップ】で【db_owner】と【public】を選択します。【OK】をクリックします。

これで、Microsoft SQL Server 2005 データベースは、Reporter のデータベースとして構成されました。

Microsoft SQL クライアント ソフトウェアのインストール

重要 : Reporter と Microsoft SQL Server が同じシステムにインストールされている場合、SQL クライアント ソフトウェアをインストールする必要はありません。

1. Microsoft SQL Server 2005 の CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. SQL Server 2005 の `setup.exe` ファイルをダブルクリックし、【クライアント コンポーネント】を選択すると、ウィンドウ形式のインストール ウィザードが表示されます。



3. このウィザードに従って操作し、値はすべてデフォルトを使用して、インストールを完了します。

Microsoft SQL Server のデータベース テーブルのアップグレード

Microsoft SQL Server データベース テーブルをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを入力します。
<install_directory>\%bin%\NewDB.exe
2. <install_directory>\%bin%\Reporter.exe をダブルクリックして Reporter を開始します。
ステータス ペインに次のメッセージが表示されます。
Completed creation/modification of required Reporter database tables.

Reporter データベースとして Microsoft SQL Server を設定した後の作業

インストール後、次の作業を行います。

ODBC 接続の確立とテスト

重要： デフォルト データベースから Microsoft SQL Server にデータを移行する場合は、Reporter ツールバー ボタンで Reporter サービスを停止し、Reporter のメイン ウィンドウを閉じます。

ODBC 接続を確立し、テストを行う必要があります。ODBC 接続の確立とテストの手順については、[第 3 章 Part C : Reporter データベースとしての Microsoft SQL Express 2005 の設定](#)の「ODBC 接続の確立」を参照してください。

データベース接続の確認

データベース接続を確認するには、次の手順を実行します。

1. [スタート] メニューから、[プログラム] [Microsoft SQL Server 2005] [SQL Server Management Studio] の順に選択します。
2. 作成したユーザー名とパスワードを入力します。
3. [Microsoft SQL Server Management Studio] ウィンドウの [データベース] の下にある [Reporter] を右クリックし、[新しいクエリ] を選択します。
4. データベースの接続を確認するための問い合わせを入力します。

クライアントとサーバーの信頼関係の確認

メモ： 信頼関係の設定は、Reporter クライアントと Microsoft SQL Server がネットワーク内の別々のドメインにある場合、またはクライアントとサーバーが別々のシステム (Windows NT4 同士、または Windows NT4 と Windows 2000) で実行されている場合に必要となります。

1. Microsoft SQL Server がインストールされているシステムに管理者特権でログオンします。
2. [スタート] [設定] [コントロール パネル] の順に選択します。コントロール パネルの [管理ツール] をダブルクリックし、[Active Directory ドメインと信頼関係] をダブルクリックします。[信頼] を選択します。[信頼する側のドメイン] ダイアログ ボックスが開きます。
3. Reporter が存在するドメインを見つけます。該当するドメインが表示されている場合、次の作業に進みます。ドメインが表示されていない場合は、必要に応じて、信頼する側のドメインを追加します。信頼する側のドメインに関して不明な点がある場合は、[ヘルプ] ボタンをクリックします (Reporter システムと Microsoft SQL Server システムが別々のドメインにある場合は、これらのシステム間の信頼関係を構成する必要があります)。

他のデータベースから Microsoft SQL Server へのデータの移行

ここでは、デフォルトの MSDE データベースまたは Microsoft Access データベースから Microsoft SQL Server データベースにデータを移行する手順について説明します。

Access データベースから Microsoft SQL Server へのデータの移行

1. `<installation_directory>%bin%NewDB.exe -empty` を実行します。
2. Reporter のメイン ウィンドウを開き、[Reporter サービス開始/終了] ツールバー ボタンをクリックして、ソース データベースにアクセスしているすべてのサービスを停止します

- (または、[実行] [Reporter サービス終了] を選択します)。
3. **SQL Server Business Intelligence Development Studio** コンソールで、新しく作成した Reporter データベースを選択します。
 4. [タスク] [データのインポート] の順にクリックします。[次へ] をクリックします。

5. [データ ソース] ドロップ ダウン リストから、[**Microsoft Access**] を選択します。
6. [参照...] ボタンをクリックし Reporter.mdb ファイルを選択して、[次へ] をクリックします。[変換先の選択] ウィンドウが表示されます。

SQL Server インポートおよびエクスポート ウィザード

変換先の選択
データのコピー先を指定します。

変換先(D): Microsoft OLE DB Provider for SQL Server

サーバー名(S): OVPNTT12#REPSQL2005

認証

Windows 認証を使用する(W)

SQL Server 認証を使用する(Q)

ユーザー名(U): openview

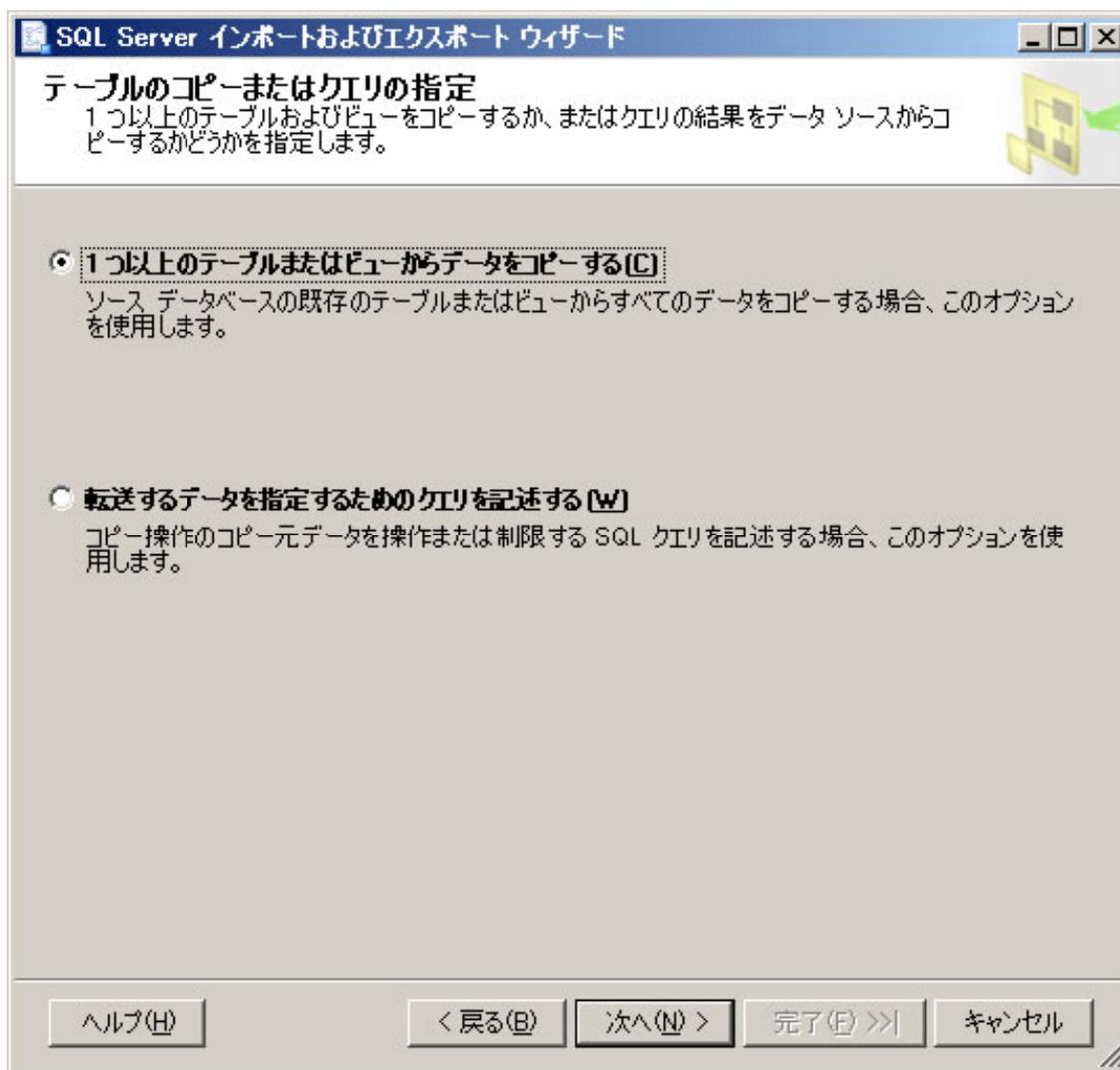
パスワード(P): *****

データベース(T): Reporter

更新(R) 新規作成(E)...

ヘルプ(H) < 戻る(B) 次へ(N) > 完了(F) >> キャンセル

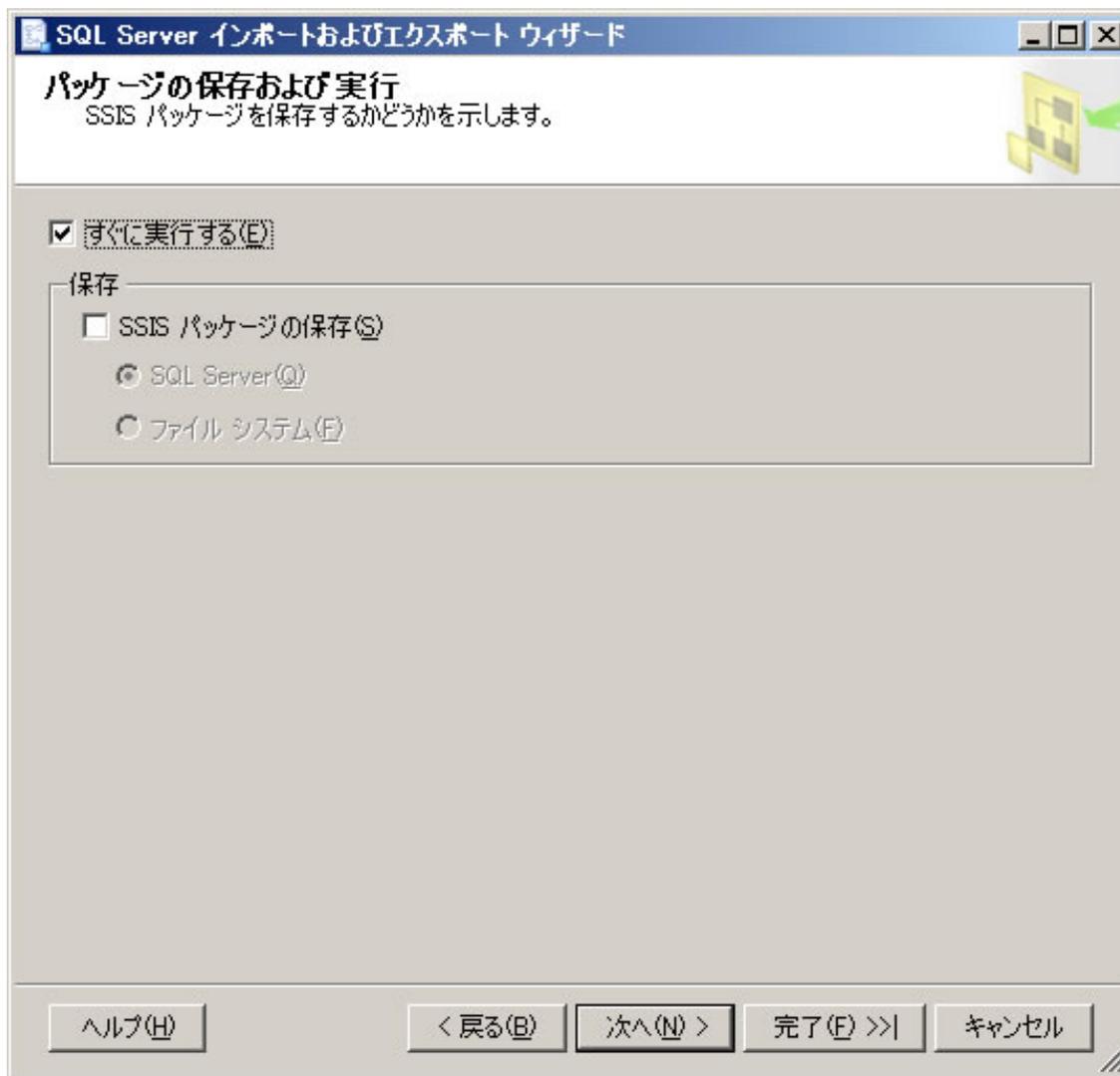
7. 【サーバー名】ドロップダウン リストで、新しく作成した Reporter データベースがある Microsoft SQL Server システムを選択します。
8. 【SQL Server 認証を使用する】ラジオ ボタンを選択します。
9. Microsoft SQL Server 2005 ソフトウェアのインストールと構成に使用したユーザー名とパスワードを入力します。
10. 【データベース】ドロップダウン リストから [Reporter] を選択し、【次へ】をクリックします。



11. 【1 つ以上のテーブルまたはビューからデータをコピーする】を選択し、【次へ】をクリックします。



12. 【すべて選択】をクリックし、【次へ】をクリックします。



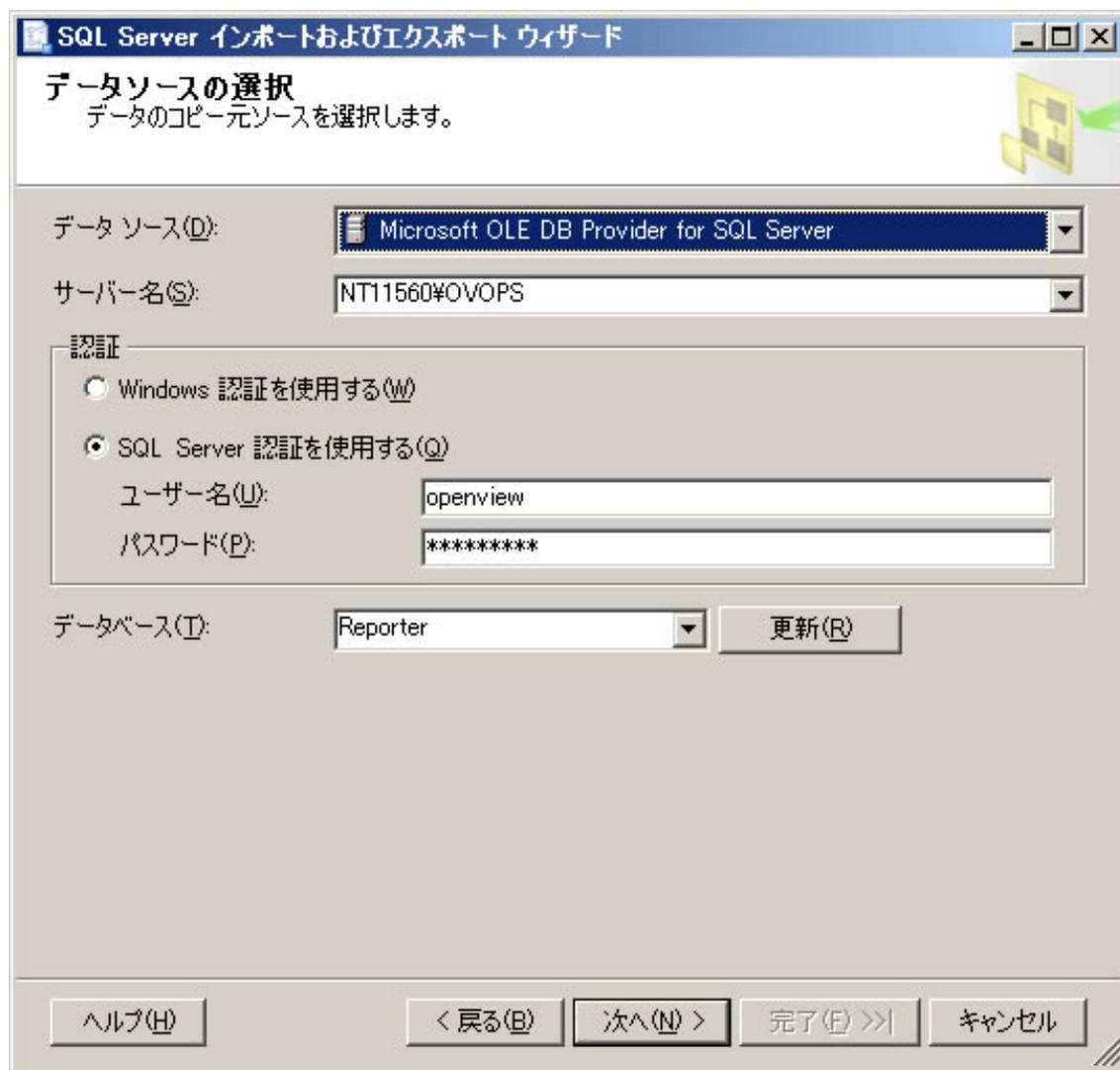
13. 【すぐに実行する】を選択し、【次へ】をクリックします。
14. 表示されるサマリ情報で変換元と変換先の情報が正しいことを確認し、【完了】を選択します。ステータス ペインにインポートの進捗状況が表示されます。インポート後、Access データベースから Microsoft SQL Server に正常にインポートできたテーブルの数がメッセージで表示されます。すべてのテーブルがエラーなしで転送されていることを確認します。

Access から Microsoft SQL Server へのデータ移行が完了した後で、Reporter を再起動できます。

デフォルトの MSDE データベースから Microsoft SQL Server へのデータの移行 (オプション)

1. `<installation_directory>\bin\NewDB.exe -empty` を実行します。
2. Reporter のメイン ウィンドウを開き、【Reporter サービス開始/終了】ツールバー ボタンをクリックして、ソース データベースにアクセスしているすべてのサービスを停止します。

- (または、[実行] [Reporter サービス終了] を選択します)。
3. **SQL Server Business Intelligence Development Studio** コンソールで、新しく作成した Reporter データベースを選択します。
 4. [タスク] [データのインポート] の順にクリックします。[次へ] をクリックします。



SQL Server インポートおよびエクスポート ウィザード

データソースの選択
データのコピー元ソースを選択します。

データ ソース(D): Microsoft OLE DB Provider for SQL Server

サーバー名(S): NT11560#OVOPS

認証

Windows 認証を使用する(W)

SQL Server 認証を使用する(Q)

ユーザー名(U): openview

パスワード(P): *****

データベース(T): Reporter 更新(R)

ヘルプ(H) < 戻る(B) 次へ(N) > 完了(F) >> キャンセル

5. [データ ソース] ドロップ ダウン リストから、[SQL Server] を選択します。
6. [ファイル名] テキスト ボックスに Reporter.mdb ファイルのパスを入力し、[次へ] をクリックします。[変換先の選択] ウィンドウが表示されます。

SQL Server インポートおよびエクスポート ウィザード

変換先の選択

データのコピー先を指定します。

変換先(D): Microsoft OLE DB Provider for SQL Server

サーバー名(S): OVPNTT12#REPSQL2005

認証

Windows 認証を使用する(W)

SQL Server 認証を使用する(Q)

ユーザー名(U): openview

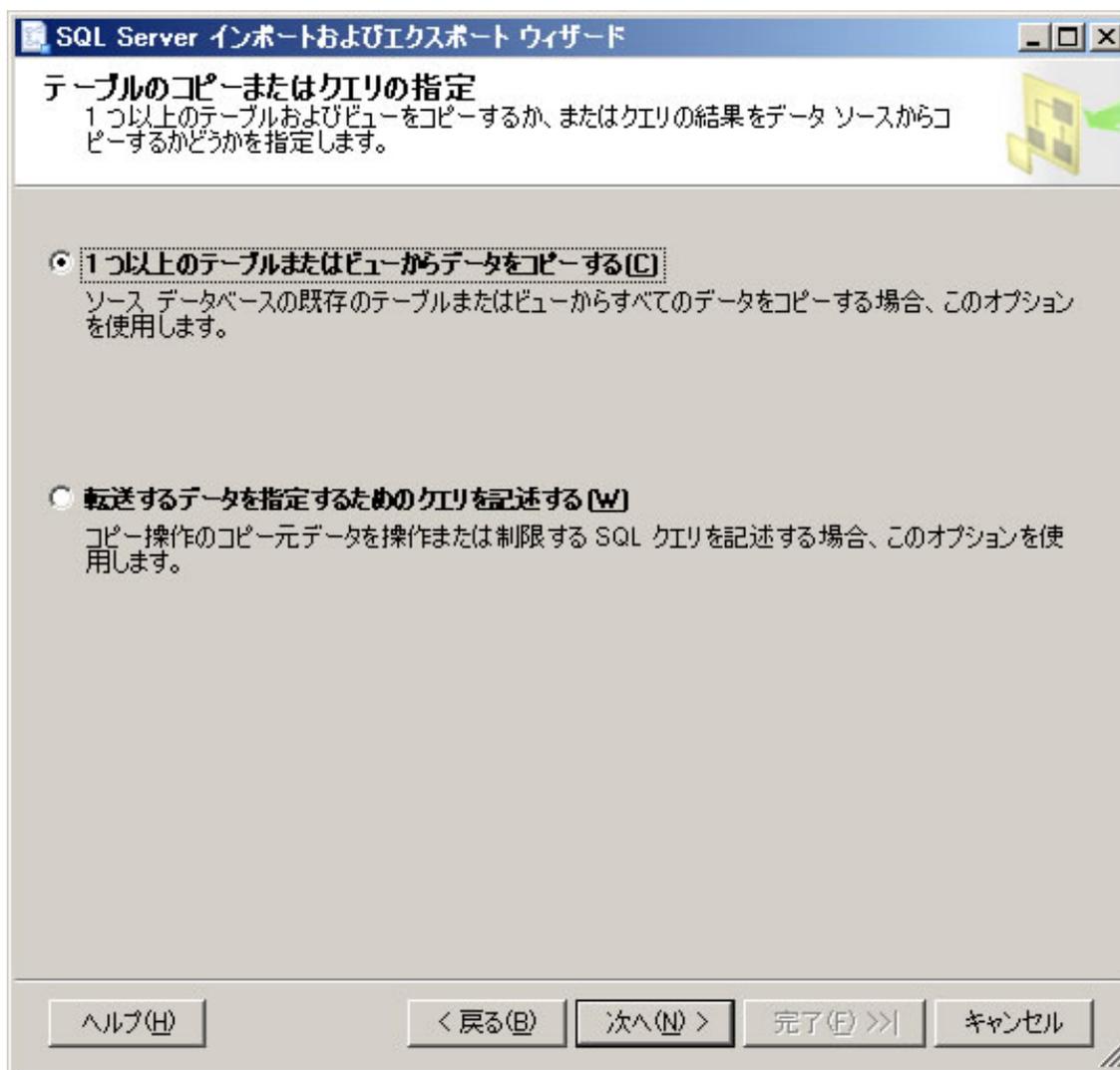
パスワード(P): *****

データベース(T): Reporter

更新(R) 新規作成(E)...

ヘルプ(H) < 戻る(B) 次へ(N) > 完了(F) >> キャンセル

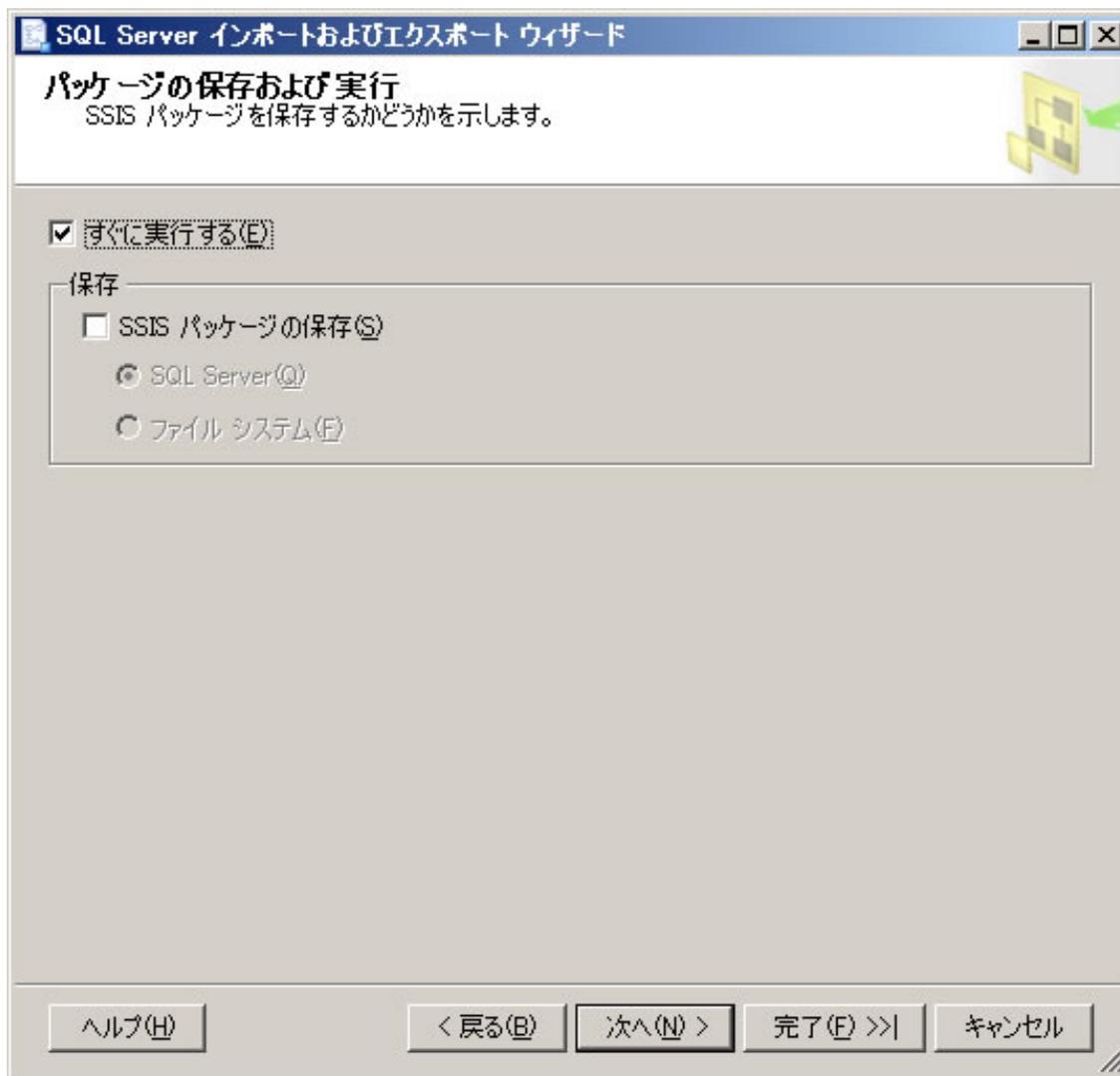
7. 【サーバー名】ドロップダウン リストで、新しく作成した Reporter データベースがある Microsoft SQL Server システムを選択します。
8. 【SQL Server 認証を使用する】ラジオ ボタンを選択します。
9. Microsoft SQL Server 2005 ソフトウェアのインストールと構成に使用したユーザー名とパスワードを入力します。
10. 【データベース】ドロップダウン リストから [reporter] を選択し、【次へ】をクリックします。



11. 【1 つ以上のテーブルまたはビューからデータをコピーする】を選択し、【次へ】をクリックします。



12. 【すべて選択】をクリックし、【次へ】をクリックします。



13. 【すぐに実行する】を選択し、【次へ】をクリックします。
14. 表示されるサマリ情報で変換元と変換先の情報が正しいことを確認し、【完了】を選択します。
ステータス ペインにインポートの進捗状況が表示されます。インポート後、デフォルト データベースから Microsoft SQL Server に正常にインポートできたテーブルの数がメッセージで表示されます。すべてのテーブルがエラーなしで転送されていることを確認します。

デフォルトの MSDE データベースから Microsoft SQL Server へのデータ移行が完了した後で、Reporter を再起動できます。

3 Part C : Reporter データベースとしての Microsoft SQL Express 2005 の設定

概要

この章では、Microsoft SQL Express 2005 を HP OpenView Reporter (Reporter) のデータベースとして設定する方法について説明します。Microsoft SQL Express 2005 をデータベースとして設定するには、次のタスクを順序どおりに実行する必要があります。

1. [Microsoft SQL Express 2005 と Microsoft SQL Server Management Studio Express のインストール](#)
2. [Reporter データベースとしての SQL Express 2005 の構成](#)
3. [ODBC 接続の確立](#)
4. [MSDE 2000 から SQL Express 2005 へのアップグレード](#)

メモ :

Microsoft SQL Express 2005 をインストールする前に、データベース管理者 (DBA) に相談して、OV Reporter によるデータベースの使用を最適化することができます。データベースの使用の最適化には、データベースの設計と設定、表領域の作成などのタスクも含まれます。Microsoft SQL Express 2005 をインストールする前に Microsoft SQL Express 2005 のドキュメントを参照し、最新の推奨設定を確認してください。

Microsoft SQL Express 2005 と SQL Server Management Studio Express のインストール

Microsoft SQL Express 2005 を Reporter のデータベースとして設定するには、次の表に示すファイルをダウンロードする必要があります。これらのファイルは、Microsoft ダウンロード センターからダウンロードできます。Microsoft ダウンロード センターには、ハードウェアおよびソフトウェア要件と MS SQL Express 2005 の設定手順に関する情報も記載されています。

アプリケーション	ファイル名	URL
SQL Express Manager Microsoft SQL Server 2005	SQLEXPJPN.EXE	http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=220549b5-0b07-4448-8848-dcc397514b41&DisplayLang=ja
Microsoft SQL Server Management Studio Express - Community Technology Preview (CTP)	SQLServer2005_SSMSEE.msi	http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?familyid=82AFBD59-57A4-455E-A2D6-1D4C98D40F6E&displaylang=en

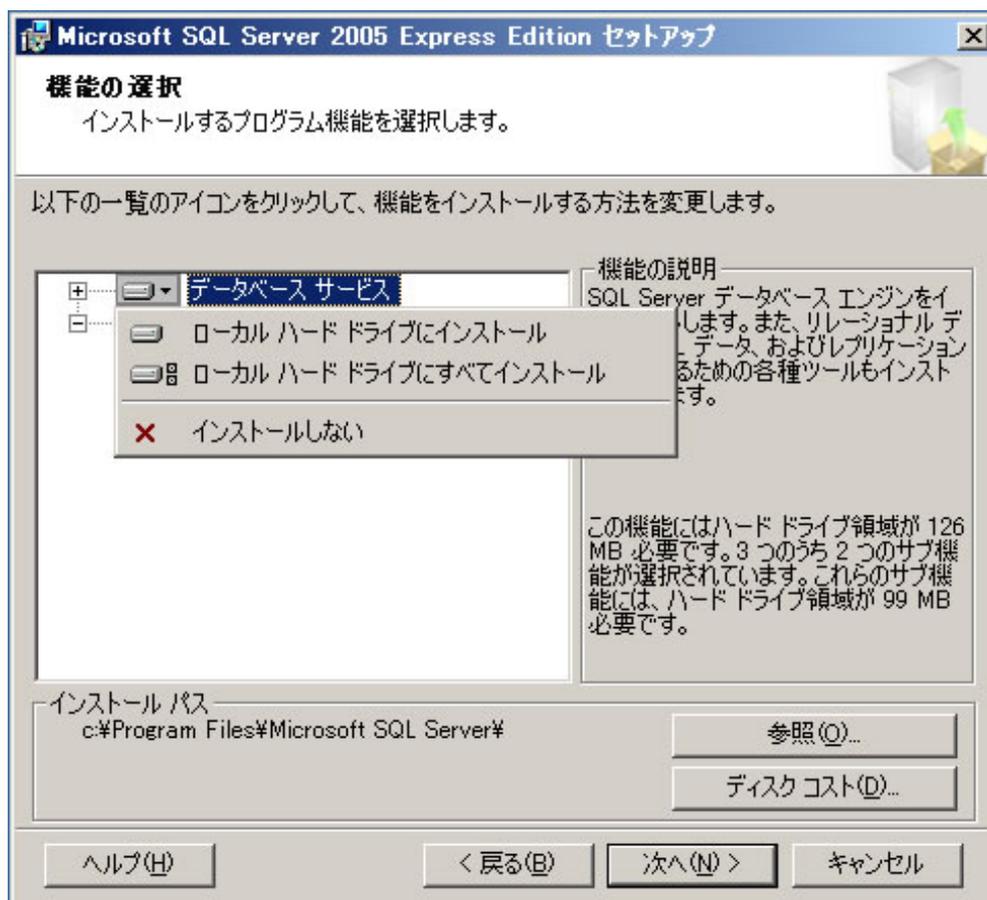
Microsoft SQL Express 2005 のインストール

MS SQL Express 2005 をインストールするには、次の手順を実行します。

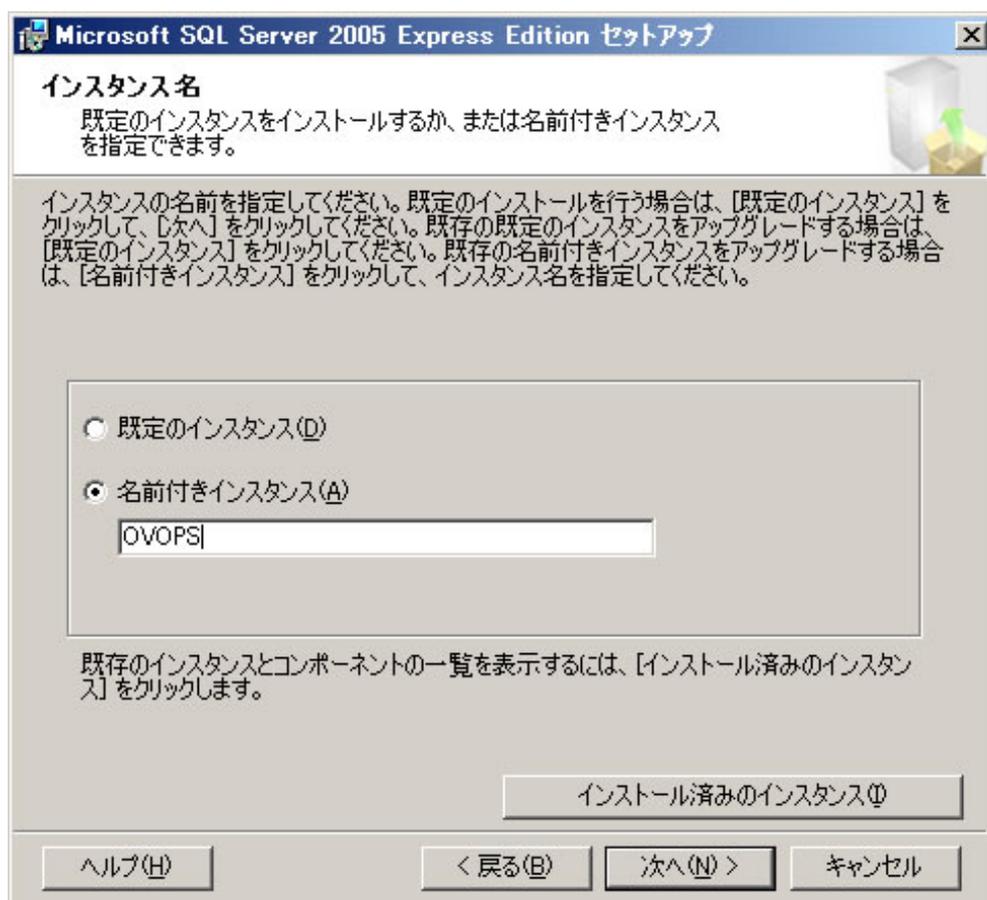
1. **SQLEXPJPN.EXE** ファイルをダブルクリックして、インストール ウィザードを開きます。
2. 【使用許諾契約書に同意する】チェック ボックスを選択し、【次へ】をクリックします。【登録情報】画面が表示されます。
3. 【名前】と【会社名】の各テキスト ボックスに入力します。

メモ : 会社名は省略可能です。

4. 【詳細構成オプションを非表示にする】チェック ボックスの選択を解除し、【次へ】をクリックします。【機能の選択】画面が表示されます。



5. 【データベース サービス】をクリックして、ドロップダウン メニューを表示します。
6. ドロップダウン メニューで、【ローカル ハード ドライブにすべてインストール】を選択します。
7. 【次へ】をクリックします。【インスタンス名】ウィンドウが表示されます。



8. 【名前付きインスタンス】を選択し、**OVOPS** と入力します。
9. 【次へ】をクリックします。【サービス アカウント】ウィンドウが表示されます。



10. 【ビルトイン システム アカウントを使用する】を選択し、ドロップダウン リストから【ローカル システム】を選択します。
11. 【次へ】をクリックします。【認証モード】ウィンドウが表示されます。
12. 【混合モード】を選択し、【パスワードの入力】テキスト ボックスに **sa** の (デフォルトの) ログオン パスワードを指定します。【パスワードの確認入力】テキスト ボックスにパスワードを再入力します。
13. 【次へ】をクリックします。以降の画面ではすべてデフォルト オプションを使用し、インストールを最後まで行います。

Microsoft SQL Server Management Studio Express のインストール

Microsoft SQL Server Management Studio Express をインストールするには、次の手順を実行します。

1. **SQLServer2005_SSMSEE.msi** ファイルをダブルクリックして、インストール ウィザードを開きます。
2. インストール ウィザードに表示されるデフォルトのオプションを使用して、MS SQL Server Management Studio Express のインストールを最後まで行います。

Reporter データベースとしての SQL Express 2005 の構成

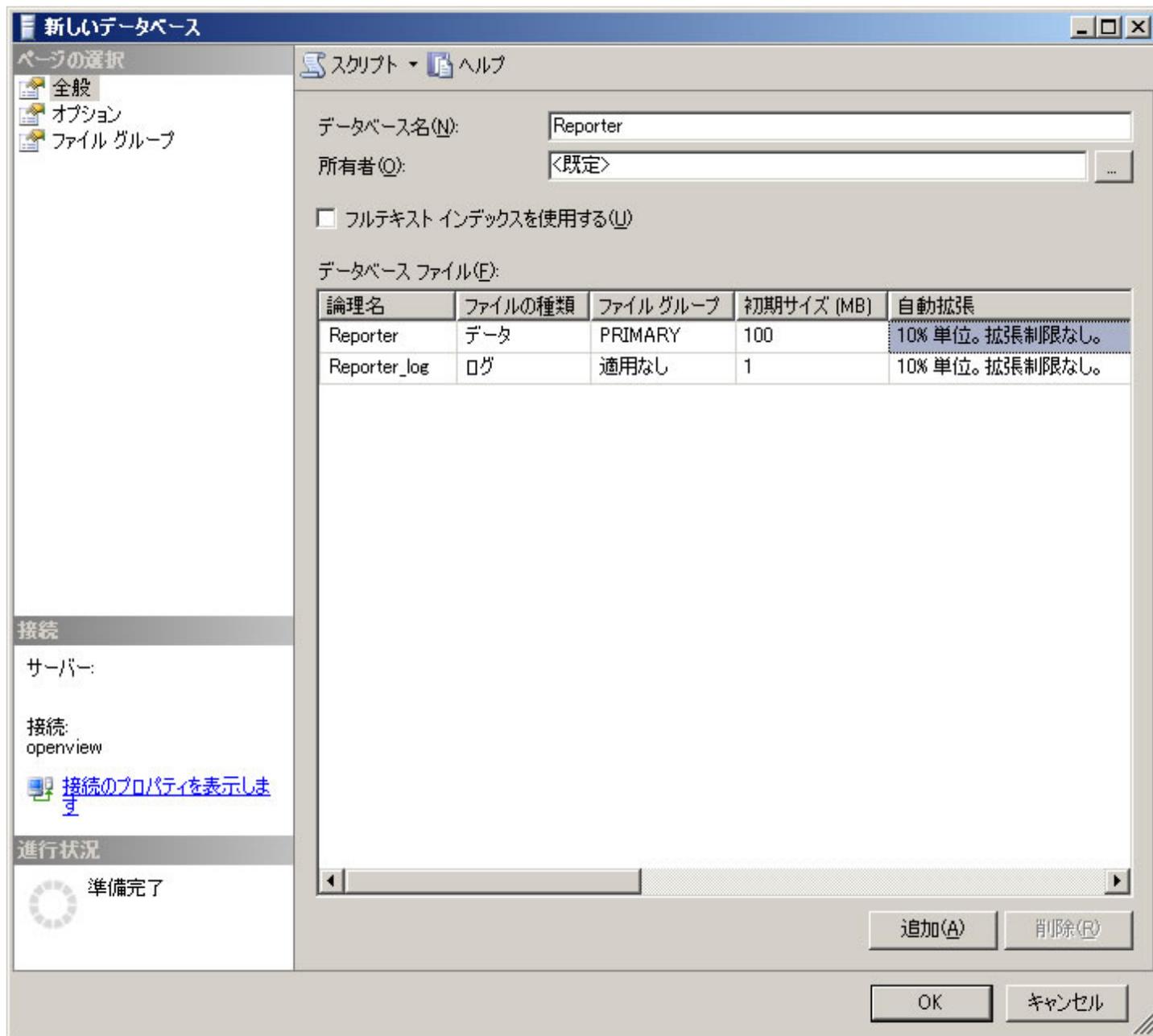
Reporter データベースとして SQL Express 2005 を構成するには、次の手順を実行します。

1. 【スタート】 【プログラム】 【Microsoft SQL Server 2005】 【SQL Server Management Studio】の順に選択します。【サーバーへの接続】ウィンドウが表示されます。
2. ログイン名とパスワードを入力し、【接続】をクリックします。【Microsoft SQL Server Management Studio Express】ウィンドウが表示されます。
3. 新しいデータベースとログイン名を作成します。手順については、「[データベースの新規作成](#)」と「[ログインの新規作成](#)」を参照してください。

データベースの新規作成

1. 【Microsoft SQL Server Management Studio Express】ウィンドウの左ペインの【データベース】を右クリックします。ポップアップメニューが表示されます。

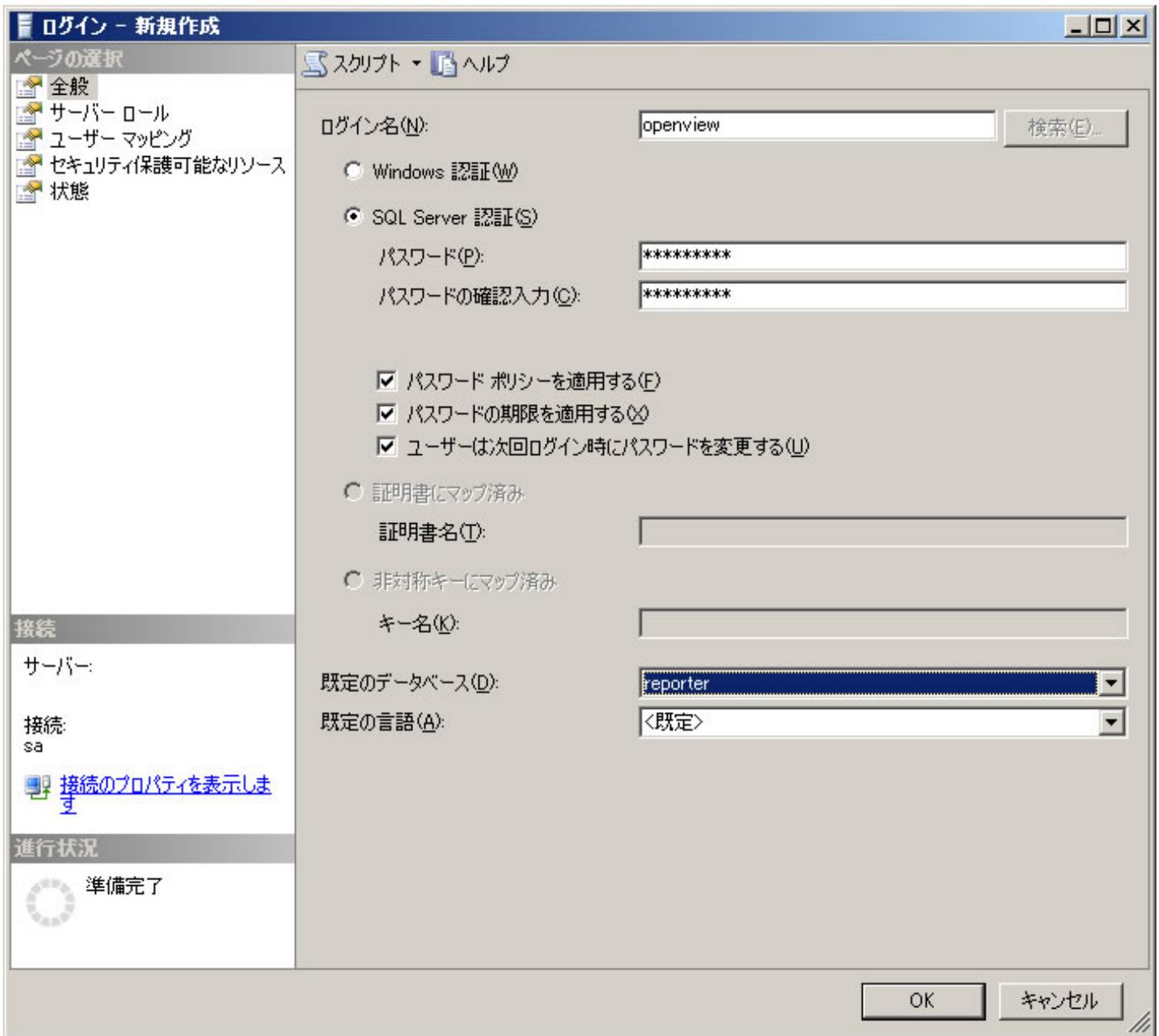
2. 【新しいデータベース】を選択して、【新しいデータベース】ウィンドウを表示します。



3. 【データベース名】テキストボックスにデータベースの名前を入力します (例：画面図に示すように「Reporter」と入力)。
4. 【データベース ファイル】セクションで、Reporter ファイルの【初期サイズ (MB)】の値を 100 と指定します。【OK】をクリックします。
5. データベースを作成した後で、新しいログインを作成します。

ログインの新規作成

1. 【Microsoft SQL Server Management Studio Express】ウィンドウの左ペインの【セキュリティ】を右クリックし、【新しいログイン】を選択して、【ログイン - 新規作成】ウィンドウを表示します。



2. 左ペインのメニュー オプションで [全般] をクリックします。【ログイン名】に *openview* と入力します。
3. 【SQL Server 認証】 ラジオ ボタンを選択し、パスワードを入力します。
4. 【既定のデータベース】 リスト ボックスから、[Reporter] を選択します。
5. 左ペインのメニュー オプションで [ユーザー マッピング] タブをクリックし、【このログインにマップされたユーザー】で Reporter に対応する【マップ】を選択します。
6. 【Reporter のデータベース ロール メンバシップ】で [db_owner] と [public] を選択します。【OK】をクリックします。

[Microsoft SQL Server Management Studio Express] ウィンドウを終了できます。

ODBC 接続の確立

ODBC 接続を確立するには、次の手順を実行します。

1. 【スタート】 【設定】 【コントロール パネル】の順に選択します。
2. 【管理ツール】をダブルクリックします。
3. 【データ ソース (ODBC)】をダブルクリックします。
4. 【Reporter】を選択し、【削除】をクリックします。
5. 【追加】を選択して、【データ ソースの新規作成】ウィンドウを表示します。
6. 【SQL Native Client】を選択し、【完了】をクリックします。
7. 【SQL Server に接続するための新規データ ソースを作成する】ウィンドウで、【サーバー】テキスト ボックスにサーバー名が表示されていることを確認します。【次へ】をクリックします。
8. 【ユーザーが入力する SQL Server 用のログイン ID とパスワードを使う】と【SQL Server に接続して追加の構成オプションの既定設定を

取得する] を選択します。

9. [ログイン ID] に「openview」と入力し、[パスワード] には「[Reporter データベースとしての SQL Express 2005 の構成](#)」で指定したパスワードを入力します。[次へ] をクリックします。
10. [既定のデータベースを以下のものに変更する] を選択し、ドロップダウン リストから [Reporter] を選択して、[次へ] をクリックします。
11. [文字データを変換する] を選択し、[完了] をクリックします。[ODBC Microsoft SQL Server セットアップ] ダイアログ ボックスが表示されます。

次の手順 : ODBC 接続のテスト

ODBC 接続をテストするには、次の手順を実行します。

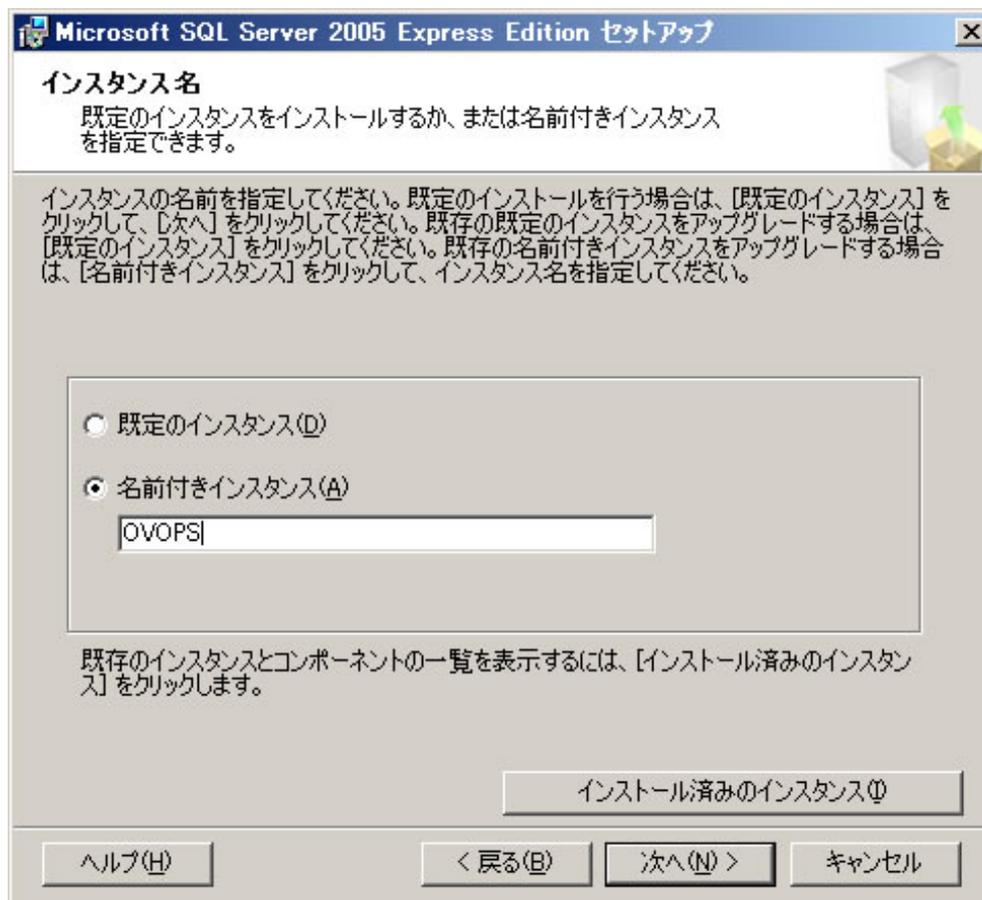
1. [ODBC Microsoft SQL Server セットアップ] ダイアログ ボックスで、[データソースのテスト] をクリックします。
2. [OK] をクリックして、[SQL Server ODBC データソース テスト] を終了します。

MSDE 2000 から Microsoft SQL Express 2005 へのアップグレード

デフォルト データベース MSDE 2000 から Microsoft SQL Express 2005 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

 **重要 :** デフォルト データベースから SQL Express 2005 にデータを移行する場合は、Reporter ツールバー ボタンで Reporter サービスを停止し、Reporter のメイン ウィンドウを閉じます。

1. 「[Microsoft SQL Express 2005 のインストール](#)」の手順 1~3 を実行します。[インスタンス名] ウィンドウが表示されます。



2. [インストール済みのインスタンス] をクリックします。[インストール済みのインスタンス] ウィンドウが表示されます。
3. [SQL Server OVOPS] を選択し、[OK] をクリックします。Reporter データベースが MSDE 2000 から SQL Express 2005 にアップグレードされます。

4 Oracle の設定/接続

(OpenView Operations Oracle データベースへの接続について説明します。)

Reporter のデータベースとして Oracle を使用するように設定できます。以下のトピックでは、Oracle の各バージョンに関する情報を提供し、Oracle リスナーへの接続の構成方法についても説明します。

 **重要** : ご使用のオペレーティング システムやバージョンが例で使用しているものと異なる場合は、画面の例や手順がここでの説明と異なることがあります。

 **重要** : Oracle をインストールする前に、Oracle のデータベース管理者 (DBA) に相談して、OV Reporter によるデータベースの使用を最適化することができます。データベースの使用の最適化には、データベースの設定、表領域の作成などのタスクも含めることができ、データベースのサイズ変更やデータ ファイルの AUTOEXTEND など、構成に関連する問題に対応できます。

 **重要** : 同じ Reporter データベースを使用して Reporter の複数のコピーを実行しないでください。Reporter の複数のコピーから Reporter データベースにデータが書き込まれると、予測できない結果が生じます。

[Part A : Oracle の listener ファイルおよび tnsnames ファイルの構成/編集](#)

[Part B : Oracle へのデータの転送](#)

[Part C : Reporter への Oracle 9i/10g OpenView Operations データベースの接続 \(OVO で管理されるシステムのレポートを作成するため\)](#)

[Part D : Oracle 9i \(Solaris または HP-UX\)](#)

[Part E : Reporter データベースとしての Oracle 10g \(Solaris または HP-UX\) の構成](#)

4 Oracle の設定/接続

Part A : Oracle listener.ora ファイルおよび tnsnames ファイルを構成するためのテンプレートの編集

[テンプレート 1](#) (listener.001) は、Oracle に対して構成されているリスナーが存在しない場合に使用します。このテンプレートを使用して、Oracle が常駐するホスト システムとディレクトリに関するテキストを挿入し、そのファイルで既存の listener ファイルを置き換えることができます。

[テンプレート 1/A](#) (tnsnames.001) は、1 つの Oracle データベース インスタンス (Reporter のデータ用) を構成する場合に使用します。このテンプレートを使用して、Reporter データベースとして使用するデータベース インスタンスに関するテキストを挿入できます。

[テンプレート 2](#) (listener.002) は、リスナーがすでに構成されている場合に使用します。このテンプレートを使用して、Reporter に関する設定をコピーして既存のテンプレートに貼り付けることができます。

[テンプレート 2/A](#) (tnsnames.002) は、Reporter のデータ用の Oracle データベース インスタンスの構成を、他の Oracle データベース インスタンスを認識するように構成済みの既存の tnsnames.ora ファイルに追加する場合に使用します。

テンプレート 1 : listener.ora ファイルの構成

次のサンプル ファイルを使用すると、Reporter に含まれているテンプレート (listener.001) を編集し、Reporter に Oracle データベース インスタンスを接続するためのリスナーを簡単に設定できます。テンプレートを使用する前に、

1. ホスト名を 2 箇所です置き換えます。
2. 必要に応じて、ORACLE_HOME パス (Oracle の常駐場所) を変更します。
3. テンプレート名を listener.ora に変更し、それを HP-UX の /etc ディレクトリまたは Solaris の \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにコピーします。

```
#####  
# FILENAME: listener.ora  
# DATE....: Nov 16 2005
```

```

# NETWORK.: openview
# NODE....: Server
# SERVICE.: LISTENER
# COMMENT.: For use with HP OpenView Reporter
#####

LISTENER =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS=
      (PROTOCOL=IPC)
      (KEY= REPORTER)
    )

    (ADDRESS =
      (PROTOCOL = TCP)
      (HOST = host_name) ##### Insert your host name for <host_name>
      (PORT = 1521)
      (QUEUESIZE = 50) ##### Increased queue size for REPORTER
    )

    (ADDRESS =
      (PROTOCOL = TCP)
      (HOST = host_name) ##### Insert your host name for <host_name>
      (PORT = 1526)
      (QUEUESIZE = 50) ##### Increased queue size for REPORTER
    )
  )

SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (SID_NAME = REPORTER)
      (ORACLE_HOME= /opt/oracle/product/9.2.0)
      (ENVS='EPC_DISABLED=TRUE')
    )
  )

STARTUP_WAIT_TIME_LISTENER = 0
CONNECT_TIMEOUT_LISTENER = 30 ##### Increased timeout for REPORTER
LOG_DIRECTORY_LISTENER = /opt/oracle/product/9.2.0/network/log
LOG_FILE_LISTENER = listener
TRACE_LEVEL_LISTENER = OFF

```

テンプレート 1A : tnsnames.ora ファイルの構成、テンプレートの使用

次のサンプルファイルを使用すると、tnsnames.001 として含まれているテンプレートを編集し、Reporter に対する 1 つの Oracle データベース インスタンスの接続を簡単に構成できます。このファイルを使用する前に、

1. ホスト名を置き換えます。
2. ファイル名を tnsnames.ora に変更し、それを HP-UX の /etc ディレクトリまたは Solaris の \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにコピーします。

```
#####  
# FILENAME: tnsnames.ora  
# DATE....: Nov 16 2005  
# NETWORK.: openview  
# NODE....: Server  
# SERVICE.: LISTENER  
# COMMENT.: For use with HP OpenView Reporter.  
#####  
  
RPT.world =  
  (DESCRIPTION =  
    (ADDRESS = (PROTOCOL= TCP)(Host= <host_name>)(Port= 1521))  
    (CONNECT_DATA = (SID = REPORTER))  
  )
```

テンプレート 2 : 既存の listener.ora ファイルの編集、テンプレートからのコピー

次のサンプルファイルを使用すると、Reporter に含まれているテンプレート (listener.002) を編集し、Reporter に Oracle データベース インスタンスを接続するためのリスナーを簡単に設定できます。このテンプレートを使用する前に、

1. ホスト名を 2 箇所で置き換えます。
2. 必要に応じて、Oracle の常駐場所であるパスを 2 箇所で変更します。
3. REPORTER ブロックおよび "Increased queue size" 行を、既存の listener.ora ファイルの対応する箇所に貼り付けます。
4. CONNECT_TIMEOUT_LISTENER 行を貼り付けるか変更して、タイムアウト値を最低 30 にします。

```
#####  
# FILENAME: listener.ora  
# DATE....: Nov 16 2005  
# NETWORK.: openview  
# NODE....: Server  
# SERVICE.: LISTENER  
# COMMENT: For use with HP OpenView Reporter  
#####  
  
LISTENER =  
  
  (ADDRESS_LIST =  
    (ADDRESS=
```

```

        (PROTOCOL=IPC)
        (KEY= openview)
    )

##### Begin REPORTER block number 1 #####
    (ADDRESS=                #
      (PROTOCOL=IPC)         #
      (KEY= REPORTER)        #
    )                          #
##### End REPORTER block number 1 #####

    (ADDRESS =
      (PROTOCOL = TCP)
      (HOST = <host_name>)
      (PORT = 1521)
      (QUEUESIZE = 50) #### Increased queue size for REPORTER
    )

##### Begin REPORTER block number 2 #####
    (ADDRESS =                #
      (PROTOCOL = TCP)         #
      (HOST = <host_name>)     #
      (PORT = 1526)           #
      (QUEUESIZE = 50)        #
    )                          #
##### End REPORTER block number 2 #####

)

SID_LIST_LISTENER =
    (SID_LIST =
        (SID_DESC =
            (SID_NAME = openview)
            (ORACLE_HOME= /opt/oracle/product/9.2.0)
        )
    )

##### Begin REPORTER block number 3 #####
    (SID_DESC =                #
      (SID_NAME = REPORTER)    #
      (ORACLE_HOME= /opt/oracle/product/9.2.0) #
      (ENVS='EPC_DISABLED=TRUE') #
    )                          #
)                              #
##### End REPORTER block number 3 #####

)

STARTUP_WAIT_TIME_LISTENER = 0
CONNECT_TIMEOUT_LISTENER = 30 #### Increased timeout for REPORTER
LOG_DIRECTORY_LISTENER = /opt/oracle/product/9.2.0.1/network/log
LOG_FILE_LISTENER = listener
TRACE_LEVEL_LISTENER = OFF

```

テンプレート 2A : 既存の tnsnames.ora ファイルの編集、テンプレートからのコピー

次のサンプルファイルを使用すると、tnsnames.002 として含まれているテンプレートを編集し、Reporter への Oracle データベース インスタンスの接続を認識するための既存の tnsnames.ora ファイルを簡単に変更できます。テンプレートを使用するには

1. ホスト名を 2 箇所で置き換えます。
2. REPORTER ブロックを、既存の tnsnames.ora ファイルの対応する場所に貼り付けます。

```
#####
# FILENAME: tnsnames.ora
# DATE....: Nov 16 2005
# NETWORK.: openview
# NODE....: Server
# SERVICE.: LISTENER
# COMMENT.: For use with HP OpenView Reporter.
#####

ov_net =
(DESCRIPTION =
(AADDRESS = (PROTOCOL= TCP)(Host= <host_name>)(Port= 1521))
(CONNECT_DATA = (SID = openview))
)

##### Begin REPORTER block#####
RPT.world = #
(DESCRIPTION = #
(AADDRESS = (PROTOCOL= TCP)(Host= <host_name>)(Port= 1521)) #
(CONNECT_DATA = (SID = REPORTER)) #
) #
##### End REPORTER block #####
```

4 Oracle の設定/接続

Part B : Oracle へのデータの転送

Reporter の Access データベースから Oracle にデータを転送するには Oracle ユーティリティを使用できます。この Oracle ユーティリティでは、データは元の形式で保持されます。ただし、操作を開始する前に、Reporter データベースをバックアップすることを推奨します。

前提条件 : Reporter データベースからデータを移行するには、Reporter 2.0 以上がインストールされている必要があります。Reporter 3.7 は、当初 Oracle のバージョン 9i および Oracle 10g をサポートします。『インストールおよび特別構成ガイド』の指示に従って、データベース オブジェクト、表領域、データ ファイル、ユーザーおよび特権も含めて、Reporter 用の Oracle データベースをインストールします。さらに、Windows 上の Oracle クライアントに必要なすべてのインストールおよび構成を行います。ただし、データベースに対して“`¥HPOpenView¥bin¥Newdb.exe`” エクセキュータブルを実行しないでください。



メモ : 現在の Oracle Migration Workbench (バージョン 2.0.2.0.0) は Oracle 9i の製品です。この製品は、Oracle 8i クライアントとは異なり、Oracle の Home (ディレクトリ構造) にインストールする必要があります。Oracle Migration Workbench (OMWB) のホーム (Oracle 9i) とクライアントのホーム (Oracle 8i) 間を切り替えるには、Oracle “Home Selector” ユーティリティを使用します。OMWB により、Oracle Universal Installer の新しいバージョンと新しい ODBC ドライバがインストールされる場合があります。OMWB は Reporter データベースへの ODBC 接続を必要とし、その接続には新しい 9.x ドライバを使用します。

OMWB は進化し続けている製品であり、Oracle Corporation により絶えず更新されています。したがって、ここでの説明は OMWB を使用するための一般的な指針に過ぎません。OMWB のインストールおよび使用方法に関する具体的な情報については、Oracle のドキュメントを参照してください。

作業 1 Oracle Migration Workbench のダウンロード

Oracle Technology Network の Web サイト (<http://otn.oracle.com>) で、[Services] セクションの [Download Software] (<http://otn.oracle.com/software/content.html>) を選択し、Oracle Migration Workbench (<http://otn.oracle.com/software/tech/migration/workbench/content.html>) を選択します。

Windows 版の Oracle Migration Workbench (最新バージョン 2.0.2.0.0) をダウンロード

します。最初に移行ツール本体をダウンロードし、次にデータ移行元のデータベース (MS Access または SQL サーバー) のプラグインをダウンロードします。

Migration Workbench のドキュメントは、<http://otn.oracle.com/docs/tech/migration/workbench/content.html>

から入手できます。

作業 2 ➡ Reporter サービスの停止

1. Access データベースを使用しているすべての Reporter サービスを停止します。
2. Reporter データベースを使用する他のすべての OpenView 製品 (OpenView Internet Services や Web Transaction Observer など) のサービスも停止します。

作業 3 ➡ Oracle Migration Workbench の移行ツール本体のインストール

1. **OMWB** プログラム (omwb_20200.exe) を実行してインストールを開始します。
2. 表示される Oracle Universal Installer の指示に従って、デフォルトの位置に zip ファイルを展開し、**[次]** をクリックします。
3. 次のように変更します。
[インストール先] の [名前] - OraHome9
[パス] - %oracle%ora9 (または別の場所を指定)
OMWB は、既存のクライアント ソフトウェアとは異なるディレクトリにインストールする必要があります。
4. **[次]** をクリックして続けます。
5. インストール タイプとして **[Typical]** を選択し、**[次]** をクリックします。
6. [サマリー] の内容を確認し、**[インストール]** をクリックします (約 174 MB が必要)。
7. [Net8 Configuration Assistant] ダイアログ ボックスが表示されます。[ディレクトリ・サービスを使用しますか?] のプロンプトに対して **[自分でネット・サービス名を作成する。この場で最初のネット・サービス名を作成します。]** を選択します。
8. **[次へ]** をクリックします。
9. アクセスする Oracle データベースのバージョンを選択し、**[次へ]** をクリックします。
10. [サービス名] に「**REPORTER**」と入力し、**[次へ]** をクリックします。
11. ネットワーク プロトコルとして **[TCP]** を選択し、**[次へ]** を選択します。
12. Oracle データベースがあるコンピュータのホスト名を [ホスト名] に入力し、**[次へ]** をクリックします。
13. **[テストを実行します]** を選択して、データベースに接続できるかどうかをテストします。
この場合、必要に応じてデフォルトのログイン名とパスワードを変更することがあります。
14. **[次へ]** をクリックします。
15. [ネット サービス名] として「**rpt_migrate**」(8i クライアント ドライバとは異なる、9.x ODBC ドライバを使用する接続先データベースの任意の名前) と入力し、**[次へ]** をクリックします。
16. 他のネット サービス名を構成するかを問うプロンプトで **[いいえ]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
17. 構成が完了したことを知らせるメッセージが表示されます。**[次へ]** をクリックして終了します。

作業 4 ➡ OMWB データベース固有のプラグインのインストール

1. OMWB プラグイン プログラム (msaccess_20200.exe) を実行してインストールを開始します。
2. 表示される Oracle Universal Installer の指示に従って、デフォルトの位置に zip ファイルを展開し、

- [次] をクリックします。
3. 作業 3 で指定したインストール先を選択し、[次] をクリックします。
 4. [サマリー] の内容を確認し、[インストール] をクリックします (約 3 MB が必要)。
 5. インストールの完了後に Universal Installer を終了します。

作業 5 ➡ OMWB の起動とデータ リポジトリの作成

1. OMWB を起動して、[Default Repository] を選択します (これにより、Access データベースと Oracle データベースのモデルを保持するローカル ストレージ構造が作成されます)。
2. 移行元データベース (Microsoft Access) を選択します。
3. 移行元データベースの [Capture Wizard] が起動します。[次へ] をクリックします。
4. Microsoft Access XML データ ファイルを作成するための指示に従います。XML ファイルを選択し、[次へ] をクリックします。
5. [Data Type Mappings] の内容を確認します。何も変更しないでください。[次へ] をクリックします。
6. Oracle モデルを作成するかどうかの問いに対して [Yes] を選択します。[次へ] をクリックします。
7. [Capture Details] の内容を確認します。[終了] をクリックします。
8. Oracle モデルの作成中にログが表示されます。エラーまたは警告がある場合は、ダイアログ ボックスが表示されます。エラーの原因である状況を修正します。[OK] をクリックします。
9. Oracle データベースにスキーマを作成するために Migration Wizard を起動するかどうかの問いに対して [No] を選択します (移行の前に Oracle モデルを調整する必要があります)。

作業 6 ➡ Oracle モデルの調整

1. OMWB ダイアログ ボックスで [Oracle Model] タブを選択します。
2. [Tools] メニューの [Tablespace Discoverer] を使用して、Oracle モデルの表領域エレメントを完全に設定します。表領域名を取得するには、DBA 特権で Oracle データベースにアクセスする必要があります。デフォルト 表領域として [Reporter] を選択します。
ツールの使用後に、[REPORTER] と [RPT_INDEXES] を含む複数の表領域が表示されます。
3. Oracle Reporter データベースの作成時に作成したユーザーの名前とパスワードに一致するように、“REPORTER” ユーザーの名前とパスワードを変更します。
4. 手順 3 で変更したユーザーの下の各インデックスに対して、[Override Default Storage Options] タブを選択し、表領域として [RPT_INDEXES] を選択します。
5. 毎回 [Apply] をクリックし、各インデックスの変更を適用します。

作業 7 ➡ Oracle への移行

1. [Migration Wizard] の開始後に、OMWB ダイアログ ボックスで [Migrate to Oracle Action] を選択します。
2. [Destination Service: RPT_MIGRATE] に DBA 特権があるユーザー名とパスワードを入力し、[次へ] をクリックします。
3. Oracle プロンプトに対してテーブルのデータを移行するには、[Yes] を選択して [次へ] をクリックします。
4. 移行用のすべてのスキーマ オブジェクトを選択し、[次へ] をクリックします。
5. サマリーの内容を確認し、[次へ] をクリックします。
6. 移行プロセスに関するログを示すダイアログ ボックスが表示されます。
7. REPORTER 表領域は移行先のデータベースにすでに存在するため、このエラーが報告された場合は [Ignore Error] を選択します。
8. OPENVIEW ユーザー (または REPORTER を Oracle データベースとして最初に作成したときに設定したユーザー名) は移行先のデータベースにすでに存在するため、このエラーが報告された場合は

[Ignore Error] を選択します。

9. MS Access データベースを変更するかどうかのプロンプトに対して、**[Cancel]** を選択します。
10. エラーが発生した場合は、その原因である状況を解決します。
11. ミリ秒が日付カラムに移行されないことを示す警告は無視します。
12. Migration Workbench を終了します。

データの移行は正常に完了しています。

作業 8 Oracle Home の設定、Reporter の起動

1. Oracle クライアントのホーム (Oracle 8i) に切り替えるには、Oracle Home Selector ユーティリティを使用します。
2. [コントロール パネル] [管理ツール] [データ ソース] [システム DSN] タブの順に選択し、REPORTER ODBC が新しい Oracle データベースを指していることを確認します。
3. Oracle データベースに対して ¥Program Files>HP OpenView¥bin¥Newdb.exe を実行し、Reporter 3.7 に対して必要なスキーマの更新を行います。
4. Reporter のメイン ウィンドウを開き、ツールバーから Reporter サービスを開始します。

これで、移行したデータを Reporter で使用できます。

4 Oracle の設定/接続

Part C : Reporter への OpenView Operations 7 または 8 (Oracle 9i / 10g) データベースの接続

HP-UX システムおよび Windows システムでの Oracle 9i/10g の設定

前提条件 : HP-UX システムのカーネルパラメータの設定と比較して、現在の設定を確認してください。変更が必要な場合は、システムをリブートする必要があります。また、予測できない結果を避けるために、Reporter の複数のコピーを実行しないでください。

その他のシステム、メモリ、およびディスク要件については、Oracle が発行し、ソフトウェアに付属している『Oracle9i Installation Guide Release 2 (9.2.0.1.0) for HP 9000 Servers and Workstations』の“System Requirements”を確認してください。

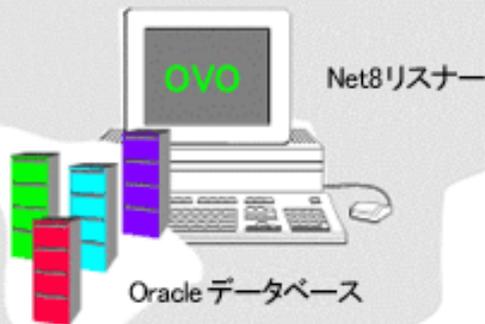
Oracle には、データベースの最適なインストールとアーキテクチャに関する特定の推奨事項があります。このマニュアルでは、データベースのインストールと管理に関する説明を網羅していません。特定の環境でデータベースのパフォーマンスを最適化する方法については、Oracle の技術資料や資格のある Oracle の専門家に問い合わせることを推奨します。

Reporter で OpenView Operations (OVO) [以前の ITO] のデータを含むレポートを作成するには、OVO データベース (UNIX システム上の Oracle) と Reporter (Windows システム上) の間の接続を構成する必要があります。次の図は、2 つのシステム上で実行する操作の概要です。

必要に応じて、UNIXシステムを構成

1 Net8リスナーがインストールされていることを確認

2 Net8リスナーの構成(構成されていない場合)



3 リスナーが実行されていることを確認

NTシステムを次の手順で構成

1 Oracle Client ソフトウェアのインストール



2 OVO への Net8 接続の構成

3 OVO への Net8 接続の確認

4 ODBC データソースの構成

5 OVO レポート パッケージのインストール

6 Reporter での データベースの構成

7 OVO システムの検出と OVO データの収集

前提条件と準備

OVO 管理サーバー上のソフトウェア - Oracle 9i/10g を使用する OVO 7 または 8 をインストールし、実行する必要があります。

Reporter システム上のソフトウェア - Oracle のソフトウェア パッケージである Oracle Client Software バージョン 9i/10g。

情報 - OVO Oracle データベース サーバーの完全修飾名、ORACLE_HOME ディレクトリ、OVO データベースにログインするためのユーザー名とパスワードを確認しておく必要があります。

大文字と小文字の区別 - Windows の一部のエントリは、大文字と小文字を区別して入力する必要があります。手順に示すテキストを正確に入力することを推奨します。

UNIX のシェル - 通常、HP-UX のユーザーは Korn シェルを使用し、Solaris のユーザーは Bourne シェルを使用するため、変数をエクスポートする構文が異なります。

Korn シェルのフォーマット :

```
export VARIABLE_NAME=<value>
```

Bourne シェルのフォーマット :

```
VARIABLE_NAME=<value>
```

```
export VARIABLE_NAME
```

以下の説明では Korn シェルのフォーマットを使用します。 Bourne シェルを実行している場合は、対応するフォーマットに置き換えてください。

UNIX サーバー システムの構成

ここでは、OVO 用の Oracle データベース サーバーである UNIX システムに Net リスナーがインストールされていることを確認し、必要に応じてリスナーをインストールします。

作業 1 ➡ Net リスナーのインストールの確認

OVO 7 または 8 が実行しているシステムの Oracle データベース サーバーに、Net リスナーをインストールし、実行している必要があります。Net リスナーがすでにインストールされ、実行していることを確認する手順は、次のとおりです。この手順では、OVO 用の Oracle データベース サーバー システムに、root としてログオンしていることを仮定しています。

リスナーが構成されているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
grep listener /etc/services
```

この出力に、"listener" で始まる行が含まれる場合 (例 : `listener 1521/tcp #Oracle listener`)、リスナーはすでに構成されているため、作業 3 に進みます。

出力に含まれるポート番号が `1521/tcp` 以外の場合、Oracle データベースまたは OVO 管理者に連絡し、ポート番号を 1521 に変更してリスナーを再開始できるかを確認してください。リスナーを再開始できない場合は、次のような 2 つの方法で (どちらを選択するかは任意) クライアント側のポート番号を変更できます。

作業 2 の手順 7 で Windows を構成するときに UNIX Oracle サーバーで指定したポートと一致する別のポートを選択します。

または

システム上の `¥Oracle¥Ora92¥network¥admin¥tnsnames.ora` ファイルを変更して、作業 2 の手順 7 (下記) で指定したポート番号を入力します。

出力が表示されない場合、リスナーは構成されていません。次の作業を行う必要があります。

作業 2 ➡ Net リスナーの構成 (必要な場合)

HP-UX Oracle データベース サーバー システムに Net リスナーを構成するには、`opcsqlnetconf` スクリプトを実行します。OVO 7 システムの場合、このスクリプトは OVO サーバー システムの `/opt/OV/bin/OpC` ディレクトリにあります。



メモ : スクリプトを実行して、「Above Net files already exist. Do you want to replace them?」という警告が表示された場合は、「No」と応答してスクリプトの実行を終了してください。OVO 管理者またはデータベース管理者に連絡してください。

スクリプトでは、OVO Oracle データベース インスタンス「openview」が、OVO のインストール先のシステムにあると仮定してお

り、デフォルトの「リスナー」システムとしてスクリプトを実行しているシステムの名前がプロンプトで表示されます。スクリプトは、OVO Oracle データベース インスタンス「openview」が常駐するシステム上で実行する必要があります。

次の手順で、**OVO 7 UNIX** サーバーを構成します。

1. OVO がインストールされている UNIX サーバーで、root としてログオンします。
2. `/opt/OV/bin/OpC/opcsqnetconf` スクリプトを実行します

(ほとんどの応答で必要なことは、**Enter** キーを押すことのみです)。

スクリプトのプロンプトと出力は、次のとおりです。

```
OVO Net configuration script opcsqnetconf.
Verify/Set Variables:
Please enter ORACLE_SID [openview]: [Enter]
Please enter ORACLE_HOME [/opt/oracle/product/9.2.0.1.0]: [Enter]
Please enter the name of the database server node
(normally management server) [voyager]: [Enter]
Do you want to enable automatic startup of the Net listener at system boot (y/n) [y] ? [Enter]
Do you want to start the Net listener now (y/n) [y] ? [Enter]
```

```
LSNRCTL for HPUX: Version 2.3.4.0.0 - Production on 18-NOV-05 14:39:39
Copyright (c) Oracle Corporation 2002. All rights reserved.
Starting /opt/oracle/product/9.2x/bin/tnslsnr: please wait...
TNSLSNR for HPUX: Version 2.3.4.0.0 - Production
System parameter file is /etc/listener.ora
Log messages written to /opt/oracle/product/9.2.0.1.0/network/log/listener.log
Listening on: (ADDRESS=(PROTOCOL=ipc)(DEV=10)(KEY=openview))
Listening on: (ADDRESS=(PROTOCOL=tcp)(DEV=14)(HOST=15.8.153.173)(PORT=1521))
Connecting to (ADDRESS=(PROTOCOL=IPC)(KEY=openview))
STATUS of the LISTENER
-----
Alias LISTENER
Version TNSLSNR for HPUX: Version 2.3.4.0.0 - Production
Start Date 18-NOV-05 14:39:46
Uptime 0 days 0 hr. 0 min. 1 sec
Trace Level off
Security OFF
SNMP OFF
Listener Parameter File /etc/listener.ora
Listener Log File /opt/oracle/product/9.2.0.1.0/network/log/listener.log
Services Summary...
```

```
openview has 1 service handler(s)
The command completed successfully
OVO Net configuration script opcsqlnetconf finished.
#
```

作業 3 ➡ リスナーの実行を確認

次のコマンドを入力します。

```
export ORACLE_HOME=<pathname>
      (pathname は通常 /opt/oracle/product/9.2.0.1.0 です)
$ORACLE_HOME/bin/lsnrctl status
```

結果のステータス サマリの「**Services Summary**」に、「**openview has <number> service handler(s)**」(number は 1 以上)と示されていることを確認します。「リスナーがない」ことを示すエラー メッセージが表示された場合、Oracle データベース管理者または OVO 管理者に連絡し、リスナーを起動してください。

Windows のクライアント システムの構成

(Reporter の実行)

ここでは、Windows クライアントの構成について説明します。この構成によって、Reporter を OVO データベースにアクセスする UNIX システムに接続できます。

作業 1 ➡ Oracle 9.2.0.1.0 クライアント ソフトウェアのインストール

最初に Oracle の Oracle 9i/10g Client, Release 2 (9.2.0.1.0) が必要です。Reporter がインストールされている Windows クライアント上での管理者権限も必要です。

 **メモ** : Reporter のメイン ウィンドウを開いている場合は、Oracle 9.2.0.1.0 クライアント ソフトウェアをインストールを開始する前にウィンドウを閉じてください。

1. システムに Oracle がインストールされている場合は、Windows システムに Oracle 9i/10g Client の CD を挿入し、表示されるダイアログ ボックスで【製品のインストール/削除】を選択します。
システムに Oracle 製品がインストールされていない場合は、この手順をスキップしてください。
2. Oracle Universal Installer の【ようこそ】ダイアログで【次】をクリックします。

3. [ファイルの場所] で、この製品の [ソース] ファイルと [インストール先] ファイルの場所を入力し、[次] をクリックします。
4. [インストール・タイプ] で [管理者] を選択し、[次] をクリックします。
5. 表示される [サマリー] ダイアログの情報を確認します。[インストール] をクリックします。

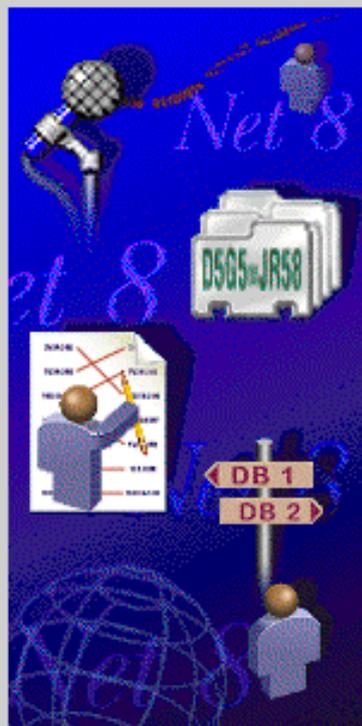
インストール プロセスにより、[構成ツール] ダイアログが自動的に表示されます。このダイアログでは、**Net Configuration Assistant** の実行を選択できます。

作業 2 ➡ OVO データベースへの Net 接続の構成

Reporter を実行している Windows システムに、Oracle Client ソフトウェアをインストールした後 (Net の構成はクライアント インストールのオプションの一部であるため、ダイアログの操作は若干異なる場合があります)、同じシステムで次の操作を行います。

1. [スタート] メニューの [プログラム] から [Oracle - <Oracle Home>]、[Network Administration]、[Net Configuration Assistant] の順に選択します。

[よろこそ] ダイアログで [ローカル・ネット・サービス名構成] を選択して、[次へ] をクリックします。



Net8 Configuration Assistantにようこそ。このツールは次の一般的な構成手順で作業を進めます:

実行する構成を選択してください:

- リスナー構成
- ネーミング・メソッド構成
- ローカル・ネット・サービス名構成
- ディレクトリ・サービス・アクセスの構成

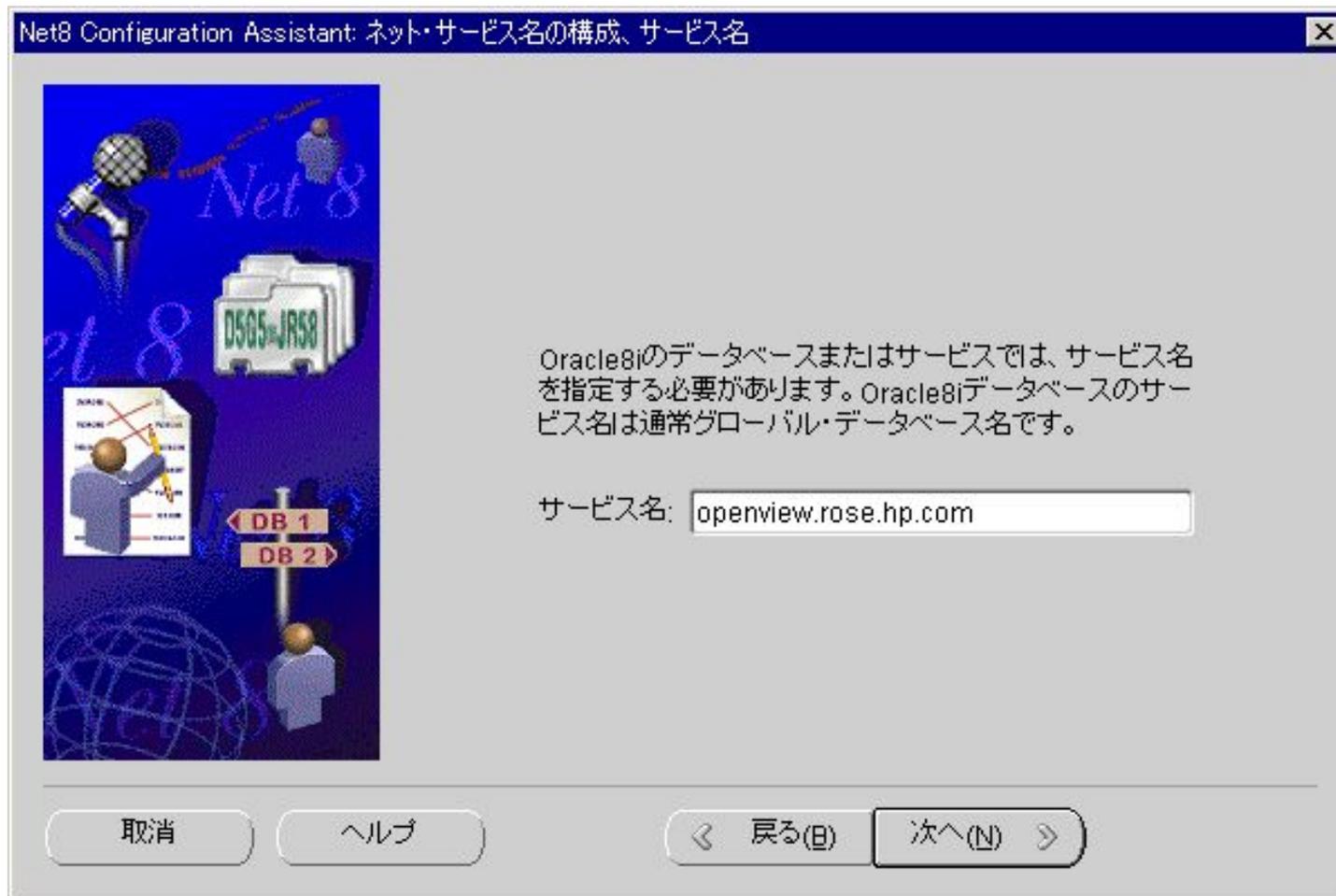
取消

ヘルプ

< 戻る(B)

次へ(N) >

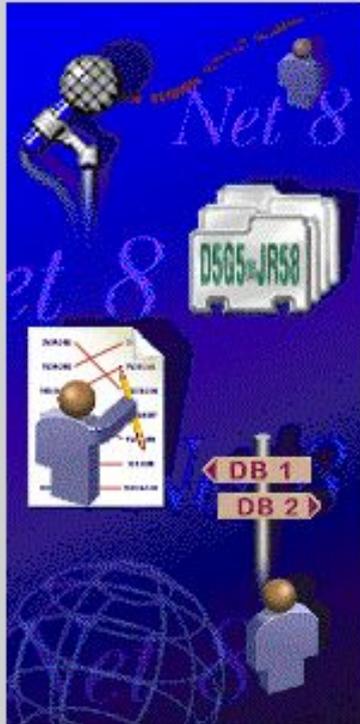
2. [ネット・サービス名の構成] ダイアログで [追加] を選択して、[次へ] をクリックします。
3. [データベース・バージョン] ダイアログで [Oracle9i/10gのデータベースまたはサービス] を選択 (以前の Oracle バージョンに接続している場合は別のオプションを選択) して、[次へ] をクリックします。
4. [サービス名] ダイアログで、データベースの作成中に指定したグローバル データベース名を入力します。
[次へ] をクリックします。



実際の完全なネット サービス名を確認するには、Net assistant を再実行し、サービスのテストを選択します。

 **メモ**： ネット サービスの名前 (**openview**) には、ネットワーク ドメインが追加されている場合があります。(たとえば、**openview.rose.hp.com**。「rose.hp.com」はドメイン名です。ドメイン名は、システムの設定によって必要のない場合もあります)。

5. [プロトコルの選択] ダイアログで、**[TCP]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
6. [TCP/IPプロトコル] ダイアログで、ホスト名とポート番号 (通常は 1521) を入力し、**[次へ]** をクリックします。



TCP/IPプロトコルでデータベースと通信するためには、データベース・コンピュータのホスト名が必要です。データベースがあるコンピュータのホスト名を入力してください。

ホスト名

TCP/IPポート番号も必要です。ほとんどの場合、標準のポート番号を使用します。

標準ポート番号1521を使用します。

別のポート番号を使用:

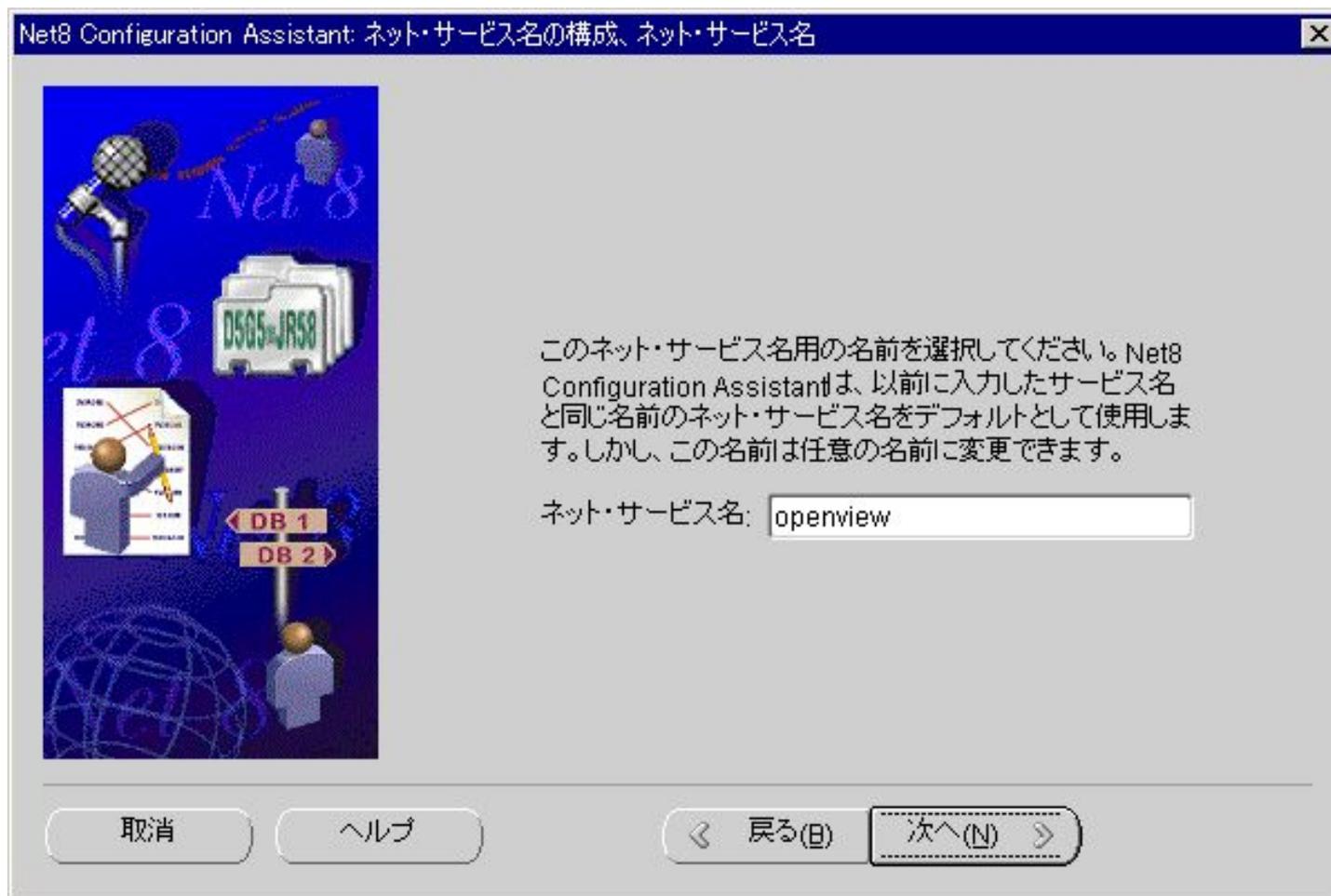
取消

ヘルプ

戻る(B)

次へ(N)

7. [テスト] ダイアログで、[テストを実行します] を選択し、[次へ] をクリックします。
8. [接続] ダイアログで、正常に接続していることを確認します (テストに成功するためにログインの変更が必要な場合もあります。ログイン/パスワードは、OVO をデータベースに接続するために設定したログイン/パスワードと一致している必要があります)。[次へ] をクリックします。
9. [ネット・サービス名] ダイアログで [ネット・サービス名] に名前 (**openview** を推奨) を指定して、[次へ] をクリックします。



10. [他のネット・サービス名を構成しますか?] ダイアログで、[いいえ]を選択し、[次へ]をクリックします。

11. [ネット・サービス名の構成が終了しました] ダイアログで、[次]を選択し、[完了]をクリックします。

 **メモ**： ネット サービスの名前 (**openview**) には、ネットワーク ドメインが追加されている場合があります (たとえば、**openview.rose.hp.com**。「rose.hp.com」はドメイン名です。ドメイン名は、システムの設定によって必要のない場合もあります)。実際の完全なネット サービス名を確認するには、Net assistant を再実行し、サービスのテストを選択します。

作業 3 ➡ OVO データベースへの Net 接続の確認

Net の構成後、システムから OVO データベースにアクセスできることを確認してください。手順は次のとおりです。

1. [スタート] メニューの [プログラム] から、[Oracle <Oracle Home>]、[Database Administration]、[SQLPlus Worksheet] の順に選択します。
2. [Oracle Enterprise Manager Login] ダイアログに、データベースのユーザー名（推奨するユーザー名は opc_report）とパスワードを入力します。サービス名（openview<.DOMAIN.NAME>）を入力します。



3. [OK] ボタンをクリックします。SQL*PLUS Worksheet が表示されます。エラーメッセージが表示された場合、システムから Oracle OVO データベースへの接続に問題があります。前述の作業を再度確認してください。

Connect openview/****@openview.india.hp.com



SQL*Plus: Release 10.1.0.2.0 - Production on 月 5月 22 22:21:25 2006

Copyright (c) 1982, 2004, Oracle. All rights reserved.

接続されました。

4. SQL*Plus Worksheet で、いずれかの Oracle データベース テーブルからデータを取り出すには、次のコマンドを入力します。

```
select node_group_name from opc_node_groups;
```

OVO データベースに正常にアクセスした場合は、次のような応答が表示されます。エラーが表示された場合は、エラーを修正してから処理を進める必要があります。Oracle データベース管理者に連絡し、エラーを修正してください。

```
NODE_GROUP_NAME
-----
hp_ux
net_devices
NT40
```

5. 【ファイル】メニューの【終了】を選択します。

作業 4 ➡ 【コントロール パネル】での ODBC データ ソースの構成

Reporter を実行している Windows システム上で Net を構成した後、ODBC データ ソースを構成する必要があります。

Reporter がインストールされている Windows システム（または Reporter をインストール予定の Windows システム）で、次の操作を行います。

1. Windows の【スタート】メニューの【設定】から【コントロール パネル】を選択します。
2. 【コントロール パネル】ウィンドウで【ODBC】をダブルクリックします。
3. 【システム DSN】タブのページを選択します
4. 【追加】ボタンをクリックして **Oracle ODBC** ドライバを強調表示させ、【完了】をクリックします。
5. 表示されるダイアログ ボックスで次の情報を入力します。

データ ソース名： **ov_net**
説明： <your_description>
サービス名： **openview<.domain.name>**
ユーザー ID： (入力不要)



メモ： OV Operations for Unix 8 の OVO 8 データベースの場合は、【データ ソース名】に「**ov_net8**」を入力してください。

Oracle8 ODBCドライバ・セットアップ

データソース名(N):

説明(D):

データソース

サービス名(S):

ユーザー名(U):

データベース・オプション

読取専用モードでデータベースに接続(R)

ワークアラウンド・オプション

LONG列の強制取り出し

フリフエッチ数(P): MTSサポートを無効化

アプリケーション・オプション

スレッド・セーフティを有効化 LOBを有効化 結果セットを有効化

フェイルオーバーを有効化 再試行回数: 遅延:

問合せタイムアウトを有効化 カーソル・コースを有効化

トランスレーション・オプション

オプション(O):

ライブラリ(L):

6. [OK] をクリックします。
7. [ODBC データ ソース アドミニストレータ] ウィンドウを閉じます。
8. [コントロール パネル] ウィンドウを閉じます。

作業 5 ➡ OVO レポート パッケージのインストール

レポート定義と構成情報を追加するには、OV Operations for Unix 7 および 8 パッケージを追加する必要があります。

⚠ 重要 : OVO (OpenView Operations for UNIX [ITO]) レポートの以前のバージョンをインストールしている場合は、[レポート パッケージの構成] ダイアログボックス (以下を参照) の [インストール済みパッケージ] 領域から、そのパッケージを削除する必要があります。

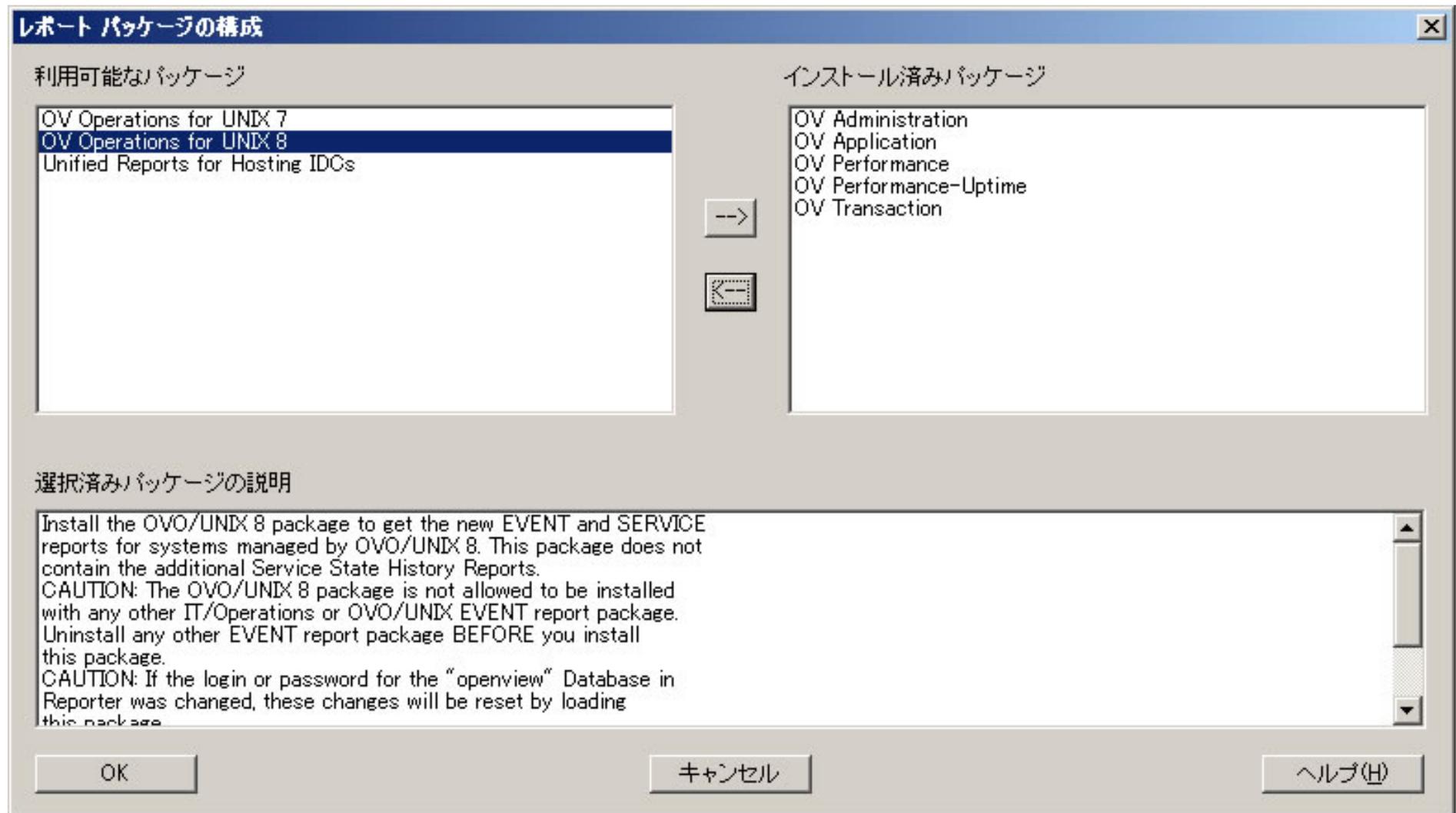
1. [インストール済みパッケージ] 領域でパッケージを選択し、左向き矢印をクリックします ([インストール済みパッケージ] 領域に、そのレポート パッケージが表示されなくなります)。

2. [OK] をクリックしてダイアログ ボックスを閉じます。次に、以下の手順に従って続行します。

 メモ： 削除したレポートに対して行った変更は、新しくインストールしたパッケージで再設定する必要があります。

パッケージを追加する手順は、次のとおりです。

1. [スタート] メニューから [プログラム]、[HP Openview]、[Reporter] の順に選択し、**Reporter** を起動します。
2. Reporter のメインウィンドウの【ファイル】メニューで、【構成】 【レポート パッケージ】の順に選択します。



3. [利用可能なパッケージ] ボックスで適切な OpenView Operations のバージョンを選択し、右向き矢印をクリックします。[インストール済みパッケージ] ボックスで **[OK]** をクリックします。

現在 ITO 5 または VPO 6 のレポート パッケージを使用している場合は、次の新しいパッケージを使用できます。

OV Operations for Unix 7

OV Operations for Unix 8

新しいパッケージをインストールする前に、現在のパッケージを必ず削除してください(上の「重要」の説明を参照)。

1. Reporter サービスが実行されていることを確認します
(3 ~ 6 番目までのツールバー ボタンがグレイ表示されている場合、サービスは実行されていません)。グレイ表示されていない場合は、2 番目のツールバー ボタンをクリックしてサービスを開始します。
2. ステータス ペインで、次のメッセージを確認します。
RepLoad>Loading package for " **OV Operations for Unix 6 & 7**"
RepLoad>Completed loading template file
(パッケージのインストールが正常に完了したことを示します)

作業 6 ➡ Reporter でのデータベースの構成

前述の作業で、Windows 2000 システムへのデータベース接続の構成と OpenView Operations Report Package のインストールが終了しました。これにより、OpenView Operations データベースをデータ ソースとして認識するように Reporter を構成することができます。Windows システムにインストールされている Reporter で、次の操作を行います。

1. Reporter のメイン ウィンドウで、[ファイル] メニューから [構成] を選択し、次にサブメニューから [データベース] を選択します (前の手順と同じエラーメッセージが表示されます)。
2. [データベースの構成] ダイアログ ボックスの下部の [その他のデータベース] セクションで、[データベース] テキスト ボックスの下向き矢印を選択し、**[openview]** を選択します。
(**[openview]** が表示されない場合は、前述の手順に戻り ODBC セットアップを構成してください。)



メモ : OV Operations for Unix 8 を構成する場合は、**[openview8]** を選択してください。

3. 残りのテキスト ボックスに次の情報を入力します。
サーバー : ov_net
ユーザー ID : <your_OpenView Operations_database_user_name>
パスワード : <your_OpenView Operations_database_password>



メモ : OV Operations for Unix 8 を構成する場合は、[サーバー] として **[ov_net8]** を選択してください。



重要 : パスワードとしてアスタリスクが表示されますが、OpenView Operations ユーザー ID の正しいパスワードを入力してください。

4. [OK] をクリックします。
5. システムを再起動します。

作業 7 OpenView Operations システムの検出と OVO データの収集

 メモ : Reporter の Discover_ITO.exe プログラムは OpenView Operations データベースをターゲットとします。

1. 左ペインで [スケジュール] を選択して、すべてのスケジュールされたアクションのリストを右ペインに表示します。

 メモ : OVO 8 を構成する場合は、パラメータとして、openview8 と共に DISCOVER_ITO.exe および Gather_ITO.exe のスケジュール エントリも新しく追加してください。

2. 右ペインで、[Discover_ITO.exe] を右クリックし、[実行] を選択します。
3. ステータス ペインで、次のメッセージを確認します。

```
2005/12/27 15:12:19 Discover_ITO: Begin Discovery of ITO database openview2000/12/27 15:12:19 Discover_ITO:
Found NEW ITO Agent on abc.xyz.domain.com
2005/12/27 15:12:19 Discover_ITO: Found NEW ITO Agent on zephram.rose.hp.com
2005/12/27 15:12:19 Discover_ITO: Found NEW ITO Agent on ros59102raw.rose.hp.com
2005/12/27 15:12:19 Discover_ITO: Found NEW ITO Agent on highbeam.rose.hp.com
2005/12/27 15:12:19 Discover_ITO: Examined 4 systems, found 4 new ITO Agents for a total of 30 known
2005/12/27 15:12:20 Discover_ITO: Examined systems in groups for 3 systems, found 3 new
2005/12/27 15:12:20 Scheduler: Next scheduled action at 12/28/00 00:15:0
```

エラーが表示された場合は、作業 6 に戻り、パスワードとその他のフィールドが正しく入力されていることを確認してください。

4. 右ペインで [Gather_ITO.exe] を右クリックし、[実行] を選択します。
5. ステータス ペインで、次のメッセージを確認します。

```
2005/12/27 15:12:40 Scheduler:
Starting program "Gather_ITO.exe" 2005/12/27 15:12:40 Gather_ITO: Begin synchronizing with ITO database openview
2005/12/27 15:12:41 Gather_ITO: Processing Historical messages
2005/12/27 15:13:19 Gather_ITO: Processed 2775 Historical messages, Added 860 Summaries, 854 Operator Sums
2005/12/27 15:13:19 Gather_ITO: Processing Active messages
2005/12/27 15:13:21 Gather_ITO: Processed 755 Active messages, Added 9 Summaries, 6 Operator Sums
2005/12/27 15:13:22 Scheduler: Next scheduled action at 12/28/00 00:15:00
```

6. すぐにレポートを参照する必要がある場合は、右ペインで [RepCrys.exe] を右クリックし、[実行] を選択します。

これで、Reporter での OpenView Operations データベースの構成が終了しました。OpenView Operations のレポート作成が、通常の夜間レポート作成サイクルで実行されます。

4 Oracle の設定/接続

Part D : データベースとしての Oracle 9i の構成

HP-UX または Solaris での Oracle 9i の設定と Reporter の Windows クライアント システムの構成

⚠ 重要 : HP OpenView Internet Services 4.0 と Reporter を同じシステムにインストールしている場合は、既存データベースから Oracle 9i への OVIS/Reporter データの移行がサポートされません。

Reporter のデータベースとして Oracle を設定するには、次の図に示す作業を行う必要があります。左側の作業は、HP-UX または Solaris システム上で行います。Oracle を新たにインストールする場合と Oracle がすでにインストールされている場合では手順が異なります。右側の作業では、Windows システム上で Oracle Reporter データベースを構成します。

HP-UXシステムでのOracleの構成

(新しく Oracle 9iをインストールする場合、すべての手順が必要です。インストール済みの場合は、5-6のみです)

1 UNIX 環境の準備

2 CDのマウント

3 Oracleソフトウェアのインストール

4 データベースリスナーの構成

5 Reporter データベース構造の作成

6 Reporter データベースのユーザーと特権の作成

Windowsシステムでの構成

1 Oracle9i クライアント ソフトウェアのインストール

2 Oracle Net 接続の構成

3 Oracle Net 接続の確認

4 ODBCデータソースの構成

5 Reporterでのデータベースの構成

前提条件 : Oracle の構成は、カーネルパラメータの設定が正しくないと成功しません。HP-UX または Solaris システムのカーネルパラメータをチェックしてください (パラメータについては、Oracle 9i Release Notes を参照)。以下の条件を満たしていることを確認してください。

メモリ : 最小 256 MB の RAM

スワップ領域 : メモリの 2 倍 (400 MB) 以上に相当するディスク領域

CD-ROM : RockRidge 拡張されている ISO 9660 フォーマットの読み取りが可能

ディスク領域 : 2.5 GB (データベースソフトウェア用)、1 GB (データベース用)

一時ディスク領域 : 400MB (/tmp ディレクトリ)

HP-UX 11.0 (64 ビット) または HP-UX 11i (64 ビット)

または

Solaris 7 (5.7) または Solaris 8 (5.8) または Solaris 9

オペレーティングシステムのパッチ (詳細は Oracle9i Release Notes を参照)

JAVA コンポーネント (詳細は Oracle9i Release Notes を参照)

HP-UX についてのメモ : X ライブラリ シンボリック リンクに関する、重要な事前インストール作業が必要です。

Oracle のドキュメント : 関連するドキュメントは、Oracle9i Database CD-ROM に収録されています。参照するには、Oracle9i Database CD-ROM の Disk 1 をマウントし、index.html を開きます。また、ドキュメントのオンライン リソースが Oracle Documentation Center (docs.oracle.com) と Oracle Technology Network (otn.oracle.com/docs/) で提供されています。Oracle 固有の情報については、以下をチェックしてください。

Oracle9i Installation Guide

Oracle9i Quick Installation Procedure

Oracle9i Release Notes

構成手順は、次のように 2 つの作業に分けられます。

HP-UX または Solaris システムでの Oracle9i のサーバー設定 :

- UNIX 環境の準備
- インストール CD のマウント
- Oracle9i Database Server ソフトウェアのインストール
- データベース リスナーの構成
- Reporter データベース構造の作成
- Reporter データベースのユーザーと特権の作成

Windows Reporter システムでの Oracle9i のクライアント設定 :

- Oracle9i クライアント ソフトウェアのインストール
- Oracle Net 接続の構成
- Oracle Net 接続の確認
- ODBC データ ソースの構成
- Reporter のデータベースの構成

作業 1 UNIX 環境の準備

1. Oracle UNIX グループを作成します。

HP-UX の場合 : System Administration Manager (SAM) を使用してグループを作成します。

Solaris の場合 : admintool または groupadd コーティリティを使用してグループを作成します。

- root ユーザーとしてログインします。
- UNIX グループ "dba" (OSDBA グループ) を作成します。
- UNIX グループ "oper" (OSOPER グループ) を作成します。
- UNIX グループ "oinstall" (ORAINVENTORY グループ) を作成します。
- HP-UX についてのメモ : OSDBA グループに割り当てる必要がある特権については、『Oracle9i Quick Installation Procedure』を参照してください。

2. UNIX ユーザー "oracle" を作成します。

HP-UX の場合 : System Administration Manager (SAM) を使用してアカウントを作成します。

Solaris の場合 : admintool または useradd コーティリティを使用してアカウントを作成します。

UNIX ユーザー "oracle" を作成します (このアカウントは、Oracle ソフトウェアのインストールとアップグレードにのみ使用されます)。

— プライマリ グループ : oinstall (ORAINVENTORY グループ)

— セカンダリ グループ : dba (OSDBA グループ)

UNIX ユーザー "apache" を作成します。

— プライマリ グループ : oinstall (ORAINVENTORY グループ)

— セカンダリ グループ : apache だけがメンバーであるグループ

Apache アカウントには最小限の特権を割り当てます。

3. Oracle データベース ソフトウェアのマウント ポイントを作成します。

- Oracle Home マウント ポイントを作成します。
mkdir -p /opt/oracle/product/9.0.1
- "cd /opt" と入力します。
- "chown -R oracle:oinstall oracle" と入力します。
- /usr/local/bin や /opt/bin などのローカルの bin ディレクトリが存在することを確認します。
- UNIX システム変数と Oracle 環境変数を設定します (.profile に追加するか、手動で設定します)。

DISPLAY=<workstation_name>:0.0 (Oracle インストーラの出力先)

ORACLE_BASE=/opt/oracle

ORACLE_HOME=/opt/oracle/product/9.0.1

ORACLE_SID=reporter

PATH には、\$ORACLE_HOME/bin、/usr/ccs/bin、/usr/bin、/etc、(HP-UX の場合は /usr/bin/X11)、(Solaris の場合は /usr/openwin/bin)、および /usr/local/bin (存在する場合) を含めます。

HP-UX の .profile の例 :

```
# Oracle Environment
ORACLE_BASE=/opt/oracle; export ORACLE_BASE
ORACLE_HOME=/opt/oracle/product/9.0.1; export ORACLE_HOME
ORACLE_SID=reporter; export ORACLE_SID
ORACLE_TERM=xterm; export ORACLE_TERM
TNS_ADMIN=/export/home/oracle/config/9.0.1; export TNS_ADMIN
NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.UTF8; export NLS_LANG
ORA_NLS33=$ORACLE_HOME/ocommon/nls/admin/data; export ORA_NLS33
LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib:/lib:/usr/lib:$ORACLE_HOME/rdbms/lib
SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/rdbms/lib32
export LD_LIBRARY_PATH
export SHLIB_PATH
```

```
#set shell search paths
```

```
PATH=/bin:/usr/bin:/usr/sbin:/etc:/opt/bin:/usr/ccs/bin:/usr/local/bin:$ORACLE_HOME/bin
export PATH
```

```
#CLASSPATH must include the following JRE locations:
CLASSPATH=$ORACLE_HOME/JRE:$ORACLE_HOME/jlib:$ORACLE_HOME/rdbms/jlib
CLASSPATH=$CLASSPATH:$ORACLE_HOME/network/jlib
```

作業 2 ➡ インストール CD のマウント

1. /etc/pfsfstab ファイルを編集して以下を追加します。
<device_file> <mount_point> <filesystem_type> <translation_method>

この構文の定義:

```
<device_file> = CD-ROM デバイス ファイル (ioscan -nFC disk で検出)
<mount_point> = マウント ポイントのパス名
<filesystem_type> = CD-ROM は、IS09660 フォーマットの Rockridge 拡張
<translation_method> = unix
```

例:

```
/dev/dsk/c1t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 0 0
```

root ユーザーとして、以下の手順を実行します。

2. "/usr/sbin/pfs_mountd &" と入力します。
メモ: pfs により CD を読み取るための正しいフォーマットが作成されます。
"/usr/sbin/pfsd &" と入力します。
3. CD を CD-ROM ドライブに挿入し、このデバイスを次のようにマウントします。
/usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
4. ディレクトリを /SD_CDROM に変更します。このディレクトリでは、CD-ROM 上のディレクトリとファイルのリストを小文字で表示できます。(マウントされている CD は、別の読み取り専用ファイル システムとして表示されます。)

インストール中は、スクリプトを実行できるように、root ユーザーのウィンドウを開いたままにしておきます。

Solaris の場合:

ボリューム管理ソフトウェア (Solaris 上でデフォルトで使用可) を使用すると、ディスク ドライブに挿入した CD-ROM が自動的に /cdrom/orcl901_1 にマウントされます。

ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合は、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。

1. Oracle 9i CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログイン、または su コマンドを実行後、CD-ROM マウント ポイント ディレクトリを作成します。
\$ su root
mkdir cdrom_mount_point_directory
3. CD-ROM ドライブをマウント ポイント ディレクトリにマウントし、終了します。
mount option device_name cdrom_mount_point_directory
exit

作業 3 ➡ Oracle 9i Database Server ソフトウェアのインストール

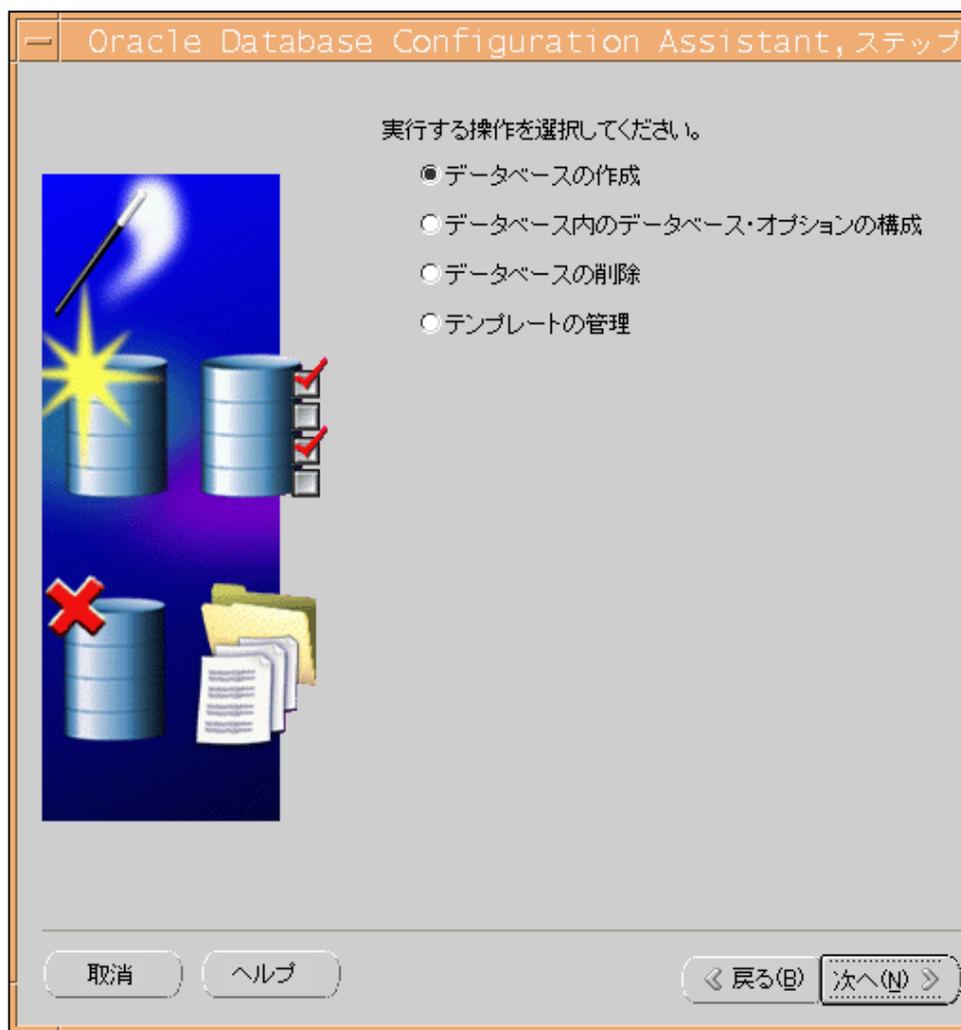
1. Oracle アカウントにログインします。
2. Oracle Universal Installer を起動します。インストーラ実行可能ファイルの完全パスを入力してください。
⚠警告! CD-ROM のディレクトリからインストーラを起動しないでください。起動すると、複数の CD をマウントできなくなります。
例:
/cdrom/oracle9i/runInstaller または /SD_CDROM/runInstaller
3. Oracle9i の新規インストールでは、[ようこそ] ウィンドウが表示されます。[次へ] をクリックしてください。
4. [インベントリの場所] ウィンドウで、ベース ディレクトリを指定し、[OK] をクリックします。
5. [UNIXグループ名] ウィンドウで、oinstall (ORAINVENTORY グループ) と入力し、[次へ] をクリックします。
6. プリインストール作業が完了していない場合は、スクリプトの実行が必要になる場合があります。
7. [ファイルの場所] ウィンドウでは、[ソース] フィールドのテキストを変更せずに [次へ] をクリックします。
8. [使用可能な製品] ウィンドウで、[Oracle9i Database] を選択し、[次へ] をクリックします。
9. [インストール・タイプ] ウィンドウで、[Enterprise Edition] を選択します
([Standard Edition] を選択することもできます。これらのインストール タイプの違いについては、Oracle のドキュメントを参照してください)。[次へ] をクリックします。
10. [データベース構成] ウィンドウで、[ソフトウェアのみ] を選択し、[次へ] をクリックします。
11. [JDKホームディレクトリ選択] で、適切な場所を入力し、[次へ] をクリックします。
12. [サマリー] ウィンドウを確認し、[インストール] をクリックします ([インストール] ウィンドウが表示されたら、製品がインストールされるのを待ちます)。
13. [セットアップ権限] ウィンドウが表示されたら、指示に従ってスクリプトを実行します。
14. [インストールの終了] ウィンドウで、[終了] をクリックします。

作業 4 ➡ データベース リスナーの構成

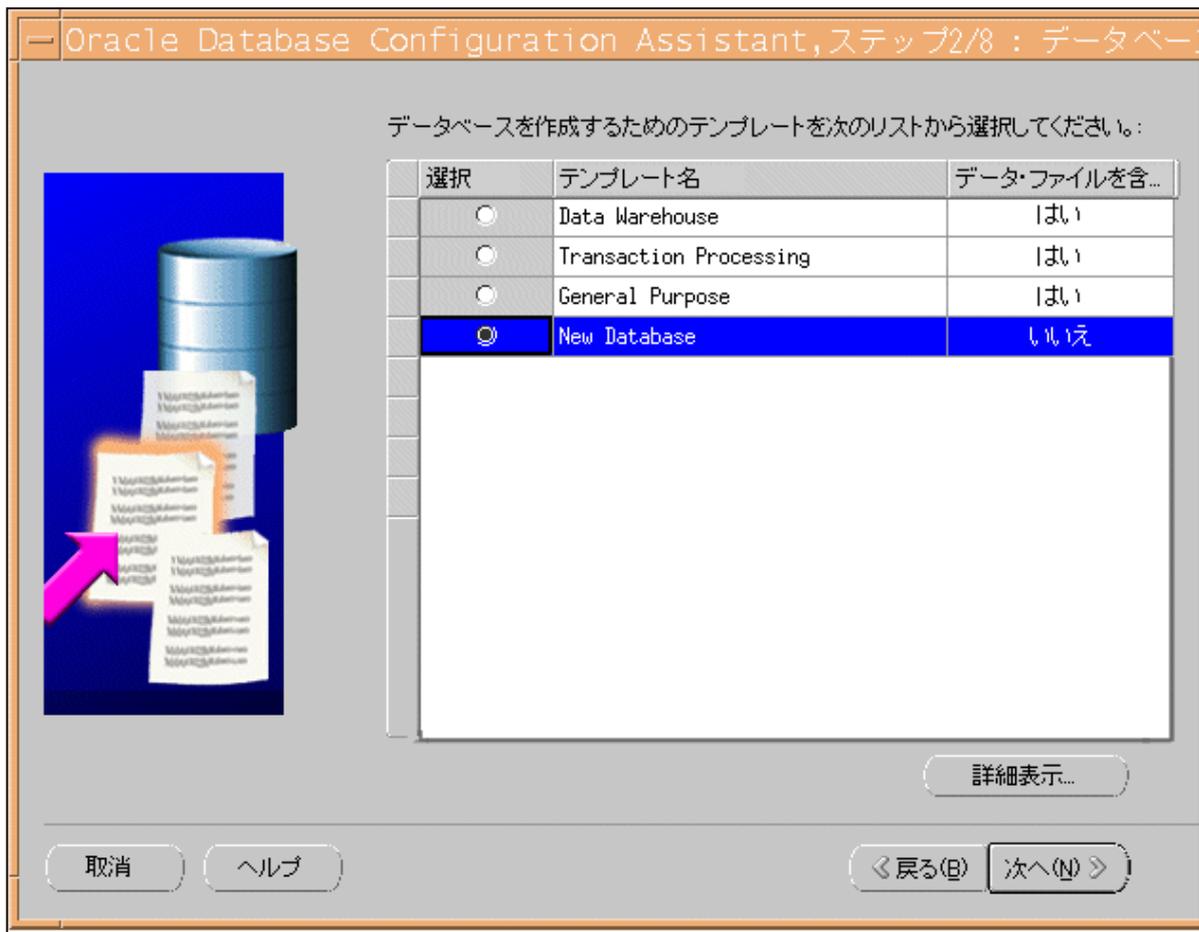
1. UNIX コンソール ウィンドウで、Oracle ユーザーとしてログインし、`netca` と入力して Oracle Net Configuration Assistant を起動します。
2. [ようこそ] ウィンドウで、[リスナー構成] を選択し、[次へ] をクリックします。
3. [追加] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. リスナー名 (LISTENER を推奨) を入力し、[次へ] をクリックします。
5. 接続プロトコルとして [TCP] を選択し、[次へ] をクリックします。
6. 標準ポート番号の [1521] を選択し、[次へ] をクリックします。
7. 別のリスナーの構成については [いいえ] を選択します。
8. 構成が完了したことを示すメッセージが表示されたら、[次へ] をクリックします。
9. 最後のウィンドウで、[完了] をクリックします。

作業 5 ➡ Reporter データベース構造の作成

1. UNIX コンソール ウィンドウで、Oracle ユーザーとしてログインし、`dbca` と入力して Oracle Database Configuration Assistant を起動します。
2. [データベースの作成] オプションを選択し、[次へ] をクリックします。



3. [New Database] テンプレートを選択し、[次へ] をクリックします。



4. [グローバル・データベース名] と [SID] に入力し、[次へ] をクリックします。

次のデータベース情報を指定してください。

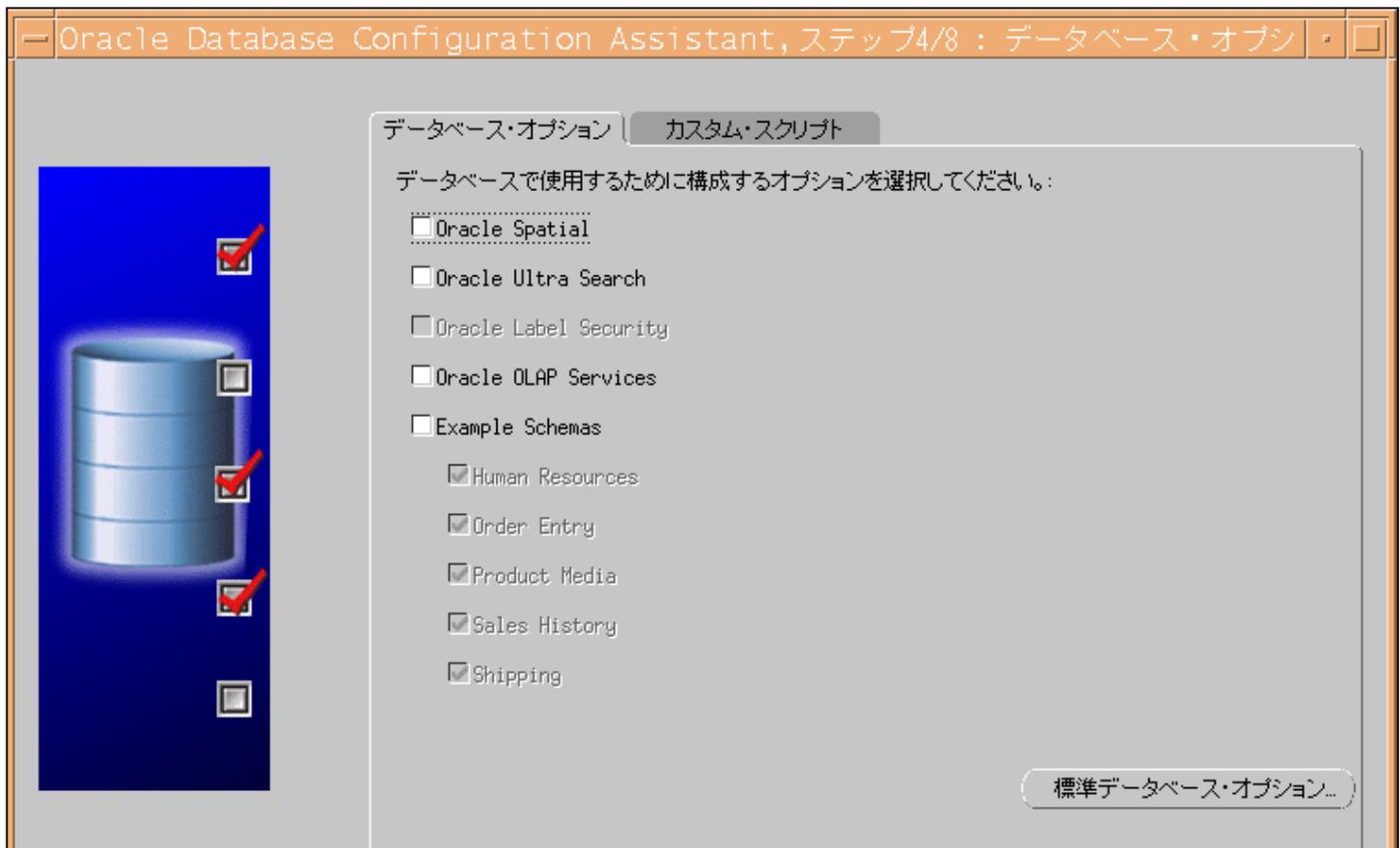
Oracle9iデータベースは、一般的に"name.domain"形式のグローバル・データベース名で一意に識別されます。

グローバル・データベース名:

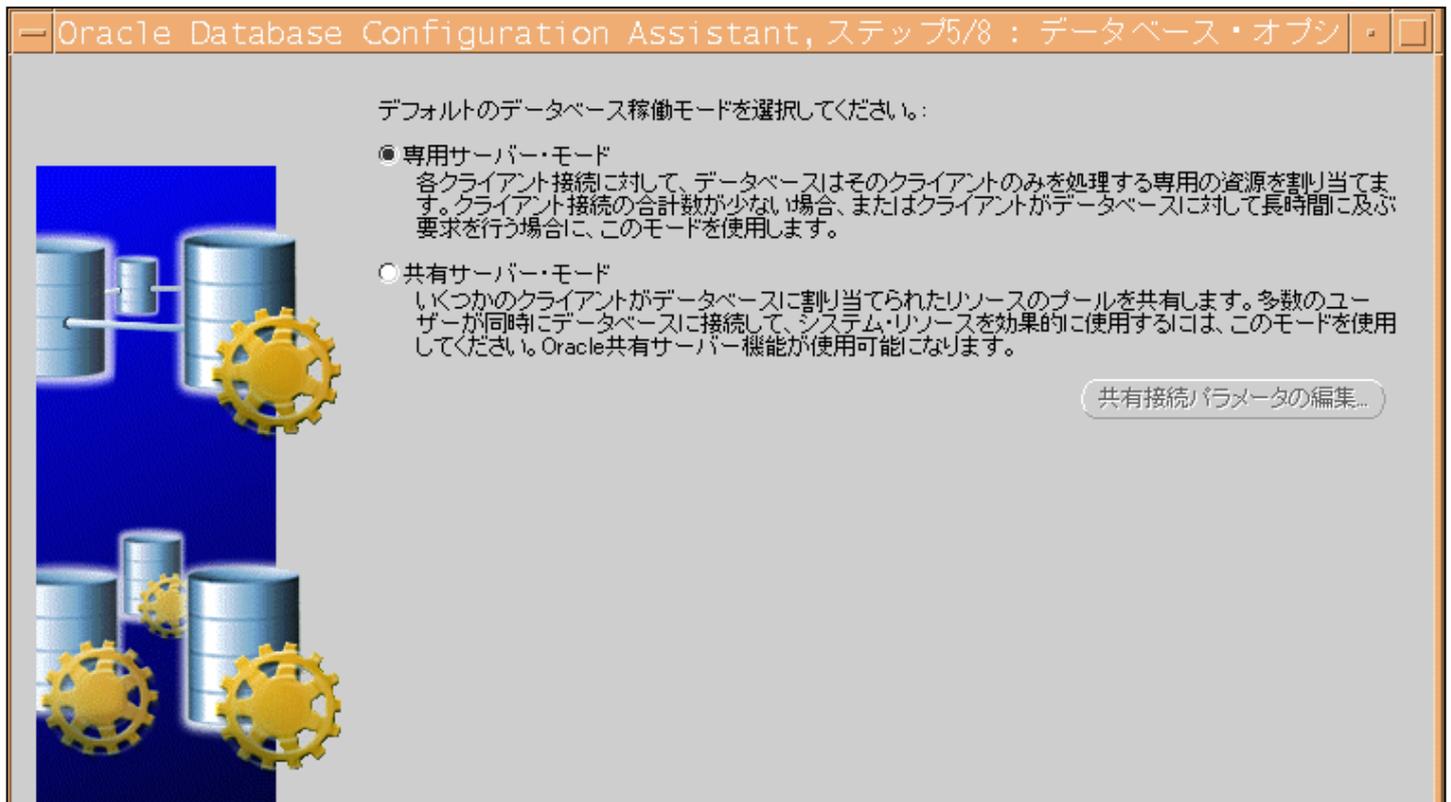
データベースは、1つ以上のOracle9i-インスタンスによって参照されており、インスタンスは、Oracleシステム識別子(SID)によってこのコンピュータ上の他のインスタンスから一意に識別されています。

SID:

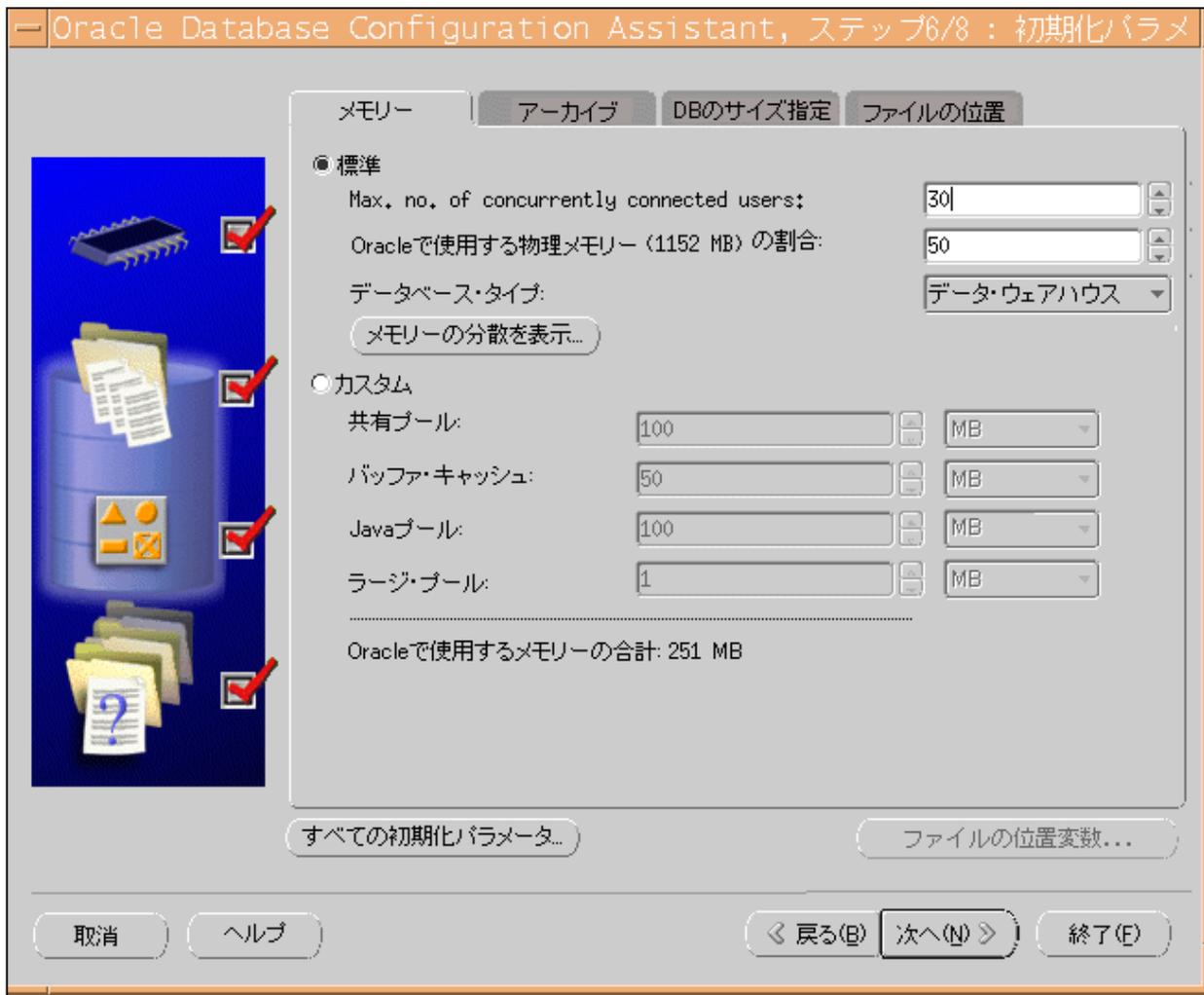
5. リストされている機能で、Reporter では必要ないものを選択解除することもできます。[次へ] をクリックします。



6. 【専用サーバー・モード】を選択し、【次へ】をクリックします。

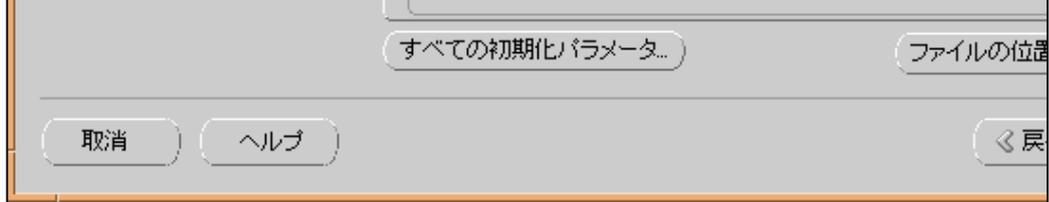


7. 【メモリー】パラメータについては、Reporter で選択したオプションによっては、ユーザーの同時実行数を最大で 40 にすることができます。RAM に 200 - 300 MB を指定 (または DBA からの指示どおりに指定) して、【次へ】をクリックします。

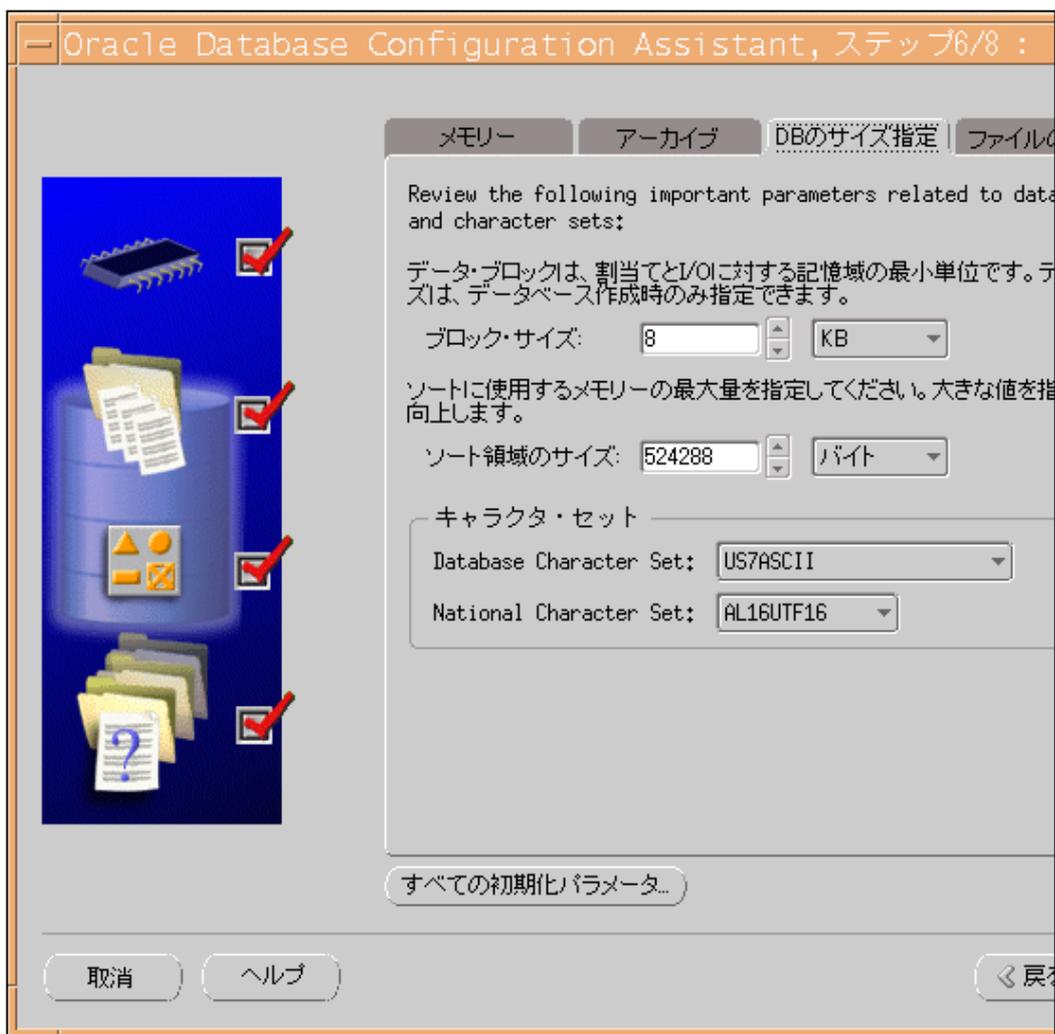


8. (オプション) 最新バックアップより前のデータを復元するためのバックアップが必要であれば、【アーカイブ】タブで【アーカイブ・ログ・モード】を選択します。

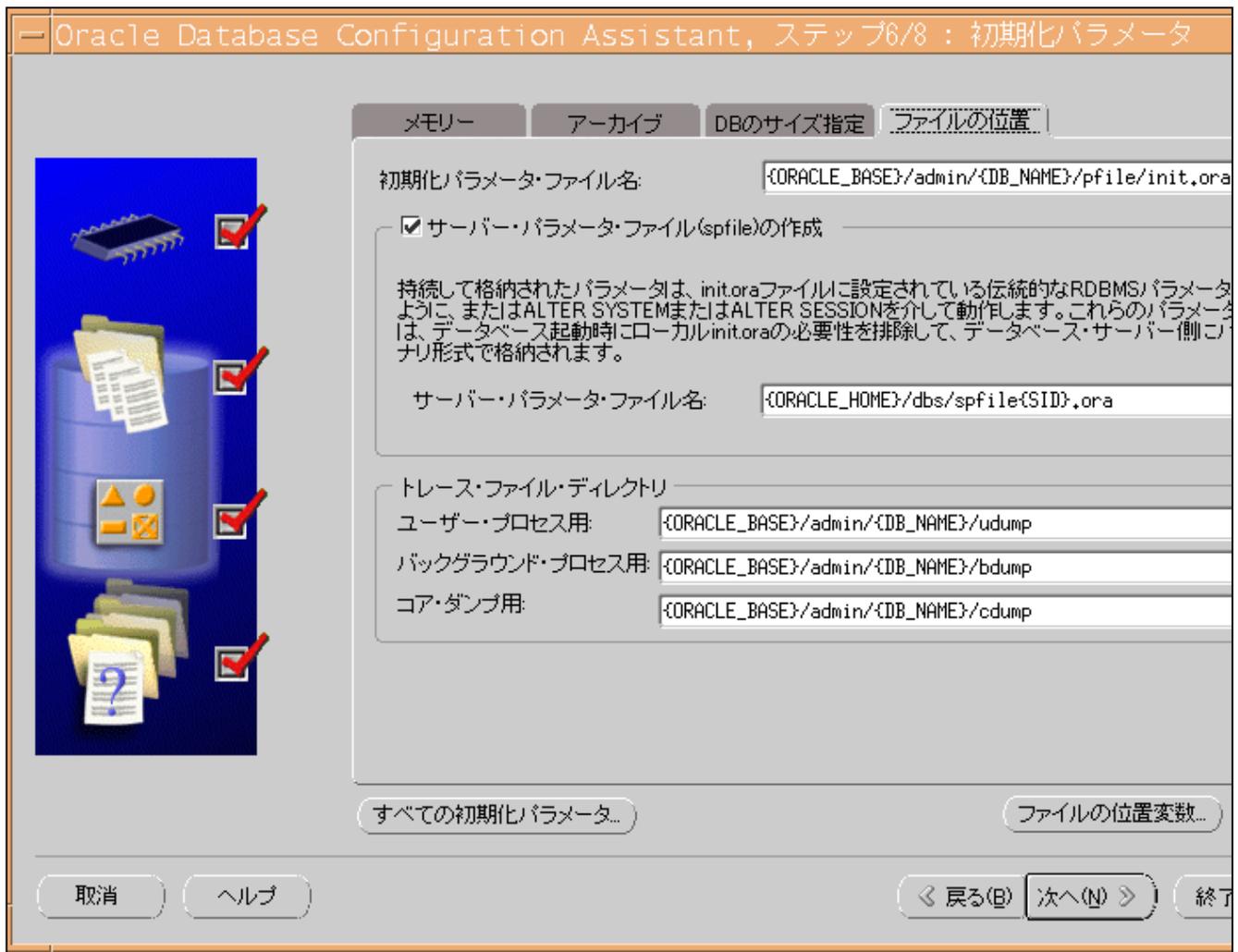




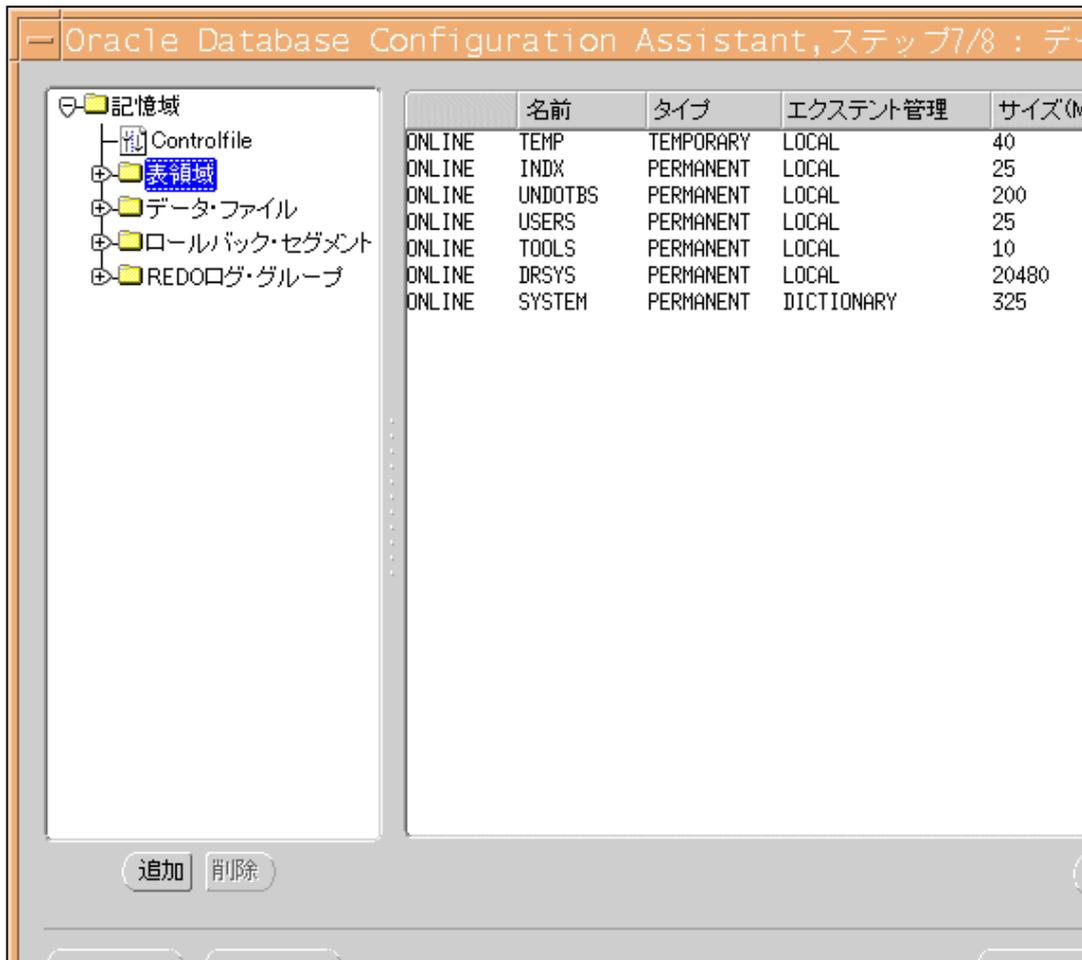
9. [次へ] をクリックします。
10. [DBのサイズ指定] タブを選択し、[ブロック・サイズ] を [8K] に設定します。

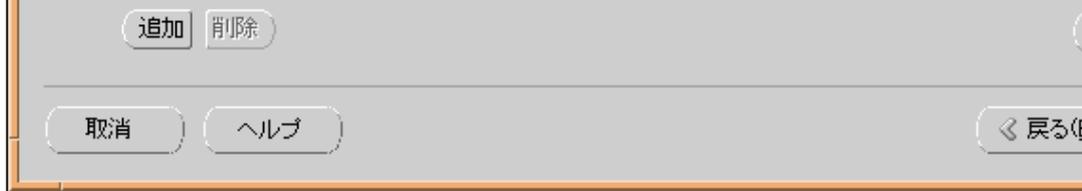


11. [ファイルの位置] タブを選択し、場所の設定を確認して、[次へ] をクリックします。

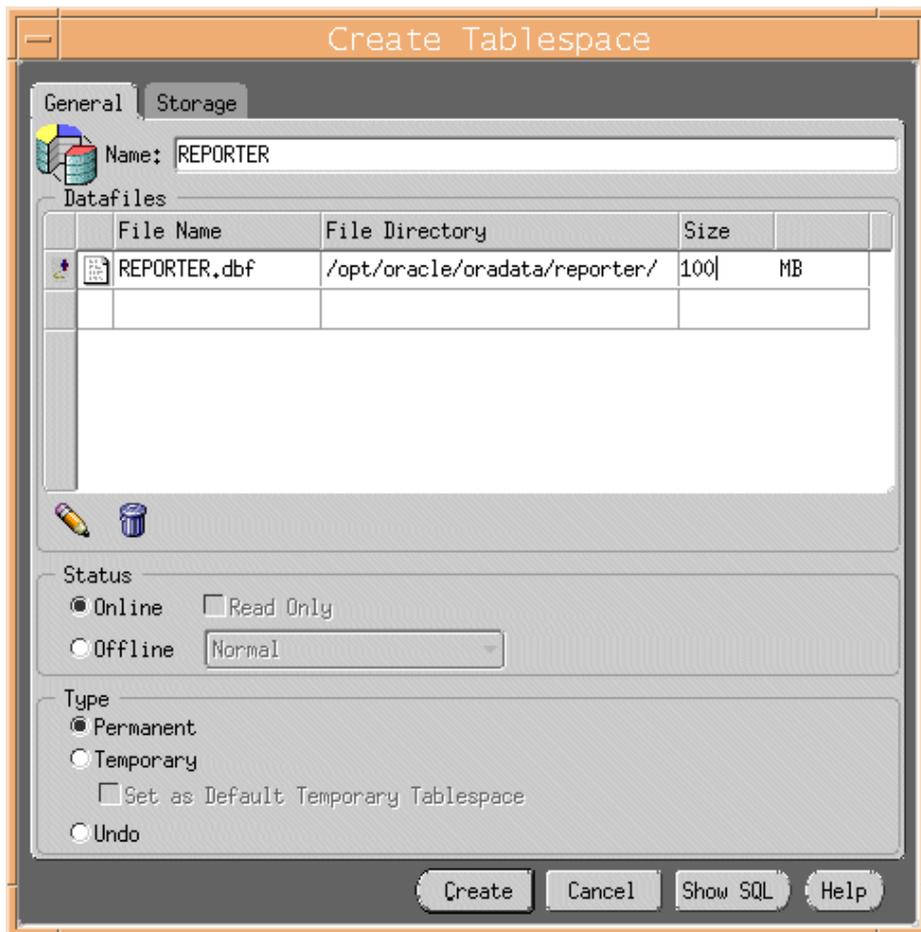


12. [データベース記憶域] ウィンドウで、ツリー内の【表領域】エントリをクリックして現在の表領域構成を表示します。





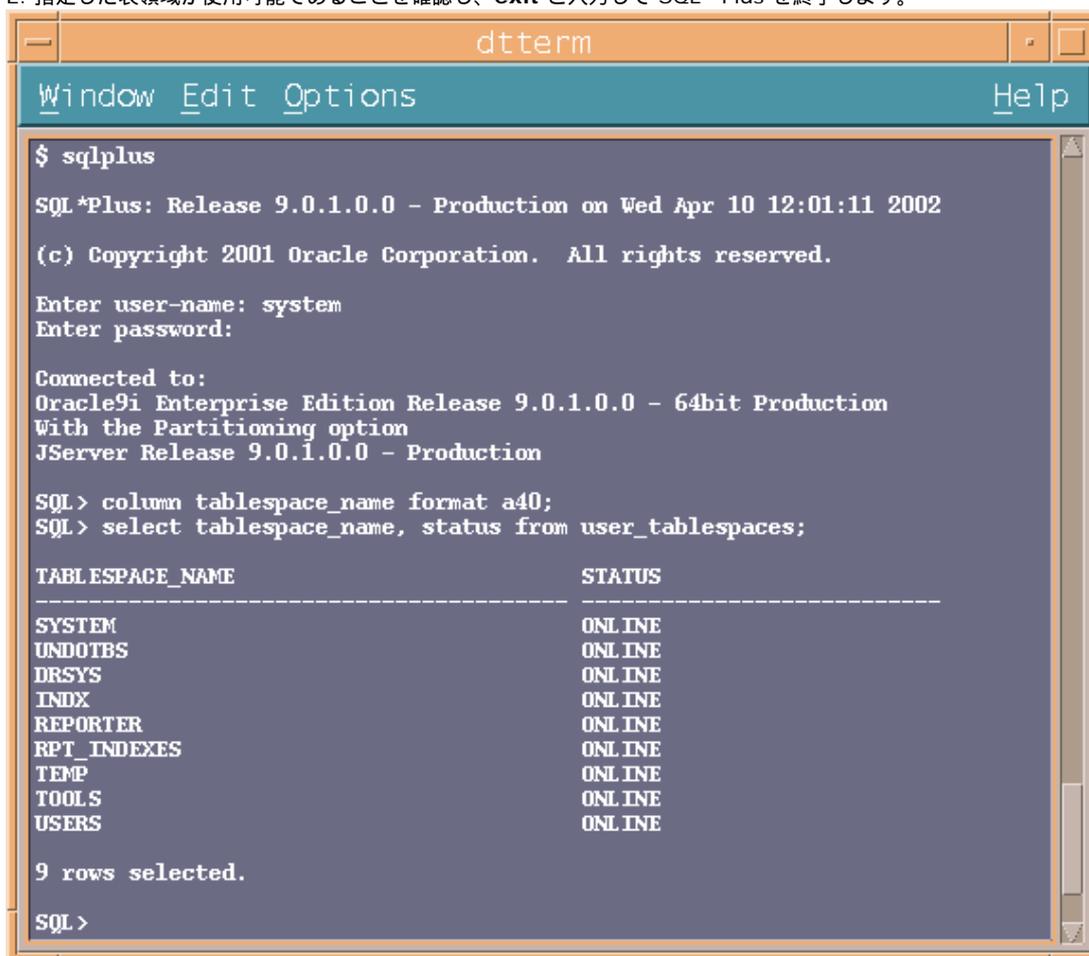
13. [追加] ボタンをクリックして [REPORTER] 表領域を追加します。表領域のサイズとして 100MB を指定します。



14. [記憶域] タブを選択し、エクステント管理がローカルになっており、[自動割当] が選択されていることを確認して、[作成] をクリックします。
15. [追加] ボタンをクリックして [RPT_INDEXES] 表領域を追加し、表領域のサイズとして 100MB を指定します。
16. [記憶域] タブを選択し、エクステント管理がローカルになっており、[自動割当] が選択されていることを確認して、[作成] をクリックします。
17. ツリー内の [表領域] エントリをクリックして、REPORTER 表領域と RPT_INDEXES 表領域が構成に追加されていることを確認し、[次へ] をクリックします。
18. [データベースの作成] オプションを選択します(オプションで、このデータベース作成プロセスのスクリプトを保存し、後で実行することができます)。[完了] をクリックします。
19. データベース作成進行状況を示すウィンドウが表示されてからデータベースが作成されるまで、選択したオプションによっては数時間かかる場合があります。データベース作成の完了を示すメッセージが表示されたら、これにตอบสนองし、Database Configuration Assistant を閉じます。



20. (オプション) REPORTER データベースが使用可能であることを確認します。
- UNIX コンソール ウィンドウで、Oracle ユーザーとしてログインし、"sqlplus" と入力して SQL *Plus 環境を起動します。
 - ユーザー名とパスワードを入力します (たとえば、ここで新しく作成したデータベースについては、ユーザー名とパスワードとして **system** と **manager** が使用可能になっているはず)。
 - SQL プロンプトから "column tablespace_name format a40;" と入力します。
 - "select tablespace_name, status from user_tablespaces;" と入力します。
 - 指定した表領域が使用可能であることを確認し、exit と入力して SQL *Plus を終了します。



作業 6 ➡ Reporter データベースのユーザーと特権の作成

- 前述した手順で SQL *Plus 環境を起動します。
- 以下の SQL 文を実行して、REPORTER データベース用ユーザーを作成します。

```

create user openview profile default
identified by openview
default tablespace reporter
temporary tablespace temp
quota unlimited on reporter
quota unlimited on rpt_indexes
account unlock;
grant
create any index,
create procedure,
create sequence,
create session,
create table,
create trigger,
create view,
select any table,
connect to openview;
grant SELECT ANY DICTIONARY to openview;

```

Windows システムでの Reporter の構成

ここでは、Reporter を実行する Windows システムを、HP-UX または Solaris システムに接続するためのソフトウェアのインストールについて説明します。Oracle データベースには、HP-UX または Solaris システムを介してアクセスできます。

作業 1 ▶ Oracle 9i クライアント ソフトウェアのインストール

- Reporter をホストする Windows NT/2000 システムで、Oracle9i インストール CD をドライブに挿入し、表示されるウィンドウで【インストールを開始】を選択します。
- Oracle Universal Installer の【ようこそ】ウィンドウで【次へ】をクリックします。
- このインストールの Oracle 9 ホームの場所を入力または選択し、【次へ】をクリックします。
- 【使用可能な製品】ウィンドウで、【Oracle9i Client】を選択し、【次へ】をクリックします。
- 【インストール・タイプ】ウィンドウで【管理者】を選択し、【次へ】をクリックします。
- 【サマリー】ウィンドウの情報を確認し、【インストール】をクリックします。

インストールの進行状況を示すウィンドウが表示されます。インストール プロセスによって、Oracle Net Configuration Assistant ツールも起動されます。この処理を続行するには、作業 2 に進みます。

作業 2 ▶ Oracle Net 接続の構成

Oracle Net Configuration Assistant ツールは、単独で (クライアント ソフトウェアを再インストールしなくても) 起動できません。

ツールを起動するには、【スタート】 【プログラム】 【Oracle-OraHome9】 【Configuration and Migration Tools】 【Net Configuration Assistant】の順に選択します。最初に表示されるいくつかのダイアログは、インストール プロセスで起動された Assistant と単独で起動された Assistant とで異なります。以下の手順では、クライアント インストールの一環として Assistant が起動された場合のダイアログを使用しています。

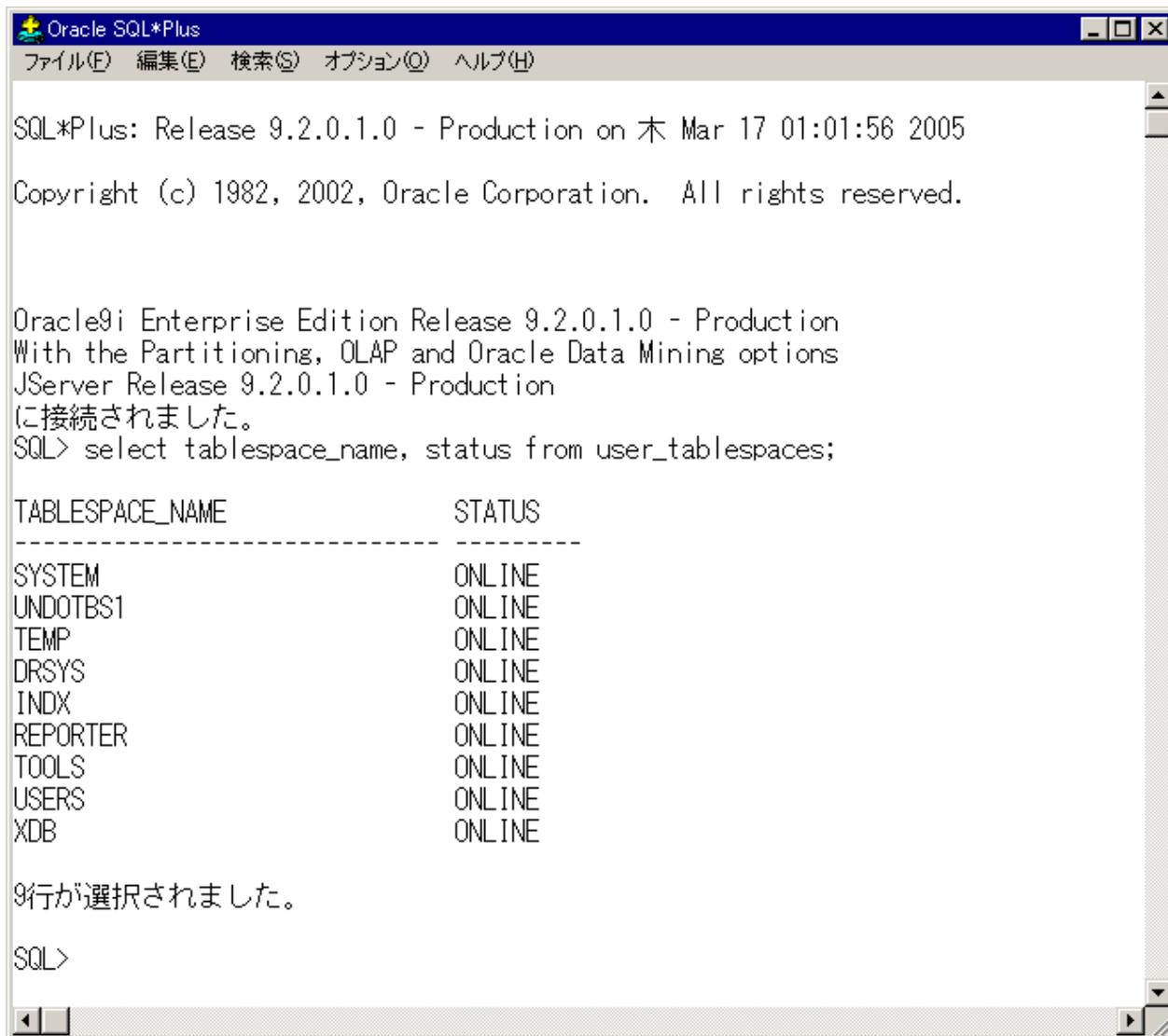
- 【ようこそ】ウィンドウで【ネット・サービス名を自分で作成する。】を選択し、【次へ】をクリックします。
- 【データベース・バージョン】ウィンドウで、【Oracle8iまたはそれ以降のデータベースまたはサービス】を選択し、【次へ】をクリックします。
- 【サービス名】ウィンドウで、データベースのサービス名 (通常は reporter または reporter.<ドメイン> (グローバル データベース名)) を入力し、【次へ】をクリックします。
- 【プロトコルの選択】ウィンドウで、適切なネットワーク プロトコル (通常は TCP) を選択し、【次へ】をクリックします。
- 【TCP/IPプロトコル】ウィンドウで、ホスト名とポート番号 (通常は 1521) を入力し、【次へ】をクリックします。
- 【テスト】ウィンドウで、【テストを実行します】を選択し、【次へ】をクリックします。
- 【接続】ウィンドウで、正常に接続していることを確認します。テストを成功させるためにログインのクレデンシャル (openview/openview) の変更が必要になる場合があります。
- 【次へ】をクリックします。
- 【ネット・サービス名】ウィンドウで、サービス名 (RPT を推奨) を入力し、【次へ】をクリックします。
- 【別のネット・サービス名】ウィンドウで【いいえ】を選択して、【次へ】をクリックします。
- 【ネット・サービス名の構成が終了しました】ウィンドウで【次へ】をクリックし、【完了】をクリックします。

作業 3 ▶ Oracle Net 接続の確認

Oracle Net Configuration の構成後、Windows システムから Reporter データベースに接続できることを、次の手順で確認します。

- SQL *Plus ツールを起動します。【スタート】 【プログラム】 【Oracle-OraHome9】 【Application Development】 【SQL Plus】の順に選択してください。

- [ログオン] ダイアログで、[ユーザー名] (system)、[パスワード] (manager)、[ホスト文字列] (RPT (作業 2 の手順 9 で入力したネット サービス名)) を入力します。
- 次の SQL 文を入力します。select tablespace_name, status from user_tablespaces;



```
Oracle SQL*Plus
ファイル(F) 編集(E) 検索(S) オプション(O) ヘルプ(H)

SQL*Plus: Release 9.2.0.1.0 - Production on 木 Mar 17 01:01:56 2005

Copyright (c) 1982, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the Partitioning, OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Production
に接続されました。
SQL> select tablespace_name, status from user_tablespaces;

TABLESPACE_NAME          STATUS
-----
SYSTEM                   ONLINE
UNDOTBS1                 ONLINE
TEMP                    ONLINE
DRSYS                   ONLINE
INDX                    ONLINE
REPORTER                ONLINE
TOOLS                   ONLINE
USERS                   ONLINE
XDB                     ONLINE

9行が選択されました。

SQL>
```

データベースに接続できない場合や、これらのテーブルスペースが表示されない場合は、UNIX ホスト システムの Oracle データベース管理者に問い合わせてください。

- SQL *Plus 環境を終了するには、"Exit" と入力します。

作業 4 ➡ ODBC データ ソースの構成

- [スタート] [設定] [コントロール パネル] の順に選択して、Windows コントロール パネルを起動します。
- Windows 2000 の場合は、[管理ツール] をダブルクリックし、[データ ソース (ODBC)] をダブルクリックします。
Windows NT4 の場合は、[データ ソース (ODBC)] をダブルクリックします。
- [ODBC データ ソース アドミニストレータ] で、[システム DSN] タブを選択します。
- Reporter** が DSN に存在する場合は、選択して削除します。
- [追加] ボタンを選択して **Oracle in OraHome9** ドライバを強調表示させ、[完了] をクリックします。
- [Oracle ODBC ドライバ構成] ウィンドウで、[データ ソース名] として **Reporter** と入力します。
[TNSサービス名] については、[作業 2 の手順 9](#) で構成した名前 (RPT) をドロップダウン メニューから選択します。
- [Oracle] タブを選択し、[プリフェッチ数] を **25** に設定して、LOB を無効化します。

Oracle ODBCドライバ構成

データソース名: Reporter

説明:

TNSサービス名: RPT

ユーザーID:

OK

取消

ヘルプ

接続テスト

アプリケーション | Oracle | Workarounds | SQLServer Migration | 翻訳オプション

プリフェッチ数: 25

LOBを有効化:

フェイルオーバー

フェイルオーバーを有効化:

再試行: 10

遅延: 10

8. 接続をテストするには (必要な場合)、【接続テスト】をクリックし、ユーザー名とパスワード (openview/openview) を入力します。
9. このデータ ソースを システム DSN に追加する場合は、【OK】をクリックします。

作業 5 ➡ Reporter でのデータベースの構成

1. 【スタート】 【プログラム】 【HP OpenView】 【Reporter】 の順に選択して、Reporter を起動します。
2. 存在しないテーブルやビューに関するエラー メッセージが表示される場合、続行するには、【OK】をクリックします。
3. Reporter のメイン ウィンドウで、【ファイル】 【構成】 【データベース】 の順に選択し、ここでもエラー メッセージを無視して続行するためには【OK】をクリックします。
4. 【データベースの構成】 ダイアログ ボックスの [Reporter データベース] セグメントで、作業 6 の UNIX 設定で決定した、データベースのユーザー ID とパスワード (openview / openview) を入力します。
データを Reporter のデフォルト データベースから Oracle に移行する場合は、system / manager などの dba アカウントを使用します。
5. 【OK】をクリックし、Reporter のメイン ウィンドウを閉じ、再び開きます。これにより、新しいユーザー名とパスワードをデータベース接続に適用します。
6. データを移行する場合 (デフォルト データベースから Oracle) は、必要なデータベース スキーマ オブジェクトが移行ツールによって作成されるため、newdb.exe の実行は不要です。
データを移行しない場合 は、必要なデータベース スキーマ オブジェクトを Reporter Oracle データベースに作成します。C:\Program Files\hp OpenView\bin\newdb.exe プログラムを実行します。

4 Oracle の設定/接続

Part E : データベースとしての Oracle 10g の構成

概要

この章では、Oracle を HP OpenView Reporter (Reporter) のデータベースとして構成し、HP-UX または Solaris プラットフォームで Oracle 10g を設定する手順について説明します。さらに、Microsoft Windows プラットフォームで Oracle クライアントを構成する方法についても説明します。

 **重要** : HP OpenView Internet Services と HP OpenView Reporter を同じシステムにインストールしている場合は、既存データベースから Oracle に Reporter データを移行できません。

前提条件

Oracle の構成を正しく行うには、HP-UX または Solaris プラットフォームで指定されているカーネルパラメータの設定が正しくなければなりません。カーネルパラメータの詳細は、最新バージョンの Oracle のドキュメントを参照してください。

インストールの前に、システムが次の要件を満たしていることを確認してください。

メモリ : 512 MB 以上の RAM

スワップ領域 : 1 GB 以上のディスク領域

CD-ROM : RockRidge 拡張されている ISO 9660 フォーマットの読み取りが可能

ディスク領域 : 3.69 GB (データベース ソフトウェア用)、1 GB (データベース用)

一時ディスク領域 : 400MB (/tmp ディレクトリ)

Solaris (Sun SPARC) と HP-UX (PARISC) : 特定のオペレーティング システムのバージョンにおける Oracle 10g サーバーのサポート状況については、Oracle の最新のドキュメントを参照してください。

オペレーティング システムのパッチ (詳細は Oracle 10g Release Notes を参照)

Java コンポーネント (詳細は Oracle 10g Release Notes を参照)

 **HP-UX に関するメモ** : X ライブラリ シンボリック リンクに関する重要な事前作業を、インストール前に行う必要があります。

Oracle のドキュメント : 関連するドキュメントは、Oracle 10g Database CD-ROM に収録されています。参照するには、Oracle

10g Database CD-ROM の Disk 1 をマウントし、**index.html** ファイルを開きます。また、ドキュメントのオンライン リソースが Oracle Documentation Center と Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>) で提供されています。必要な情報については、次のドキュメントを参照してください。

Oracle 10g Installation Guide
Oracle 10g Quick Installation Procedure
Oracle 10g Release Notes



メモ :

Oracle 10g をインストールする前に Oracle のドキュメントを参照し、最新の推奨設定を確認してください。

Reporter データベースとしての Oracle 10g の構成

構成手順は、次のように 2 つの作業に分けられます。

[HP-UX または Solaris システムでの Oracle 10g のサーバー設定](#)
[Windows システムでの Oracle クライアントソフトウェアの構成](#)

HP-UX または Solaris プラットフォームでの Oracle 10g のサーバー設定

HP-UX または Solaris プラットフォームで Oracle 10g を設定するには、次の手順を実行します。

1. [UNIX 環境の準備](#)
2. [インストール CD のマウント](#)
3. [Oracle 10g Database Server ソフトウェアのインストール](#)
4. [データベース リスナーの構成](#)
5. [Reporter データベース構造の作成](#)
6. [Reporter データベースのユーザーと特権の作成](#)



メモ :

オペレーティング システムが HP-UX の場合、System Administrator Manager (SAM) を使用してユーザー グループを作成します。
オペレーティング システムが Solaris の場合、`admintool` または `groupadd` ユーティリティを使用して UNIX ユーザー グループを作成します。

作業 1 ➡ UNIX 環境の準備

1. Oracle UNIX グループを作成します。
 - a. root ユーザーとしてログインします。
 - b. UNIX グループ "dba" (OSDBA グループ) を作成します。
 - c. UNIX グループ "oper" (OSOPER グループ) を作成します。
 - d. UNIX グループ "oinstall" (ORAINVENTORY グループ) を作成します。

HP-UX に関するメモ : OSDBA グループに割り当てる必要がある特権については、『Oracle 10g Quick Installation Procedure』を参照してください。

2. UNIX ユーザー "oracle" を作成します。
 - a. UNIX ユーザー "oracle" を作成します (このアカウントは、Oracle ソフトウェアのインストールとアップグレードにのみ使用されます)。

プライマリ グループ : `oinstall` (ORAINVENTORY グループ)
セカンダリ グループ : `dba` (OSDBA グループ)

- b. UNIX ユーザー "apache" を作成します。

プライマリ グループ : `oinstall` (ORAINVENTORY グループ)
セカンダリ グループ : `apache` だけがメンバーであるグループ

- c. Oracle データベース ソフトウェアのマウント ポイントを作成します (例 : `cd /opt`)。d. 次のコマンドを入力します。

```
chown -R oracle:oinstall oracle
```

- e. Oracle ユーザーの権限を適切に設定するために、次のコマンドを入力します。

```
chmod -R 755 (インストール ディレクトリが対象。例 : /opt/oracle)
```

- f. `/usr/local/bin` や `/opt/bin` などのローカルの `bin` ディレクトリが存在することを確認します。
- g. UNIX システム変数と Oracle 環境変数を設定します
(`.profile` ファイルに変数を追加するか、変数を手動で設定します)。

```
DISPLAY=<workstation_name>:0.0 (Oracle インストーラの出力先)
```

```
ORACLE_BASE=/opt/oracle
```

```
ORACLE_HOME=/opt/oracle/product
```

```
ORACLE_SID=reporter
```

```
PATH には、$<ORACLE_HOME>/bin、/usr/ccs/bin、/usr/bin、/etc、/usr/bin/X11 (HP-UX の場合)、/usr/openwin/bin (Solaris の場合)、/usr/local/bin (存在する場合) を含めます。
```

HP-UX の `.profile` の例 :

```
# Oracle Environment
ORACLE_BASE=/opt/oracle; export ORACLE_BASE
ORACLE_HOME=/opt/oracle/product; export ORACLE_HOME
ORACLE_SID=reporter; export ORACLE_SID
ORACLE_TERM=xterm; export ORACLE_TERM
NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.UTF8; export NLS_LANG
ORA_NLS33=$ORACLE_HOME/ocommon/nls/admin/data; export ORA_NLS33
LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib:/lib:/usr/lib:$ORACLE_HOME/rdbms/lib
SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32:$ORACLE_HOME/rdbms/lib32
export LD_LIBRARY_PATH
export SHLIB_PATH
#set shell search paths
PATH=/bin:/usr/bin:/usr/sbin:/etc:/opt/bin:/usr/ccs/bin:/usr/local/bin:$ORACLE_HOME/bin
export PATH
#CLASSPATH must include the following JRE locations:
CLASSPATH=$ORACLE_HOME/JRE:$ORACLE_HOME/jlib:$ORACLE_HOME/rdbms/jlib
CLASSPATH=$CLASSPATH:$ORACLE_HOME/network/jlib
```

作業 2 ➡ インストール CD のマウント

HP-UX の場合 :

1. `/etc/pfs_fstab` ファイルを編集して以下を追加します。

`<device_file> <mount_point> <filesystem_type> <translation_method>`

この構文の定義 :

`<device_file>` = CD-ROM デバイス ファイル (`ioscan -nFC disk` で検出)
`<mount_point>` = マウント ポイントのパス名
`<filesystem_type>` = CD-ROM は、ISO9660 フォーマットの Rockridge 拡張
`<translation_method>` = unix

例 : `/dev/dsk/c1t2d0 /CDROM pfs-rrip xlat=unix 0 0`

2. root ユーザーは、次の手順を実行します。
 - a. 次のコマンドを入力します。
`/usr/sbin/pfs_mountd`

 **メモ** : pfs により、CD を読み取るための正しいフォーマットが作成されます。

- b. 次のコマンドを入力します。
`/usr/sbin/pfsd`
- c. CD を CD-ROM ドライブに挿入し、次のコマンドを入力してこのデバイスをマウントします。
`/usr/sbin/pfs_mount /CDROM`

インストール中は、スクリプトを実行できるように、root ユーザーのウィンドウを開いたままにしておきます。

Solaris の場合 :

ボリューム管理ソフトウェア (Solaris 上でデフォルトで使用可) を使用すると、ディスク ドライブに挿入した CD-ROM が自動的にマウントされます。ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合は、CD-ROM を手動でマウントする必要があります。

1. Oracle CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. **root** ユーザーとしてログイン、または **su** コマンドを実行後、次のコマンドで CD-ROM マウント ポイント ディレクトリを作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のように、CD-ROM ドライブをマウント ポイント ディレクトリにマウントし、終了します。

```
# mount option device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

作業 3 Oracle 10g Database Server ソフトウェアのインストール

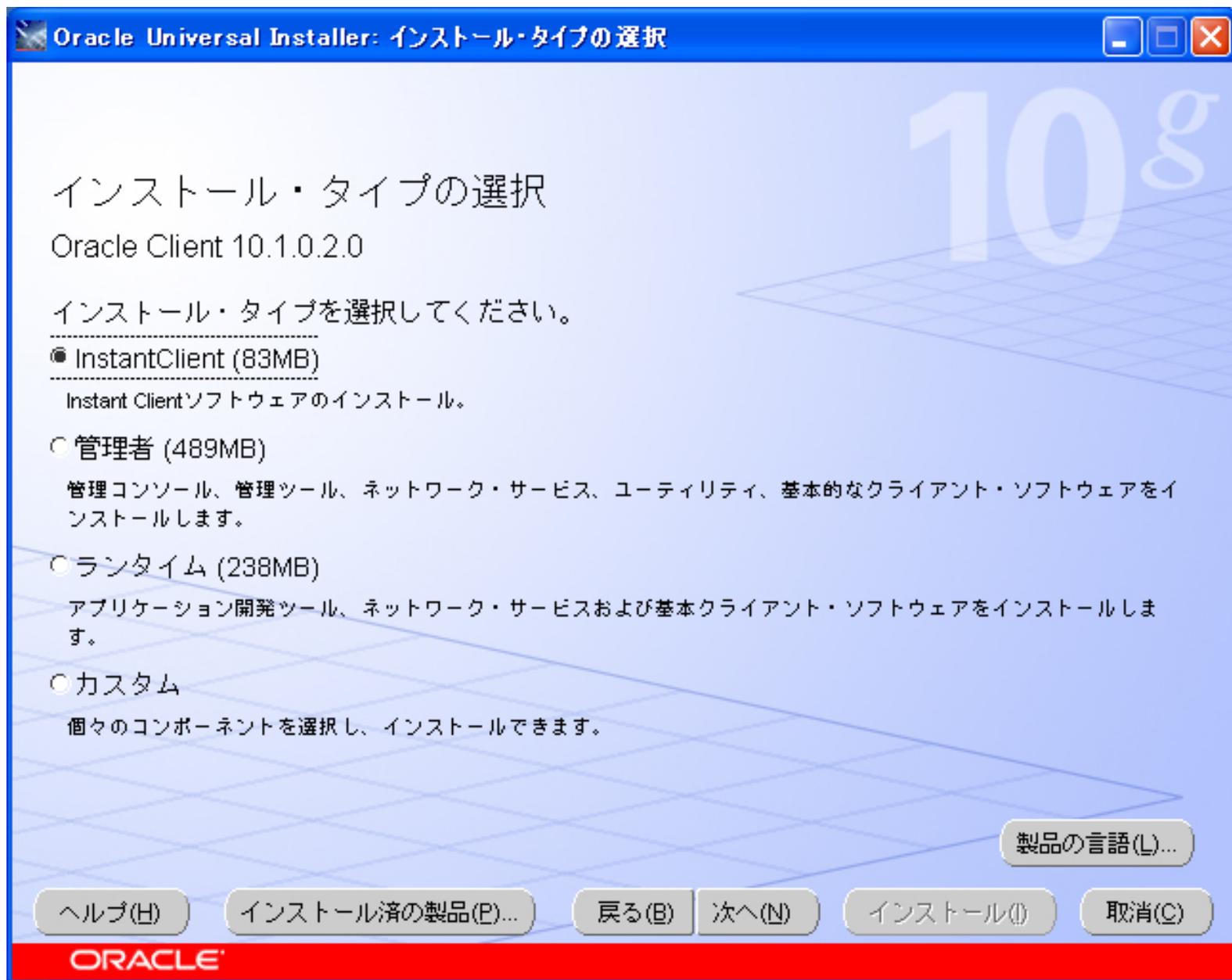
1. Oracle アカウントにログインします。
2. インストーラ実行可能ファイルの完全パスを入力して、**Oracle Universal Installer** を起動します。

警告 :

CD-ROM のディレクトリからインストーラを起動しないでください。起動すると、複数の CD をマウントできなくなります (例 : `/<CD-Drive>/oracle10g/runInstaller` または `/<CD-Drive>/runInstaller`)。インストール前にプリインストール作業が完了していない場合は、スクリプトの実行が必要です。

3. Oracle 10g の新規インストールでは、[ようこそ] ウィンドウが表示されます。

4. [次へ] をクリックします。[ファイルの場所の指定] ウィンドウが表示されます。[ソース] フィールドのテキストを変更しないでください。
5. [次へ] をクリックします。[ソフトウェアのインベントリ・ディレクトリおよび資格証明の指定] ウィンドウが表示されます。
6. ORACLE HOME のディレクトリ名とパスを入力します。[次へ] をクリックします。[使用可能な製品の指定] ウィンドウが表示されます。
7. **[Oracle10g Database]** を選択し、[次へ] をクリックします。
8. 実行するインストールのタイプを選択します。次のオプションを選択できます。
 - Enterprise または Standard Edition
 - カスタム



メモ：カスタム インストールを選択する場合、Oracle、Oracle Net Services、Oracle Net Services のすべてのサブ製品を選択する必要があります。これらのインストール タイプの違いについては、最新バージョンの Oracle のドキュメントを参照してください。

9. [次へ] をクリックします。製品固有の前提条件をチェックし、[次へ] をクリックします。[データベース構成の選択] ウィンドウが表示されます。
10. [初期データベースを作成しない] を選択し、[次へ] をクリックします。[サマリー] ウィンドウが表示されます。
11. 表示内容を確認し、[インストール] をクリックします。[インストール] ウィンドウが表示されたら、製品がインストールされるのを待ちます。
12. [セットアップ権限] ウィンドウが表示されたら、指示に従ってスクリプトを実行します。
13. [インストールの終了] ウィンドウで、[終了] をクリックします。

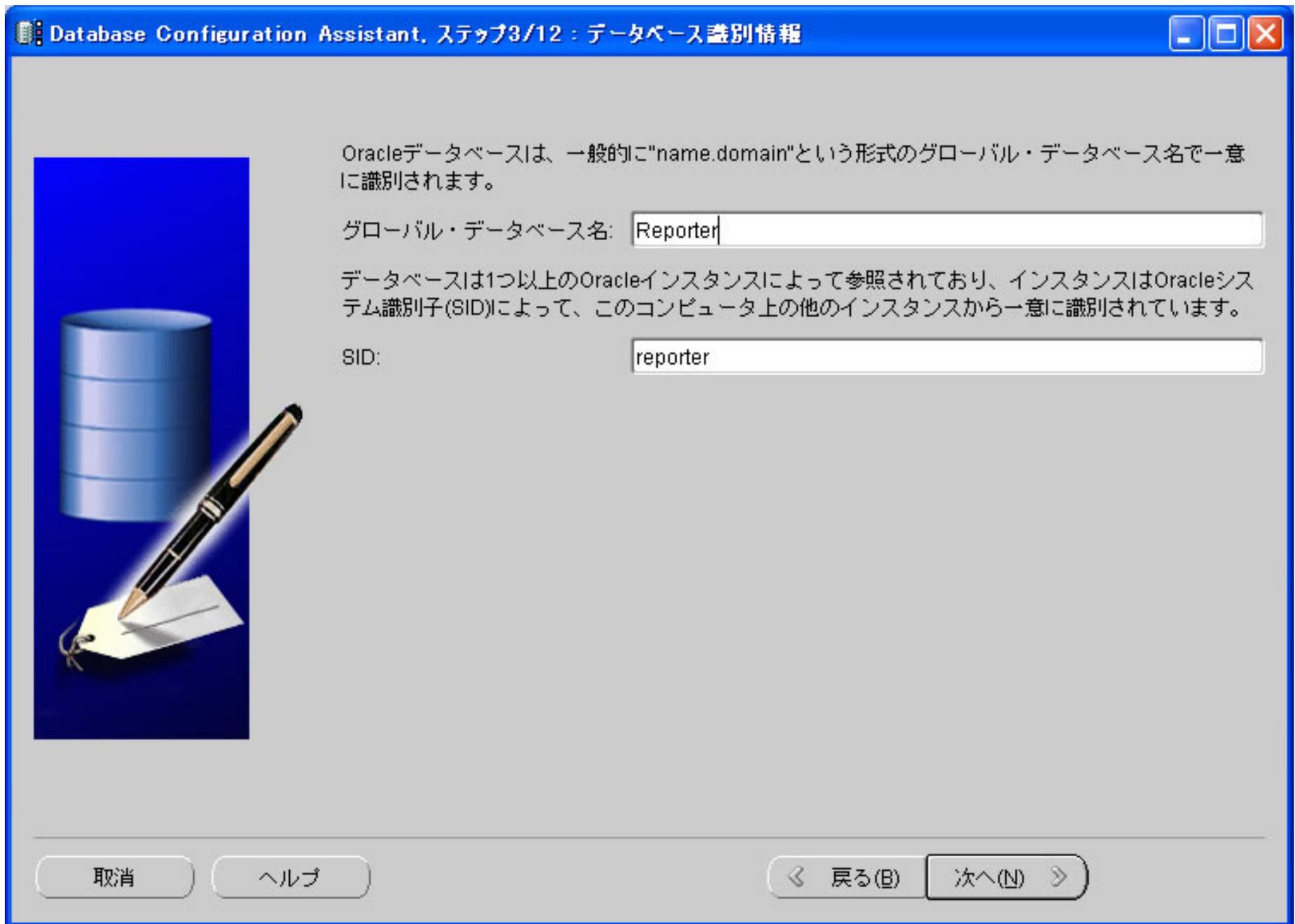
作業 4 ➡ データベース リスナーの構成

1. UNIX コンソール ウィンドウから Oracle ユーザーとしてログインします。
2. Oracle Net Configuration Assistant を起動するために、コマンド `netca` を入力します。この構成ウィザードの [ようこそ] ウィンドウが表示されません。
3. [リスナー構成] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. [追加] をクリックし、[次へ] をクリックします。
5. [リスナー名] に名前を入力し (`LISTENER` を推奨)、[次へ] をクリックします。
6. 接続プロトコルとして [TCP] を選択し、[次へ] をクリックします。
7. 標準ポート番号の [1521] を選択し、[次へ] をクリックします。
8. 他のリスナーの構成については [いいえ] を選択します。構成が完了したことを示すメッセージが表示されます。[次へ] をクリックします。
9. 最後のウィンドウで、[完了] をクリックします。

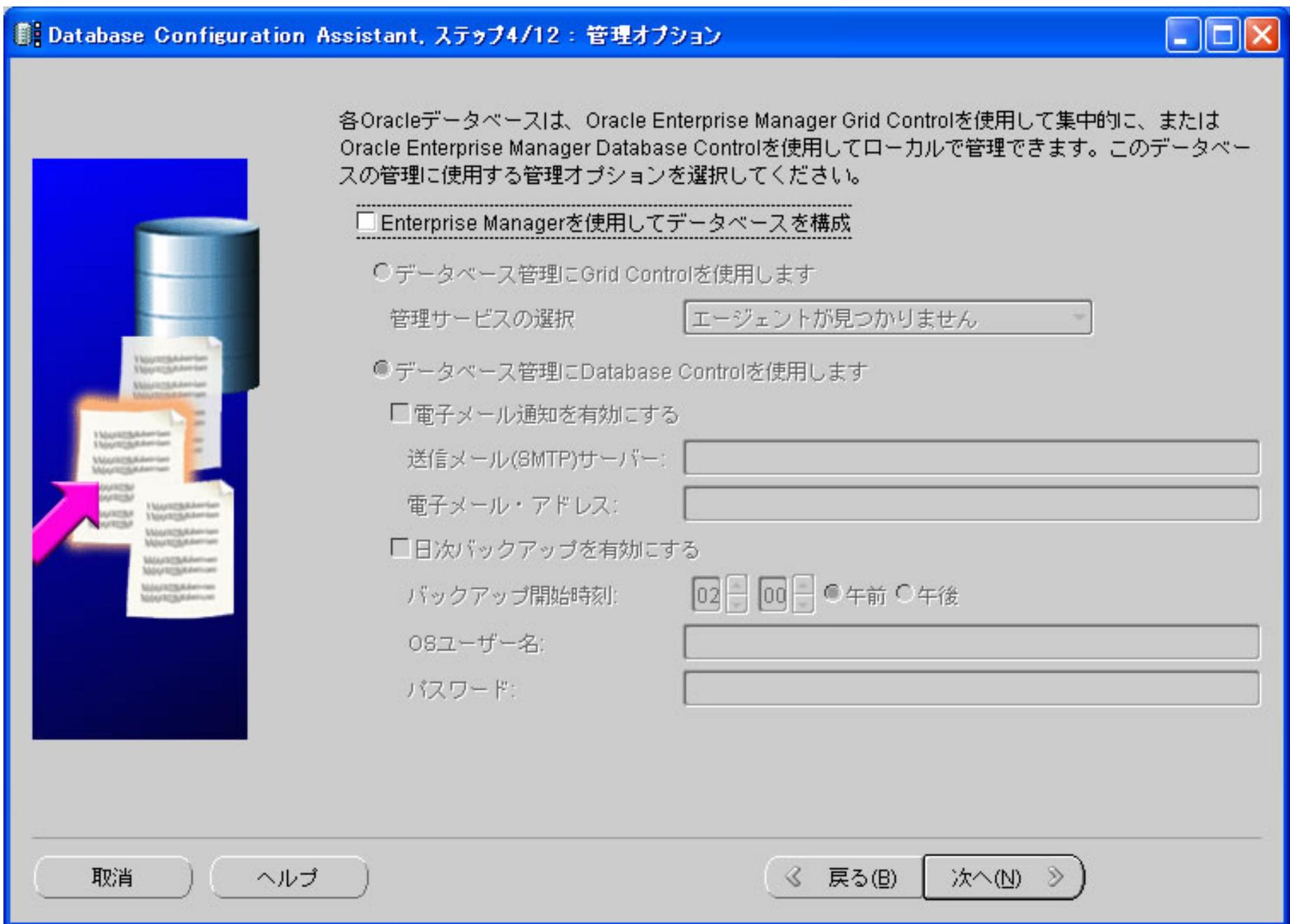
 メモ：データベースを作成する前に、システムが Oracle パージョン 10.1.0.4 以降にアップグレードされていることを確認してください。

作業 5 ➡ Reporter データベース構造の作成

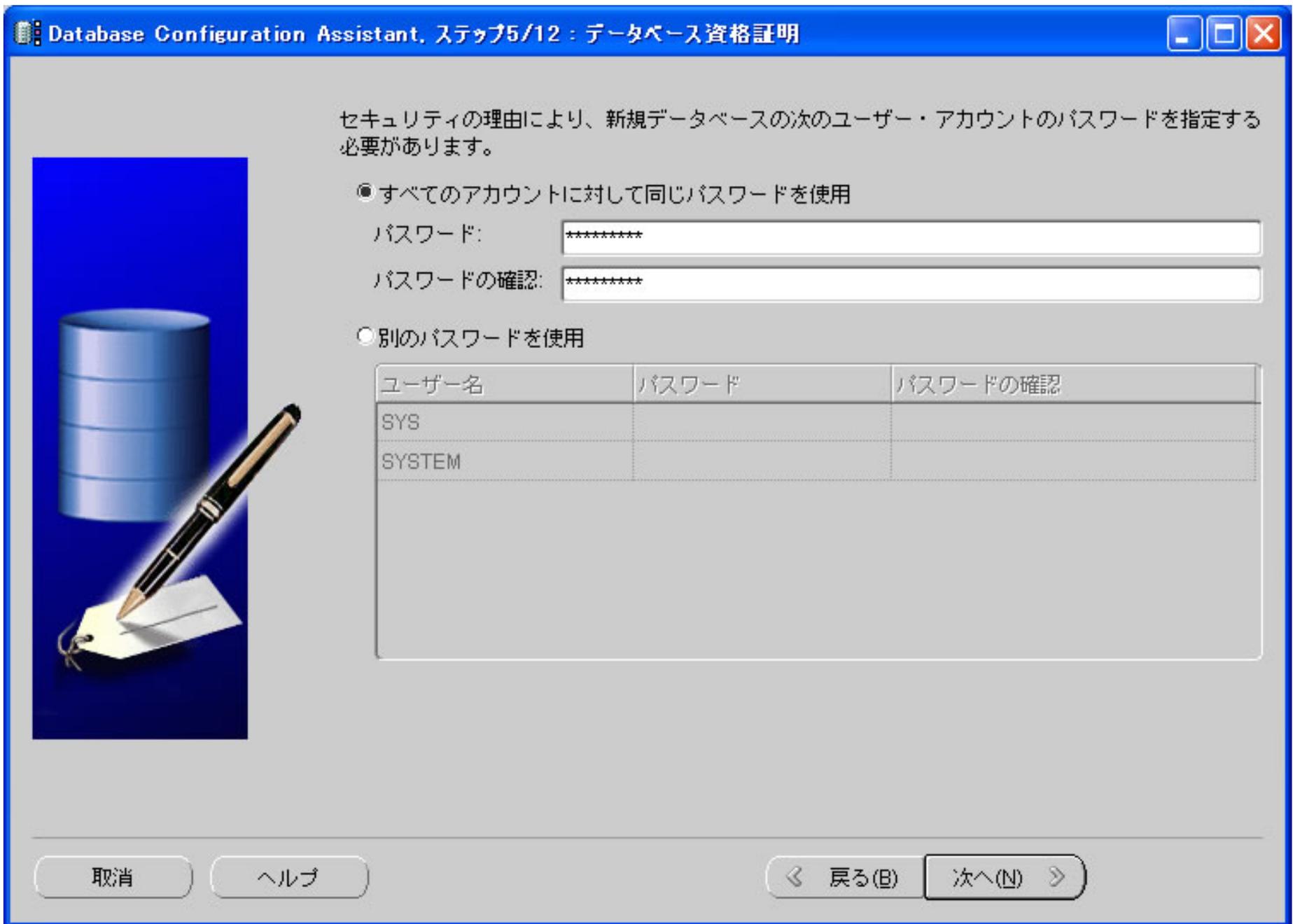
1. UNIX コンソール ウィンドウから Oracle ユーザーとしてログインします。
2. コマンド `dbca` を入力します。[Oracle Database Configuration Assistant : ようこそ] ウィンドウが表示されます。
3. [次へ] をクリックします。[Oracle Database Configuration Assistant, ステップ1/12 : 操作] ウィンドウが表示されます。
4. [データベースの作成] を選択し、[次へ] をクリックします。[Oracle Database Configuration Assistant, ステップ2/12 : データベース・テンプレート] ウィンドウが表示されます。
5. [カスタム データベース] テンプレートを選択し、[次へ] をクリックします。[Oracle Database Configuration Assistant, ステップ3/12 : データベース識別情報] ウィンドウが表示されます。



6. 【グローバル データベース名】に *Reporter* と入力し、【SID】に *reporter* と入力します。【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ4/12 : 管理オプション】ウィンドウが表示されます。



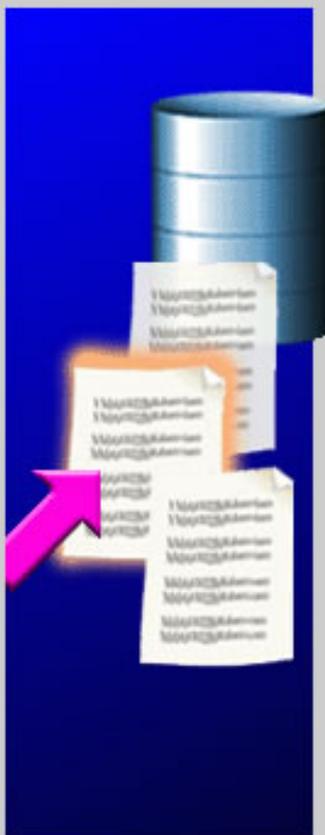
7. 必要なオプションまたはデフォルトを選択できます。【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ5/12 : データベース資格証明】ウィンドウが表示されます。



8. 【すべてのアカウントに対して同じパスワードを使用】を選択します。【パスワード】に入力し、確認のため、【パスワードの確認】テキストボックスにパスワードを再入力します。【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ6/12 : 記憶域オプション】ウィンドウが表示されます。



データベースに使用する記憶域メカニズムを選択してください。



ファイル・システム

データベース記憶域にファイル・システムを使用します。

Automatic Storage Management (ASM)

Automatic Storage Managementにより、データベース記憶域の管理が簡素化され、データベース・レイアウトが最適化されてI/Oパフォーマンスが向上します。このオプションを使用するには、ディスク・セットを指定してASMディスク・グループを作成するか、既存のASMディスク・グループを指定します。

RAWデバイス

Automatic Storage Managementを使用しておらず、クラスタ・ファイル・システムが使用可能ではない場合は、Real Application Clusters (RAC)データベースに必要な共有記憶域を、RAWパーティションまたはボリュームで指定できます。データベースに作成予定のデータファイル、制御ファイルおよびログ・ファイルごとにRAWデバイスを1つずつ作成しておく必要があります。

RAWデバイス・マッピング・ファイルの指定

参照...

取消

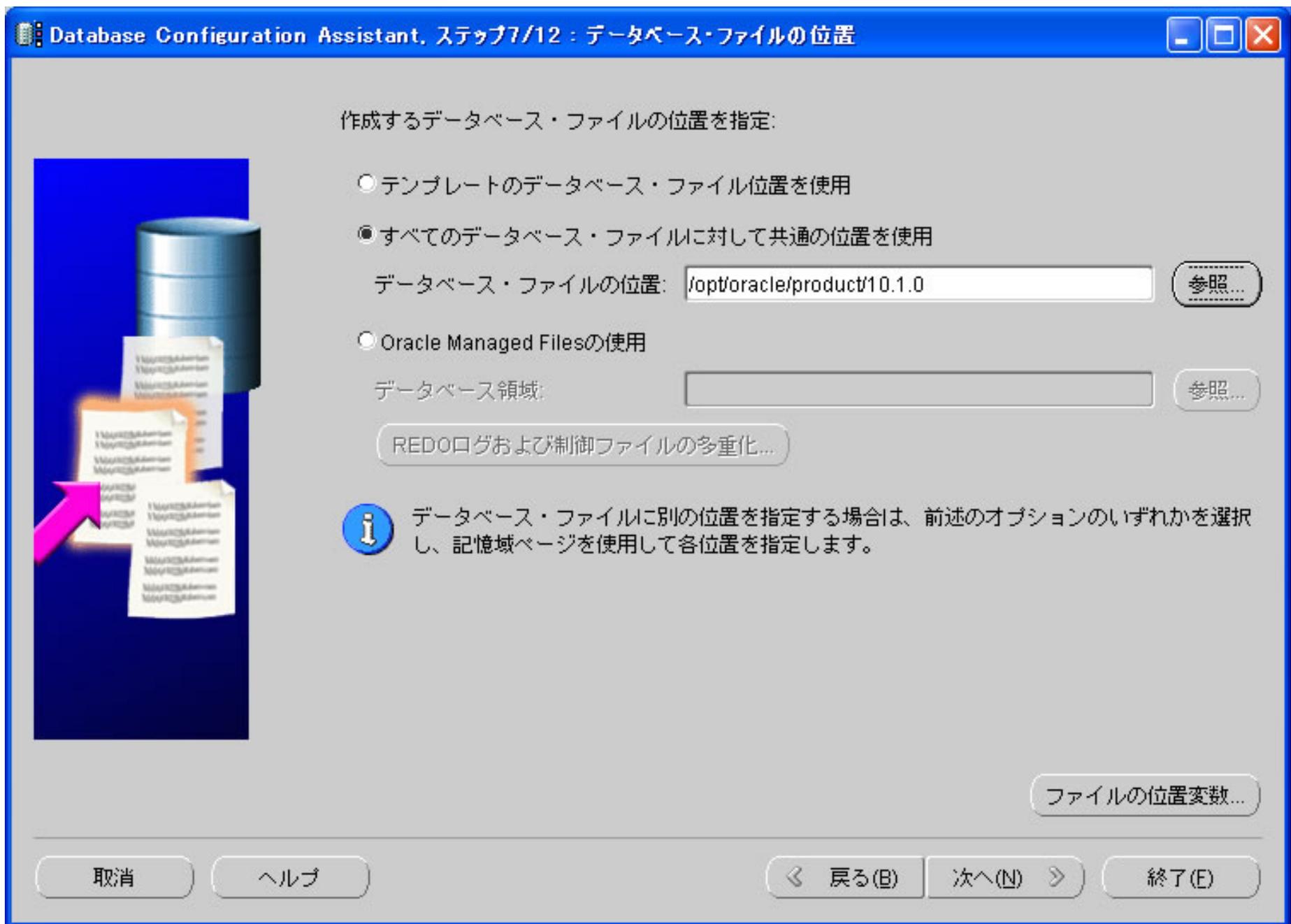
ヘルプ

戻る(B)

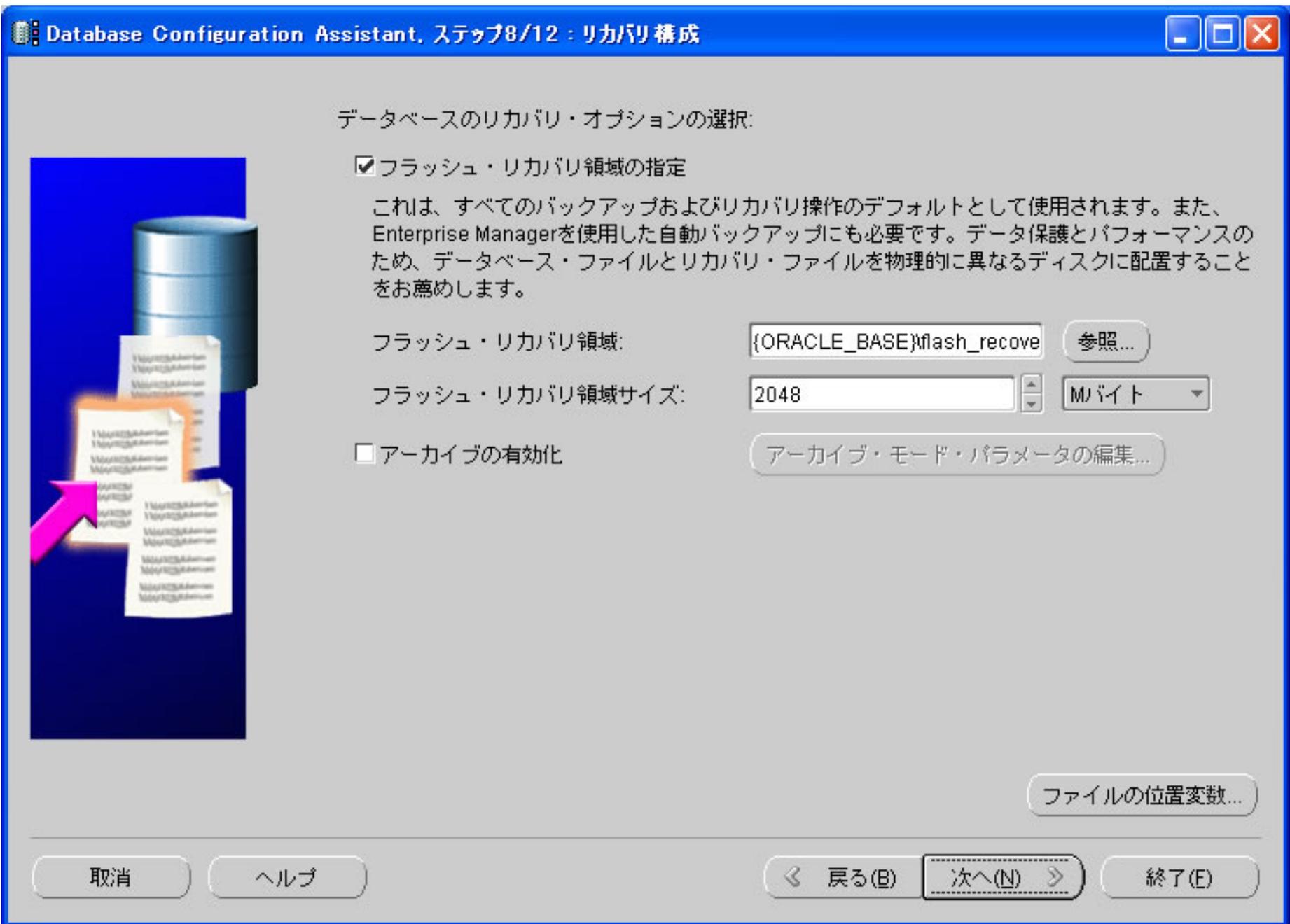
次へ(N)

終了(E)

9. 【ファイル・システム】を選択し、【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ7/12 : データベース・ファイルの位置】ウィンドウが表示されます。



10. 【すべてのデータベース・ファイルに対して共通の位置を使用】を選択します。作成するデータベース ファイルのパスを入力するか、【参照】をクリックしてシステム上の該当ディレクトリを指定します。【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ8/12 : リカバリ構成】ウィンドウが表示されます。

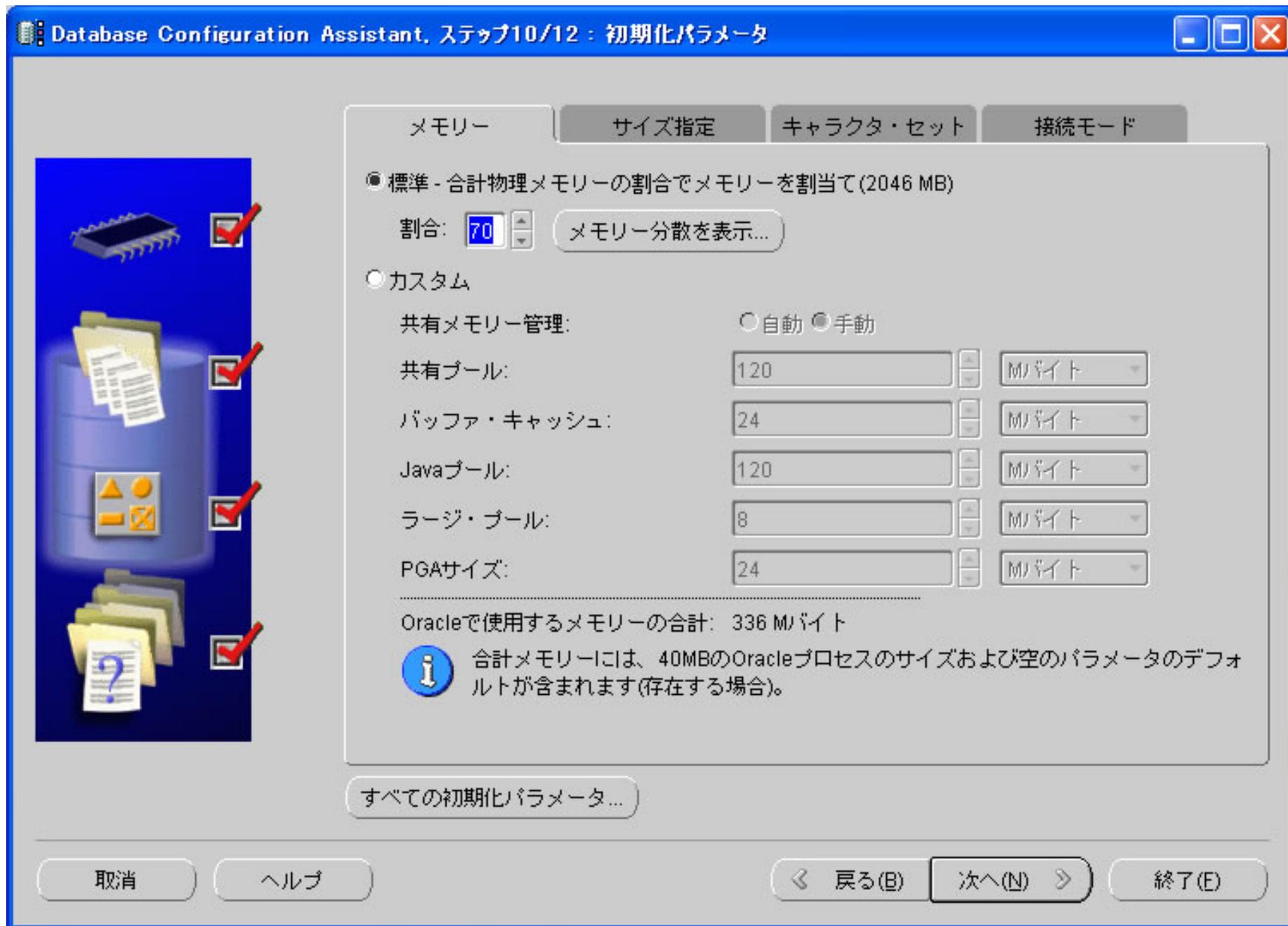


11. 【フラッシュ・リカバリ領域の指定】を選択します。次の情報を入力します。
 - フラッシュ・リカバリ領域：バックアップ ファイルとリカバリ ファイルの格納先となるパス
 - フラッシュ・リカバリ領域サイズ：バックアップ ファイルを割り当てるメモリ
12. 【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ9/12 : データベース・コンテンツ】ウィンドウが表示されま

す。



13. データベース内に構成するコンポーネントを選択します。[次へ] をクリックします。[Oracle Database Configuration Assistant, ステップ 10/12 : 初期化パラメータ] ウィンドウが表示されます。



14. 【メモリー】タブをクリックします。【標準】を選択します。

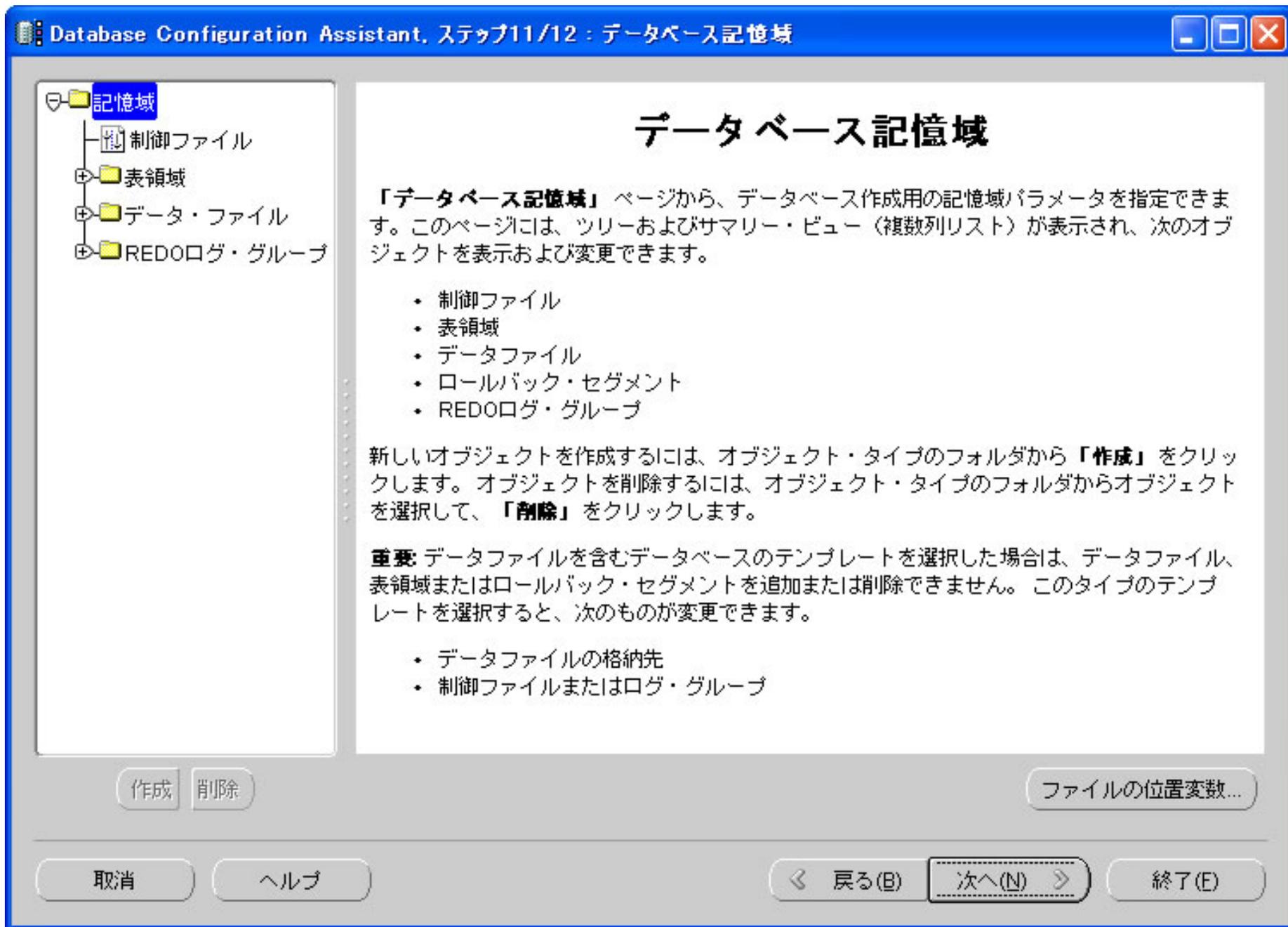
15. 【キャラクタ・セット】タブを選択します。



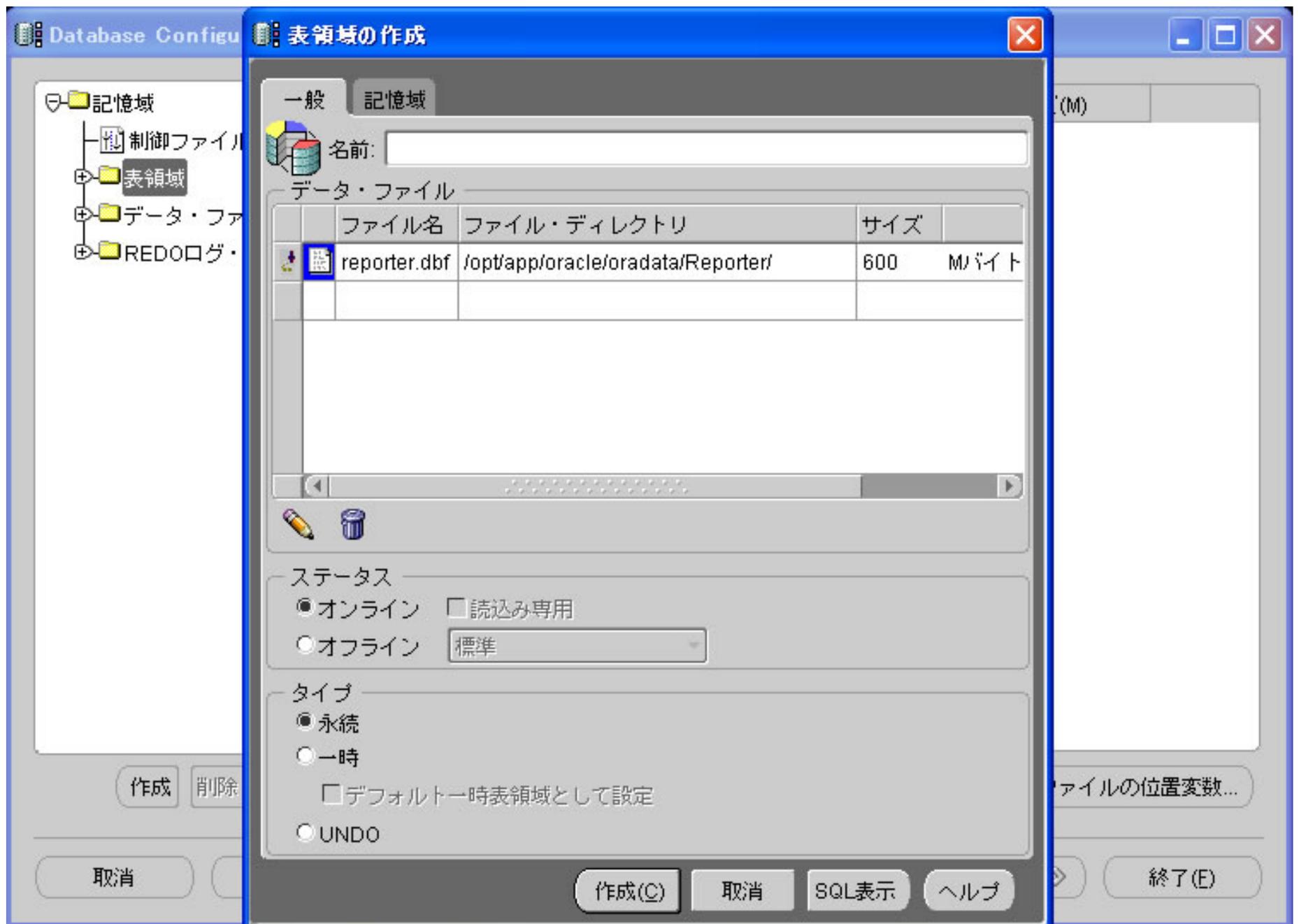
16. 【デフォルトを使用】を選択します。【接続モード】タブを選択します。



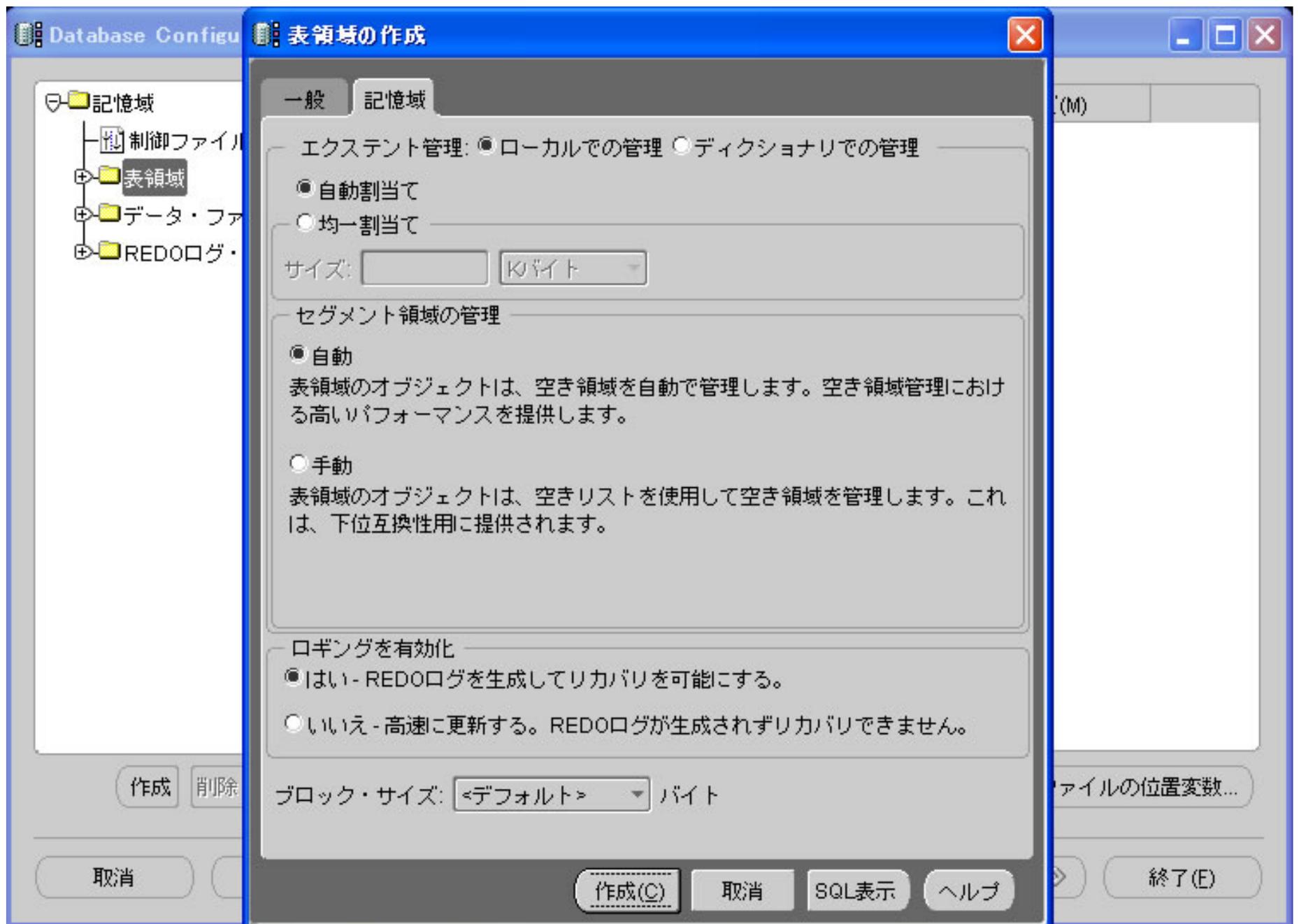
17. 【専用サーバー・モード】を選択し、【次へ】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant, ステップ11/12 : データベース記憶域】ウィンドウが表示されます。



18. 左ペインの【表領域】を選択します。【作成】をクリックします。【表領域の作成】ダイアログボックスが開きます。

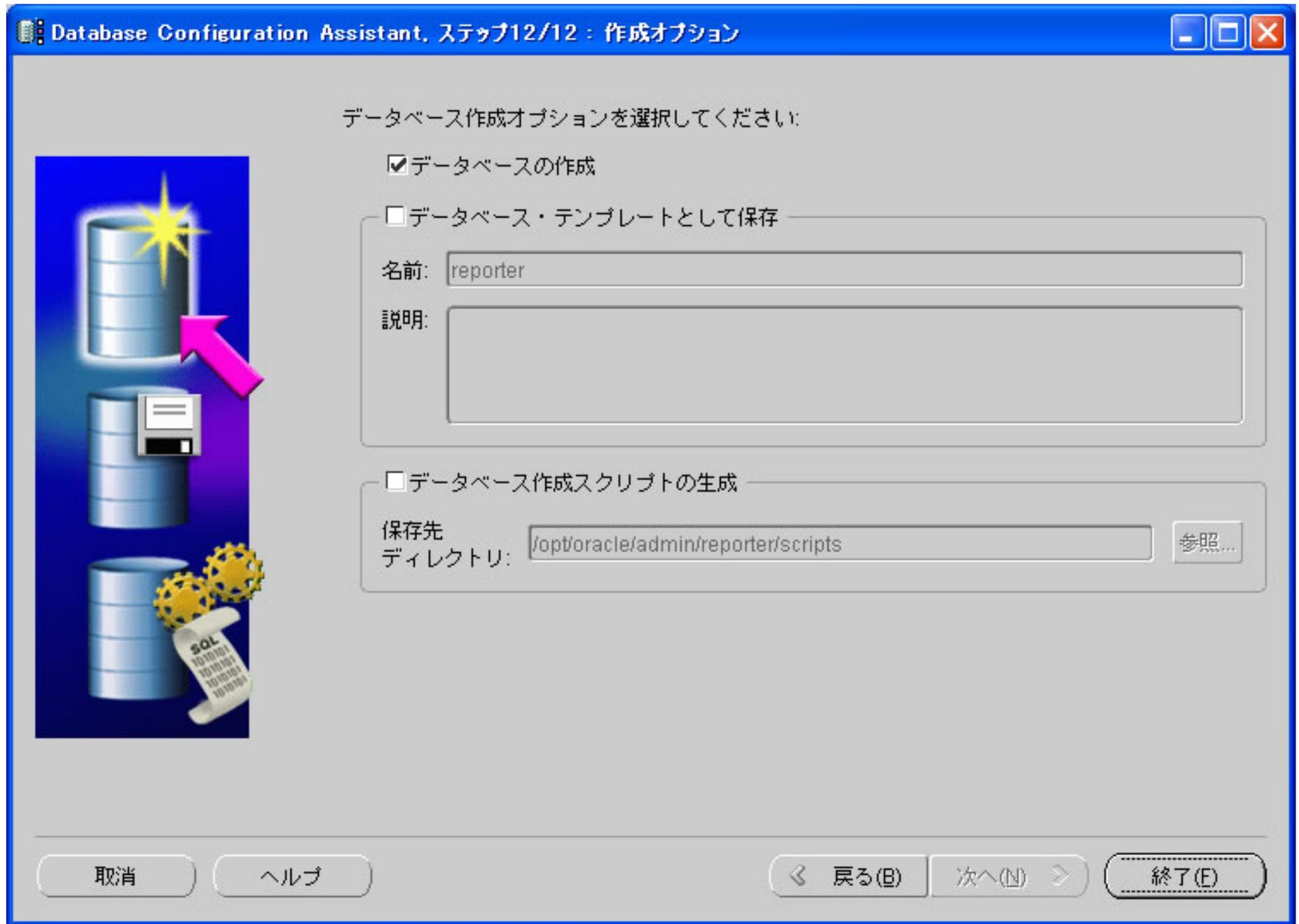


19. 表領域の【名前】に「REPORTER」と入力します。【ファイル名】で `reporter.dpf` を選択し、【サイズ】に「600 MB」と入力します。
20. 【記憶域】タブを選択します。



重要 : 実際の記憶域のサイズ (REPORTER 表領域に 600 MB、RPT_INDEXES 表領域に 300 MB) が十分な大きでない場合は、使用環境に適したサイズや Oracle の AUTOEXTEND データ ファイル機能の設定方法について、Oracle データベース管理者に問い合わせてください。

21. 【自動割当て】を選択します。【セグメント領域の管理】セクションで【自動】を選択します。【作成】をクリックしてデータ ファイルを作成します。



22. 【データベースの作成】を選択します。【終了】をクリックします。確認ウィンドウが表示されます。
23. 【OK】をクリックします。【Oracle Database Configuration Assistant】ウィンドウが表示されます。

24. データベースの作成後に、データベース作成の完了を示すメッセージが表示されます。
25. データベース作成の完了を示すメッセージが表示されたら、これに応答し、Database Configuration Assistant を閉じます。

作業 6 Reporter データベースのユーザーと特権の作成

1. **SQL *Plus** 環境を起動するために、次の手順を実行します。
 - a. UNIX コンソール ウィンドウから **Oracle** ユーザーとしてログインします。
 - b. 次のコマンドを入力して、**SQL *Plus** 環境を起動します。
`sqlplus`
 - c. ユーザー名とパスワードを入力します。

メモ：作成したデータベースに対し、システムまたは管理者ログイン権限が必要です。

2. Reporter データベースのユーザーを作成するために、次の SQL コマンドを実行します。

- o `create user openview profile default`
- o `identified by openview`
- o `default tablespace reporter`
- o `temporary tablespace temp`
- o `quota unlimited on reporter`
- o `quota unlimited on rpt_indexes`
- o `account unlock`

ユーザーの作成を示すメッセージが表示されます。

3. 権限を割り当てるために、次のコマンドを入力します。
 - o `grant`
 - o `create any index`
 - o `create procedure`
4. Oracle 10g (HP-UX または Solaris) をデータベースとして構成します。
 - o `create sequence`
 - o `create session`
 - o `create table`
 - o `create trigger`
 - o `create view`
 - o `connect to openview`

Windows システムでの Oracle クライアント ソフトウェアの構成

Reporter を Microsoft Windows システムにインストールし、Oracle データベースを HP-UX または Solaris システムにインストー

ルする場合、Reporter がデータにアクセスできるよう、Oracle 10g クライアント ソフトウェアをインストールする必要があります。Windows システムに Oracle クライアント ソフトウェアをインストールし、構成するには、次の手順を実行します。

1. [Oacle 10g クライアント ソフトウェアのインストール](#)
2. [Oracle Net 接続の構成](#)
3. [Oracle Net 接続の確認](#)
4. [ODBC データ ソースの構成](#)
5. [Reporter のデータベースの構成](#)

作業 1 ➡ Oracle 10g クライアント ソフトウェアのインストール

1. Windows NT または 2000 システムで、Oracle 10g クライアントのインストール CD を挿入します。【製品のインストール/削除】を選択します。
2. **【Oracle Universal Installer : ようこそ】** ウィンドウが表示されます。【次へ】をクリックします。
3. Oracle 10g クライアント ソフトウェアのインストール先となる **Oracle home** の場所を入力または選択し、【次へ】をクリックします。【使用可能な製品】ウィンドウが表示されます。
4. **【Oracle10g Client】** を選択し、【次へ】をクリックします。【インストール・タイプの選択】ウィンドウが表示されます。
5. **【管理者】** を選択し、【次へ】をクリックします。
6. **【サマリー】** ウィンドウの情報を確認し、【インストール】をクリックします。
7. インストールの進行状況を示すウィンドウが表示されます。

インストール プロセスが完了した後で、Oracle Net Manager ツールがデフォルトで起動します。Oracle Net 接続の構成手順については、「[作業 2 : Oracle Net 接続の構成](#)」を参照してください。

作業 2 ➡ Oracle Net 接続の構成

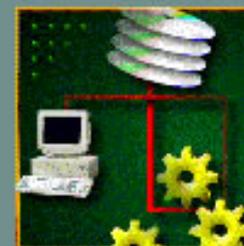
Oracle 10g クライアント ソフトウェアをインストールした後で、Oracle クライアントを構成する必要があります。ここでは、**Oracle Net Manager** ツールを使用して Oracle 10g クライアント ソフトウェアを構成する手順を説明します。**Oracle Net Configuration Assistant** を使用してクライアントを構成することもできます。

1. 前の「[作業 1 : Oracle 10g クライアント ソフトウェアのインストール](#)」から引き続き構成を行う場合は、**Oracle Net Manager** ツールが表示されています。[手順 3](#) に進んでください。
2. **Oracle Net Manager** ツールを起動するために、【スタート】 【プログラム】 **【Oracle-OraClient10g_home】** **【Configuration and Migration Tools】** **【Net Manager】** の順に選択します。**【Oracle Net Manager】** ウィンドウが表示されます。

ファイル(F) 編集 ツール ヘルプ(H)

Oracle Netの構成

ローカル



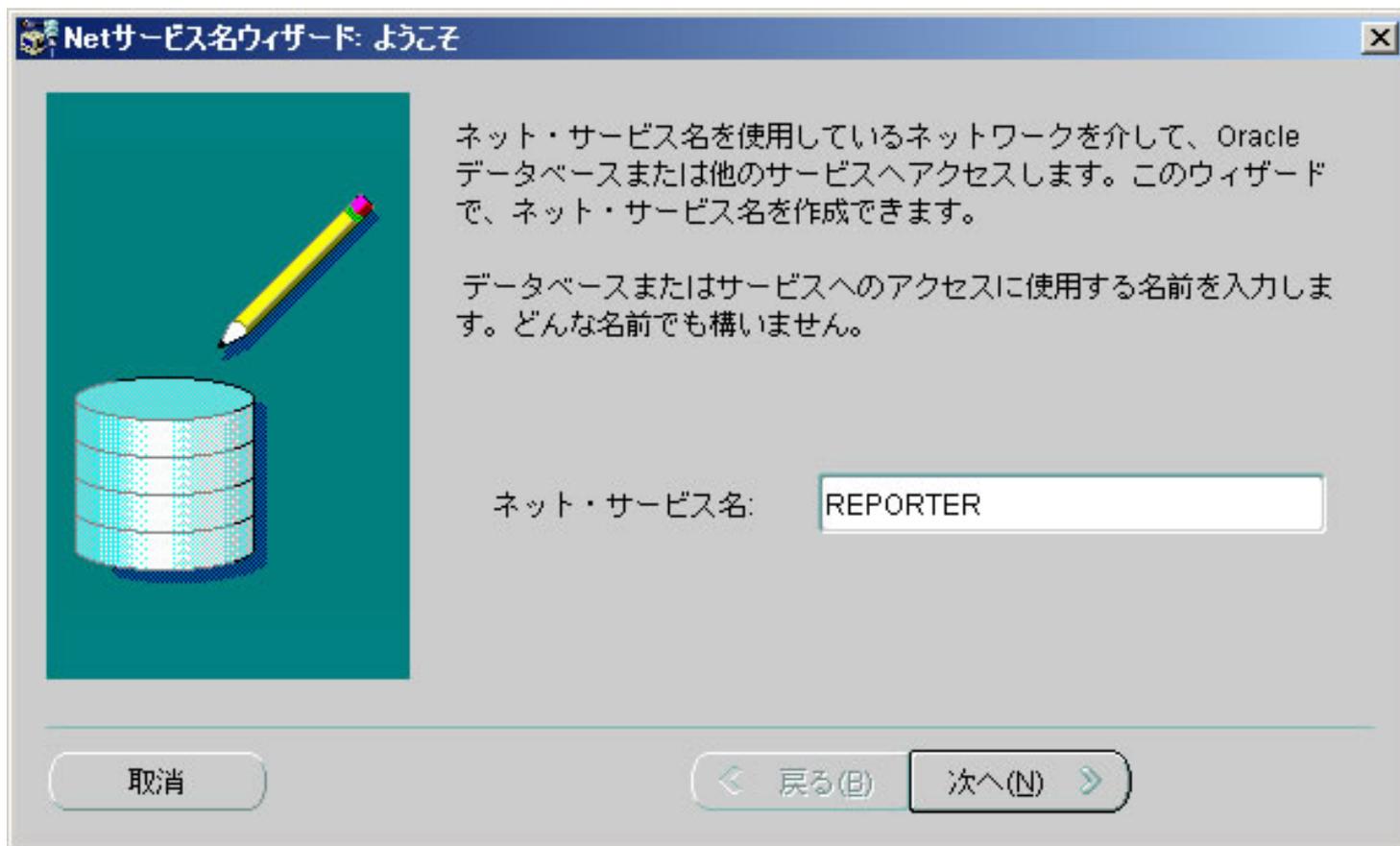
Oracle Net Managerへようこそ。Oracle Net Managerを使用して、ネットワークの次の項目を構成できます：

ネーミング - データベースなど、サービスの位置を識別する単純名を定義できます。この名前は、ネットワークの位置およびサービスの識別を含む接続記述子にマップされます。

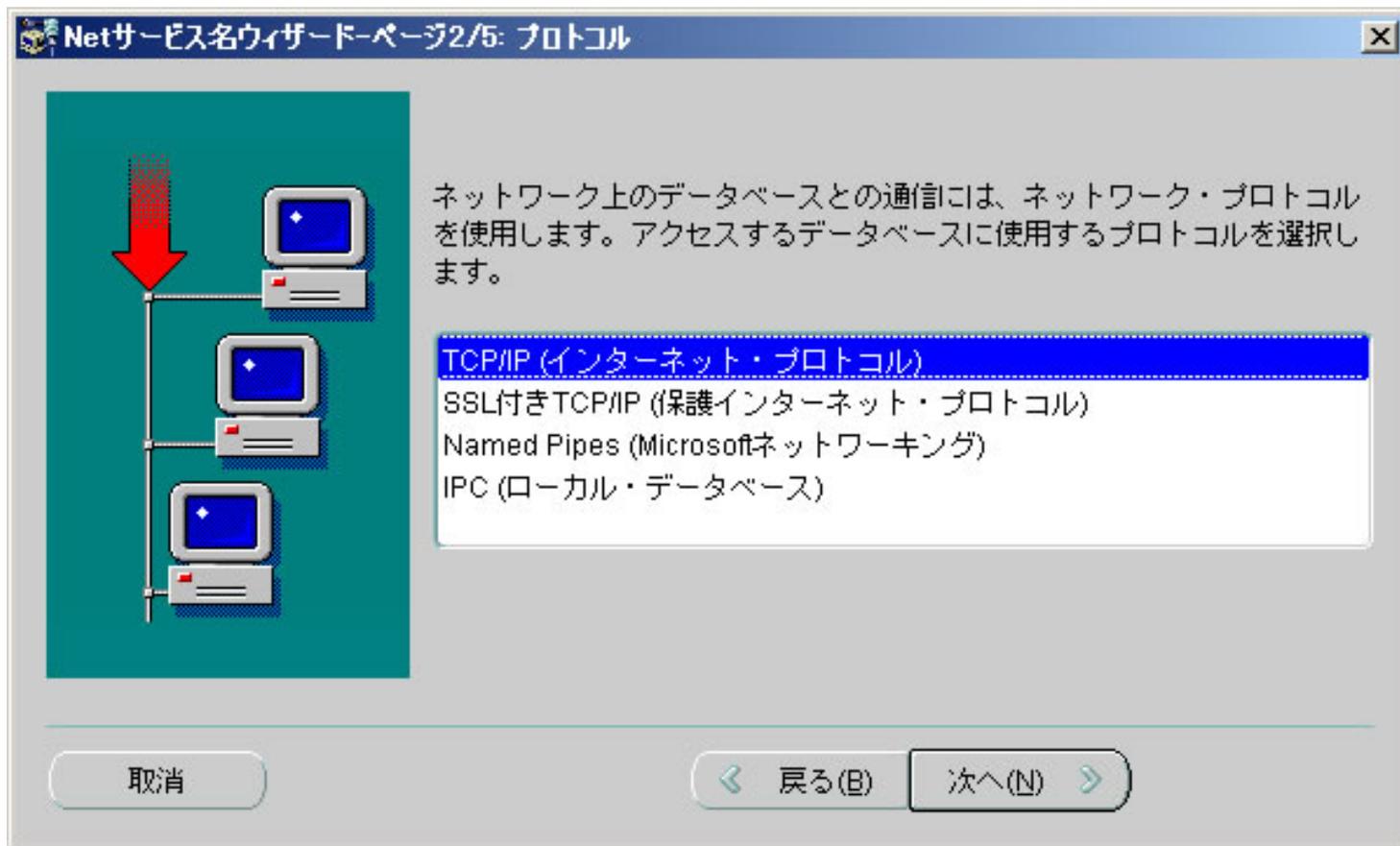
ネーミング・メソッド - 単純名を接続記述子にする方法を構成できます。

リスナー - クライアントの接続を受け取るリスナーを作成し、構成できます。

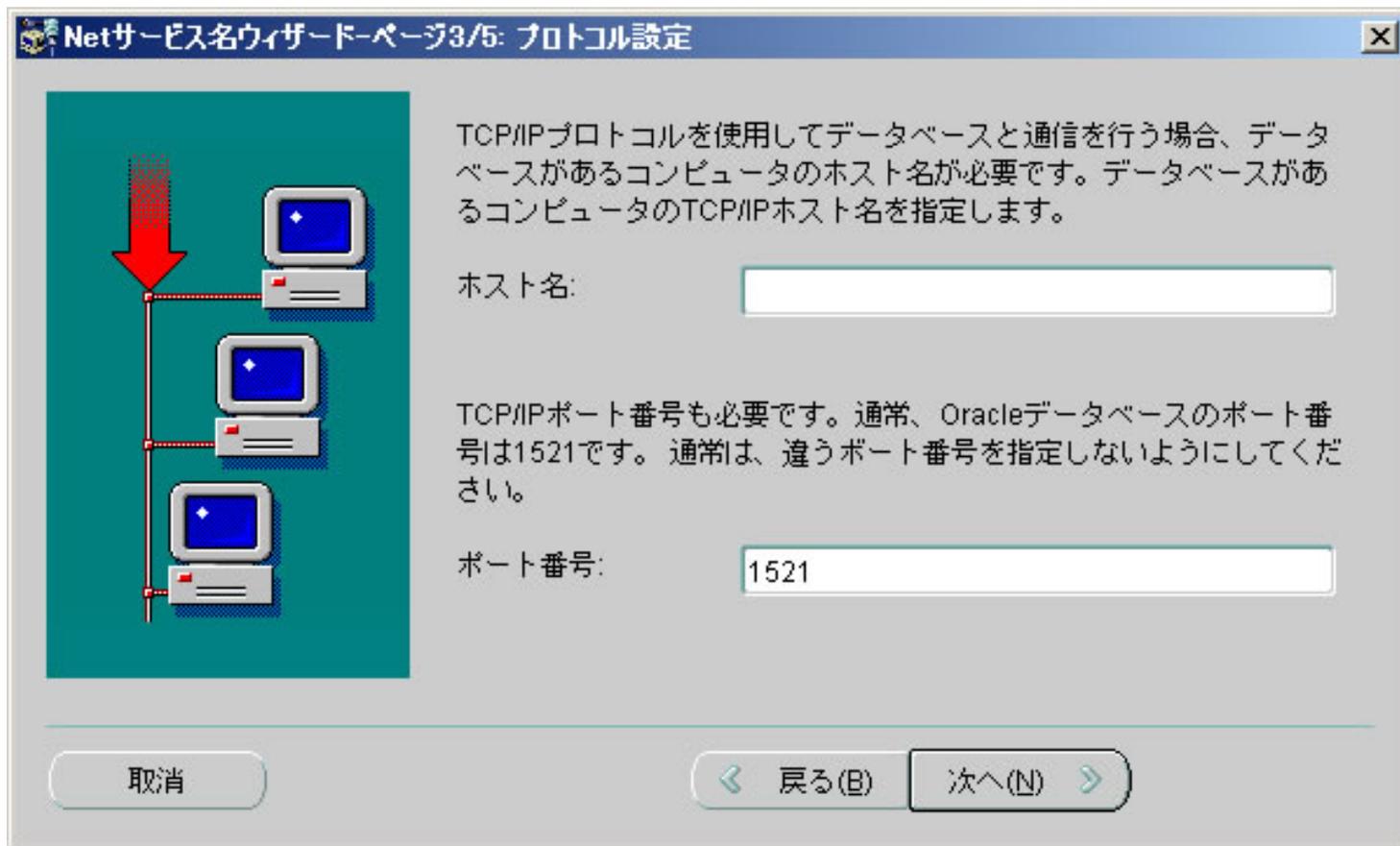
3. [Oracle Net Manager] ウィンドウで [+] をクリックします。Net サービス名ウィザードが表示されます。



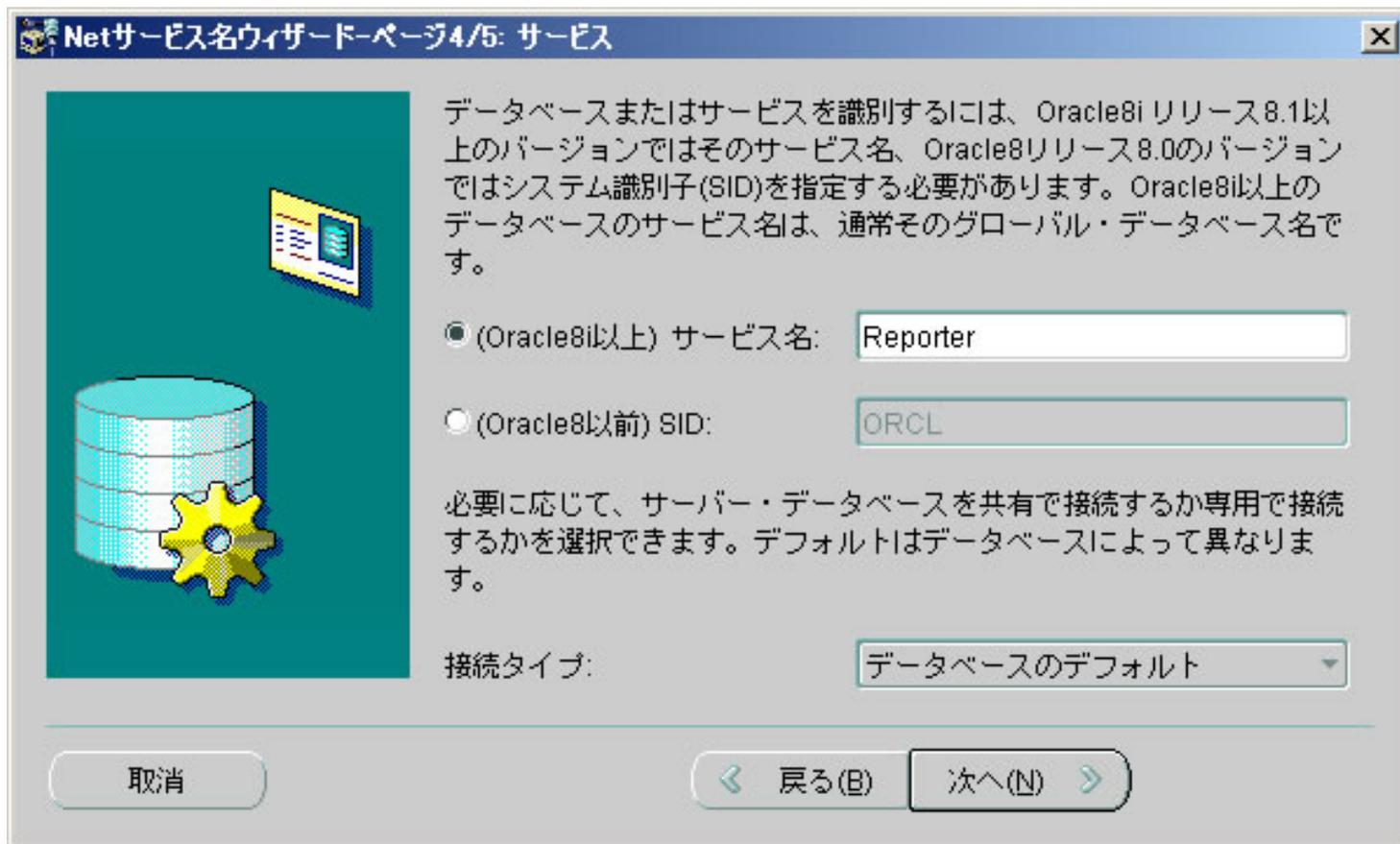
4. [ネット・サービス名] に **REPORTER** (Reporter データベース構成で指定したサービス名) と入力します。[次へ] をクリックします。[Net サービス名ウィザード - ページ2/5 : プロトコル] ウィンドウが表示されます。



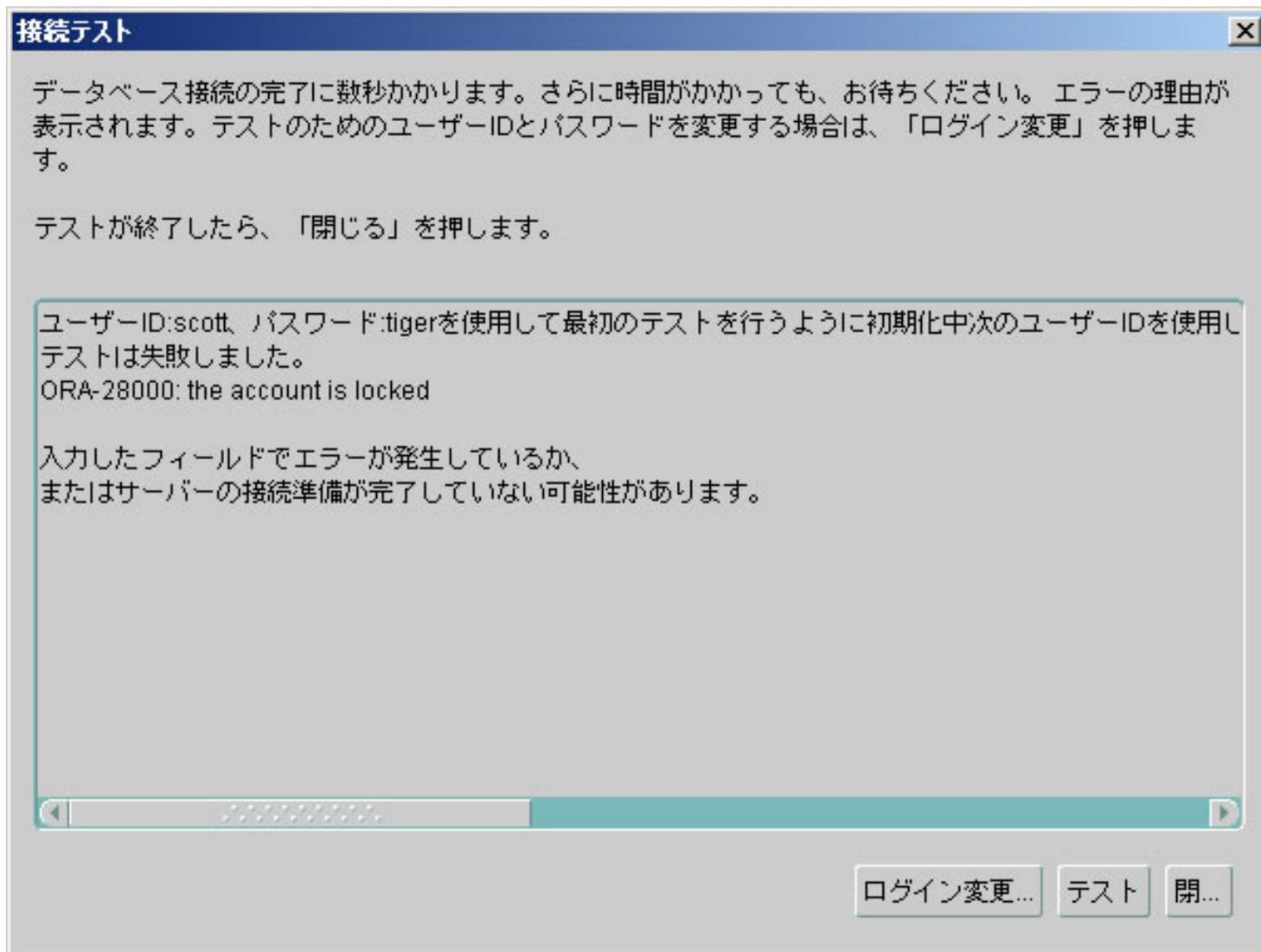
5. **【TCP/IP (インターネット・プロトコル)】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。**【Net サービス名ウィザード - ページ3/5 : プロトコル設定】** ウィンドウが表示されます。



6. 【ホスト名】を入力します。ホスト名は、Oracle サーバーがインストールされているコンピュータの完全修飾ドメイン名です。Oracle データベースの【ポート番号】を入力します。Oracle データベースのデフォルトポートは 1521 です。【次へ】をクリックします。【Net サービス名ウィザード - ページ 4/5 : サービス】ウィンドウが表示されます。

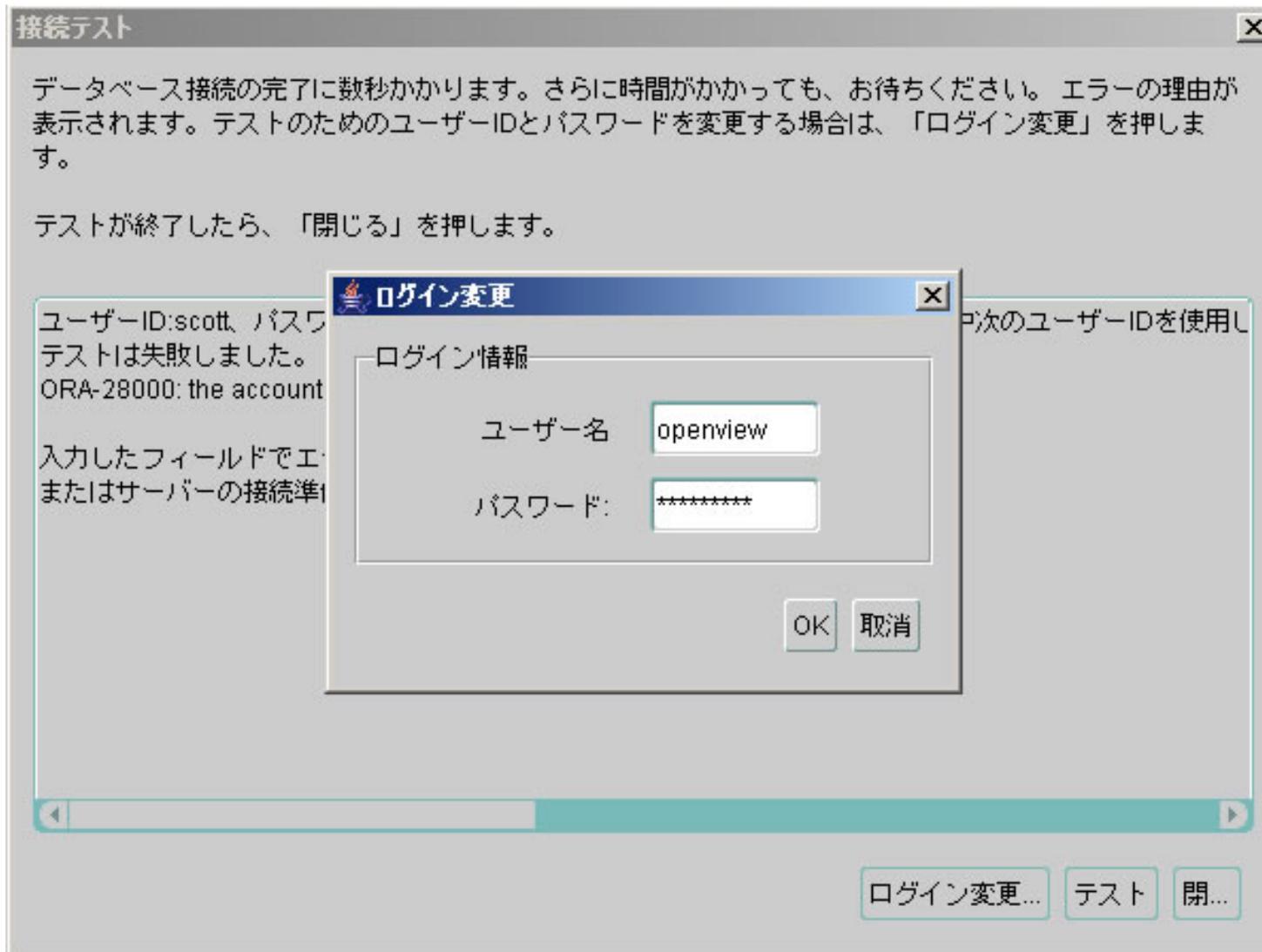


7. 【(Oracle8i以上) サービス名】に **REPORTER** (Reporter データベース構成で指定したサービス名) と入力します。【次へ】をクリックします。【接続テスト】ウィンドウが表示されます。



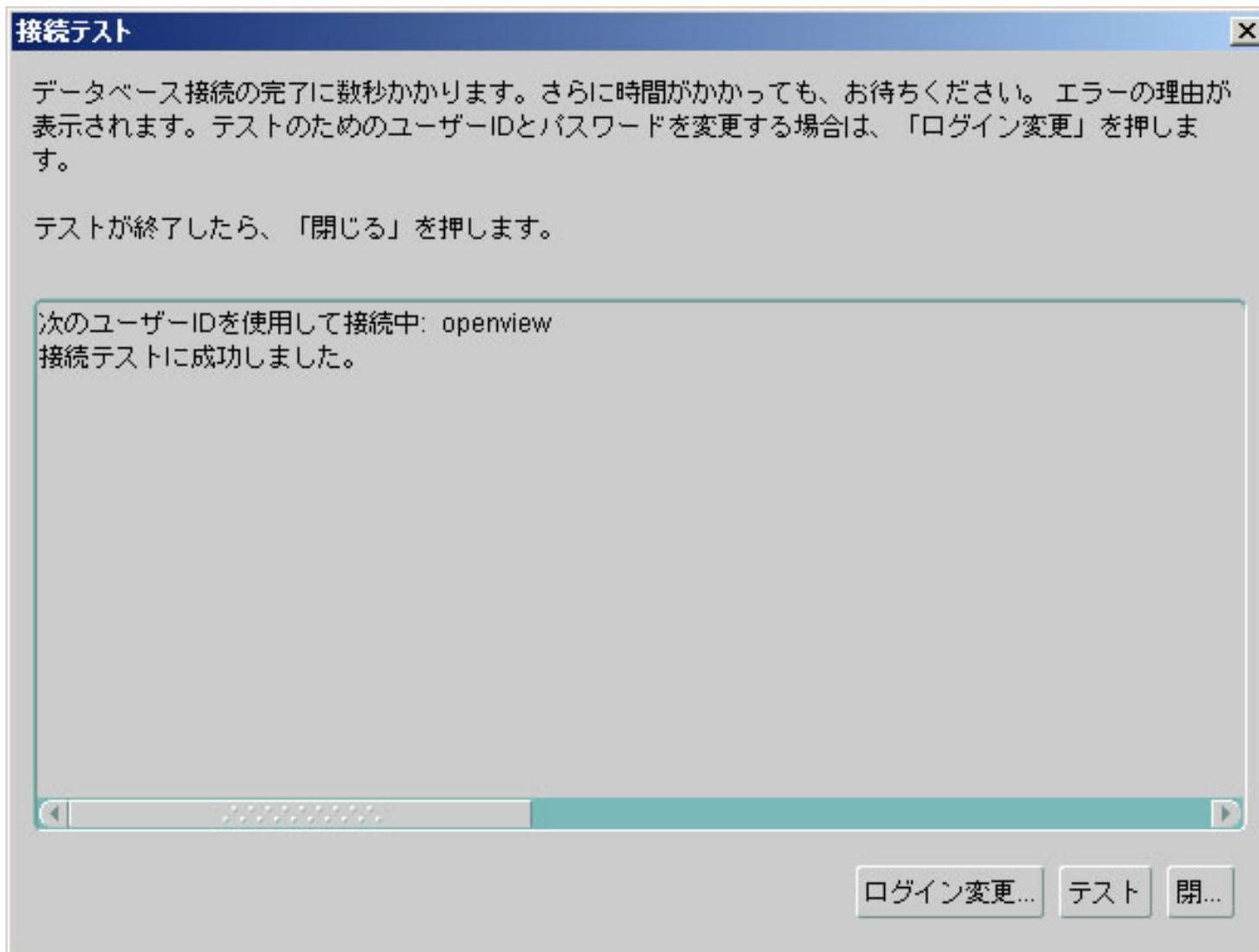
8. 【テスト】をクリックします。接続テストが開始し、【接続テスト】ウィンドウに接続テストの結果が表示されます。
 - 接続テストが失敗した場合、【ログイン変更】ボタンをクリックし、【ユーザー名】に *openview*、【パスワード】に *openview* と入力します（または、データベースサーバーのインストール時に指定したユーザー名とパスワードを入力します）。【OK】をクリックします。

メモ：接続テストが失敗するのは、ユーザー名とパスワードが Oracle のデフォルトの値に設定されており、Reporter データベースに割り当てられているユーザー名とパスワードに一致しないためです。



再度接続をテストできます。[テスト]をクリックします。

- 。接続テストに成功した場合、インストールの成功を示すメッセージが表示されます。これは、Oracle クライアントが Oracle サーバーに正しく接続していることを示します。



9. 【閉じる】をクリックします。【Oracle Net Manager】ウィンドウが表示されます。

ファイル(E) 編集 ツール ヘルプ(H)



Oracle Netの構成

- ローカル
 - プロファイル
 - サービス・ネーミング
 - REPORTER**
 - リスナー

サービスの識別

サービス名: 詳細...

SID:

接続タイプ:

Oracle8リリース8.0互換識別子を使用

アドレスの構成

アドレス 1

プロトコル:

ホスト名:

ポート番号:

詳細の表示

+ × < > 詳細...

ヘルプ



ホスト名を入力してください。

10. 構成の設定を保存するために、【ファイル】 【ネットワーク構成の保存】の順にクリックします。
11. 【ファイル】 【終了】の順に選択して、Oracle Net Manager ウィザードを終了します。

作業 3 ▶ Oracle Net 接続の確認

Oracle Net の構成後、Microsoft Windows システムから Reporter データベースに接続できることを、次の手順で確認します。

1. **SQL *Plus** ツールを起動するために、【スタート】 【プログラム】 【Oracle-OraClient10g_Home】 【Application Development】 【SQL Plus】の順に選択します。
2. 【ユーザー名】と【パスワード】に入力し、【ホスト文字列】には「REPORTER」、つまり前に指定した Net サービス名を指定します。
3. 次の SQL 文を入力します。select tablespace_name, status from user_tablespaces;
4. データベースに接続できない場合や、これらの表領域が表示されない場合は、UNIX ホスト システムの Oracle データベース管理者に問い合わせてください。
5. SQL *Plus 環境を終了するには、Exit と入力します。

作業 4 ▶ ODBC データ ソースの構成

1. 【スタート】 【設定】 【コントロール パネル】の順に選択して、Windows コントロール パネルを起動します。
2. 【管理ツール】をダブルクリックし、【データ ソース (ODBC)】をダブルクリックします。
3. 【ODBC データ ソース アドミニストレータ】ウィンドウで、【システム DSN】タブを選択します。画面にデータ ソースのリストが表示されます。
4. Reporter DSN が表示される場合は、【Reporter DSN】を選択し、【削除】をクリックします。
5. 【追加】を選択し、【Oracle driver】を選択し、【完了】をクリックします。【Oracle ODBC ドライバ構成】ウィンドウが表示されます。
6. 【Oracle ODBC ドライバ構成】ウィンドウで、【データ ソース名】として Reporter と入力します。

 **重要**：データ ソース名は、大文字と小文字を区別します。Reporter は、Internet Services の実行可能ファイルでの Reporter の参照と一致するように、「R」のみを大文字にします。

7. 【TNSサービス名】ドロップ ダウン リストから、構成した名前を選択します。
8. 【Oracle】タブを選択し、【プリフェッチ数】を 25 に設定して、【LOBを有効化】チェック ボックスを外します。
9. 接続をテストする場合は、【接続テスト】をクリックします。
10. データベースの設定で指定したユーザー名とパスワードを入力し、【OK】をクリックします。
11. このデータ ソースを【システム DSN】に追加する場合は、【Oracle ODBC ドライバ構成】ウィンドウで【OK】をクリックします。

作業 5 ▶ Reporter のデータベースの構成

1. 【スタート】 【プログラム】 【HP OpenView】 【Reporter】の順に選択して、Reporter を起動します。

2. エラーメッセージが表示されます。このメッセージは、テーブルまたはビューが存在しないことを示します。このエラーメッセージを無視し、**[OK]** をクリックします。
3. Reporter のメイン ウィンドウで、**[ファイル]** **[構成]** **[データベース]** の順に選択して、ここでもエラーメッセージを無視し、**[OK]** をクリックして続行します。
4. **[データベースの構成]** ダイアログ ボックスの **[Reporter データベース]** セグメントで、作業 6 の UNIX 設定で決定した、データベースのユーザー ID とパスワード (openview / openview) を入力します。

 **メモ** : データを Reporter のデフォルト データベースから Oracle に移行する場合は、**System**、**Manager** などのデータベース管理者アカウントを使用します。

5. **[OK]** をクリックします。Reporter を再起動して、新しいユーザー名とパスワードをデータベース接続に適用します。

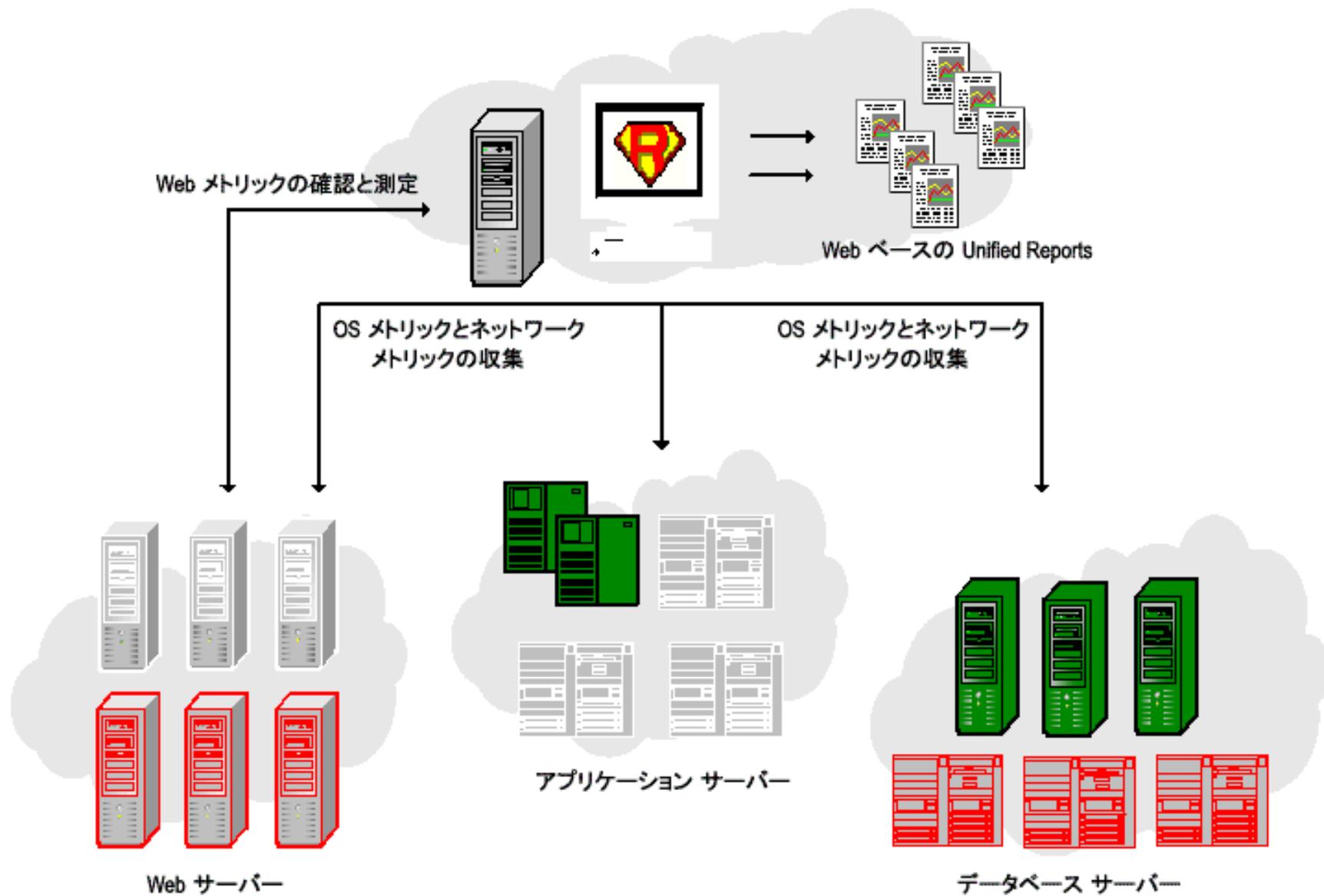
 **メモ** : デフォルト データベースからデータを移行しない場合は、Reporter の Oracle データベースに、必要なデータベース スキーマ オブジェクトを作成する必要があります。データベース スキーマ オブジェクトを作成するには、**C:¥Program Files¥hp OpenView¥bin¥newdb.exe** プログラムを実行します。デフォルト データベースから Oracle にデータを移行する場合は、移行ツールにより、必要なデータベース スキーマ オブジェクトが作成されます。

5 Unified Reports の設定

Unified Reports 概要

Unified Reports は、Reporter の Web ベースのレポート作成システムを一層充実させる追加コンポーネントです。Unified Reports と特定の OpenView 製品/エージェント (**OpenView Internet Services**、**Smart Plug-ins for Databases**、**Network Diagnosis Add-On Module**) を併用すると、取り込んだデータを独特の方法で統合できます。この新しい統合されたデータの全体像に基づいて、OpenView データ コレクタ/エージェントからアクセスできる Web サーバー、アプリケーション サーバー、データベース サーバーに関するレポートを作成できます。次の図に示す分散環境の領域がアクセスされます。

 **重要** : 予測できない結果を避けるために、Reporter の複数のコピーを実行しないでください。



Unified Reports の構成

前提条件： Unified Reports を使用してレポートを作成するには、次の HP OpenView 製品/コンポーネントをインストールして実行していることが条件です。

			インストール位置
--	--	--	----------

必要な製品/ コンポーネント	説明/機能	最低 バージョン	レポーター システム	Web サーバー システム	アプリケーション サーバー システム	データベース サーバー システム
OpenView Reporter	OpenView データ 収集/レポート作成	A.03.6	X	-	-	-
OpenView Internet Services	Web パフォーマンス監視用のプローブ配置。	A.04.00 または A.03.50	X	X	-	-
Database SPI SPI for Oracle または SPI for MS SQL Server	Oracle データベースまたは SQL Server データベースの監視。	A.03.51 または それ以降	-	-	-	X
Network Diagnostic Add-On Module (NDAOM) ¹	指定されたノード間のネットワークパスのパフォーマンス監視。 OpenView Operations (OVO) への統合を可能にする Problem Diagnosis 製品へのアドオン モジュール。	A.01.50	-	X	X	X
Problem Diagnosis	NDAOM の前提条件。	A.01.00	-	-	-	-
OpenView Operations パフォーマンス サブエージェント (Coda) または OpenView Performance Agent (MeasureWare Agent)	オペレーティングシステムのパフォーマンス メトリックの監視と、 Database SPI および NDAOM メトリックからのデータ収集とそのロギング。	すべて	-	X	X	X
OpenView Operations for UNIX	上の必要なコンポーネントの一部を構成するために使用。	バージョン 7 または 8	-	-	-	-

¹ Problem Diagnosis は、NDAOM をインストールする前にインストールする必要があります。



メモ： Unified Reports では、次のデータベースがサポートされています。

- SQL Server
- MSDE
- Oracle

Unified Reports では、Access データベースはサポートされていません。Unified Reports を使用するには、Access からサポートされているデータベースにデータを移行し、その後に Unified Reports を構成する必要があります。

Unified Reports の構成：手順

Unified Reporting を構成および使用するには、以下の作業を実行します。次の作業をクリックすると、対応する手順にジャンプできます。

- 作業 1 [OpenView Internet Services の監視対象サービスの構成](#)
- 作業 2 [Reporter への Unified Reports Package のインストール](#)
- 作業 3 [Web サーバー システムを Reporter が検出したシステムへ追加](#)
- 作業 4 [正常な構成の確認](#)
- 作業 5 [システムへのレポートの割り当て](#)
- 作業 6 [NDAOM 構成の設定](#)
- 作業 7 [DB-SPI 構成の検証](#)
- 作業 8 [Unified Reports のタイプと説明の確認](#)
 - [グループ レポート](#)
 - [システム レポート](#)
 - [レポートの説明](#)
- 作業 9 [Unified Reports のレポートの表示](#)

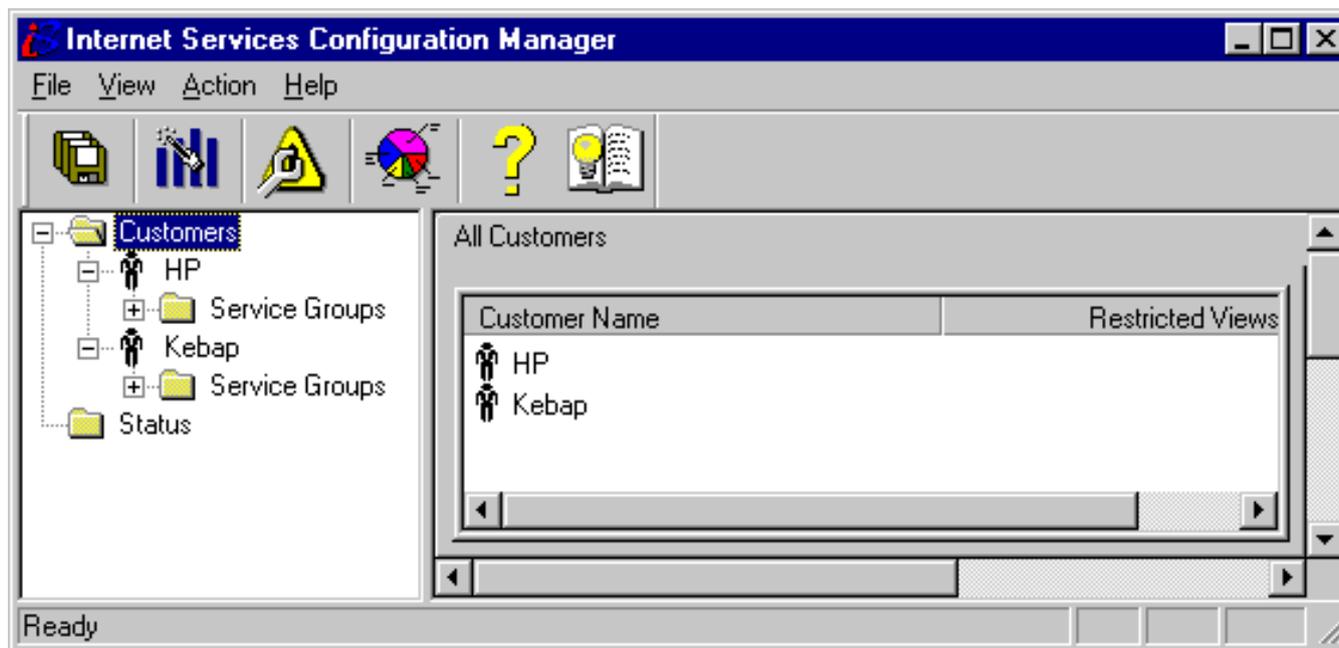
作業 1 OpenView Internet Services の監視対象サービスの構成

前提条件

- OpenView Reporter A.03 がインストールおよび構成されていること
- OpenView Internet Services がインストールおよび構成されていること

Unified Reports を OpenView Internet Services 用に設定するには、以下の作業を実行します。

1. OpenView Internet Services のメイン ウィンドウを開きます。【スタート】 【プログラム】 【HP OpenView】 【OpenView Internet Services】 【設定マネージャ】 の順に選択してください。
次の図に示すような [Internet Services 設定マネージャ] ウィンドウが表示されます。



2. 左ペインの、ユーザーが定義した顧客の下にある【サービス グループ】フォルダを強調表示します。次に、【ファイル】 【新規作成】 【サービス グループ】の順に選択します。または【サービス グループ】フォルダを右クリックし、【サービス グループの新規作成】を選択します。次の図に示すような【サービス グループの作成】ダイアログ ボックスが表示されます。



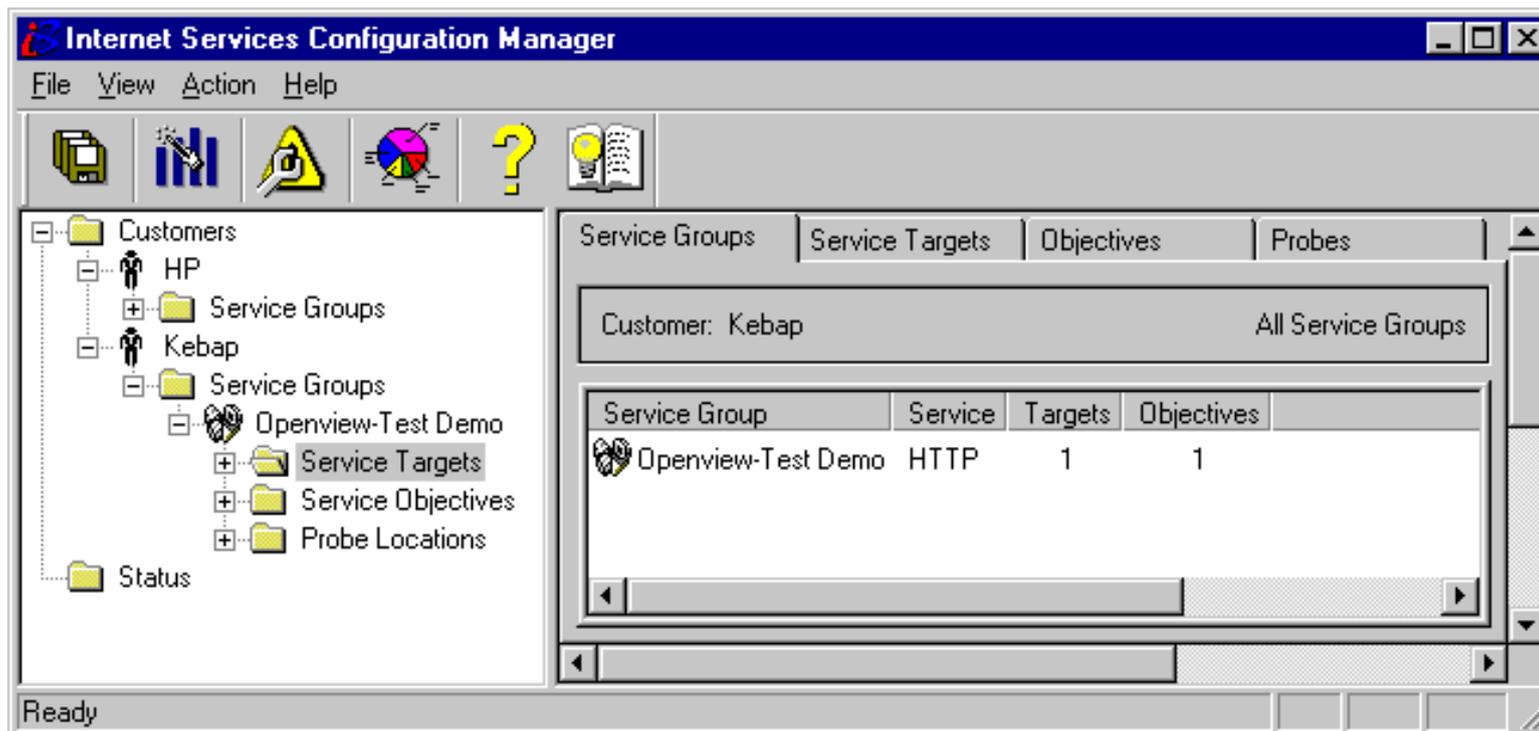
3. 【サービス グループの作成】ダイアログで、サービス グループの名前を【サービス グループ名】ボックスに入力します。
4. 【サービス グループの作成】ダイアログ ボックスで、【監視するサービス】ボックスの下矢印をクリックし、監視するサービスのタイプをドロップダウン リストから選択して【OK】をクリックします。

OVIS 設定マネージャ ウィンドウの左ペインで、先ほど作成したサービス グループの下に以下のフォルダが表示されます。

[監視対象サービス]
[サービス目標値]
[プローブ ロケーション]

また、OVIS 設定マネージャ ウィンドウの右ペインに、以下のタブが表示されます。

[サービス グループ]
[監視対象サービス]
[目標値]
[プローブ]



[監視対象サービス] フォルダの編集

1. [監視対象サービス] を右クリックし、[監視対象サービスの新規作成] を選択します。
2. フィールドの情報を入力します。
3. 終了後、[OK] をクリックします。

[サービス目標値] フォルダの編集 (オプション)

1. [サービス目標値] を右クリックし、[目標値の新規作成] を選択します。
2. フィールドの情報を入力します。
3. 終了後、[OK] をクリックします。

[プローブ ロケーション] フォルダの編集

1. [プローブ ロケーション] を右クリックし、[プローブ ロケーションの新規作成] を選択します。
2. フィールドの情報を入力します ([プローブ ロケーション] フィールドでは、デフォルトの設定を使用します)。
3. 終了後、[OK] をクリックします。

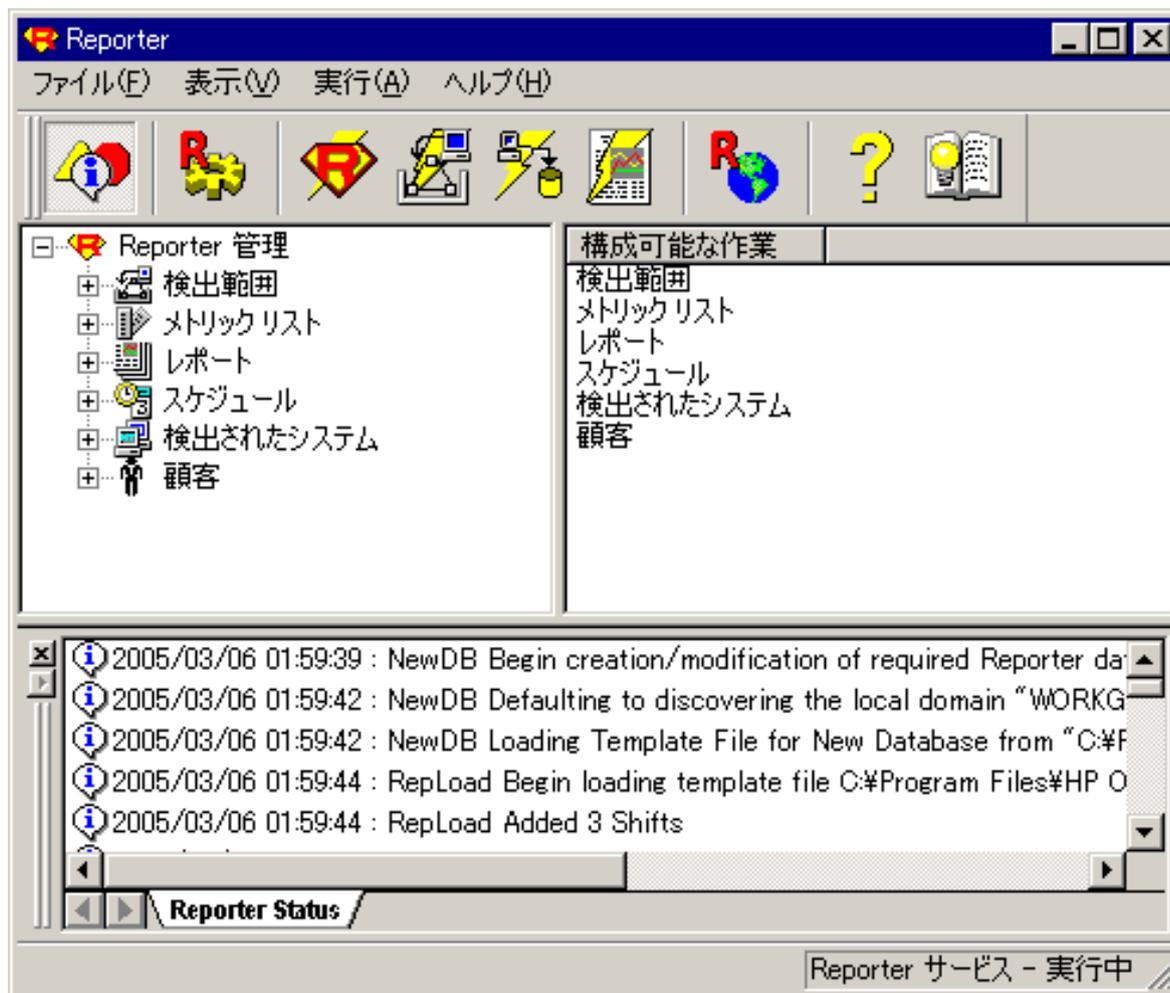
 **メモ** : 入力した情報は、[Internet Services 設定マネージャ] ウィンドウの右ペインにあるタブに表示されます。

OpenView Internet Services の詳細については、『OpenView Internet Services Active Monitoring Concepts Guide』を参照してください。

作業 2 ➡ Reporter への Unified Reports Package のインストール

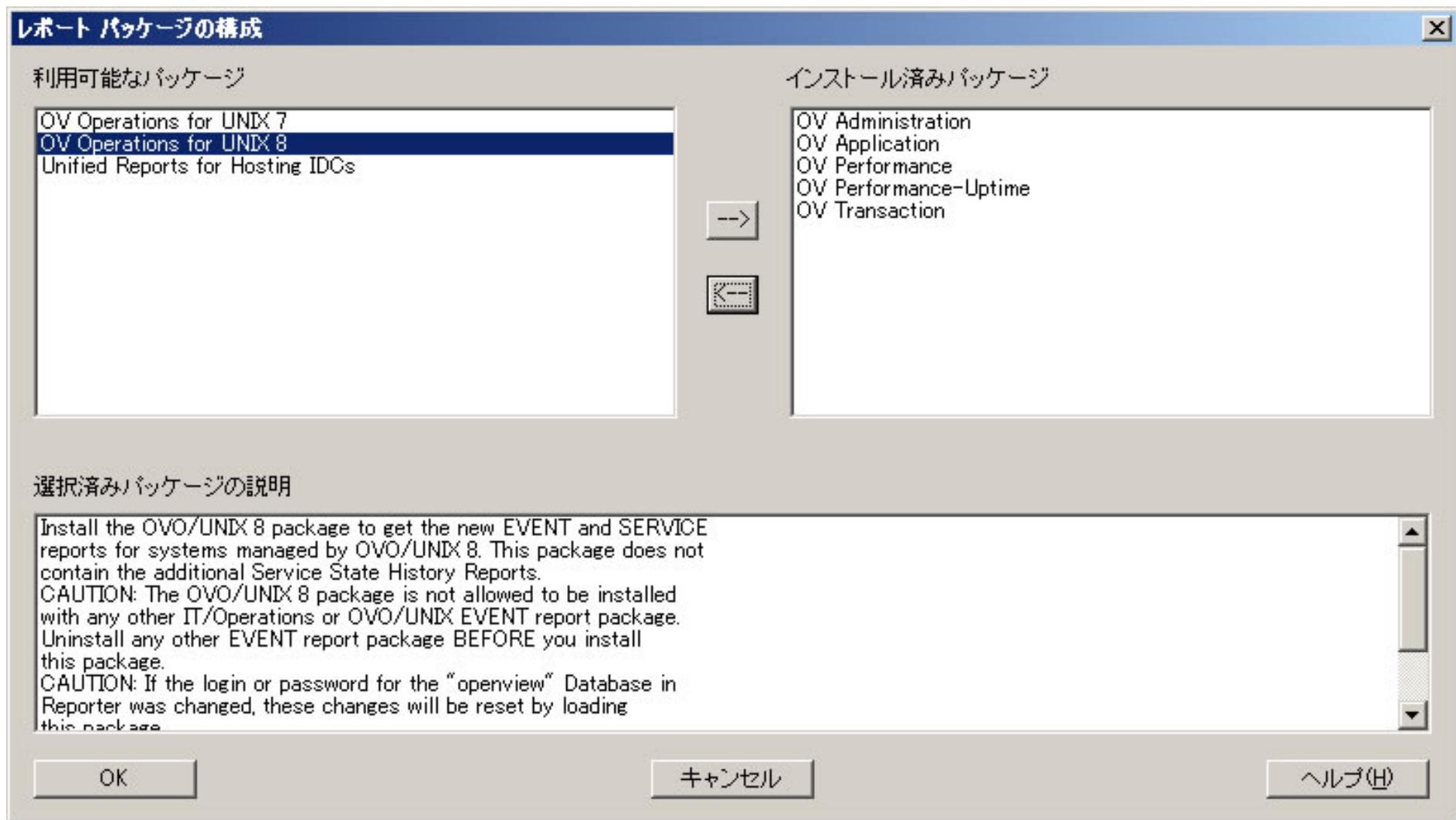
Reporter の構成

1. Reporter のメイン ウィンドウを開きます。[スタート] [プログラム] [HP OpenView] [Reporter] [Reporter] の順に選択してください (下図のような Reporter ウィンドウが表示されます)。



 メモ : Reporter の使用に関する詳しい情報が必要な場合は、『Reporter コンセプト ガイド』を参照してください。

2. 【ファイル】メニューで、【構成】 → 【レポート パッケージ】の順に選択します。次の図に示すような【レポート パッケージの構成】ウィンドウが表示されま



3. ウィンドウの左ペインの [利用可能なパッケージ] で、[Unified Reporter for Hosting IDCs] を選択し、右向きの矢印をクリックします。
4. [OK] をクリックします。

作業 3 ➡ Reporter (AppServer グループ、DBServer グループ、または WebServer グループ) への Web サーバー システムの追加

Web サービスを監視する作業では、監視する Web サイトに関する情報の入力を求められます。Reporter があるシステムにアクセスしてメトリックを収集することができるようになるには、まず、そのシステムを検出する必要があります。ここでは、必要に応じて、システムが検出されるように設定します。いったん検出したシステムは、適切な Unified Reports ノード グループに追加できます。

以下に示す手順では、Web サービスを行う物理システムを識別し、そのシステムを適切なノード グループに追加する必要があります。各物理システムは、Reporter

がそのシステムについてレポートを生成するため、検出されたシステムとして使用可能な状態にしておく必要があります。

システムの検出と適切なサーバー グループへの割り当て

Unified Reports パッケージを Reporter に追加した場合は、レポートだけでなく、それらのレポートを割り当てるシステム グループも追加しています。システム グループには、**AppServer**、**DBServer**、**WebServer** があります。以下に示す手順では、必要に応じて、それらのグループにアプリケーション サーバー、データベース サーバー、Web サーバーの各システムを追加します。ただしまず初めに、それらのシステムを Reporter が検出することが必要です。Reporter の検出にシステムが 1 つでも含まれていれば、手順 1 をスキップして手順 2 ~ 4 に進むことができます。手順 2 ~ 4 では検出されたシステム (1 つまたは複数) をシステム グループに追加します。

1. Reporter のメイン ウィンドウの [検出範囲] で、監視対象とする、Web サービスを提供するシステムを特定し、それを [Discovered Area] に追加します (Reporter システムのローカル ドメイン内およびローカル ドメイン外の両方でシステムを検出する手順については、Reporter のオンライン ヘルプを参照してください)。
2. Web サービス システムがすべて検出されたら、[検出されたシステム] で [ALL] グループを展開します (現在検出されているシステムが左ペインに表示され、グループが右ペインに表示されます)。
3. 左ペインで、システムを割り当てるグループをクリックします。
4. 左ペインにある [ALL] グループのシステムから、右ペインにあるグループに割り当てるシステムを選択し、それらのシステムを左から右にドラッグ アンド ドロップします (複数のシステムを選択するには、[Shift] キーまたは [Ctrl] キーを使用します)。
5. 左から右にドラッグ アンド ドロップを行うことにより、アプリケーション サーバー システムを **AppServer** グループに追加します。

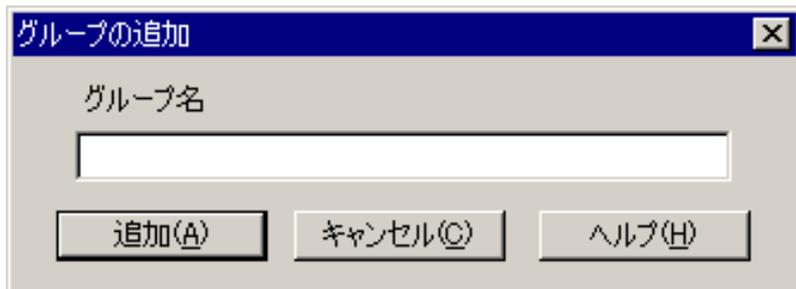
以上の手順をすべてのデータベース サーバーについて繰り返し、必要に応じてシステムを **DBServer** グループに追加します。

以上の手順をすべての Web サーバーについて繰り返し、必要に応じてシステムを **WebServer** グループに追加します。

OpenView Internet Services で作成したサービス グループの追加

次に、[作業 1 の手順 3](#) で入力した名前と一致するグループを追加します。

1. [検出されたシステム] を強調表示して右クリックします。
2. サブメニューから、[グループの追加] を選択します。[グループの追加] ダイアログ ボックスが表示されます (次の図を参照)。



3. グループの名前をボックスに入力します。入力したグループ名は、[グループ] ペインに表示されます。

4. [システムの検出と適切なサーバー グループへの割り当て](#)で作成したアプリケーション サーバー、データベース サーバー、Web サーバーのすべてのノードを、新しく作成したグループに追加します。

グループを削除するには

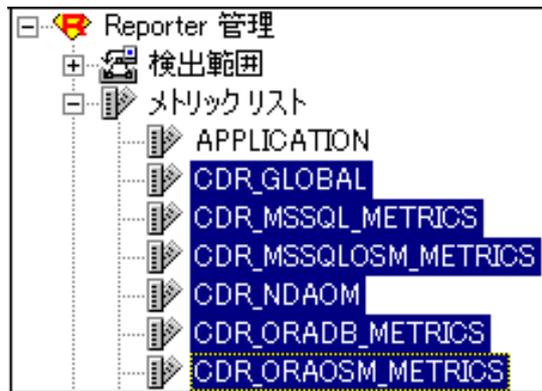
1. [検出されたシステム] をクリックします。
2. ウィンドウの右ペインで、削除するグループを選択します。
3. グループを右クリックして、[削除] を選択します。

作業 4 ➡ DB SPI の構成

インストールが正常に完了したことを確認するには、次の情報が表示できることを確認します。

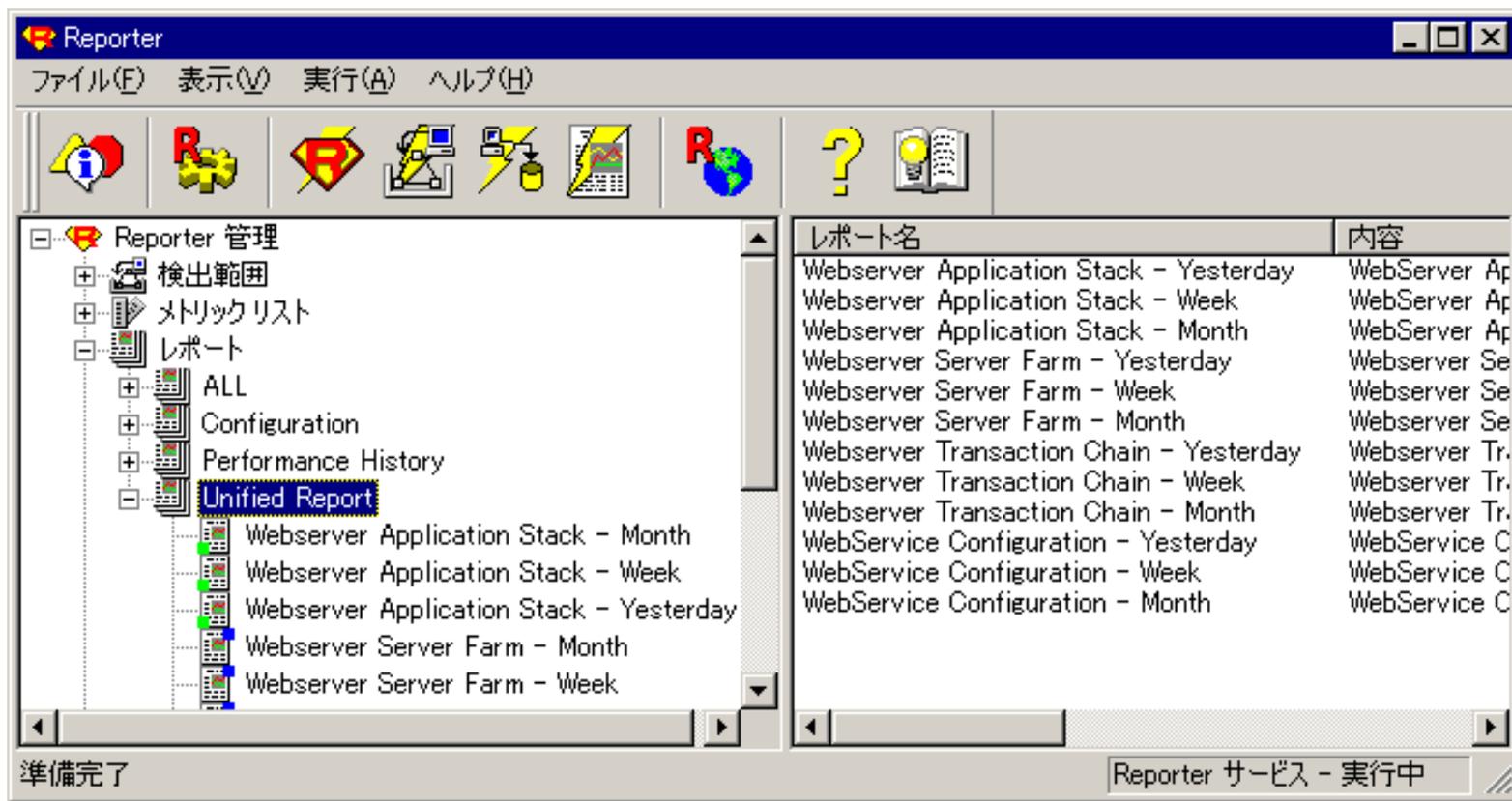
1. Reporter ウィンドウから、[メトリック リスト] を選択します。次の図に示すようなメトリック リストが表示されます。

CDR_GLOBAL
CDR_MSSQL_METRICS
CDR_MSSQLOSM
CDR_NDAOM
CDR_ORADB_METRICS
CDR_ORAOSM_METRICS



2. Reporter ウィンドウのツリー階層から、[レポート] [Unified Reports] の順に選択します。Reporter ウィンドウの右ペインに次のレポートが表示されま

Webserver Application Stack - Month, Week, Yesterday
Webserver Farm - Month, Week, Yesterday
Webserver Transaction Chain - Month, Week, Yesterday
Web Service Configuration - Month, Week, Yesterday



3. Reporter ウィンドウから、[検出されたシステム] を選択します。以下のノード グループが作成されており、これらは Reporter ウィンドウの右ペインに表示されます。

AppServer (すべてのアプリケーション サーバー用)

DBServer (すべてのデータベース サーバー用)

WebServer (すべての HTTP サーバー用)



4. **[AppServer]** を強調表示し、[AppServer] アイコンをクリックして展開します。右ペインの [システム] の下に、すべての追加済みの AppServer ノードが表示されます。
5. 新しいノードを追加するには、左ペインでノードを選択して右ペインにドラッグします。
6. **[DBServer]** を強調表示し、手順 5 を繰り返してデータベース サーバー ノードを追加します。
7. **[WebServer]** を強調表示し、手順 5 を繰り返して Web サーバー ノードを追加します。

 **メモ**： 正常なインストールの完了後、ノードグループを作成する前に、すべての識別された物理システムを [検出されたシステム] に追加する必要があります。

作業 5 ➡ システムグループまたは単一システムへのレポートの割り当て

グループレポートの割り当て

グループレポートは、監視対象のシステムグループに関する情報を提供します。次の手順に従って Unified Reports にグループレポートを追加します。

1. 新しく作成したノードに追加するグループレポートを選択します。ドラッグアンドドロップ機能を使用して、必要な Unified Reports のグループレポートを AppServer グループ、DBServer グループ、または WebServer グループに追加します。
2. [F5] キーを押して画面を更新します。

 **メモ**： グループレポートは、青いアイコンで識別されます。

システムレポートの割り当て

システムレポートは、監視対象として選択した単一のシステムに関する情報を提供します。監視対象の単一のシステムとして、Web サーバー、アプリケーションサーバー、またはデータベースサーバーを選択できます。次の手順に従って Unified Reports にシステムレポートを追加します。

1. 新しく作成した AppServer グループ、DBServer グループ、または WebServer グループに追加するシステムレポートを選択します。ドラッグアンドドロップ機能を使用して、Unified Reports のシステムレポートを、WebServer グループ内の単一システムに追加します。

- [F5] キーを押して画面を更新します。
- ノード グループのすべてのシステムに対して手順 1 ~ 2 を繰り返します。

 **メモ** : システム レポートは、緑のアイコンで識別されます。

レポート テンプレートの説明

次の表は、各レポート テンプレートに関する詳細情報の一覧です。

レポート テンプレート	タイムフレーム	グループ/システム テンプレート	説明
s_webappstack_d.rpt	昨日	システム	複数のグラフに示される、単一システムに関する上位メトリックの相関関係
s_webappstack_w.rpt	週	システム	
s_webappstack_m.rpt	過去 31 日	システム	
g_webtrans_d.rpt	昨日	グループ	1 つのトランザクション チェーンに関わるサーバー間でのメトリックの相関関係
g_webtrans_w.rpt	週	グループ	
g_webtrans_m.rpt	過去 31 日	グループ	
g_websvrfarm_d.rpt	昨日	グループ	同じ分類に属する複数のサーバー間での同一メトリックの相関関係
g_websvrfarm_w.rpt	週	グループ	
g_websvrfarm_m.rpt	過去 31 日	グループ	
g_config_d.rpt	昨日	グループ	アプリケーションを実行するハードウェア プラットフォームの使用状況 (使用中/使用可能) と、ハードウェア プラットフォーム別の CPU 使用率を表示します。
g_config_w.rpt	週	グループ	
g_config_m.rpt	過去 31 日	グループ	

作業 6 NDAOM の構成

ここでは、Unified Reports と統合するために実行する必要がある NDAOM コマンドについて説明します。NDAOM のインストール方法および構成方法についての詳細は、NDAOM に付属の『**HP OpenView Network Diagnosis Add-On Module Administrator's Guide**』を参照してください。

この手順を完了すると、管理対象ノードで Web サーバー、アプリケーション サーバー、データベース サーバー間のパスのパフォーマンスを監視できます。

データベースへの NDAOM 情報の構成

- OpenView Operation Server ディレクトリの `/opt/OV/ndaom/bin` から、次のコマンド全体を入力します。
`./ovnwlinkmon -add`

```
root=america
parent=Application_Server
interval=10m
source=parsley.london.mycom.com
target=sundev1.london.mycom.com
label=parsley_to_sundev1
```

 **メモ**：詳細は、以下の「[NDAOM フィールドの説明](#)」を参照してください。

パスを監視するには、次のコマンド ラインを入力してパスを配布します。

```
ovnwlinkmon -deploy -NoGUI
```

(パスは、配布されるまで監視されません。)

2. 監視対象の環境でソース サーバーとターゲット サーバー間で使用可能なすべてのネットワーク接続を構成します。

NDAOM フィールドの説明

フィールド	説明
<RootServiceID>	構成情報の挿入先のサービス オブジェクト ID。構成情報はサブサービスとして挿入されま す。 NoNewObject フィールドを選択すると、RootServiceID を使用してネットワーク接続が属 するサービス オブジェクトが特定されます。 このフィールドの情報は、削除の操作に使用されます。
<ParentServiceID>	すべての新しいサービス オブジェクトの親であるサービス オブジェクトのサービス ID。 NoNewObject フィールドを選択すると、このフィールドは監視対象のネットワーク接続に関 するメッセージを受け取ります。親サービス ID はルート サービス、またはルート サービスのサブ ツリーにあります。
<Label>	新しく作成されたサービス オブジェクト パラメータのサービス ラベル。このフィールドを指定しな いと、ラベルはサービス ID と同じになります。 NoNewObject を指定しない場合は、このパラメ ータを使用します。このフィールドへの入力オプションです。
<PollingInterval>	ネットワーク接続をポーリングする間隔を計測する単位を定義します。デフォルトの単位は分です。
<SourceNode>	パスの先頭の IP アドレスまたはノード名 (AppServer など)。
<TargetNode>	パスの末尾の IP アドレスまたはノード名 (DBServer など)。

作業 7 ➡ Database SPI の構成 (必要な場合)

Web サービス環境におけるデータベースのパフォーマンスや可用性を監視するために、現在インストールおよび構成されている HP OpenView Smart Plug-in for Databases (特に Oracle や Microsoft SQL Server) を使用できます。Database SPI の構成の一環として、各管理ノードのレポート作成とグラフ作成を有効にする必要があります。

Database SPI のインストール方法および構成方法についての詳細は、以下を参照してください。

HP OpenView Smart Plug-in for Databases User's Guide (A.04.x 以前)

または

HP OpenView Smart Plug-in for Databases Configuration Guide (for A.05 以降)

製品の古いリリースでも新しいリリースでも、インストール、構成、レポートについてのマニュアルは同じ内容です。インストールと構成 (レポートの有効化を含む) については第 2 章を、Database SPI レポートについての詳細は第 5 章を参照してください。このガイドでは、4 つのデータベース タイプを扱っていますが、Unified Reports については、Oracle や Microsoft SQL Server についての記述された部分のみ対応しています。

作業 8 ➡ Unified Reports の内容の確認

Unified Reports は、以下の 3 つのグループ レポート パッケージを提供します。各レポート パッケージには、メトリックやシステム可用性、その他を表示するさまざまなグラフが含まれます。

グループ レポート

[Server Farm]

[Transaction Chain]

[Configuration]

(1) [Server Farm] レポート パッケージ (グループ)

アプリケーション サーバーのグラフには、次の情報が表示されます。

[\[Operating System\]](#) - すべてのアプリケーション サーバーの CPU 使用率

[Network Response Time] - すべてのアプリケーション サーバーのネットワーク応答時間

[\[Availability\]](#) - システムの可用性

Web サーバーのグラフには、次の情報が表示されます。

[\[Operating System\]](#) - すべての Web サーバーの CPU 使用率

[\[Network Response Time\]](#) - ソース別のすべての Web サーバーに関するネットワーク応答時間

[Network Response Time for Group] - Web サーバーから他のサーバー (アプリケーション、データベース) へのネットワーク応答時間

[\[Application Performance\]](#) - Web サーバーの応答時間

[\[Availability\]](#) - Web サーバーの可用性

データベース サーバーのグラフには、次の情報が表示されます。

[\[Operating System\]](#) - すべてのデータベース サーバーの CPU 使用率

[Network Response Time by Source] - すべてのデータベース サーバーのネットワーク応答時間

[Network Response Time for Group] - データベース サーバーから他のサーバー (アプリケーション、Web サーバー) へのネットワーク応答時間

[\[Application Performance Graph\]](#) - データベース サーバーのコミット レート

[\[Availability\]](#) - データベース サーバーの可用性

(2) [Transaction Chain] レポート パッケージ

[Transaction Chain] グループは、次のグラフで構成されます。

[\[Operating System CPU Utilization\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

トランザクション サーバー (データベース サーバー、アプリケーション サーバー、Web サーバー) の CPU 使用率。 システムのダウン タイムがグラフに表示されます。

[\[Network Response Time \(ms\) by Source\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

データベース サーバーおよび Web サーバーのトランザクション サーバーのネットワーク時間

[\[Application Performance\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

Web サーバーの応答時間

Web サーバーのスループット (KB)

データベース トランザクションのコミット レート

ダウンタイム

[\[Availability\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

データベース サーバーと Web サーバーの可用性およびトランザクションのシステム全体の可用性を示すパーセント

(3) [Configuration] レポート パッケージ

[Configuration] グループは、次のグラフで構成されます。

[\[Operating System\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

実行しているオペレーティング システムの数

[\[Server Type\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

サーバー タイプの数

[\[CPU Utilization per Operating System\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

オペレーティング システム別の CPU 使用率

Unified reports には、以下の単一システム レポート パッケージも含まれます。 グループ パッケージと同様に、このレポート パッケージにも、メトリックやシステム可用性、その他を表示するさまざまなグラフが含まれます。

システム レポート

[Application Stack]

[Application Stack] レポート パッケージ

[Application Stack] グループは、次のグラフで構成されます。

[\[Overview for Systems\]](#) グラフには、次の平均値が表示されます。

キャッシュ ヒット率
コミット レート
CPU 使用率

[\[Database for system\]](#) グラフには、次の平均値が表示されます。

コミット レート
キャッシュ ヒット率
ユーザー数

[\[Web Server Performance for System\]](#) グラフには、次の平均値が表示されます。

スループット (KB)
サーバー時間
転送時間
DNS 時間
接続時間

[\[Operating System for Systems\]](#) グラフには、次の平均値が表示されます。

実行キュー
CPU 使用率
メモリ使用率
正常な平均ネット パケット レート
正常な平均ディスク物理 IO レート

[\[Availability\]](#) グラフには、次の情報が表示されます。

データベース
Web サーバー
システム

Unified Reports のテーブル名とレポートの説明

次の表は、Unified Reports のレポートを構成するコンポーネント、フィールド、説明の一覧です。

レポート	使用ビュー	説明
g_websvrfarm_d.rpt g_websvrfarm_w.rpt g_websvrfarm_m.rpt	VUR_GLOBAL、VUR_GROUPS、 VUR_DOWNTIME、 VUR_NDAOM_AVG_UPTIME、 VUR_APPL_WEBFARM、 VUR_AVAIL_WEBFARM	同じタイプの複数のサーバーに関する同じメトリック（複数の Web サーバー間の CPU 使用率など）の相関関係を示し、使用率の低いサーバーまたは過負荷状態のサーバーを決定します。
g_webtrans_d.rpt g_webtrans_w.rpt g_webtrans_m.rpt	VUR_GLOBAL、VUR_GROUPS、 VUR_NDAOM_AVG_UPTIME、 VUR_APPL_WEBFARM、 VUR_AVAIL_WEBFARM	1 つのトランザクション チェーンに関わるサーバー間のメトリックの相関関係を示し、潜在的なボトルネックを表示して、トランザクションのブレイクダウンに関する追加情報を提供します。
g_webappstack_d.rpt g_webappstack_w.rpt g_webappstack_m.rpt	VUR_GROUPS、 VUR_APPLSTACK_WEBFARM、 VUR_GLOBAL、 VUR_AVAIL_WEBFARM、 VUR_DOWNTIME	複数のグラフ（システムの OS メトリックを示すグラフやデータベース パフォーマンス メトリックを示すグラフなど）に表された、単一のシステムに関する上位メトリックの相関関係を示します。

g_config_d.rpt g_config_w.rpt g_config_m.rpt	VUR_SYSCONFIG	アプリケーションを実行するハードウェアプラットフォームの使用状況(使用中/使用可能)と、ハードウェアプラットフォーム別のCPU使用率を表示します。
--	---------------	---

Unified Reports のビュー設計

次の表は、Unified Reports のビューを構成するコンポーネント、フィールド、説明の一覧です。

テーブル名	使用するレポート	使用するビュー	参照されるテーブル/ビュー	フィールド
VUR_APPL_WEBFARM	Websvr farm、 Webtrans		VUR_DBMetrics、 VUR_VP_IS	システム名、日付/時刻、サービス名、応答時間、VPIS 可用性、VPIS グループ数、IS 転送スループット、プローブ名、コミットレート、バッファ キャッシュ ヒット率、ユーザー ログオン数
VUR_APPLSTACK_WEBFARM	Webappstack		VUR_DBMetrics、 VUR_VP_IS_DETAIL、 VUR_GLOBAL	システム名、日付/時刻、サービス名、応答時間、VPIS 可用性、VPIS グループ数、IS 転送スループット、プローブ名、DNS 時間、接続時間、サーバー時間、転送時間、コミットレート、バッファ キャッシュ ヒット率、ユーザー ログオン数、CPU 使用率

VUR_AVAIL_WEBFARM	Websvrfarm、 Webtrans、 Webappstack		VUR_GROUPS、 VUR_VP_IS、 DOWNTIME、 VUR_DB_UPTIME	グループ名、サブ グループ、システ ム名、タイムバ ケット、システム ダウンタイム、シ ステムシフト時 間、DbUpMin、サ ービス名、 ISDBServer、 OVIS (VPIS) 可用 性、OVIS (VPIS) グループ数
VUR_DB_UPTIME		VUR_AVAIL_WEBFARM	CDR_ORAOSM_METRICS、 CDR_MSSQL_METRICS	タイムバケット、 DbUpMin、システ ム名
VUR_DBMetrics		VUR_APPLSTACK _WEBFARM、 VUR_APPLWEBFARM	CDR_ORAOSM_METRICS、 CDR_MSSQL_METRICS	システム名、日付/ 時刻、コミットレ ート、バッファ キャッシュヒット 率、ユーザーログ オン数
VUR_DOWNTIME	Websvrfarm、 Webappstack	V_AVAIL_WEBFARM	DOWNTIME	システム名、日付/ 時刻、シフト名、 シフト時間、ダウ ンタイム
VUR_GLOBAL	Websvrfarm、 Webtrans、 Webappstack	VUR_APPLSTACK _WEBFARM	CDR_GLOBAL	システム名、タイ ムバケット、実行 キュー、CPU 総使 用率、システム CPU 使用率、ユー ザー CPU 使用 率、ファイルシス テムスペース使用 率ピーク、ディス ク物理 I/O レー ト、メモリ使用 率、ネットパケッ トレート、スワッ プスペース使用 率、空
VUR_GROUPS	Websvrfarm、 Webtrans、 Webappstack	VUR_AVAIL_WEBFARM	SYSTEMS_GROUPS、 SUBGROUPS、 IOPS_SERVICES、 IOPS_SERVICE-TARGETS	グループ名、サブ グループ、システ ム名、システム ID

VUR_NDAOM_AVG_UPTIME	Websvrfarm、 Webtrans		CDR_NDAOM、 GROUPS	システム名、タイムバケット、ndaom ターゲット、NDAOM パス ID、NDAOM ホップ数、NDAOM 平均、MM システム名、Num、Dest グループ
VUR_SYSCONFIG	Config		SYSTEMS	システム ID、システム名、OS 名、OS リリース、OS バージョン、マシンタイプ、除外
VUR_VP_IS		VUR_AVAIL_WEBFARM、 VUR_APPL_WEBFARM	IOPS_PROBE_DATA、 IOPS_SERVICES、 IOPS_SERVICE_TARGETS	システム名、タイムバケット、サービス名、応答時間の可用性、グループ数、転送スループット、ホスト、プローブ名、システム ID
VUR_VP_IS_DETAIL		VUR_APPLSTACK _WEBFARM	IOPS_PROBE_DATA、 IOPS_SERVICES、 IOPS_SERVICE_TARGETS	システム名、タイムバケット、サービス名、応答時間の可用性、グループ数、転送スループット、プローブ名、DNS 時間、接続時間、サーバー時間、転送時間

作業 9 Unified Reports の表示

Reporter は 24 時間ごとに新しいデータで新しいレポートを作成するので、レポートは翌日には参照可能となります。レポートは、次の手順で表示できます。Unified Reports も、それ以外のすべてのレポートとともに、Reporter のメイン Web ページに表示されます。

グループ レポートの表示

1. 表示するレポートのグループを選択します。

2. [実行] メニューで【レポートの表示】を選択します。
または
【レポートの表示】 ツールバー ボタンをクリックします。



 メモ：グループ レポートの表示とシステム レポートの表示を切り替えるには、[F5] キーを押して画面を更新し、対応するレポート グループにアクセスします。

システム レポートの表示

1. レポートを表示するシステムを選択します。
2. [実行] メニューで【レポートの表示】を選択します。
または
【レポートの表示】 ツールバー ボタンをクリックします。



別々のシステムでの Reporter と OVOW 7.5 の実行

Reporter とリモートの OVOW 7.5 を統合して管理ノード情報を収集し、OVOW レポートを作成することができます。

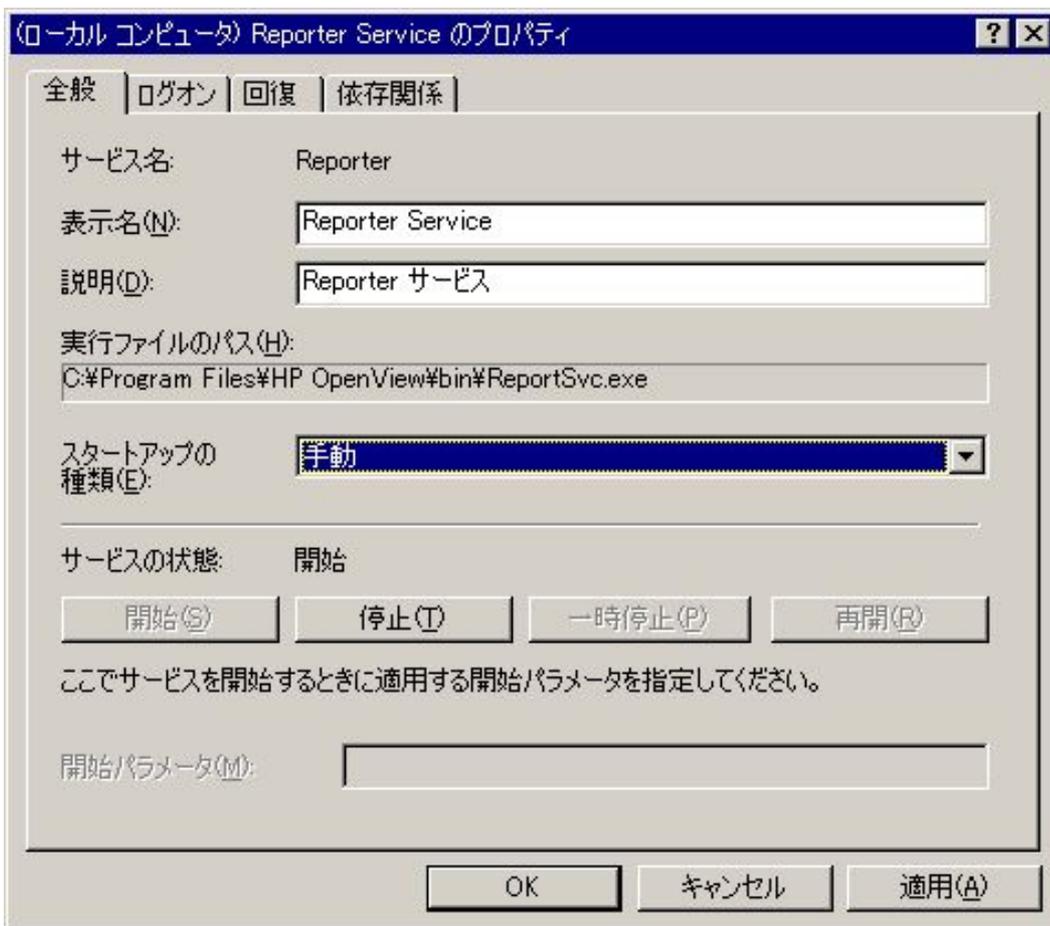


メモ : OVOW 7.2 以前のバージョンでは、この構成はサポートされていません。

OVOW と Reporter システムを構成するには、次の各セクションの手順を実行してください。

OVOW 7.5 システムの構成

1. [スタート] メニューから、[設定] [コントロール パネル] [管理ツール] [サービス] の順に選択して、Reporter サービスを選択します。
2. [スタートアップの種類] ドロップダウン リスト ボックスで、[手動] を選択します。



3. Reporter サービスを停止するには、[停止] をクリックします。OVOW システムのユーザー グループにユーザーを追加する方法については、「OVOW システムのユーザー グループへのユーザーの追加」を参照してください。

Reporter システムの構成

1. OVOW の CD から OVOW パッケージをインストールします。
2. [スタート] メニューから、[設定] [コントロール パネル] [管理ツール] [データ ソース (ODBC)] を選択します。
3. [ODBC データ ソース アドミニストレータ] ダイアログ ボックスの [追加] をクリックして、OVOW データベースを示す [Openview DSN] を追加します。



4. Reporter の画面で【ファイル】 【構成】 【データベース】の順に選択し、手順 2 で追加した openview DSN を使用して新しいデータベース OVMSDB を作成します。



5. Reporter の画面で【ファイル】 【構成】 【オプション】の順に選択し、[OVOW 設定] のパラメータを指定します。
6. [OVOW 設定] の【OVOW 管理サーバー】に OVOW のシステム名、【ドメイン ¥ユーザー名】にユーザー名（ドメイン名を含めるかどうかは任意）、【パスワード】にパスワードを入力します。

Reporter オプションの構成

機能選択

- ARM トランザクション追跡レポート
- OVPA ARM トランザクション追跡
- 非アクティブ システムの削除 日後
- システム グループ "NEW" を新システムに作成
- OVO ノード グループ別にシステム グループを作成

OVOW 設定

OVOW 管理サーバー

ドメイン ユーザー名

パスワード

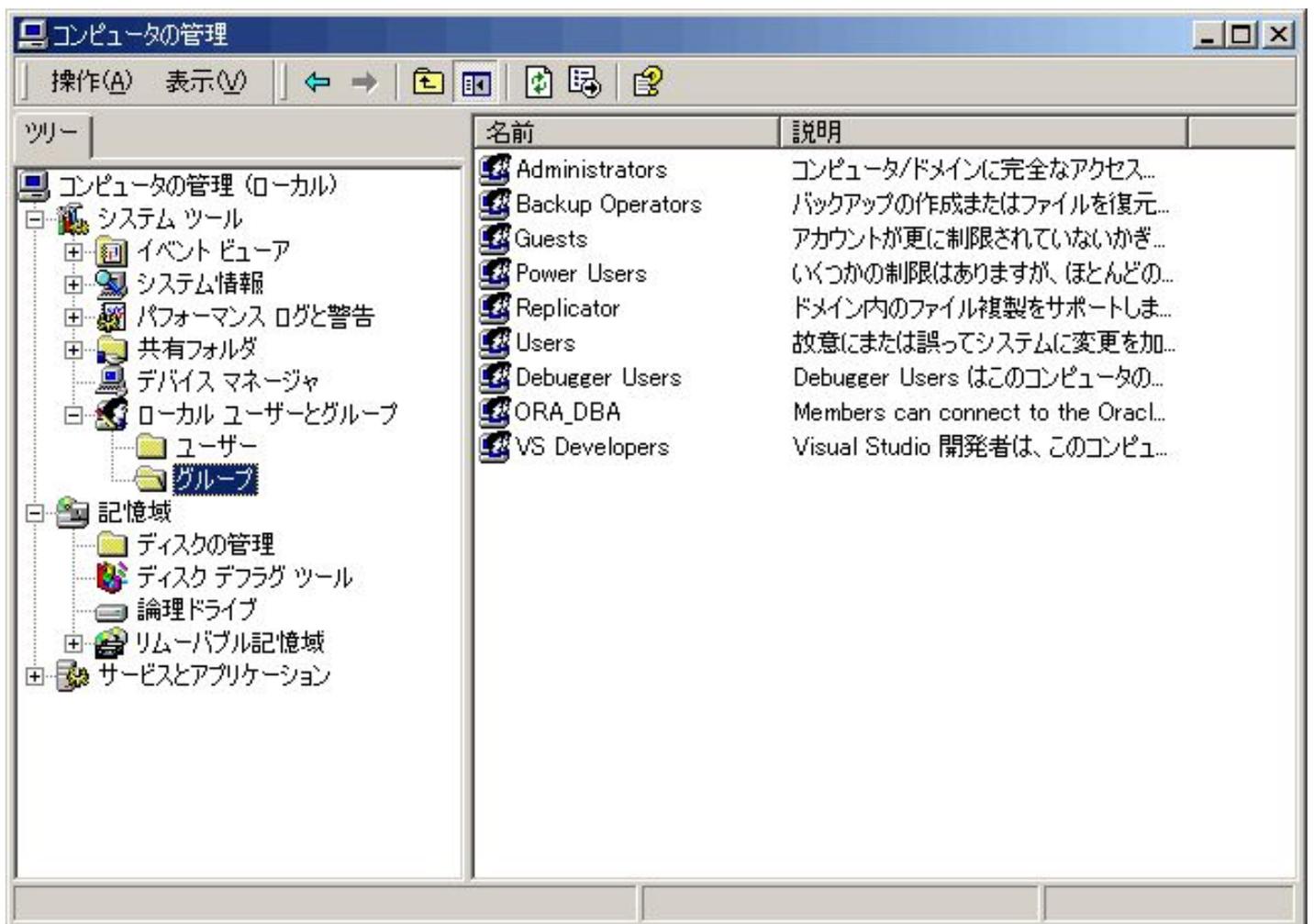
トレース レベル (オフ) Hang_Timer 分

7. Reporter 画面の左ペイン の【スケジュール】 を右クリックし、【スケジュールの追加】 を選択して、Reporter のスケジューラに「Discovery_Neutron」を追加します。

⚠ 重要 : [OVOW 設定] パネルに入力するユーザー名は、OVOW 管理サーバー システムの Administrators、HP-OVE-ADMINS、または HP-OVE-OPERATORS ユーザー グループに含まれている必要があります。

OVOW システムのユーザー グループへのユーザーの追加

1. [スタート] メニューから、【設定】 【コントロール パネル】 【管理ツール】 【コンピュータの管理】 の順に選択します。
2. 左ペインから【システム ツール】 【ローカル ユーザーとグループ】 【グループ】 の順に選択します。



3. 右ペインでユーザーを追加するグループをクリックし、ユーザー追加の手順に従って操作します。

全般



Administrators

説明(E):

コンピュータ/ドメインに完全なアクセス権があります。

所属するメンバ(M):



Administrator

追加(D)...

削除(R)

OK

キャンセル

適用(A)

7 Microsoft Cluster Server (MSCS) へのインストール

前提条件

MSCS に Reporter をインストールするときの前提条件を次に示します。

Windows Server 2003 Enterprise Edition または Datacenter Edition を実行している。
Reporter をインストールする前に Microsoft Cluster Server がインストールされ、構成済みである。
クラスタ サーバーの作成については、URL http://www.microsoft.com/resources/documentation/WindowsServ/2003/datacenter/proddocs/en-us/cluad_pr_50.asp を参照してください。
クラスタ ノードに SQL Server 2000 Enterprise Edition の Service Pack 3a 以降がインストールされ、構成済みである。
Reporter をインストールする前に Reporter ODBC DSN が構成済みである。
物理ディスク、IP、ネットワーク名 (仮想サーバー) MSCS クラスタ リソース グループを実行している。
ログイン中のユーザーに、クラスタへのアクセスまたは変更を実行できる管理権限がある。

Reporter のインストールと設定

MSCS に Reporter をインストールするには、次の各セクションの手順を実行します。

SQL Server 2000 SP 3a のインストール

Microsoft クラスタへの SQL Server のインストールと Microsoft クラスタでの SQL Server の管理については、URL http://www.microsoft.com/japan/msdn/library/ja/adminsql/ad_clustering_2icn.asp を参照してください。

Reporter データベースの作成

Reporter データベースを作成するには、『インストールおよび特別構成ガイド』の「MS SQL Server ソフトウェアのインストールと構成」の作業 3「[SQL Server 2000 での Reporter データベースの構成](#)」の手順を実行します。

 **メモ**：高可用性を実現するために、データ ファイルとトランザクション ログを共有ディスクに格納してください。

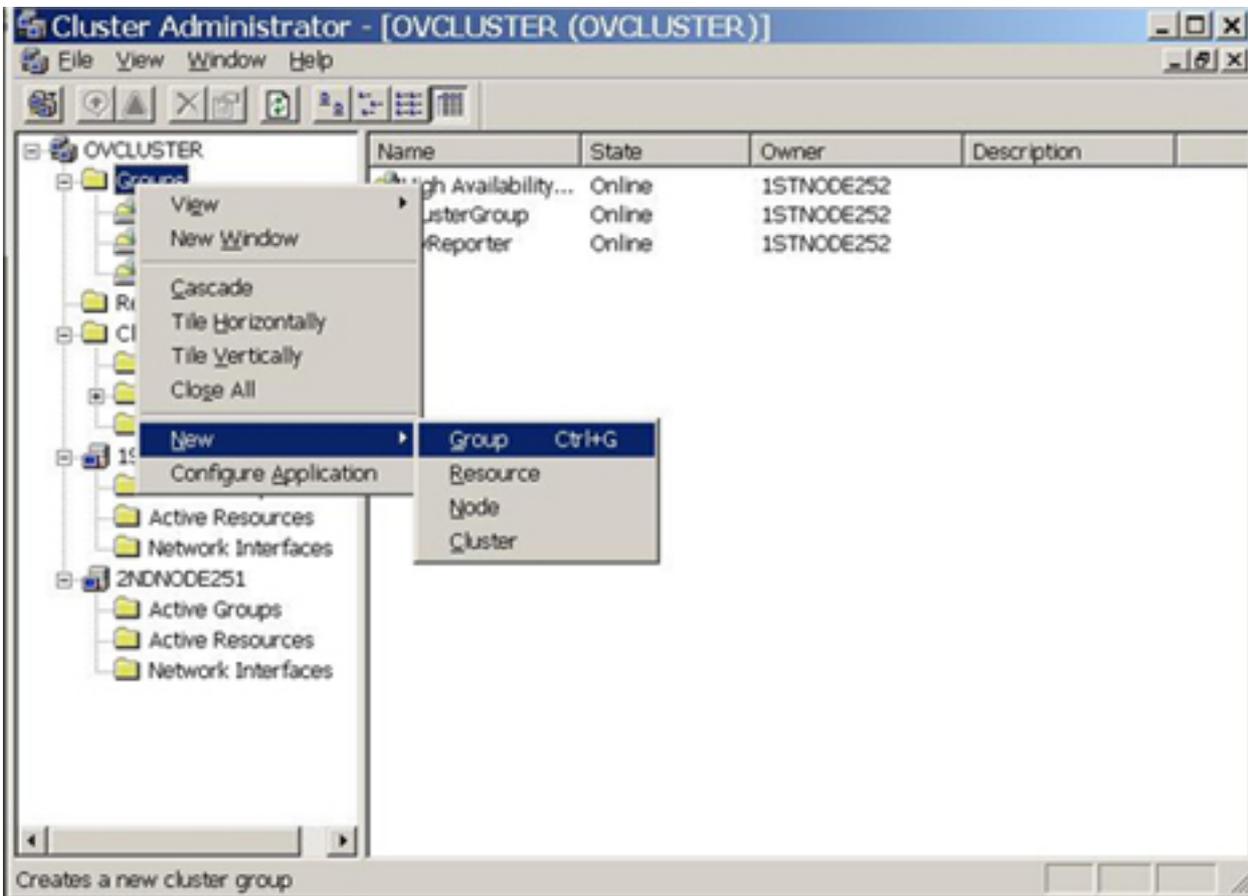
データベースへの ODBC 接続の設定

Reporter データベースへの ODBC 接続を設定するには、『インストールおよび特別構成ガイド』の「SQL クライアント ソフトウェアのインストールと構成」の作業 2「[ODBC 接続の設定](#)」の手順を実行します。

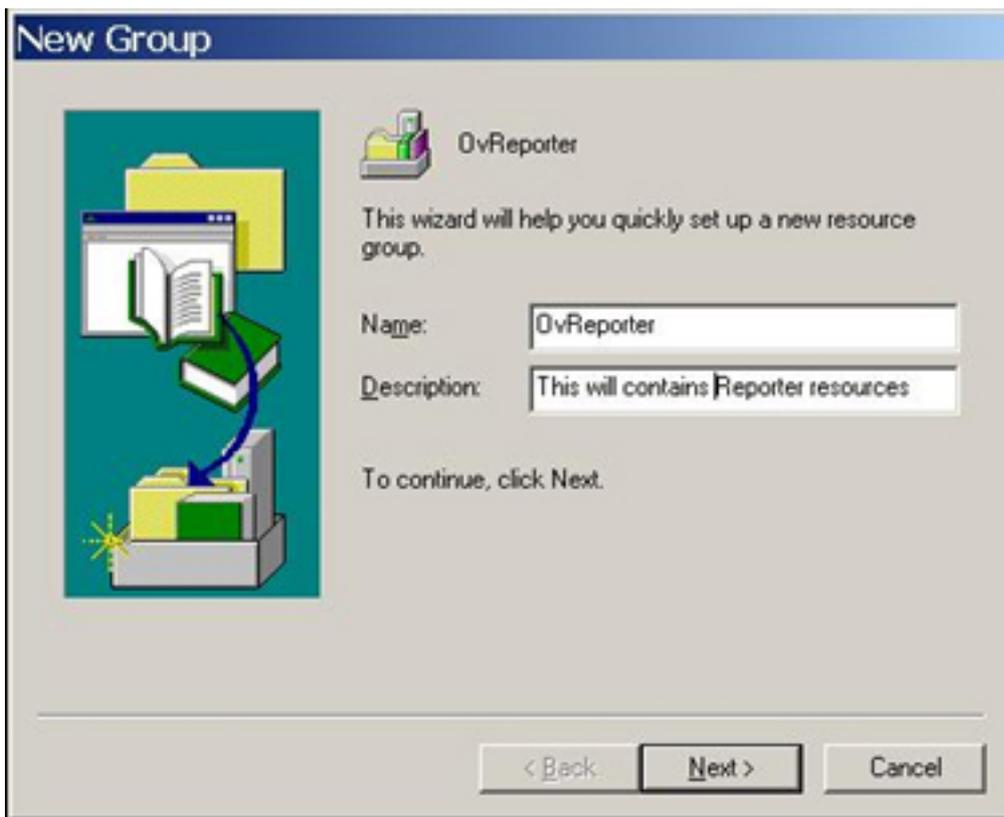
 **メモ** : Reporter をインストールする各ノードに Reporter ODBC DSN を作成し、構成してください。

グループ、IP アドレス、またはネットワーク名の追加

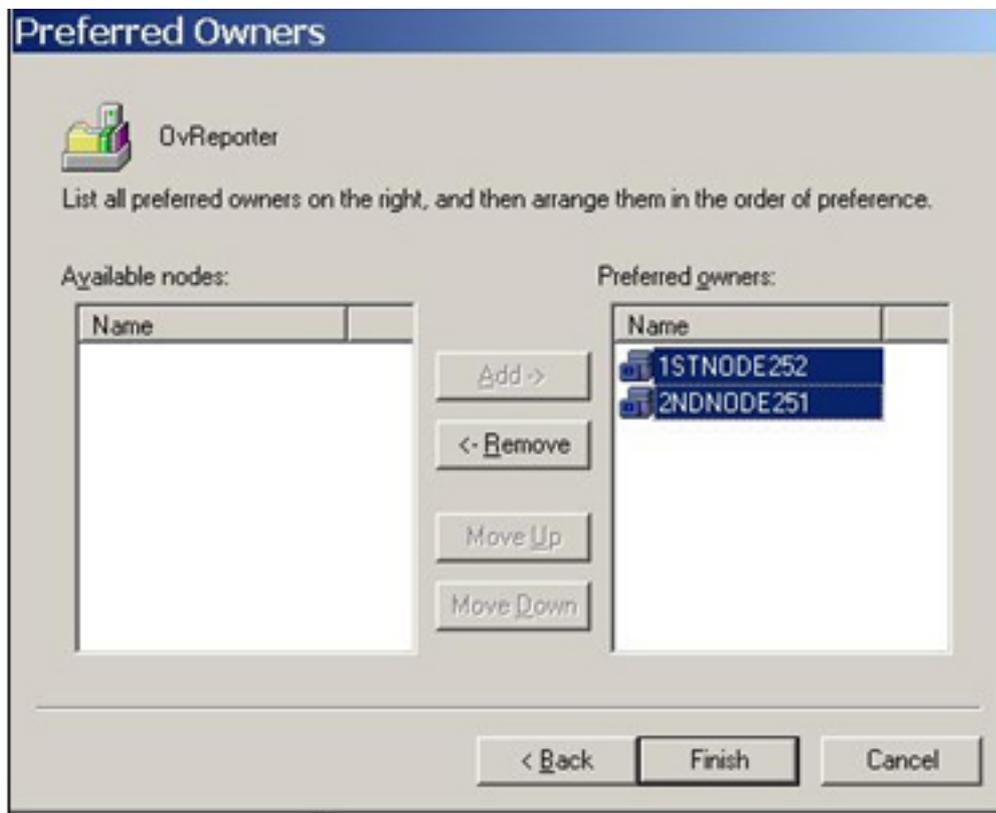
1. リソース グループ、または IP アドレスおよび仮想サーバー (ネットワーク名) を作成するには、[スタート] メニューから、【プログラム】 【管理ツール】 【クラスタ アドミニストレータ】 (Microsoft クラスタ アドミニストレータ ツール) の順に選択します。
2. 左ペインの【グループ】を右クリックし、【新規作成】をポイントし、【グループ】をクリックします。



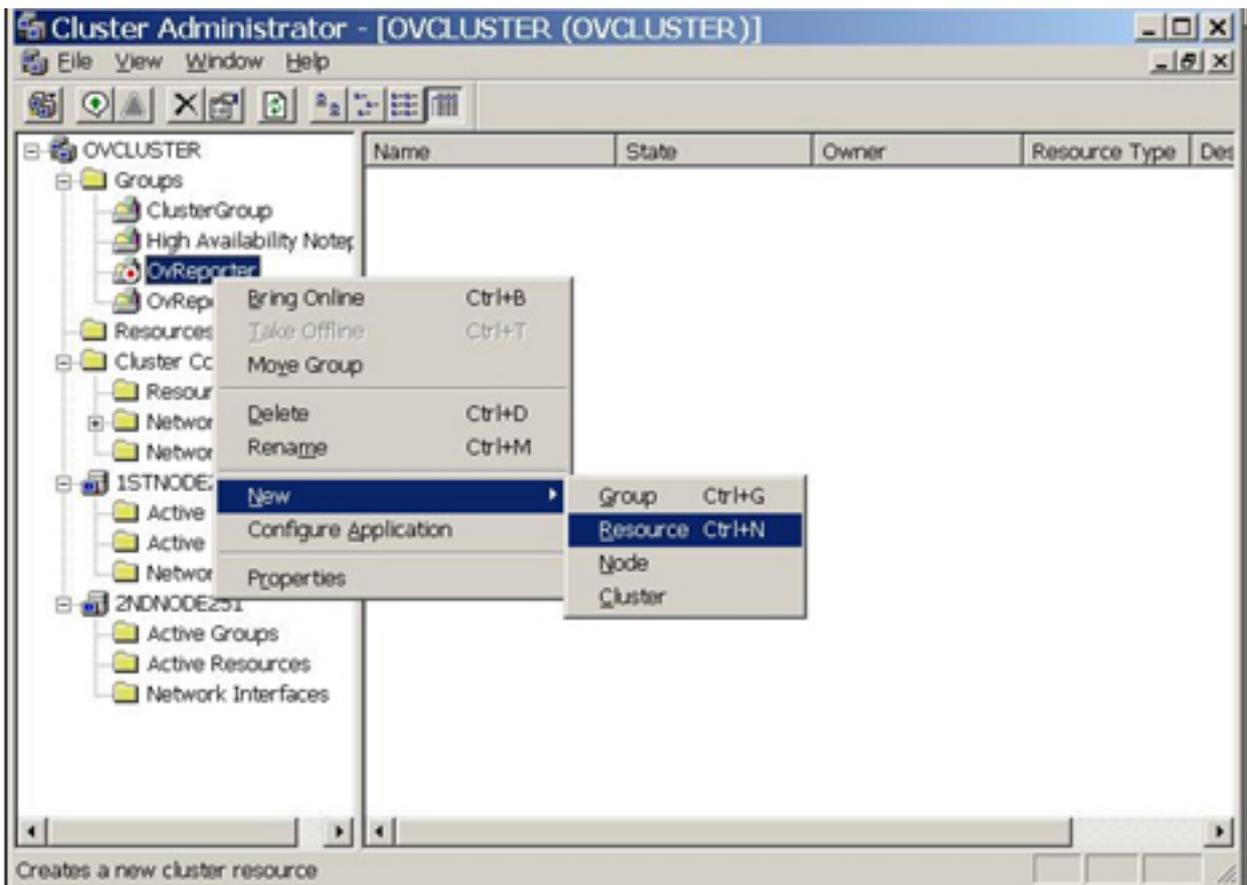
3. 新しいグループ (OvReporter など) を追加し、【次へ】 ボタンを押します。グループ名は任意です。



4. 【利用可能なノード】のリストのノードを【優先所有者】に追加します。

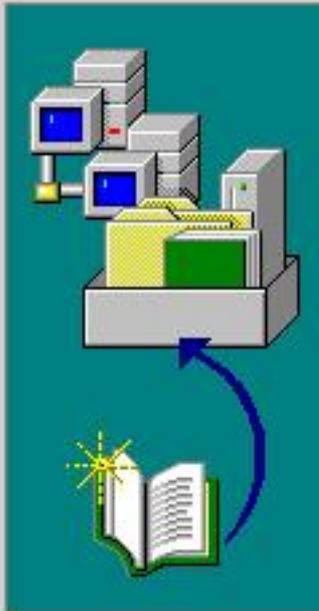


5. 【完了】をクリックすると、クラスタに OvReporter グループが追加されます。
6. 【OvReporter】を右クリックし、【新規作成】をポイントして、【リソース】をクリックします。



7. [リソースの種類] で [IP アドレス] を選択し、[グループ] で [OvReporter] を選択します。
8. [名前] に「IP アドレス」と入力します。IP アドレスの名前は任意です。

New Resource



IP Address

Name:

Description:

Resource type:

Group:

Run this resource in a separate Resource Monitor

To continue, click Next.

< Back

Next >

Cancel

9. 【次へ】をクリックし、【利用可能なノード】のリストから【実行可能な所有者】にノードを追加します。

Possible Owners



Ip Address

Possible owners are nodes in the cluster on which this resource can be brought online. Specify the possible owners for this resource.

Available nodes:

Name

Add >

< Remove

Possible owners:

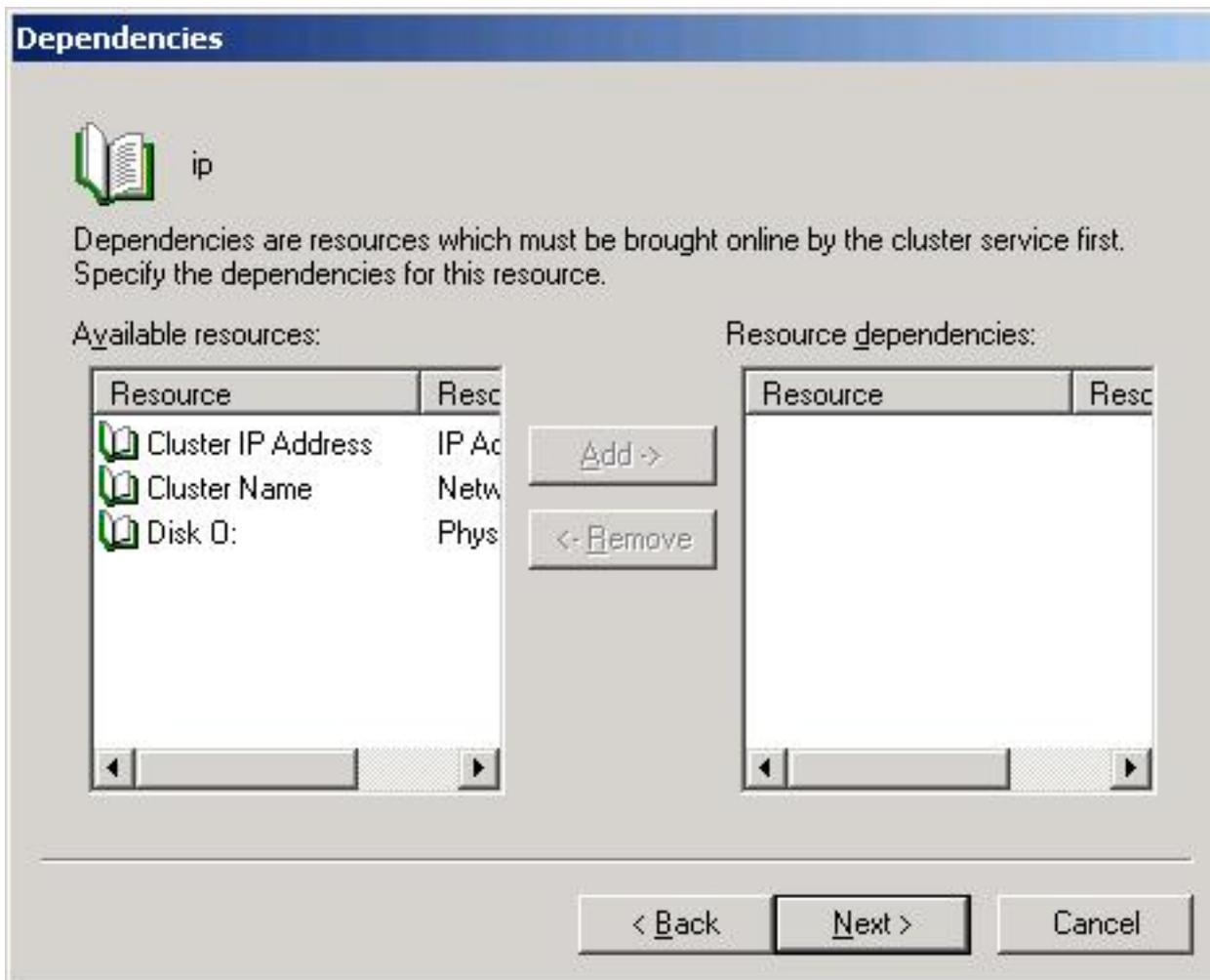
Name
1STNODE252
2NDNODE251

< Back

Next >

Cancel

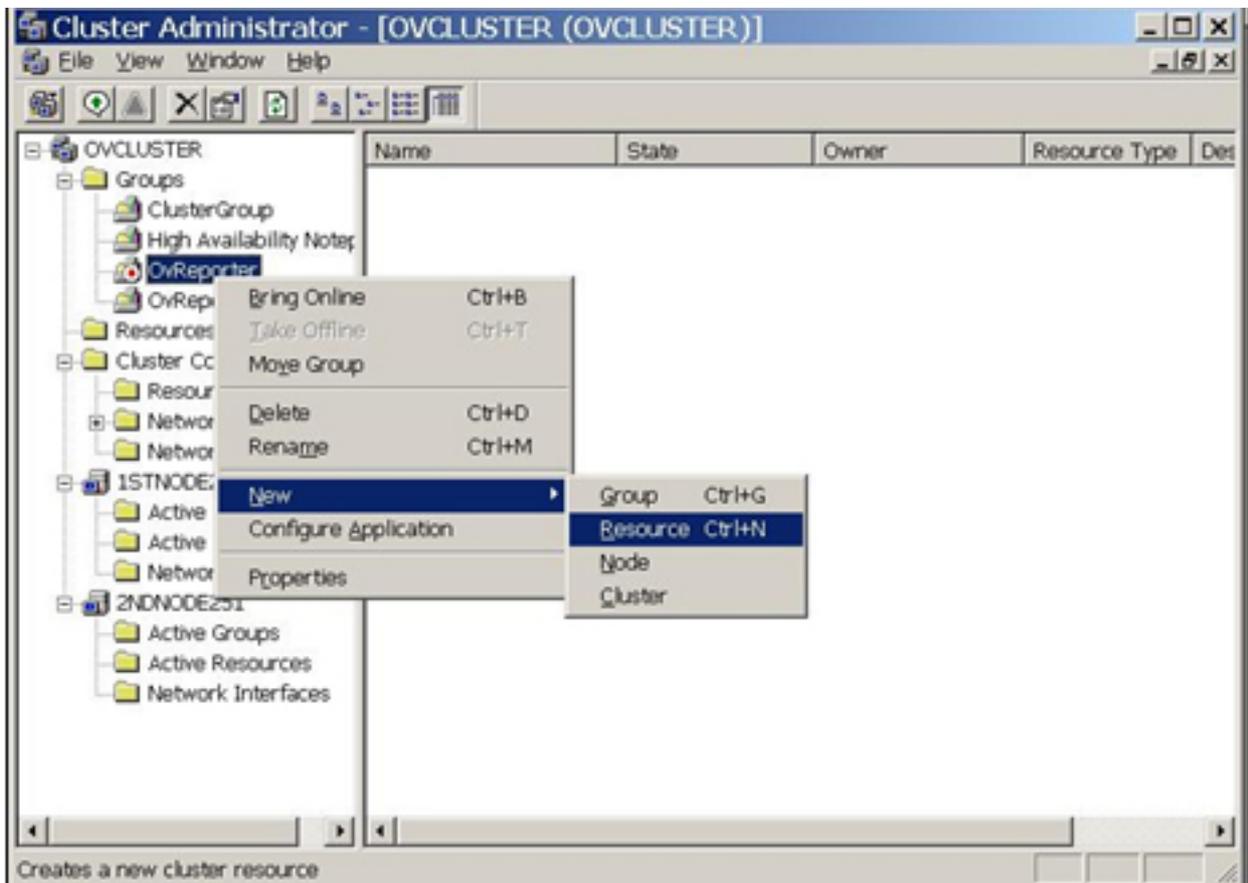
10. 依存関係は追加せずに、【次へ】をクリックします。



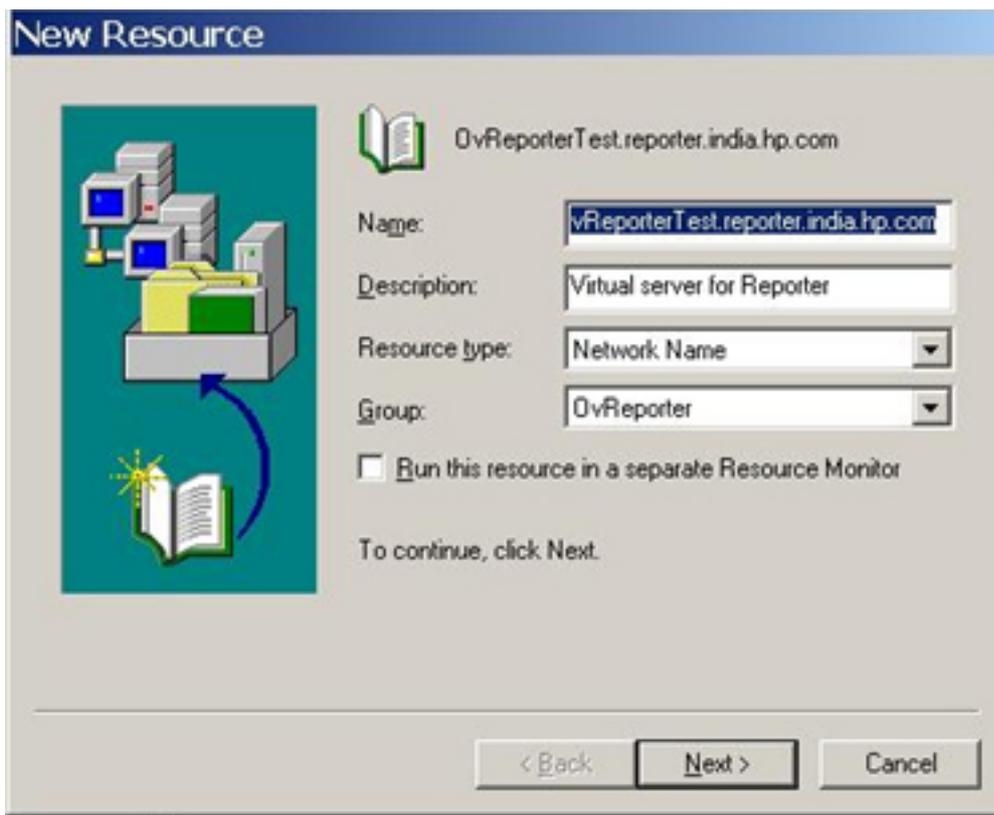
11. 【アドレス】と【サブネットマスク】に入力します。【完了】をクリックすると、OvReporter グループに IP アドレス リソースが追加されます。



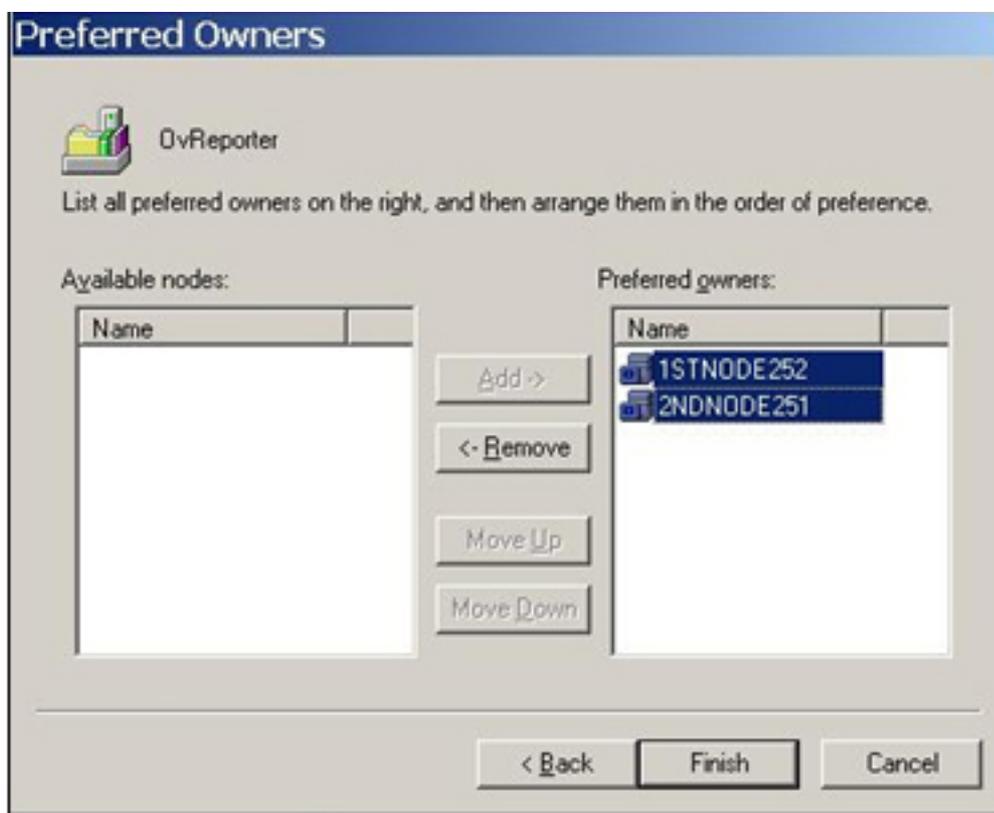
12. OvReporter グループを右クリックし、【新規作成】をポイントして、【リソース】をクリックします。



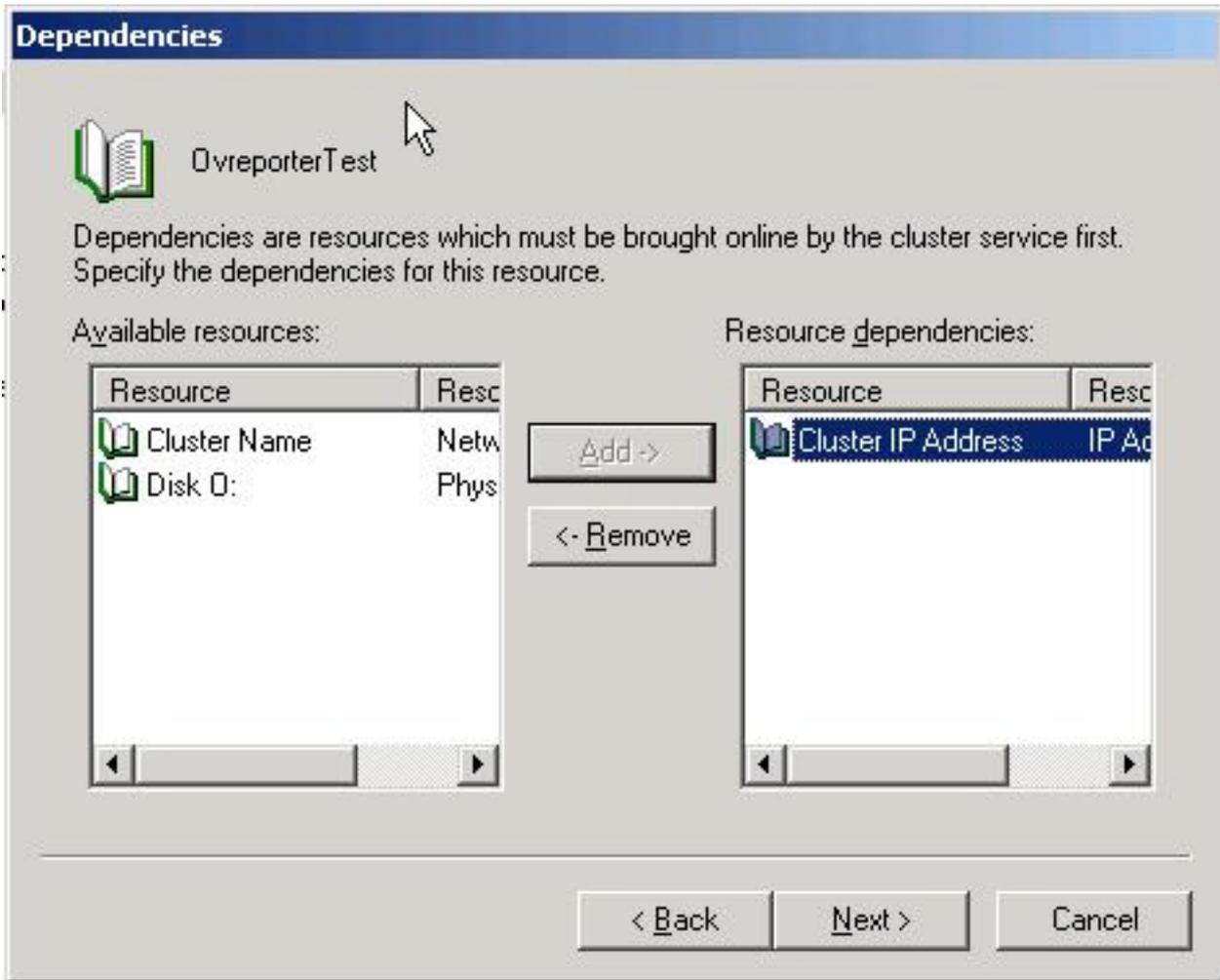
13. [リソースの種類] で [ネットワーク名] を、[グループ] で [OvReporter] を選択します。次に、ネットワーク名の名前を入力し、[次へ] をクリックします。ネットワーク名の名前は任意です。



14. 【利用可能なノード】のリストから【優先所有者】にノードを追加し、【次へ】をクリックします。



15. 【リソースの依存関係】で【IP アドレス】を選択し、【次へ】をクリックします。



16. 仮想サーバーとして選択した名前を入力します。【完了】をクリックすると、サーバーが **OvReporter** グループに追加されます。



アクティブ ノードへの Reporter のインストール

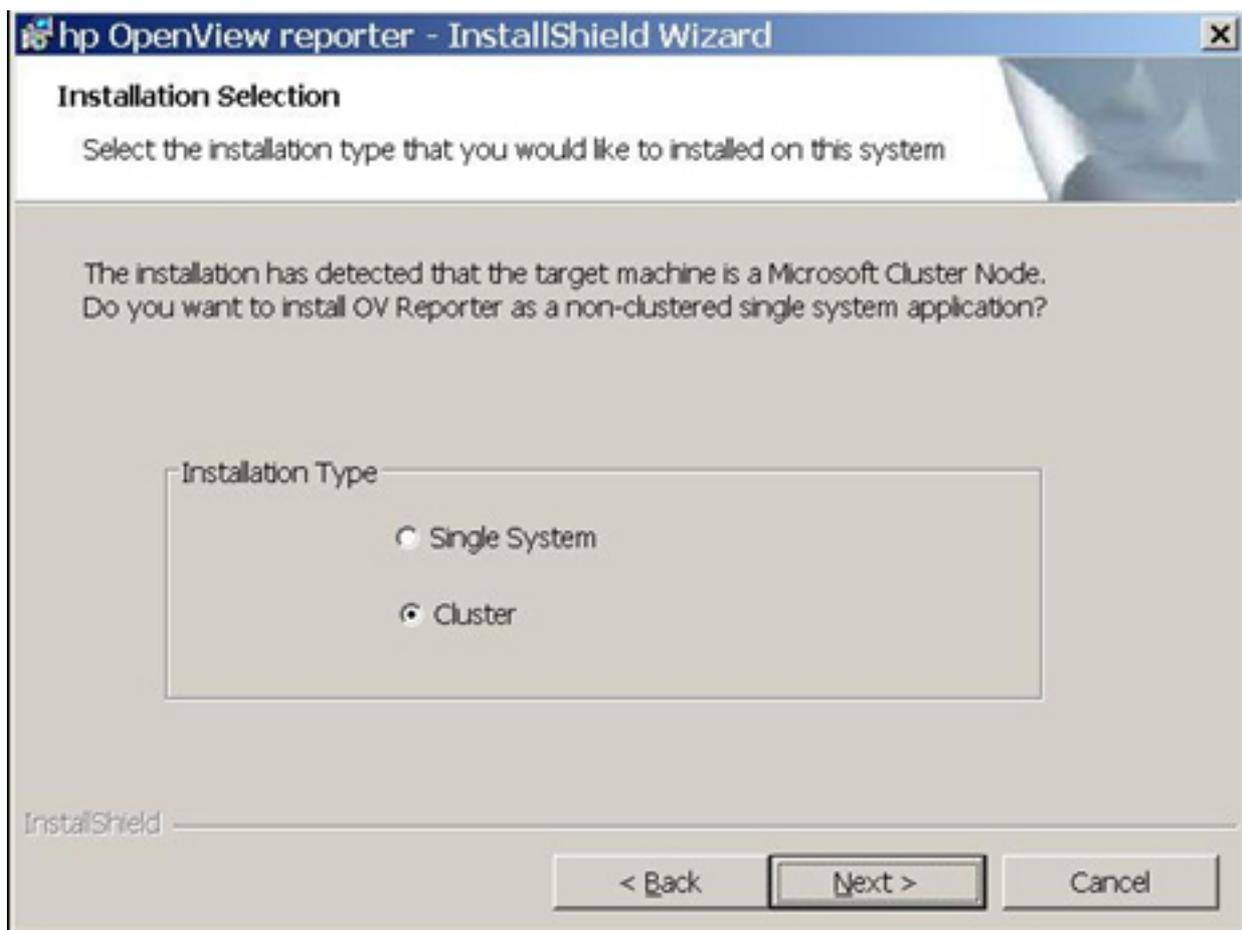
1. [スタート] メニューから、[プログラム] [管理ツール] [クラスタ アドミニストレータ] (Microsoft クラスタ アドミニストレータ ツール) を選択して、仮想サーバー、IP アドレス、共有ディスク クラスタ リソースを含むリソース グループを作成します。

 **メモ**：仮想サーバー、IP アドレス、共有ディスク クラスタ リソースを含むリソース グループがすでに MSCS に構成されている場合、リソース グループの作成を省略できます。仮想サーバー、IP アドレス、共有ディスク クラスタ リソースを含むリソース グループの追加については、「[グループ、IP アドレス、またはネットワーク名の追加](#)」を参照してください。

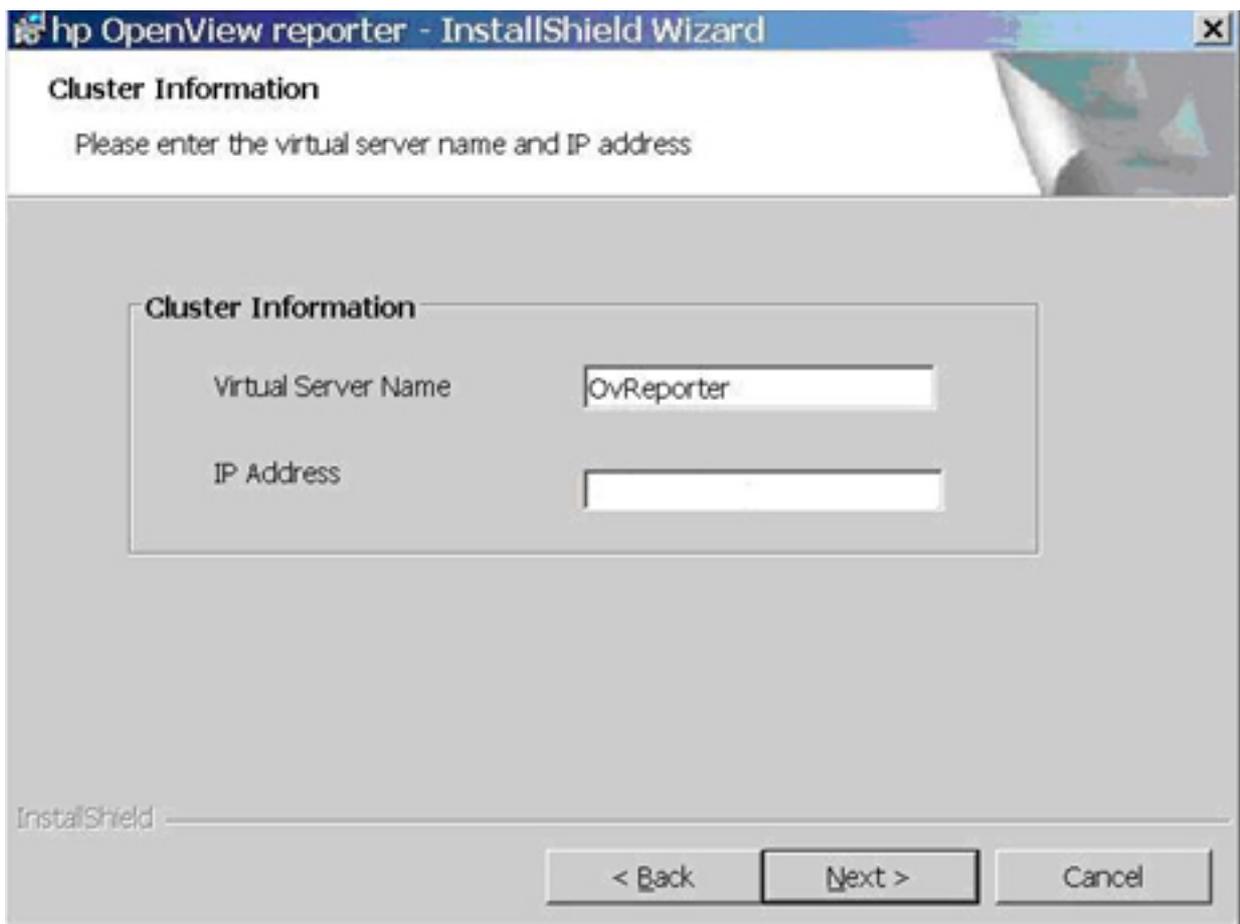
 **重要**：物理ディスク、IP アドレス、ネットワーク名リソースを含むリソース グループを現在のノードで実行する必要があります。

2. 仮想サーバーに対して有効な所有権を持つノードの CD-ROM ドライブに Reporter のインストール CD を挿入します。
3. **[reporterのインストール]** を選択し、手順に従って Reporter をインストールします。

 **メモ**：現在のユーザーに管理権限がない場合、またはシステムがクラスタ システムでない場合、次の [Installation Selection] ダイアログ ボックスは表示されません。



4. Reporter をクラスタ形式でインストールするために、**[Cluster]** を選択します。
5. **[次へ]** を選択して、クラスタの詳細に関するダイアログ ボックスを表示します。

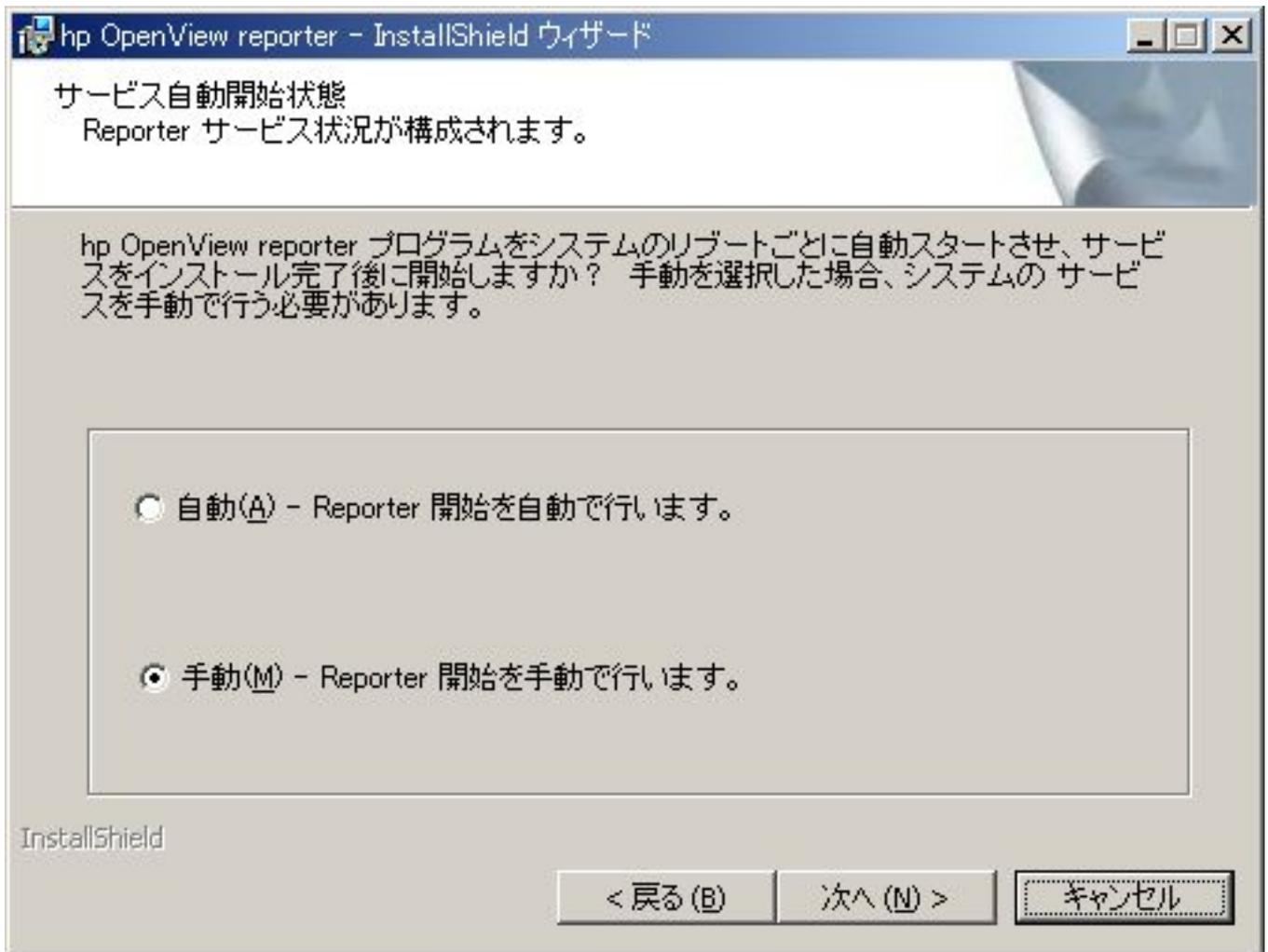


6. 手順 1 で指定した既存の仮想サーバー名と IP アドレスを入力します。
7. 有効な共有フォルダを選択し、プログラム ファイル用にローカル ドライブを、共有データ ファイル用に共有ドライブを選択します。
たとえば、共有ドライブが S の場合、次のように選択します。
hp OpenView reporter のインストール先: C:¥Program Files¥HP OpenView¥
hp OpenView reporter データのインストール先: C:¥Program Files¥HP OpenView¥Data
Install hp OpenView reporter Shared Data to: S:¥MyShare¥



 **重要** : クラスタの他のノードに Reporter をインストールするときは、同じプログラム ファイル ディレクトリ、共有データ ディレクトリ、およびデータ ディレクトリを選択してください。

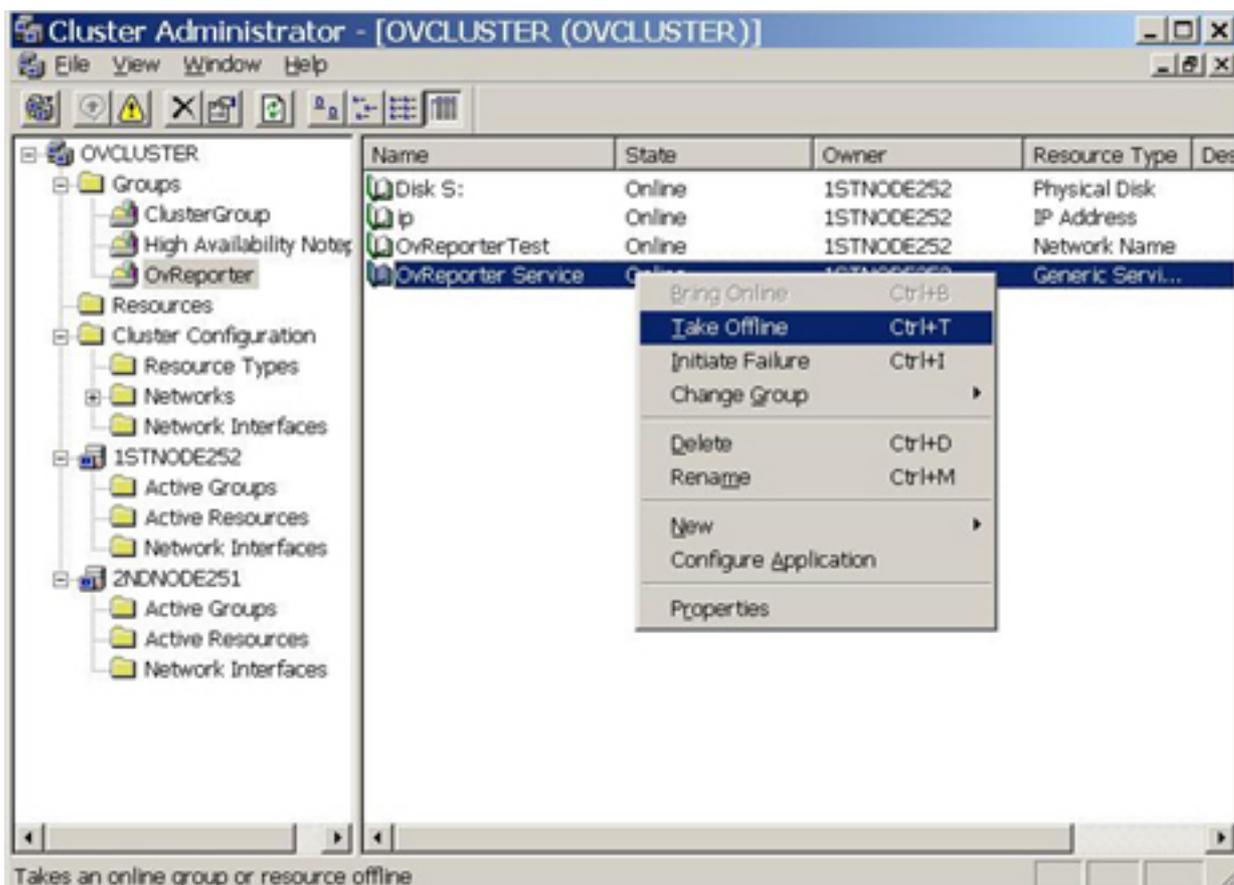
8. [手動 - Reporter 開始を手動で行います。] オプション ボタンをクリックします。



9. 【次へ】をクリックし、手順に従って Reporter をインストールします。

他のノードへの OvReporter のインストール

1. Microsoft クラスタ アドミニストレータ ツールで **[OvReporter Service]** を選択します。右クリックし、**[オンラインにする]** オプションを選択して、リソースのステータスをオンラインにします。
2. OvReporter グループ (OvReporter サービスを含む) を次のノードに移動しないでください。



現在のノードへの OvReporter のインストール

1. 前のセクション「[アクティブ ノードへの Reporter のインストール](#)」の手順に従って、現在のノードに Reporter をインストールします。
2. 手順 1 と 2 を繰り返して、クラスタ内の残りのノードに Reporter をインストールします。

Reporter のアンインストール

1. 最後にインストールしたノードを最初にアンインストールします。Reporter をアンインストールする前に、OvReporter サービスがオフラインであることを確認してください。OvReporter サービスをオフラインにする方法については、前の「他のノードへの OvReporter のインストール」の[手順 1](#)を参照してください。
2. **OvReporter** サービス リソースを管理するアクティブ ノードから Reporter をアンインストールします。



メモ：共有ドライブのデータは、現在のノードが最後のノードの場合のみ削除されます。

3. Microsoft クラスタ アドミニストレータ ツールを使用して、MSCS の次の Reporter ノードにリソース グループ (リソース、OvReporter サービスを含む) を移動します。
4. 手順 2 と 3 を繰り返して、Reporter をすべてのノードからアンインストールします。

制限事項

1. クラスタ形式の Reporter とクラスタ形式でない他の OpenView 製品を共存させることはできません。
2. OpenView のパフォーマンス製品 (OVOW、OVIS など) は、クラスタ形式の Reporter との共存をサポートしない限り、同じシステムにインストールすることはできません。
3. サポートされている構成は、アクティブ/パッシブ構成のみです。つまり、Reporter は、すべてのクラスタ ノードにインストールできますが、一度に実行できるのは 1 つのノードのみです。負荷分散は不可能であり、サポートされていません。クラスタ内で実行できる Reporter サービスは 1 つのみです。
4. Reporter 3.1 または 3.5 からクラスタ形式の Reporter へのアップグレードは不可能であり、サポートされていません。

8 第 8 章 複数の OVO UNIX 管理サーバーのための Reporter の構成

ここでは、複数の HP OpenView Operations (OVO) for UNIX サーバーに関するレポートを作成するために HP OpenView Reporter (Reporter) を構成する手順について説明します。この機能を使用すると、Reporter に接続しているデータベースを使用しないシステムのレポートを作成できます。

制限事項

OVO UNIX ファミリのレポートのうち、次のレポートは作成できません。

1. UNIX Discovered Systems
2. UNIX Messages by Node and Application
3. UNIX Operator Acknowledgements
4. UNIX Messages by Application and Severity (Full Time Range)
5. UNIX Messages by Application and Severity (Last Month)
6. UNIX Messages by Application and Severity (Last Week)
7. UNIX Messages by Application and Severity (Yesterday)

Reporter からの既存の OVO 構成の削除

複数の OpenView Operations (OVO) for UNIX サーバーに関するレポートを作成するために HP OpenView Reporter を構成する場合、事前に Reporter ウィンドウから既存の OVO 構成を削除することができます。この処理は省略可能です。

現在インストールされている「OV Operation for UNIX 7 または 8」パッケージを削除するには、Reporter ウィンドウを使用するか、コマンド プロンプトを使用します。

- 現在インストールされている OV Operation for UNIX 7 または 8 パッケージを Reporter ウィンドウで削除するには、次の手順を実行します。
 - a. Reporter ウィンドウで、【ファイル】 【構成】 【レポート パッケージ】 の順に選択します。【レポート パッケージの構成】 ウィンドウが開きます。
 - b. 【インストール済みパッケージ】 ペインで **【OV Operations for UNIX 7】** または **【OV Operations for UNIX 8】** パッケージを選択し、【<--】 をクリックします。
 - c. 選択したパッケージが **【利用可能なパッケージ】** ペインに表示されます。
 - d. **【OK】** をクリックします。Reporter のメイン ウィンドウが表示されます。
- 現在インストールされている OV Operation for UNIX パッケージをコマンド プロンプトで削除するには、次の手順を実行します。

システムにインストールされている OpenView Operations for UNIX のバージョンに基づき、次のコマンドを実行します。

システムに OpenView Operations for UNIX (OVOU) 7.0 パッケージがインストールされている場合

```
Repload -remove "<InstallDIR>%newconfig  
%packages%repload_ovoux71.srp"
```

システムに OpenView Operations for UNIX (OVOU) 8.0 パッケージがインストールされている場合

```
Repload -remove "<InstallDIR>%newconfig  
%packages%repload_ovoux8.srp"
```

2. Reporter 画面で既存のデータベース構成を削除します。
3. OVO UNIX に構成されているデータ ソース名 (DSN) をシステムから削除します。
 - a. **[スタート]** **[ファイル名を指定して実行]** の順にクリックします。
 - b. `odbcad32` と入力し、**[OK]** をクリックします。**[ODBC データ ソース アドミニストレータ]** ウィンドウが表示されます。
 - c. **[システム DSN]** タブを選択します。
 - d. リストから **[DSN configured to OVO/U]** データベースを選択し、**[削除]** をクリックします。

複数の OpenView Operations (OVO) UNIX サーバー データベースに関するレポートを作成するための HP OpenView Reporter の構成

複数の OpenView Operations (OVO) UNIX サーバー データベースに関するレポートを作成するために HP OpenView Reporter を構成するには、次の手順を実行します。

1. [Oracle クライアントの構成](#)
2. [ODBC の構成](#)
3. [Reporter データベースの構成](#)
4. [Service Reporter Package \(SRP\) ファイルの作成](#)
5. [Reporter データベースへの、作成した SRP ファイルのロード](#)

Oracle クライアントの構成

OVO UNIX サーバーと Oracle データベース サーバーの Oracle クライアントを構成します。手順については、『HP OpenView Reporter コンセプト ガイド』の「第 5 章 Reporter のカスタマイズ」の「他のデータベースからのレポート作成」を参照してください。

ODBC の構成

Oracle データベース サーバーと OVO UNIX 管理サーバーのすべてに対してデータ ソース名 (DSN) を作成します。サーバーにはすべて、対応する DSN が必要です。手順については、「[第 4 章 Part C : Reporter への OpenView Operations 7 または 8 \(Oracle 9i / 10g\) データベースの接続](#)」を参照してください。

Reporter データベースの構成

データベースを構成するには、次の手順を実行します。

1. **Reporter** ウィンドウで、**[ファイル]** **[構成]** **[データベース]** の順に選択します。**[データベースの構成]** ウィンドウが開きます。
2. **[新規]** をクリックします。データベース名を入力します。例：OVO_DB1
3. ドロップ ダウン リストから、作成したデータベースを選択します。
4. 作成した **DSN** 名を入力します。
5. データベースのユーザー ID とパスワードを入力します。
6. **[OK]** をクリックします。これで、データベースの構成が終了しました。

上記の DSN およびデータベース名には、作成した DSN およびデータベース名を使用することができます。データベース名は、15 文字以下にする必要があります。

Service Reporter Package (SRP) ファイルの作成

1. Reporter CD を CD-ROM ドライブに挿入します。CD-ROM ドライブのフォルダ **support** **¥Multiple_OVO Folder** を開きます。システムにインストールされている管理サーバーに基づき、次のファイルのどちらかをテキスト エディタで開きます。
 - `multiple_management_server_template_7.srp` (OVO/U 7.x データベースを使用している場合)
 - `multiple_management_server_template_8.srp` (OVO/U 8.x データベースを使用している場合)
2. **[DATABASENAME]** (角かっこも含む) をすべて、Reporter で構成したデータベース名に置き換えます。
例：構成したデータベース名が **OVO_DB1** の場合、**[DATABASENAME]** を **OVO_DB1** に置き換えます。
3. **[ファイル]** **[名前を付けて保存]** の順にクリックし、ファイルを **<INSTALLDIR>¥newconfig ¥packages** ディレクトリの次のファイルに保存します。
 - `multiple_management_server_template_7_OVO_DB1.SRP` (OVO/U 7.x データベースを使用している場合)
 - `multiple_management_server_template_8_OVO_DB1.SRP` (OVO/U 8.x データベースを使用している場合)

メモ：ファイルを保存するとき、ファイル拡張子として必ず **.srp** を指定してください。メモ帳などのテキストエディタでは、デフォルトの拡張子として **.txt** が使用されます。

Reporter データベースへの SRP ファイルのロード

SRP ファイルをロードするには、Reporter ウィンドウを使用するか、コマンド プロシ

プトを使用します。

Reporter ウィンドウで SRP ファイルをロードする場合

1. Reporter ウィンドウまたはコントロール パネルで Reporter サービスを開始します。
2. Reporter ウィンドウで、【ファイル】 【構成】 【レポート パッケージ】 の順に選択します。
3. 【利用可能なパッケージ】 で、作成したパッケージを選択します。【-->】 をクリックします。選択したレポート パッケージが【インストール済みパッケージ】 ペインに表示されます。
4. 【OK】 をクリックします。Repload プログラムが起動します。
5. Repload プログラムが完了するまで待ちます。

コマンド プロンプトで SRP ファイルをロードする場合

次のコマンドを実行します。

- Repload -load <INSTALLDIR>%newconfig%packages
%multiple_management_server_template_7_OVO_DB1.SRP (OVO/U 7.x データベースを使用する場合)
- Repload -load <INSTALLDIR>%newconfig%packages
%multiple_management_server_template_8_OVO_DB1.SRP (OVO/U 8.x データベースを使用する場合)

SRP ファイルのロード後、Reporter ウィンドウには次の内容が表示されます。

新しく作成されたレポート ファミリのリスト。接頭辞としてデータベース名が使用されます。
各ファミリのレポートのリスト。接頭辞としてデータベース名が使用されます。

レポートの作成

コマンド プロンプトで、次のコマンドを実行します。

```
repcrys
```

メモ：コマンド ライン パラメータとしてレポート名を指定して、特定のレポートを作成することもできます。

レポート作成後、Reporter の Web ページに、各レポート ファミリのために作成されたリンクが表示されます。

レポート パッケージのアンインストール

Reporter パッケージをアンインストールするには、Reporter ウィンドウを使用するか、コマンド プロンプトを使用します。手順は次のとおりです。

Reporter ウィンドウで Reporter パッケージをアンインストールする場合

1. 【ファイル】 【構成】 【レポート パッケージ】 の順に選択します。【レポート パッケージの

- 構成] ウィンドウが表示されます。
2. [インストール済みパッケージ] ペインで削除するパッケージを選択し、[<--] をクリックします。
 3. 選択したパッケージが [利用可能なパッケージ] ペインに表示されます。[OK] をクリックします。
 4. [ファイル] [構成] [データベース] の順に選択します。Reporter ウィンドウで定義したデータベースを削除します。
 5. ODBC 構成で作成した DSN を削除します。

コマンド プロンプトで Reporter パッケージをアンインストールする場合

次のコマンドを実行します。

- `Repload -Remove <INSTALLDIR>%newconfig%packages
%multiple_management_server_template_8_OVO_DB2.SRP` (OVO/U 8.x データベースを使用する場合)
- `Repload -Remove <INSTALLDIR>%newconfig%packages
%multiple_management_server_template_7_OVO_DB1.SRP` (OVO/U 7.x データベースを使用する場合)

索引

[A](#), [B](#), [C](#), [D](#), [E](#), [F](#), [G](#), [H](#), [I](#), [J](#), [K](#), [L](#), [M](#), [N](#), [O](#), [P](#), [Q](#), [R](#), [S](#), [T](#),
[U](#), [V](#), [W](#), [あ](#), [か](#), [た](#)

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

[listener.ora ファイル、Oracle データベース設定用エン
トリ](#)

M

Microsoft SQL Server の設定、「SQL Server」を参照

R

[Reporter \(Unified Reports\)](#)

[Unified Reports の表示](#)

[Unified Reports 用グループ レポート](#)

[Unified Reports 用システム レポート](#)

[Unified Reports 用レポート テンプレートの追加](#)

[Reporter データベースとしての Oracle 9i \(『インストー
ルおよび
特別構成ガイド』の PDF 版を参照\)](#)

[Reporter のアンインストール](#)

S

[Solaris/Sun 用のカーネル パラメータ](#)

[Solaris/Sun を実行しているシステムにある OVO データ
ベースへの接続](#)

[Solaris、Reporter データベースとしての Oracle 9.2.0.1
の構成](#)

[SQL Server、Reporter データベースとして使用するた
めの設定](#)

T

[tnsnames ファイル、Oracle 接続用編集](#)

U

N

[Unified Reports](#)

[概要](#)

[構成](#)

[メトリック リスト](#)

O

[ODBC、Reporter で使用](#)

V

[Oracle データベース インストール用カーネルパラメータ設定](#)

W

[Oracle へのデータの転送](#)

[Web アプリケーション サーバー、Unified Reports による監視](#)

Oracle、推奨構成、拡張容易性
(『コンセプトガイド』の第 6 章を参照)

あ

[Oracle、リスナー構成用テンプレートおよび Reporter 用データベース インスタンス](#)

[アプリケーション サーバー、レポート作成](#)

[インストール、Reporter](#)

[OVO の構成](#)

か

P

[環境変数、Oracle の HP-UX システム インストール用](#)

Q

[監視対象 Web サービス、\(Unified Reports 用\) 追加](#)

[検出、説明](#)

構成

[OpenView Operations データベース](#)

[Unified Reports](#)

[デフォルト データベースとしての Oracle](#)

[デフォルト データベースとしての SQL Server](#)

[複数の HP OpenView Operations \(OVO\) for UNIX サーバーに関するレポートの作成](#)

た

[テンプレート、Oracle リスナー ファイルと tsnames ファイル](#)

データベース、
[Oracle へのデータ転送](#)

[SQL Server へのデータ転送](#)



法律上の注意

保証について:

日本ヒューレット・パカード社 (以下、「日本 HP」) は、本サイトに含まれる内容物の商用性および特定の用途への適合性について、(黙示的保証も含め、これに限定されることなく)いかなる責任を負うものではありません。また、日本 HP は、本資料の使用に関して、いかなる直接損害、間接損害、特別損害、偶発的損害または結果的損害についても責任を負いません。

ご利用の HP 社製品の保証については、製品販売代理店およびサービス オフィスにお問い合わせください。

本サイトの利用制限:

米国政府機関に所属されるユーザーには、DFARS 252.227-7013 の Rights in Technical Data and Computer Software の附則 (c)(1)(ii) で定義される制限が適用されます。

Hewlett-Packard Company
United States of America

DOD 以外の米国政府の部門または機関の権利は、FAR 52.227-19(c)(1,2) に定められている通りとなります。

著作権情報

©Copyright 2005 Hewlett-Packard Development Company, L.P., all rights reserved.

日本 HP 社の書面による許諾なしに、本書の内容をコピー、複製、他言語に翻訳することは禁じられています。本書で提供されている情報は、予告なく変更されることがあります。

商標について

Java™ は Sun Microsystems, Inc. の商標です。

Microsoft® は Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Windows NT® は Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Windows® および MS Windows® は Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Netscape™ および Netscape Navigator™ は Netscape Communications Corporation の米国商標です。

Oracle® は Oracle Corporation (カリフォルニア州 Redwood 市) の米国登録商標です。

Oracle7™ は Oracle Corporation (カリフォルニア州 Redwood 市) の商標です。

OSF/Motif® および Open Software Foundation® は Open Software Foundation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium® は Intel Corporation の米国登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。